

# 石器文化研究

石器文化研究会 設立40周年記念

シンポジウム「関東・東海地方の旧石器時代研究の現在」



22

石器文化研究会  
2025.12



石器文化研究 22

2025  
石器文化研究会



# 目 次

<b>第1部 設立40周年を迎えて</b>	1
石器文化研究会の活動年表	3
石器文化研究会創設の頃 白石浩之	4
設立40周年を迎えて 佐藤宏之	6
石器文化研究会黎明期の頃 諏訪間 順	7
石器文化研究会の現在と未来 伊藤 健	8
石器文化研究会の活動記録（2016年～）	10
<b>第2部 シンポジウム「関東・東海地方の旧石器時代研究の現在」</b>	13
プログラム	16
趣旨説明 石器文化研究会 代表世話人 伊藤 健	17
研究発表の対象となった地域・遺跡	18
<b>本研究発表</b>	21
南関東の旧石器編年の学史的検討 諏訪間 順	23
星野遺跡発掘から60年のいま（日本列島の中期旧石器） 酒巻孝光	28
後期旧石器時代前半期前葉における『狩猟具』のコンセプト ～型式論・機能論の方法論的再整理を通して～ 鈴木秋平	33
基部加工を主体としたナイフ状石器の様相—AT下位の石刃石器群との関連性— 白石浩之	41
南三里塚宮原第1遺跡の現在—下総台地の後期旧石器時代前半期を考える— 宇井義典	48
2つの環状ブロック群—清河寺前原遺跡と津久井城跡馬込地区— 西井幸雄	54
相模野旧石器時代前半期の再整理 麻生順司	60
南関東の石器群編年とMIS2の環境変動 鈴木美保	66
後期旧石器時代後半期前葉の編年研究—関東平野北西部を対象にして— 小原俊行	72
相模野台地における最終氷期最寒冷期前後の諸活動 井関文明、脇 幸生	78
相模野台地における砂川期からナイフ形石器終末期にかけての石器群の様相と年代 高屋敷飛鳥	84
悉皆集成による武蔵野編年第IIb～IV期の再構成 伊藤 健	90
静岡県磐田原台地における旧石器時代石器群編年の再検討 富樫孝志	96
関東地方における北方系細石刃石器群 諸星良一	102
相模野台地における狩猟具の様相—L1S層出土石器群を中心とした予察— 長澤有史	109
下茂内第II文化層尖頭器石器群の較正年代と南関東との編年的対比 堤 隆	115
<b>ポスターセッション</b>	121
瀬戸内技法研究の現在—東日本への波及を考える— 絹川一徳	123
「石槍」の三次元形態測定学 野口 淳	131

緑色凝灰岩および緑色岩を使用した石斧の分布と原産地の調査 前嶋秀張 .....	134
下河原崎谷中台遺跡の角錐状石器を伴う石器群について 天野早苗 .....	136
ハンマーストーンの分析による石器製作技術と動作	
－東日本の後期旧石器時代前半期石器群の諸事例から－ 金 彦中 .....	138
呪原遺跡の再整理作業－その手順と成果－ 尾崎沙羅・小林竜太 .....	141
相模野台地における男女倉型有撃尖頭器の衝撃剝離痕跡 野口智輝 .....	144
剥片尖頭器石器群の原産地的様相－熊本県石清水遺跡を事例として－ 矢野賢太 .....	147

# 第 1 部

## 設立 40 周年を迎えて

石器文化研究会は本年、2025 年に設立 40 周年を迎えました。それを記念し、歴代の代表世話人の中から 4 名に研究会の思い出や歴史を語っていただきます。



## 石器文化研究会の活動年表

- 1985年6月8日 第1回例会（設立） 於：明治大学駿河台校舎学芸員養成課程実習室  
代表世話人 安蒜政雄、白石浩之
- 1991年2月23日 第50回例会 於：明治大学駿河台校舎か
- 1991年4月13・14日 シンポジウム「AT降灰以前の石器文化—関東地方における変遷と列島内対比—」  
於：江東区総合区民センター
- 1992年6月22日 代表世話人 安蒜政雄、白石浩之、織笠 昭
- 1994年3月5・6日 第1回石器文化研究交流会かながわ大会 於：つきみ野文化会館
- 1995年2月25・26日 第2回石器文化研究交流会とうきょう大会 於：板橋区立産文ホール
- 1995年12月2・3日 第3回石器文化研究交流会さいたま大会 於：東大宮コミュニティセンター
- 1996年3月30日 第100回例会 於：板橋区立産文ホール
- 1996年7月13・14日 シンポジウム「AT降灰以降のナイフ形石器文化～関東地方におけるV～IV下層段  
階石器群の検討～」 於：調布市グリーンホール
- 1997年2月15・16日 第4回石器文化研究交流会ちば大会 於：千葉県立中央博物館
- 1997年4月26日 代表世話人 砂田佳弘、佐藤宏之、諏訪間 順
- 1998年1月31・2月1日 第5回石器文化研究交流会とちぎ大会 於：栃木県立博物館
- 1999年2月27・28日 第6回石器文化研究交流会ぐんま大会 於：前橋市中央公民館
- 2000年5月27日 第150回例会 於：かながわ県民センター
- 2000年7月1・2日 シンポジウム「砂川—その石器群と地域性—」 於：かながわ県民センター
- 2000年12月24日 各地域研究団体共同による前・中期旧石器捏造事件に関する声明 於：福島県立博物  
館
- 2001年5月26日 代表世話人 砂田佳弘、諏訪間 順、伊藤 健
- 2001年3月3・4日 第7回石器文化研究交流会しづおか大会 於：沼津市立図書館
- 2002年3月2・3日 第8回石器文化研究交流会やまなし大会 於：帝京大学山梨文化財研究所
- 2003年9月23・24日 第9回石器文化研究交流会かながわ大会 於：横浜市歴史博物館
- 2004年9月24・25日 第10回石器文化研究交流会とうきょう大会 於：府中市郷土の森博物館
- 2005年3月19日 第200回例会 於：神奈川県社会福祉社会館
- 2005年10月1・2日 シンポジウム『「ナイフ形石器文化終末期」再考—ナイフ形石器文化終末期石器群の  
変動—』 於：かながわ県民センター
- 2006年9月30日・10月1日 第11回石器文化研究交流会さいたま大会 於：三芳町中央公民館
- 2007年11月17・18日 第12回石器文化研究交流会いばらき大会 於：茨城県立歴史館
- 2008年10月18・19日 第13回石器文化研究交流会とちぎ大会 於：矢板市文化会館
- 2009年11月21・22日 第14回石器文化研究交流会ぐんま大会 於：高崎市南公民館
- 2010年2月19日 第250回例会 於：大和市月見野遺跡群上野遺跡第14地点発掘調査地点
- 2011年1月22・23日 石器文化研究会設立25周年シンポジウム「ナイフ形石器文化とは何か—概念・実  
体を問い合わせ—」 於：明治大学駿河台校舎リバティータワー
- 2011年10月1・2日 第15回石器文化研究交流会静岡大会 於：沼津市片浜地区センター
- 2012年9月29・30日 第16回石器文化研究交流会山梨大会 於：山梨文化財研究所
- 2014年1月25・26日 第17回石器文化研究交流会かながわ大会 於：神奈川県立歴史博物館
- 2014年8月23・24日 第18回石器文化研究交流会とうきょう大会 於：府中市郷土の森博物館
- 2016年1月30・31日 第19回石器文化研究交流会さいたま大会 於：戸田市郷土資料館
- 2025年8月30日 第300回例会 於：リスペース東京日本橋
- 2025年9月27・28日 シンポジウム「関東・東海地方の旧石器時代研究の現在」 於：明治大学駿河台キ  
ヤンパスグローバルフロント
- 2025年11月8日 代表世話人 伊藤 健、富樫孝志、鈴木美保

(作成：伊藤 健)

## 石器文化研究会創設の頃

愛知学院大学名誉教授  
白石 浩之

1979年12月に鈴木次郎さんと私が中心となってナイフ形石器文化終末期の諸問題をテーマとして神奈川考古同人会でシンポジウムを開催しました。その頃は開発に関わる事前の緊急発掘調査が全国的に行われるようになっていた頃です。とりわけ関東地方は首都圏域に位置しているため大規模な開発が多くなり、長期の発掘調査が次々と行われるようになりました。その結果、従前に行われた旧石器時代の学術的な調査事例とは比べることができないくらい広い範囲に石器群が確認され、しかもローム層中から複数の石器群が層位的に出土したのです。このことから半ば常識化されていた既存の研究成果が抜本的に見直される状況になってきました。他方地域間の石器群がどのような共通性や異質性があるのかを知る手がかりを得たいという点から情報交換が急務になったのです。そこで先のシンポジウムでは相模野、武藏野、下総の各台地から出土した旧石器時代石器群の層位、出土石器、石器組成、石材等について、最新の発掘状況を踏まえた討議が行われました。あわせて近畿、東北、北陸の各地方で活躍している研究者にその地域で出土した旧石器時代石器群の事例が紹介されることにより、石器群の地域的様相がおおむね理解されました。しかし内容が多岐にわたり、時間的な制約も重なって、充分満足な討論ができたとは言い難いものでしたが、今後の研究に大きな足掛かりをつけたと言えます。

シンポジウムが終わり、旧石器研究の展望が見えてきたことで、明治大学の安蒜政雄さんとこれまでの研究を継続的に深化させようということで、新たに会を創って活動していくことで意見の一一致をみました。研究会は当時大学の教室を借用して開催することは難しい時勢でしたので、喫茶店考古学とでも言いましょうか「丘」喫茶店の片隅で勉強会を行ったり、京王線明大前駅近くの松原カトリック教会で土曜日に一室を借りて研究会を開きました。1981年8月?日、9月5日、10月3日、11月29日、1982年1月30日、2月27日、4月3日、5月22日、6月12日、7月3日の10回程度松原教会で開催したメモがノートに記されていました。参加者は荒井幹夫、安蒜政雄、織笠昭、織笠(松村)明子、栗島義明、鈴木次郎、砂田佳弘、実川順一、白石浩之、館野孝、田中英司、辻本崇夫、中村喜代重、服部実喜、比田井(坂入)民子、御堂島正、矢島國雄の各氏です。メモには『プレ研』と明記されていましたので、会の愛称として呼んでいたのでしょう。

プレ研は原則月1回開かれ、「シンポジウムの進め方」「時期区分」「第四紀」「石器組成」や「石器群の系統」「調整剥離技術」「剝片剥離技術」「切斷手法」「構造論」「ナイフ形石器の分類」「角錐状石器」「使用痕の研究」などの課題について、担当を決めて発表し、その内容について討議しました。先に開催された神奈川考古のシンポジウムでの反省を踏まえ「月見野・野川以前と以後」の学史を読み取る中で、何が問題点であったのかを明瞭にすることでした。このようなプレ研は明確に次期シンポジウムに向けての勉強会としてなされたものと言ってよいでしょう。

このようにして第1回開催後から3年を経て1982年11月28日神奈川県横浜市の開港記念会館で『南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題』をテーマとして、相模野台地のB2U~B2L層、武藏野や下総台地のIV中~IV下層から出土した石器群を対象にしてシンポジウムが開催されました。第1

回目のシンポジウムの反省を踏まえて、司会の安蒜政雄さんは「一つでも二つでも共通した考え方、問題点を掘り下げる」ことを目標として実施されました。

その後お茶の水の談話室滝沢の喫茶店で研究会の発足準備のための打ち合わせを行い、1985年6月8日に明治大学学芸員養成課程指導室にて研究会が発足し、石器文化研究会と命名されたのです。安蒜政雄氏と白石が初代世話人になりました。活動は原則として月一回研究会を開催し、随時遺跡見学会、遺物検討会等の開催をすることでスタートとしたのです。

関東地方では発掘調査が立川ローム層の基層まで及ぶようになり、AT層以前の良好な石器群が発掘調査され、その事例も増加してきました。加えて関東地方の一地域にとどまらず、列島の中でその位置づけが必要になってきたのです。そこで1988年8月27日・28日にかけて、小田原市アジアセンターで「AT降灰以前の石器文化」と題して第1回研究討論会が実施されました。また第2回研究討論会は「AT降灰以前の石器文化 PartII」と題して1989年9月30日-10月1日にかけて八王子市大学セミナーハウスで開催されました。これらの研究討論会はいずれも織笠昭さんが司会となって進められました。

その後1992年6月には石器文化研究会の代表世話人は安蒜政雄さんと白石浩之の体制に織笠昭さんが加わり、1997年4月には新たに諏訪間順、砂田佳弘、佐藤宏之の各氏（後に伊藤健氏に2001年5月交代）に代わり、2025年11月には伊藤 健、富樫孝志、鈴木美保の各氏の新体制になりました。難題をいくつも乗り越えて今日まで石器文化研究会の伝統の重みに牽引されてきたといつても過言ではないでしょう。

以上石器文化研究会の創設の頃についておぼつかない記憶と残されたメモを頼りにまとめてみました。日常的に行ってきた研究会の活動を積み重ねることがいかに重要であるかを改めて知ることができたのではないでしょうか。

なお私のまとめた石器文化研究会の創設の後の活動記録については伊藤健さんの作成された活動年表を参照ください。

## 設立 40 周年を迎えて

東京大学名誉教授  
**佐藤 宏之**

石器文化研究会は、本年 6 月に創設 40 周年を迎えた。鶴丸俊明さんに誘われて、明治大学の今は無き記念館で開かれた最初の集まり(1985 年 6 月)に参加したのは 40 年前となる。最初なので、会の名称を石器文化研究会と定め、代表世話人として安蒜政雄さんと白石浩之さんが選ばれ、原則毎月 1 回開催することとなった例会の進行を担当する「司会」(実際に企画も)を、故織笠昭さんと、なぜか新参者(まだ 20 代!)の私が担当することになった。毎回の例会の発表担当や内容、のちには内部の研究集会や公開シンポジウムの企画を構想するため、毎月のように新宿の喫茶店に集まって長時間粘った記憶が蘇る。その後は決まって懇親の場となった。

きっかけはうろ覚えだが、最初のテーマとして後期旧石器時代前半期が選ばれ、毎回の例会では順番にこのテーマに即した発表と討論が行われ、研究成果がある程度蓄積した段階で、小田原で研究会内部の初めての討論会「AT 降灰以前の石器文化」が泊まり込みで行われた(1988 年 8 月)。そして満を持して公開シンポジウム「AT 降灰以前の石器文化」を開催することができた(1991 年 4 月)。

この成功を受けて、しばらくはテーマ設定→例会での関連研究発表→内部の研究討論会→公開シンポジウムと言う活動のサイクルが原則となり、後半期の各時期を古い段階から順番に対象とした。「V ~IV 下層」(1996 年 7 月)・砂川期(2000 年 7 月)・終末期ナイフ(2005 年 10 月)の各シンポジウムに結実し、その成果は不定期刊行の会誌『石器文化研究』で公表した。

1997 年都埋文から東大の常呂実習施設に転職したが、代表世話人が安蒜さん・白石さんから砂田佳弘さん・諏訪間順さんと私の 3 人体制に移行した。私は 2001 年まで代表世話人を務め、伊藤健さんに引き継がれた。

前半の 20 年間は研究会の会員も若く、活発に活動が行われていたといえるが、そこに「旧石器捏造事件」が発覚した(2000 年 11 月)。この衝撃は今更改めて確認するまでもなく巨大で、日本の考古学界をあげて学問的にも社会的にも対応に追われた。震源となった旧石器研究は特に深刻であり、当時各地で活躍していた地域の研究会とは別に、旧石器研究の国際化や研究水準の向上、そして何よりも研究の再生を目指して、日本旧石器学会が設立されることとなった(2003 年)。さらにロシア・中国・韓国・日本の 4 つの国内学会が連合してアジア旧石器協会が設立された(2008 年)。学会活動には石器文化研究会の会員も積極的に貢献したが、この時期は旧石器時代の調査を行うこと自体が困難な状況に直面することもまま見られ、旧石器研究者は日本旧石器学会を通して社会的責任を果たす(あるいは復権する)ことに努めていたといえよう。

本年捏造事件発覚から 25 年を迎え、事態はようやく沈静化して平常化したように見える。休眠状態であった石器文化研究会の活動もようやく再開された。今後は次世代の若手研究者が育ち、研究会を通じて活躍されることを期待したい。

## 石器文化研究会黎明期の頃

明治大学黒耀石研究センター  
誠訪間 順

石器文化研究会 40 周年を迎えるにあたり発足時から参加していたものの一人として黎明期の思い出を振り返ってみたい。

石器文化研究会は、神奈川考古同人会が主催した 2 回のシンポジウムを経て、関東の石器研究者に声掛けして発足した。代表世話人は安蒜政雄氏、白石浩之氏の 2 名で会の運営の中心は織笠昭氏であった。通称、「プレ研」と呼んでいたが、会員同士は原則、大学の教授であっても「さん付け」とし、入会は大学院以上で、学部学生の参加は認められなかった。

第 1 回の例会は 1985 年 6 月 8 日に明治大学駿河台校舎学芸員養成課程実習室にて開催された。その頃は明治大学にお世話になっていたが、少しあって、江東区西大島や東大島の会場を使用することが多くなった。例会の後の懇親会は事前予約もしていなかったので毎回苦労した思い出がある。

そして、例会を重ねるうち、1986 年 12 月 21 日の例会で、「AT 降灰以前の石器群について」を具体的なテーマとしていくこととなり、各地の事例報告などが積み重ねられ、1988 年 8 月 27 日・28 日に小田原市城山のアジアセンターにて宿泊込みの研究討論会「AT 降灰以前の石器文化」が行われた。その内容は、1989 年 5 月 25 日付『石器文化研究』1 号において報告されている。討論部分をカセットテープに録音したものを何人かで分担し、テープ起こし、発言者に修正を依頼するというもので、インターネットもメールのない時代には電話と手紙でのやり取りであったと記憶している。また、当時はワープロが出始めた頃で、1 週間以上もかけて文字起こしをしたものを消してしまい、夜中に絶叫したことを思い出した。

1989 年 9 月 28 日・29 日に第 2 回研究討論会『AT 降灰以前の石器文化 Part II』開催した。1991 年 4 月 13・14 日 シンポジウム「AT 降灰以前の石器文化—関東地方における変遷と列島内対比—」を江東区総合区民センターにて開催し、全国から多くの研究者が参集した。

このシンポジウムでは、武藏野台地の立川ローム層の層位区分に沿って、X 層から V 層までの層位的な出土事例が集成・検討され、以後、「X 層段階」「IX 層段階」といった層位編年が共通言語のように広まる経緯となったといえる。

シンポジウムを経て、1992 年 6 月 22 日に 織笠 昭氏が代表世話人に加わり、安蒜政雄、白石浩之氏と 3 人体制となった。

1994 年 3 月 5・6 日 第 1 回石器文化研究交流会かながわ大会が大和市つきみ野文化会館にて開催され、最新の旧石器時代遺跡調査の報告などが行われ、以後、各県持ち回りで開催が続いた。

1991 年のシンポジウム以降は「AT 降灰以降のナイフ形石器文化」をテーマとして例会が重ねられ、1996 年 7 月 13 日・14 日に「AT 降灰以降のナイフ形石器文化～関東地方における V～IV 下層段階石器群の検討～」が調布市グリーンホールにて開催された。予稿集は石器文化研究 5 号として 500 頁を超える大部なものとなった。この時は印刷費を抑えるためにダイレクト印刷にしたが、編集が大変だったのはいうものでもない。編集後記のデータ消滅と「お前こそ初期化してやる」は編集のクライマックスの状況を今日に伝えている。そんな研究会の黎明期から 10 年であった。

## 石器文化研究会の現在と未来

石器文化研究会 代表世話人  
**伊藤 健**

石器文化研究会の名称は、当初「石器研究会」が候補だったところ同名の研究会がすでにあったことから、この名になったとのこと。神奈川考古同人会先土器部会を源流としながらも、「旧石器時代」との兼ね合いで「先土器」は用いなかったのである。また、関東地方を中心としつつも地域の垣根を超えた研究会を標榜する意味を込めて、地域名もつけなかったという（織笠 1991）。そしてもう一つ「石器文化」。石器ではなく、石器文化＝「くりかえし起る石器諸型式の組合せ」（織笠 1989）から文化、時代を理解しようという当時の研究概念を反映するもので、全国各地の研究会にもこの「文化」が付いているのは時代の趨勢であった。

私は 1987 年 5 月にはじめて参加したので、それら当初のことは後から知った。ただ出席回数はトップクラスなので、設立後しばらくしてからの事情はおそらく最も詳しい一人であろう（ちなみに砂田佳弘さんと私のどちらかが一位でどちらかが二位、また最近 10 年に限れば酒巻孝光さんが一位）。そこで、研究会 40 年の中盤以降のことを記したいと思う。

研究会の運営は、代表世話人のもと、主に司会係（後に総務幹事、代表幹事などの組織・名称が変遷）が中心になって行った。初代の織笠 昭さんらを筆頭に、数年ずつ 6 代にわたり、シンポジウムの開催をもって次代にバトンタッチしていった。私は 3 代目にあたる。その間、時機を得た発表と共に通テーマによる検討によった例会は、概ね土曜日に「石器文化研究交流会」と 8 月の夏休みを除く毎月、すなわち年に 10 回程度を行うことができた。例会参加者は常時 20～40 名で、時に 40 名を超えたこともあった。

一方、石器文化研究交流会は 1994 年 3 月に第 1 回が開催された。第 1 回の発表要旨には「検出された遺跡や出土遺物に関する情報収集が困難になっているのも事実です。つまり、何時・何処で・何の遺構や遺物を発掘調査しているのか分からなくなっています。」そこで「研究と啓発を一段と推進していくために・・・企画しました。」と記されている（石器文化研究会・第 1 回石器文化研究交流会かながわ実行委員会 1994）。如何に情報を渴望していたかがわかるが、例会と並行して実施したその熱量のほどを感じることができる。爾来、関東地方と静岡県、山梨県を巡回して、概ねシンポジウムを行わない年度に年 1 回、第 19 回まで実施。関係者の苦労は並大抵ではなかったろう（もちろん私も関わった）。

しかし・・・例会の参加人数は徐々に減りだし 2010 年度頃から 10～20 名で推移し、しばし 10 名を割り込んだ。私も大学授業の曜日と重なってしまい、毎回参加することもなくなったり。それに合わせて 2010 年度頃から開催回数も減りだし、2013 年度以降は年に 4 回を超えることはなくなり、ついに 2019 年、コロナ禍を前にして活動停止した。またシンポジウムは 2010 年度を最後に途絶え、そして石器文化研究交流会は 2015 年度をもって終了した。

最も大きな停滞の要因は頑張ってバトンをつないできたメンバー個々の事情であろう。低迷期が就職氷河期だったことも関連するが、多分に個人の努力を頼ってきたのが実情である。それを別にすれば、第一にやはり前・中期旧石器捏造事件の影響であろう。それによって旧石器時代研究を志

す学生そして研究者が減少した。第二に情報共有環境の変化である。情報技術の発達により研究会で情報を入手する必要があまりなくなり、一方コンプライアンスの関係から研究会で未報告資料に触れることも難しくなった。往時は研究会に来なければ、石器の情報に触ることはできなかった。そして第三に日本旧石器学会の発足、科学研究費などの研究プロジェクトの増加である。各地の地域研究会しかなかった時代に比べ、研究参加の機会は多様化した。最後は第三の問題と根は同じであるが、研究趨勢の変化である。実験痕跡研究、遺跡形成論、測量・計測技術など「分析考古学」が学界の潮流となり、一方編年研究は広範囲高精度年代測定と大陸を視野に入れたグローバルなものになった。「石器文化」という概念自体あまり使われなくなった。私も使用しない。大方の編年が確立され発掘調査資料の位置づけが容易になったとされる関東地方にあっては、特に新たな地域相解明への取り組みも低調になった。

コロナ自粛期間がほぼ終了した 2022 年末、白石さんの肝入りで当時の代表世話人が司会係を兼ねて以前のような活動を再開した。失われた年々を経て、関東・東海地方の旧石器編年は見直しする必要が生じていた。年間 6・7 回の例会を開き、毎回 20 名前後の方が参加している。参加メンバーの多くが関東・東海地方在住であることを踏まえ、地域研究会として関東・東海地方の地域相の解明をテーマとしつつ各発表や資料見学を重ね、その結実として本年 9 月のシンポジウムを開き新たな問題点を炙りだすことができた。

本年 11 月、幹事メンバーが少し若返り、代表世話人が代行してきた司会係は元どおり代表幹事に戻った。とはいっても、参加者の過半数は 60 歳台。設立後 10 年以内に参加し始めたメンバーが多い。世間のさまざまな集まりと同じである。ただ次の多いのが 20 歳台。大学生、大学院生がほとんどであるが、再開 3 年を経て少しずつ文化財関係の仕事につき始めている。参加を勧めてくださる大学の先生方に感謝する。研究会低調期に学生や嘱託職員であった 30・40 歳台の現役社会人世代が少ないのが寂しいが。

#### 引用・参考文献

- 織笠 昭 1989 「尖頭器文化とは何か－文化・考古学的文化・石器文化－」『長野県考古学会誌』,59・60, 27-32 頁, 長野, 長野県考古学会
- 織笠 昭 1991 「石器文化研究会の歩みと石文化研究の視点」『石器文化研究』,3, 1-6 頁, 神奈川, 石器文化研究会  
石器文化研究会・第 1 回石器文化研究交流会かながわ実行委員会「はじめに」『第 1 回石器文化研究交流会－発表要旨－』, 石器文化研究会

## 石器文化研究会活動の記録（2016年～）

- 第19回石器文化研究交流会 2016.1.30・31 さいたま大会 研究討論会「大形尖頭器の出現とその背景」 戸田市郷土資料館
- 第270回例会 2016.11.12 東京都府中市武藏台遺跡立川ローム第X層資料の見学(尾田誠好) 東京都埋蔵文化財センター大塚分室
- 第271回例会 2016.12.23 石器文化研究会設立30周年記念講演会 安蒜政雄「石器と学ぶ50年」 明治大学駿河台キャンパスリバティタワー 24名
- 第272回例会 2017.1.8 神奈川県伊勢原周辺の遺跡巡査(砂田佳弘他) 神奈川県伊勢原市内発掘調査現場
- 第273回例会 2017.10.21 栃木県栃木市星野遺跡「地層探査館地点石器資料」見学検討会(酒巻孝光他) 星野遺跡地層たんけん館・寺尾公民館 19名
- 第274回例会 2017.12.23 伊藤 健「武藏野編年の新地平ー砂川期の見直しー」 佐藤悠登「杉久保系石器群の多様性に関する考察」 東京都埋蔵文化財センター 19名
- 第275回例会 2018.2.24 2017年度総会 記念講演/麻生順司「神奈川の旧石器時代ー大和配水池内遺跡の調査を基に最新の調査事例までー」 ビジョンセンター横浜 12名
- 第276回例会 2018.5.12 横須賀市船久保遺跡第5次調査の現地見学(麻生順司) 横須賀市船久保遺跡発掘調査現場 16名
- 第277回例会 2018.6.9 2018年度総会 仲田大人「旧石器時代の装身具」 神奈川県埋蔵文化財センター 12名
- 第278回例会 2018.12.1 野口 淳「石器形態研究再考ー3D計測・形態測定学から技術・機械的性能を見るー」 NVセミナールーム飯田橋
- 第279回例会 2019.3.23 白石浩之「文化変動する先史時代の日本」 みんなの会議室代々木
- 第280回例会 2019.9.21 2019年度総会 尾崎沙羅「北海道・更新世終末期における石器群の石材獲得と消費」 みんなの会議室神保町
- 第281回例会 2019.12.7 高屋敷飛鳥「石材消費からみた砂川期の地域性ー相模野台地と武藏野台地を中心にしてー」 ふれあい貸会議室飯田橋No.8
- 第282回例会 2022.12.3 2022年度総会 記念講演/白石浩之「旧石器時代終末から縄文草創期の有舌尖頭器の盛衰とその集団」 TKP九段下神保町ビジネスセンター 22名
- 第283回例会 2023.1.28 大和市上原・長久保遺跡の見学(絹川一徳) 上原・長久保遺跡発掘調査現場事務所 16名
- 第284回例会 2023.3.11 大和市新道遺跡第1次・第2次調査出土資料の検討(麻生順司) 玉川文化財研究所 22名
- 第285回例会 2023.4.22 2023年度総会 伊藤 健「武藏野編年の再確認ー茂呂遺跡論争を超えてー」 服部隆博「茂呂遺跡について考えたこと、関東ローム層について考えることー伊藤健氏へのコメントにかえてー」 五反田文化会館 15名
- 第286回例会 2023.6.10 相模原市立博物館所蔵の石器見学(長澤有史) 討論会「桶状剥離尖頭器の展開～相模野台地と武藏野台地の比較～」 相模原市立博物館 30名
- 第287回例会 2023.7.22 高屋敷飛鳥「相模野編年の現在」 諏訪間順「相模野段階編年の再構築に向けての課題」 ふれあい貸し会議室五反田No.82 28名

- 第 288 回例会 2023.9.16 富樫孝志「静岡県磐田原台地における旧石器時代石器群の構造変動」  
スマートレンタルスペース新橋汐留 16 名
- 第 289 回例会 2023.10.14 企画展「早稲田大学を訪れた旧石器人 一校地内遺跡出土資料からー」  
見学（長崎潤一・北村成世・阿部嵩士・鯉沼来人） 早稲田大学早稲田キャンパス 3 号館・  
会津八一記念博物館 31 名
- 第 290 回例会 2023.12.23 鈴木美保「石器群の編年的研究とその解釈ー野川編年を題材としてー」  
佐藤悠登「野川編年と東北地方石器群の編年との対比について」スマートレンタルスペ  
ース新橋汐留 26 名
- 第 291 回例会 2024.2.24 綾瀬市上原・長久保遺跡出土資料検討会（絹川一徳） かながわ考古学  
財団野庭出土品整理室 29 名
- 第 292 回例会 2024.6.1 日 2024 年度総会 伊藤 健「相模野と武藏野は同じなのかー悉皆的石  
器石材情報から編年を読むー」スマートレンタルスペース新橋汐留 28 名
- 第 293 回例会 2024.7.13 前嶋秀張「旧石器時代出土品整理作業における石材研究の現状と課題  
ー緑色凝灰岩と緑色岩の産地推定についてー」神奈川県埋蔵文化財センター 28 名
- 第 294 回例会 2024.9.14 縄文時代初頭の石器群についてー相模原台地を中心にーB0～L1S 層の  
尖頭器石器群や細石刃石器群資料見学（長澤有史）相模原市立博物館 21 名
- 第 295 回例会 2024.10.19 西井幸雄・尾崎沙羅「大宮台地における旧石器時代研究の現状と課題」  
スマートレンタルスペース新橋汐留 17 名
- 第 296 回例会 2024.12.7 清瀬市伊勢遺跡・強清水遺跡出土資料の見学（山崎詩乃）清瀬市郷土  
博物館 16 名
- 第 297 回例会 2025.1.11 国分寺市多摩蘭坂遺跡出土資料の見学 国分寺市武藏国分寺跡資料館  
／上敷領久「国分寺崖線域および多摩川中流域左岸における後期旧石器時代前半期の斧形  
石器の展開」都立多摩図書館セミナールーム 23 名
- 第 298 回例会 2025.2.22 砂田佳弘「相模川以西の細石刃石器群研究の展望」RIVERLD 神田 B 26  
名
- 第 299 回例会 2025.6.1 2025 年度総会 島田和高・長澤有史「細石刃石器群における黒曜石原産  
地分析についてー相模原市田名塩田遺跡群 B 地区の事例からー」ふれあい会議室浜松町  
No.97 22 名
- 第 300 回例会 2025.8.30 シンポジウム「関東・東海地方の旧石器時代研究の現在」事前発表 リ  
スペース東京日本橋 11 名  
シンポジウム「関東・東海地方の旧石器時代研究の現在」2025.9.27・28 明治大学駿河台キャン  
パスグローバルフロント 95 名
- 第 301 回例会 2025.11.8 野口智輝「有樋尖頭器や有樋尖頭器を伴う石器群の機能研究」リスペ  
ース東京日本橋 15 名



## 第 2 部

### シンポジウム

#### 「関東・東海地方の旧石器時代研究の現在」

2025 年 9 月 27 日・28 日にシンポジウム「関東・東海地方の旧石器時代の現在」を開催しました。

その予稿集を再録します。

さらに、シンポジウム開催時には掲載できなかった鈴木美保氏の論考を掲載します。



シンポジウム  
関東・東海地方の旧石器時代研究の現在  
予稿集



2025年9月27日・28日

主催 石器文化研究会

共催 明治大学黒耀石研究センター

## シンポジウム 関東・東海地方の旧石器時代研究の現在

### プログラム

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 多目的室

#### 9月27日

10:15-10:20	開会挨拶：諏訪間 順・明治大学黒耀石研究センター
10:20-10:30	趣旨説明：伊藤 健
10:30-11:00	諏訪間 順 南関東の旧石器編年の学史的検討
11:00-11:30	酒巻孝光 星野遺跡発掘から60年のいま（日本列島の中期旧石器）
11:30-12:00	鈴木秋平 後期旧石器時代前半期前葉における『狩猟具』のコンセプト ～型式論・機能論の方法論的再整理を通して～
12:00-13:00	休憩
13:00-13:30	白石浩之 基部加工を主体としたナイフ状石器の様相—AT下位の石刃石器群との関連性—
13:30-14:00	宇井義典 南三里塚宮原第1遺跡の現在一下総台地の後期旧石器時代前半期を考える—
14:00-14:30	西井幸雄 2つの環状ブロック群—清河寺前原遺跡と津久井城跡馬込地区—
14:30-15:00	麻生順司 相模野旧石器時代前半期の再整理
15:00-15:10	休憩
15:10-15:40	鈴木美保 南関東の石器群編年とMISステージ2の環境変動
15:40-16:10	小原俊行 後期旧石器時代後半期前葉の編年研究—関東平野北西部を対象にして—
16:10-16:40	井関文明、脇 幸生 相模野台地における最終氷期最寒冷期前後の諸活動
16:40-17:10	高屋敷飛鳥 相模野台地における砂川期からナイフ形石器終末期にかけての石器群の様相と年代
17:30-	懇親会

#### 9月28日

10:00-10:30	伊藤 健 悉皆集成による武藏野編年第IIb～IV期の再構成
10:30-11:00	富樫孝志 静岡県磐田原台地における旧石器時代石器群編年の再検討
11:00-11:30	諸星良一 関東地方における北方系細石刃石器群
11:30-12:00	長澤有史 相模野台地における狩猟具の様相—L1S層出土石器群を中心とした予察—
12:00-13:40	コアタイム・休憩
13:40-14:10	堤 隆 下茂内第II文化層尖頭器石器群の較正年代と南関東との編年的対比
14:10-14:25	休憩
14:25-15:50	討論 司会：伊藤 健 パネラー：本研究発表者全員
15:50-16:00	閉会挨拶：伊藤 健

### ポスターセッション

絹川一徳	瀬戸内技法研究の現在—東日本への波及を考える—
野口 淳	「石槍」の三次元形態測定学
前嶋秀張	緑色凝灰岩および緑色岩を使用した石斧の分布と原産地の調査
天野早苗	下河原崎谷中台遺跡の角錐状石器を伴う石器群について
金 彦中	ハンマーストーンの分析と石器製作技術と動作 —東日本の後期旧石器時代前半期石器群の諸事例から—
尾崎沙羅、小林竜太、浅井 希、大久保 聰、太田賢一、大野朝日、西井幸雄、藤田健一、水村雄功	臼原遺跡の再整理作業—その手順と成果—
野口智輝	相模野台地における男女倉型有樋尖頭器の衝撃剥離痕跡
矢野賢太	剥片尖頭器石器群における原産地的様相—熊本県石清水遺跡を事例として—

主催 石器文化研究会

共催 明治大学黒耀石研究センター

## 趣旨説明

日本ではじめて旧石器と認識された石器が関東地方で発見されて以降、関東・東海地方では全国に先んじて多くの発掘調査が行われ、旧石器時代の石器群が蓄積されました。特に南関東地方ではローム層が厚く堆積することから層序対比が進み、石器の型式・形態的研究と相まって早くから編年案が示され、1980年代までに相模野台地と武藏野台地を中心に旧石器時代編年が確立しました。また、南関東地方と石器群の特徴があまり大きく変わらない下総台地、北関東地方、東海地方でも、それを追うように編年研究が進みました。それらは既に一定の評価を得、動かしにくい成果と言えましょう。

関東・東海地方の旧石器時代編年、特に相模野編年、武藏野編年は、出土層序に裏打ちされた精緻な存在であるがゆえに、それを列島内に敷衍化して、列島の標準に擬せられることもありました。そのことは本地方を研究フィールドとする者にとって誇らしいことでもあります、一方でそれが足枷でもあったのです。細かく石器を分け時間順に並べるという行為なくして、この地方の研究が成り立たなくなってしまったというジレンマもあります。

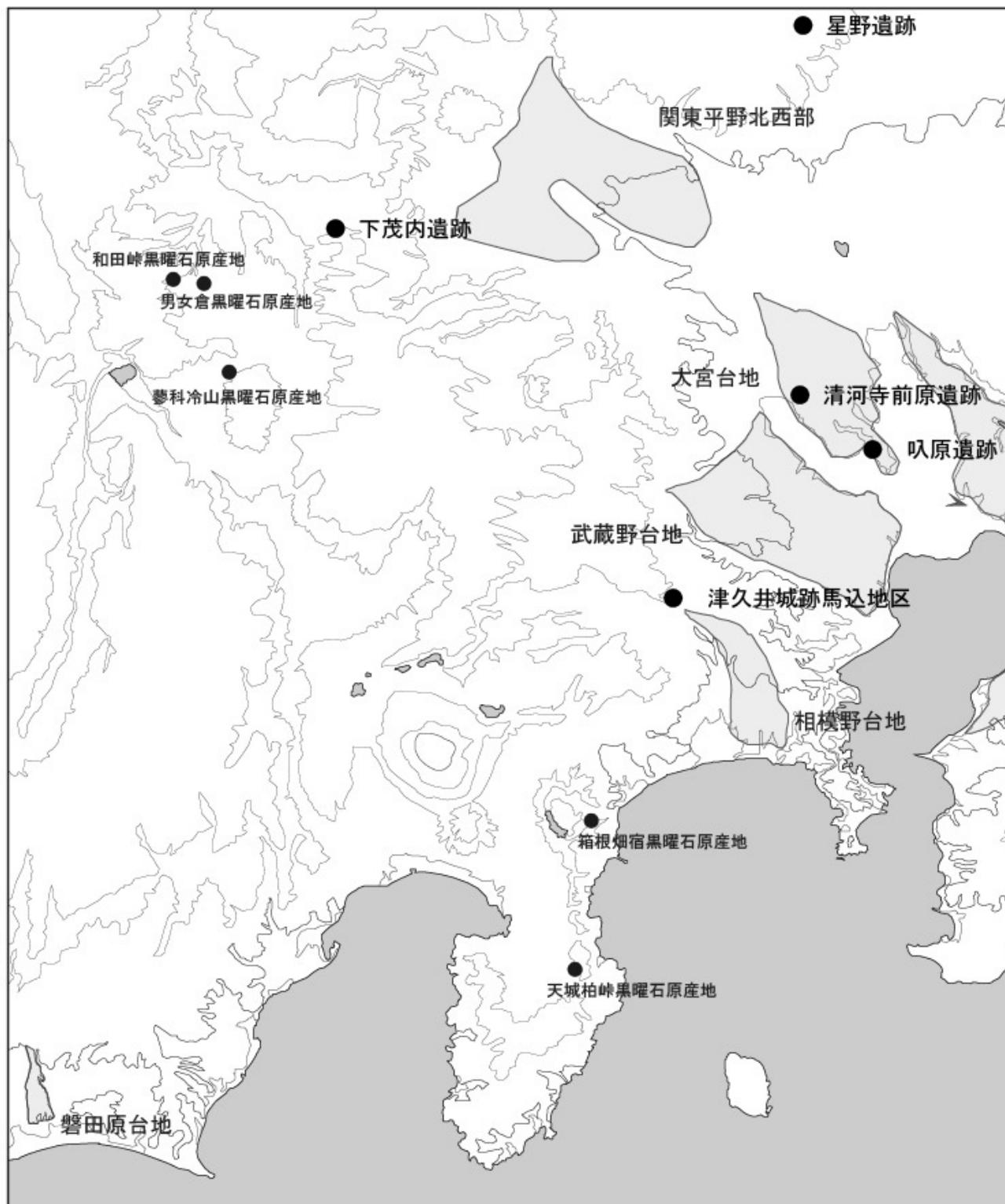
さて、1990年代以降、発掘調査件数はうなぎ登りに増加し、新たな旧石器時代資料は膨大に蓄積されました。ある集計では、1990年以降はそれ以前の10倍以上に達すると言います。ですが、1990年代以降の資料は、個別では新しい発見があったとは言うものの、大枠ではそれ以前の資料と変わらないとみられたため、資料の蓄積を受けての当地方の編年の再確認・再検討は進みませんでした。果たして30年以上前の編年案が現資料でも通用するのでしょうか。編年確立期の調査報告書が、現在の研究水準と比べ情報不足であったのは、紛れもない事実です。

この間、旧石器時代の研究分野は大きく広がりました。石器型式・形態研究は元より、環境変動論、石材産地・石材受給研究、遺跡構造論、年代論、石器痕跡研究、石器形態測定研究など枚挙に暇がありません。本シンポジウムはそれら多彩な研究テーマにより、本研究発表16件、ポスターセッション8件の計24件から構成されています。いずれも発表者自身の応募によった、今現在の研究テーマで、対象は関東全都県、静岡県、長野県にわたり地域外の研究成果もあります。多彩なテーマ設定ながらも、そこから現在の「関東・東海地方の旧石器時代」像を浮かび上がらせることができたならば、望外の喜びです。

その長い研究史をもつ、厚い層序に裏打ちされた関東・東海地方の旧石器時代編年研究を継承し発展させつつ、一方で断絶し超克することが、このシンポジウム最終のテーマです。

2025年9月

石器文化研究会 代表世話人 伊藤 健



研究発表の対象となった地域・遺跡





## 本研究発表

*Oral presentations*



## 南関東の旧石器編年の学史的検討

明治大学黒曜石研究センター

諏訪間 順

### はじめに

石器文化研究会は、「神奈川考古同人会先土器（旧石器）研究グループ」を母体として、1985年6月8日（土）第1回例会を開催し、正式に発足した。そして、本年2025年6月に40周年を迎えた。その間、1988年8月に第1回研究討論会『AT降灰以前の石器文化』開催、1989年5月に『石器文化研究』1号創刊し、1991年4月に初めての公開シンポジウム『AT降灰以前の石器文化 関東地方における変遷と列島内対比』を開催した。その後、月例会を継続し、1996年7月にシンポジウム『AT降灰以降のナイフ形石器文化～関東地方におけるV～IV下層段階石器群の検討』を開催し、続いて、2000年6月にシンポジウム『砂川—その石器群と地域性—』、そして、2005年10月シンポジウム『「ナイフ形石器文化終末期」再考』を開催している。

南関東地方の旧石器時代石器群の編年は、武藏野台地の立川ローム層X層段階からV・IV層下部段階という層位名による呼称とその石器群の評価は、一定の定着を見せており、子細な点の評価は別として概ね共通言語的に使われるようになっている（石器文化研究会編 1991・1996・2000・2005）。

2005年のナイフ形石器文化終末期のシンポジウム以降は、2011年1月に『ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何か—概念と実態を問い合わせ—』を開催しているが、その後に続く、尖頭器石器群、細石刃石器群、そして、神子柴系石器群を含めた縄文時代草創期石器群について編年を中心とした検討は行われていない。この2005年以降の20年間は、編年研究に一定の共通理解が得られたことに加え、社会生態研究や行動論的研究が主流になっていった時期とも重なり、編年研究そのものが研究の中心ではなくなったともいえる。2000年代以降の研究の視点として、黒曜石原産地推定分析から導き出される遺跡内の構造や原産地と消費地との関係性の研究も進み、ここ10年の研究状況は、放射性炭素年代<sup>14C</sup>年代測定の分析数の増加と較正年代の精緻化が進んだことにより、これまでの層位と型式や石器製作技術に加え、放射性炭素年代による比較・検討も進んできている（中村 2014・高屋敷 2024）。

### 1 関東地方の旧石器時代編年

関東の旧石器時代研究は、1949年の岩宿遺跡の発見を契機に本格化した。その後、茂呂遺跡や砂川遺跡の調査を経て、1960年代には相模野台地の月見野遺跡群、武藏野台地の野川遺跡が調査され、研究史上大きな転換点を迎えた。月見野遺跡群や小園前畑遺跡の成果を受け、相模野編年（I～V期）が提示された（小野・鈴木編 1972）。武藏野台地では野川遺跡の調査で立川ローム層を基盤とした層位区分と文化層の編年が確立された。小田・キーリー氏によるPhase I～IVの体系化は、武藏野台地のみならず、南関東全体の編年として発展していった（小田・キーリー 1973）。

1970年代以降、相模野台地では寺尾・下鶴間長堀・橋本など良好な遺跡調査が相次ぎ、ナイフ形石器文化後半から縄文草創期までの石器群が蓄積された。そして、1988年には鈴木・矢島両氏による南関東統一編年が提示され、関東地方の基盤的枠組みが整えられた（鈴木・矢島 1988）。ほぼ同時期に筆者は相模野台地の旧石器時代から縄文時代草創期までの石器群を12段階に区分した段階編年を提示し（諏訪間 1988）、2001年にはシンポジウム「相模野旧石器編年の到達点」でこれまでの編年研究を総括した（諏訪間 2001）。

下総台地では大規模開発に伴う調査が進み、1984年に『房総考古学ライブラリー』で編年案が示さ

れた(田村・橋本 1984)。

北関東でも 1980 年代から公共事業に伴う調査が進み、群馬県の後田・善上・下触牛伏遺跡などで AT 降灰以前の石器群や環状ブロック群が発見された。1994 年には群馬編年が提示されている(岩宿フォーラム実行委員会編 1994)。

茨城では資料が少なかったが、2002 年に研究の到達点を示すシンポジウムが開催され、橋本勝雄氏による編年が整理された(橋本 1995)。埼玉県では大宮台地を中心に西井幸雄氏らによる編年が提示されている(西井他 1997)。

こうして、2000 年代までには関東各地域の編年が整理されていった。長沼正樹氏は、こうした台地別層位編年に着目しその編年研究の問題点や課題を行動論的視点から指摘している(長沼 2010)。

一方、1990 年代以降は石材研究が飛躍的に発展した。特に蛍光 X 線分析による黒曜石産地推定の方法が展開し、従来、黒曜石は信州産が主と考えられていたが、箱根・伊豆・高原山産など近傍産地の存在が明確化され原産地と各台地の遺跡との関係や遺跡内での分布状況まで把握可能となった(池谷 2009)。これにより石材の調達・搬入・消費の過程が具体的に復元でき、人間行動や社会構造の解明に直結する研究が進んだ。さらに、各地域に伝統的な石材圏が存在することが示され、行動領域の設定が可能になった。2000 年代以降は、社会生態学的アプローチや行動論的研究が加わり、旧石器時代の人間集団の自然環境・社会環境への適応過程を読み取る試みが進展した。安斎正人氏の社会生態学的視点、佐藤宏之氏の二極構造論、田村隆氏の二項モード論などは新しい研究が潮流となった。

さらに、放射性炭素  $^{14}\text{C}$  の AMS 法による高精度年代測定が可能となり、従来の層位・型式研究に加え、暦年代に基づく比較が進んだ。

総じて、南関東旧石器編年研究は、岩宿発見以来 70 年以上にわたり、層序研究・編年整理から石材研究・社会生態学的研究へと展開してきた。近年は高精度年代測定と自然科学的分析を取り込み、遺跡群を人類史的文脈で再解釈する段階に入っている。今後は、各地域における石材環境と行動領域の解明、AMS 年代測定の蓄積、国際的比較研究の深化が課題である。石器文化研究会の 40 年に及ぶ活動の蓄積は、その基盤を築いたものであり、さらなる総合化が期待される。

## 2 編年研究の展望

関東地方の編年研究に高精度な炭素年代を与えて精緻な年代軸を構築するためには、放射性炭素年代の集成と追加の分析が何よりも必要なことである。

近年、相模野台地の放射性炭素年代を集成し、29 遺跡 175 点の放射性炭素年代値を較正曲線 Intcal20 を用いて整理された(高屋敷 2024)。ここでも指摘されているが、段階変遷と AMS 年代の較正值は、時期ごとに順を追って推移し、概ね相模野編年と一致していることが明らかになった。一方、放射性炭素年代は、各段階によって粗密があり、28,500~27,800 cal BP の段階 V の前半(IV 層相当前半)、25,000~24,000 cal BP の段階 V の後半、19,000~16,000 cal BP の段階 X の細石刃石器群の年代値については存在しないか少ないことも明らかになっている。神奈川県内の石器群は、体系的に放射性炭素年代測定が行われていないという致命的な欠落があるのである。

これまでの層位や石器組成、石器製作技術、石材組成などの精緻な分析に加え、さらに放射性炭素年代測定を多く蓄積することは極めて重要かつ必要であるといえる。年代の欠落した時期の石器群に伴う炭化材資料を掘り起こし、追加で分析にかける必要性があり、特に、AT 降灰以前の放射性炭素年代値の集成は大きな課題といえる。

関東地方特に相模野台地及びこの 10 数年の間に膨大に資料の増加がある伊勢原・秦野市域の西相

模地域は関東地方のみならず、日本列島の旧石器時代石器群編年を考える上で最も重要な地域となるであろう。

#### 引用・参考文献

- 麻生順司 2015「大和市域を中心とした旧石器時代の変遷について—上草柳遺跡群大和配水池内遺跡の調査事例を基に—」『大和市史研究』39 大和市役所管理部庶務課
- 池谷信之 2009『黒曜石考古学』新泉社
- 岩宿フォーラム実行委員会編 1994『群馬の岩宿時代の変遷と特色：予稿集』笠懸野岩宿文化資料館
- 小野正敏・鈴木次郎編 1972『綾瀬町文化財調査報告第1集一小園前畠遺跡発掘調査報告書一』綾瀬町教育委員会
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 有斐閣
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 新版 有斐閣
- 諫訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」『神奈川考古』24 神奈川考古同人会
- 諫訪間順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考古学会考古学講座 神奈川県考古学会
- 諫訪間順 2019『相模野台地の旧石器考古学』新泉社
- 橋本勝雄 1995「茨城県の旧石器」『茨城県考古学協会誌』7 茨城県考古学協会
- 高屋敷飛鳥 2024「放射性炭素年代からみた相模野編年の現在」『神奈川考古』60 神奈川考古同人会
- 田村 隆・橋本勝雄 1984『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』千葉県文化財センター
- 石器文化研究会編 1991「シンポジウム AT 降灰以前の石器文化—列島内の様相と対比—」『石器文化研究』3
- 石器文化研究会編 1996「シンポジウム AT 降灰以降のナイフ形石器文化」『石器文化研究』5
- 石器文化研究会編 2000「シンポジウム砂川—その石器群と地域性—予稿集」『石器文化研究』9
- 石器文化研究会編 2005「シンポジウム「ナイフ形石器文化終末期」再考—ナイフ形石器文化終末期石器群の変動—予稿集」『石器文化研究』12
- 中村雄紀 2014「関東地方における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』10 日本旧石器学会
- 長沼正樹 2010「いわゆる「ナイフ形石器文化」をめぐる学説史と方法論的展望—関東平野南部の台地別層位編年に着目して」『論集忍路子 III』 忍路子研究会
- 西井幸雄他 1997「埼玉の旧石器時代」『埼玉考古』別冊5 埼玉考古学会
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会

武藏野：小田・キーリー 1973

Phase	Sub	自然層名
Phase IV	-	III層
Phase III	-	III層
Phase II	II b期 II a期	IV層中と III層の一部
Phase I	-	X層から V層 (提示コンポーネント数: 26)

武藏野：小田 1980a・b

分化期	亜文化期	自然層名
第IV文化期	-	第III層最上部
第III文化期	-	第III層中部
第II文化期	II b II a	第IV層上部から第III層最下部 第V層上部から第IV層中部
第I文化期	I c I b I a	第VII層上部から第V層下部 第X層最上部から第VII層下部 第X層の中部から上部

相模野：小野・鈴木ほか 1972

期	自然層名
第V期	(暗色帯による規定はなし)
第IV期	暗色帯2の形成が終わった頃から暗色帯1の形成が終わった頃
第III期	暗色帯2の上部からその上面
第II期	暗色帯4より新しくSISまで
第I期	暗色帯4とそれ以前

(提示コンポーネント数: 12)

相模野：矢島・鈴木 1976

期	自然層名
第V期	L1Hより L1S下半部
第IV期	L2およびB1の全層準
第III期	B2L上部より B2U
第II期	L4から B2Lの上半部
第I期	B4以下

(提示コンポーネント数: 26)

相模野：諏訪間 1988・2001

段階	自然層位名	
	1988年	2001年
段階 XII	漸移層～富士黒土層下部	漸移層～富士黒土層下部
段階 XI	L1S上面	L1S中部～漸移層
段階 X	B0中部～L1S上部	B0中部～L1S上部
段階 IX	L1H上部～B0下部	L1H上部～B0下部
段階 VIII	L1H下部から上部	L1H中部
段階 VII	B1上部から B1上面	B1上部～上面
段階 VI	L2から B1中部	L2～B1中部
段階 V	B2L下部から B2U上面	B2L下部～B2U
段階 IV	B3上部から B2L下部	B3上部～B2L下部
段階 III	B4上部ないし B3下部 から B3中部	B4上部と B3下部
段階 II	B5下底～B4上部 ないし B3下部	L5上部～B4上面
段階 I	L6下底～L6上面	B5

(提示コンポーネント数: 86) (追加コンポーネント数: 27)

南関東：鈴木・矢島 1978

期	細分	自然層位名	
		相模野	武藏野
第V期	-	L1S～L1H	III層
第IV期	-	B1～L2	IV層中・上部
第III期	-	B2U～B2L上部	IV層下部
第II期	後半期 前半期	B2L下底～B3中位	V～VII層 IX・X層
第I期	-		X層

(提示コンポーネント数: 31)

南関東：鈴木・矢島 1988

期	細分	自然層位名	
		相模野	武藏野
第V期	-	L1S～L1H	III層
第IV期	後半 前半	B1上部～上面 B1中～L2	IV層中・上部
第III期	-	B2U～B2L上部	IV層下部
第II期	後半 前半	B2L下底～B3中位	V～VII層 IX・X層
第I期	-		X層

図1 武藏野台地・相模野台地の各編年案と自然層位名（考古層序区分）の対応関係  
(長沼 2010)

時期区分	相模野編年	相模野段階編年	主な出土層位	年代(cal BP)
縄文草創期(隆起線文土器)	-	段階 X II	漸移層～FB下部	約15,000～14,000
縄文草創期初頭(出現期土器) ・削片系細石刃石器群	-	段階 X I	L1S上部	約16,000～15,000
稜柱系・舟底系細石刃石器群	第 V 期	段階 X	B0上部～L1S下部	約19,000～17,500?
		段階 IX	L1H上部～B0下部	約20,500～19,000
		段階 VIII	L1H	約21,500～19,000
尖頭器石器群	第 IV 期後半	段階 VII	B1上	約22,500～21,500
ナイフ形石器終末期(月見野期)	第 IV 期前半	段階 VI	L2～B1下	約24,000～22,500
砂川期	第 III 期	段階 V	B2L上部～B2U	約29,000～24,000
IV下 V層相当	第 II 期後半	段階 IV	L3～B2L下部	約30,500～29,000
VI層相当	第 II 期後半	段階 III	L4～B3	約33,000～30,000
VII層相当	第 II 期前半	段階 II	L5～B4	約35,000～33,000
IX層相当	第 I 期	段階 I	B5	～約35,000

図 2 相模野台地の AMS 年代値(高屋敷 2024)

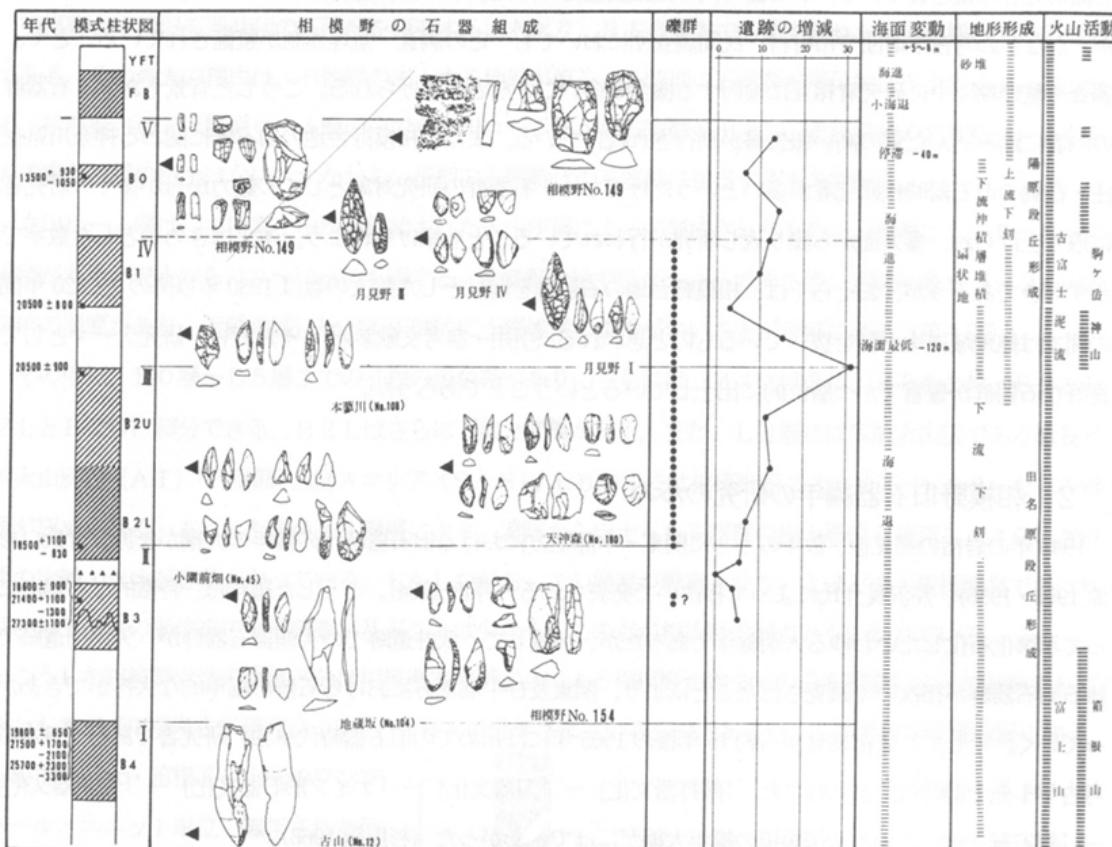


図 3 相模野台地の第四紀総合編年 (小野正敏・鈴木次郎編 1972)

## 星野遺跡発掘から60年のいま（日本列島の中期旧石器）

FP オフィス酒巻  
酒巻 孝光

### はじめに

星野遺跡は、栃木県栃木市星野町の永野川左岸の山口大地上に位置する。1965年に故斎藤恒民氏がチャート製のルバロア石核に酷似した石核を発見し、東北大学文学部考古学研究室の芹沢長介氏に鑑定を依頼したことによる。発掘主体 栃木市教育委員会、発掘担当 東北大学考古学研究室 芹沢長介助教授（当時）による発掘が、1965年から67年に3次にわたり実施された。その後、1973年に4次、1978年に5次調査が、東北大学文学部考古学研究室主体で行われた。結果、珪岩製の石器が13枚の文化層から出土した。しかし、4万5千年前に赤城山より噴出堆積した鹿沼軽石層（AgKp）より下の層から出土した石器は、崖錐作用による偽石器（珪岩製旧石器問題）として扱われ、この問題に考古学会として結論が出されないまま発掘から60年の還暦を迎える遺跡である。

発掘終了後、保存されてきたEトレンチの有効活用策として、1998年に「星野遺跡地層たんけん館」が建設され一般公開されている。この建設工事に伴う事前発掘調査は、栃木市教育委員会により実施された。しかし、調査した土層範囲は、鹿沼軽石層直上の後期旧石器包含層までの調査で終了し、4万年より以前の中期旧石器包含層は、無調査で建設工事が実施された。工事期間中、遺跡の発見者である故斎藤恒民氏は、破壊されていく遺跡を目の当たりにしながら毎日現場に張り付いて、出土する石器の回収に当たった。回収された石器の数は数千点にものぼる。回収した石器一点一点を、洗浄し、注記し、且つ文化層別に分けて「星野遺跡記念館」に保管をされた。

故斎藤恒民氏が、自費で1985年に建設し星野遺跡出土の旧石器を中心にナウマン像、オオツノジカなどの化石も展示して一般公開してきた「星野遺跡記念館」が、斎藤恒民氏の逝去に伴い2007年から閉館となっていた。2017年にこの施設と収蔵・展示品が、ご遺族より栃木市へ寄贈されリニューアルオープンされることになった。この開館準備作業への協力依頼が、栃木市教育委員会から酒巻にあり、受託して東北大学名誉教授の柳田俊雄氏と共に作業にあたった（2017年～2021年）。故斎藤氏回収石器（地層たんけん館地点石器）の実見、観察、検討、展示整理作業を主に実施した。その作業で判明した星野遺跡の中期旧石器の特徴的な事実をキーワードに、本州島内で発見され後期旧石器以前とされる幾つかの遺跡の石器資料を、現地に赴き実見した結果得られたにことについて発表する。

### 1. 星野遺跡出土石器の特徴

石割の特徴は、原礫の分割、剥片剥離が、石材の種類（珪岩、石英、方解石、ホルンフェルス、チャート、石灰岩等）に関係なくほぼ両極打法により行われていることが最大の特徴である。剥片は、板状の四角形、台形状を呈し、両側縁または一側縁に自然面を残す剥片が大多数をしめる。柳田・梶原氏の（「日本列島における前期旧石器時代の両極剥離」九州旧石器第22号67-86頁参照）両極剥離模式図にてらして抽出を試みた結果、モデル①～⑤の石核、剥片が確認された。剥片観察で、ハンマー側に生ずる打点、コーンなどの基本的なチェック項目は、問題なく確認できる。対面する台石側では、反動によりできた抉りと階段状剥離を呈するものが多く観察できることが特徴的である。また、縦長の剥片に彫刻刀と誤認しやすい桶状剥離面が同時割れとしてできるので、両極打法の剥片観察の時には要注意したい点である。

次に、特徴的な石核として、主に縦長の石核に上下のほぼ中央付近が膨らんだビヤ樽型の石核ができる。これも両極打法ならではの結果であろう。この他にも両極打法による特徴的な石核があるが、ここでは省略させていただく。詳しくは、柳田・梶原氏の 2018 年九州旧石器掲載論文を参照ください。次に、特徴的な石器について述べる。

### 1) 片刃石器 (チョッパー又はスクレイパー)

両側縁に自然面を残した台形状、又は四角形の板状剥片を素材として、側辺と直行する幅広な側の端部に片刃を作った石器である。片刃の作出方法に大きな特徴がある。その方法は、剥片の幅広な側の端部に両極打法で樋状に一撃の剥離で刃部を作出していることである。この方法で作られた石器には、イ) 剥片の側面に沿って刃部を作出したもの (写真 1・2)、ロ) 剥片の幅広な端部の左右どちら側の角から斜めに切りだしナイフ状の刃部を作出したもの (写真 3) がある。また、イ) の方法で作られた石器の中に両極打法特有の剥離の結果、刃部の中央近辺に尖った部分ができる石器がある。ビヤ樽型の石核形成と同一の現象 (写真 4)。また、この方法で作成された石器は、10 cm を優に超える大型のものから 2 cm ほどの小型のものまでバラエティに富む (使用石材も多種)。これら片刃の石器は、今までに日本国内で報告されている後期旧石器時代の資料で筆者は実見したことが無い加工方法の石器である。

### 2) 尖頭部を錯向剥離で作出した石器

両極打法により剥離された厚手、薄手の板状剥片を素材として、剥片の直行する二辺の角に錯向剥離で尖頭部を作るもの a (写真 5)。板状、楕円上の大型、小型剥片の一側辺の中央付近に背面、腹面から錯向剥離で尖頭部を作るもの b (写真 6・7) がある。a、b どちらも錯向剥離は、器体の奥まで入らず縁辺部にとどまるため尖頭部が短く、太いのが特徴である。錐と判断した石器の尖頭部 (細身) との違いは明瞭である。石器の大きさは 10 cm を超えるものから 3、4 cm のものまで様々である。

### 3) その他特徴的な石器

ノッチの機能とスクレイパーの機能が一体化された様な石器を確認した。写真 8 のように搔器の刃部に抉りの剥離を施した石器である。ノッチ、スクレイパーどちらの機能も備えた複合石器である。スクレイパーも大型、小型、刃部が直線、鋸歯状、内湾する、外湾するなど多彩である。細長の分厚い剥片素材の端部に二次加工したエンドスクレイパーも確認した。尖頭部が細い錐などの作出にも錯向剥離を利用したものもある。その他に特徴的な石器ではないが、敲き石 (砂岩、珪岩、ホルンフェルス、花崗岩など) 台石 (石材未鑑定) も確認したので、石器製作が行われていた遺跡であろう。

## 2. 使用石材について

第 1 次から第 5 次の発掘調査で、鹿沼軽石層より下の層位から出土した石器に使用されていた石材は、チャート (珪石) と珪岩のみであったが、地層たんけん館地点回収石器に使用されていた石材は実に多彩であった。珪岩 (珪石が二次的な熱による接触編成作用を受けた変成岩。剥離面に貝殻状のリングがない。石英の剥離面に近似している) チャート (珪石)、ホルンフェルス (ディサイト、砂岩起源など) 石英岩、砂岩、石灰岩、方解石 (石灰岩が熱変性によって再結晶してできた結晶質石灰岩)、緑色岩、礫岩、花崗岩などが確認できた (鑑定者: 中村由克氏)。今まで、星野遺跡の石器

は、崖錐作用により作られた偽石器であるとして、日本の旧石器研究者の殆どの方々が無視してきたが、星野遺跡の位置する北側山地をはじめ永野川左岸の山口台地には存在しない（産総研の地質図で確認）石灰岩、方解石、緑色岩、花崗岩などの石器が出土している。星野遺跡所在の山口台地に存在しないこれらの石材は、この遺跡を残した人類によって他の地から搬入され石器製作に利用されたと判断することが妥当であろう。

故斎藤恒民氏が分類注記した「地層たんけん館地点回収石器」の文化層区分がほぼ正しいとして文化層別の石材利用を見ると、珪岩、チャート、石英岩は、上層（第5文化層）から第13文化層まで幅広く利用されているが、石灰岩、方解石、緑色岩は、最下層の第13文化層と第12文化層のみであった。また、砂岩、ホルンフェルスは、下層での使用量は少なく上層になるにつれて多くなる傾向が見られ、第6文化層では、使用量が顕著に増加する。反対に、白色の硬い石英岩は、下層の第13、第12文化層での使用量が顕著である。珍しい花崗岩の石器は、第8文化層で確認された。このことから層位学的に古い時代は、石英岩の様な硬い石材が多く利用され後期旧石器時代への移行期に近づくと比較的柔らかく剥離しやすい（フリーハンドでの剥片剥離）石材の利用へと変化したことが窺える。

### 3. 星野遺跡の石器観察から得られたキーワードに共通する石器を確認した遺跡

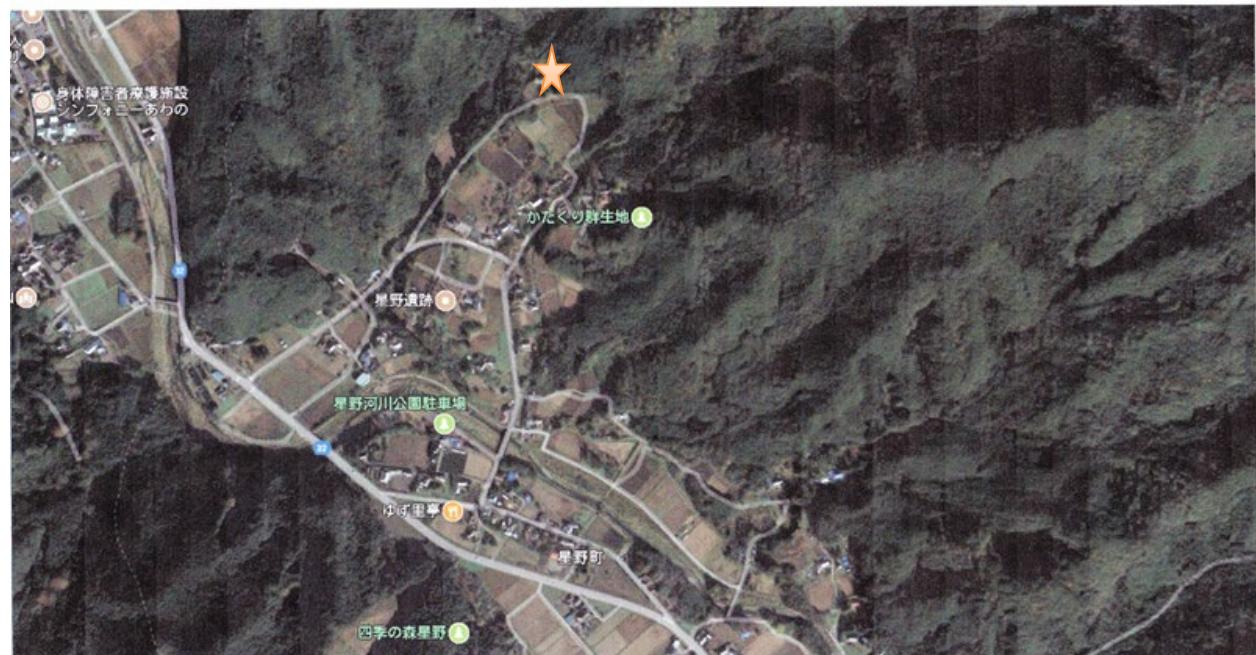
星野遺跡の特徴的な石器観察から得られたキーワードは、1) 剥片剥離を主に「両極打法」を用いて行っている。2) 両極打法による樋状剥離で刃部を作出した「片刃石器」の存在。3) 錯向剥離で短く、太い尖頭部を作出した嘴状石器（ベック）の存在の3点である。この三つのキーワードを基に後期旧石器時代以前の遺跡とされてきた幾つかの遺跡の石器を、筆者が現地に赴き観察した結果、次にあげる遺跡で存在が確認できた。岐阜県多治見市の西坂遺跡、愛知県新城市の加生井沢遺跡、長野県飯田市の石子原遺跡、竹佐中原遺跡、群馬県桐生市の鶴ヶ谷東遺跡、みどり市の岩宿遺跡D地点最下層石器、仙台市蒲沢山遺跡の7遺跡と現在調査途中で遺跡登録はされていないが、栃木県鹿沼市のタンデンバ遺跡（仮称）を合わせた8遺跡である（これらの8遺跡は、捏造事件とは全く無縁の遺跡であることを強く申し上げておく）。三つのキーワードに該当する石器が、本州島の中部地方から東北地方までの広い範囲の遺跡で確認できたことは、星野遺跡の旧石器が崖錐地形による偽石器ではなく人為的に作られた旧石器であることを担保する客観的な一事実と言えるだろう。また、4万5千年を超える層位から出土した共通する特徴を持つ石器を確認した遺跡が、数百キロも離れた中部・東海地方から関東地方、東北地方で複数確認できたことは、前中期旧石器遺跡の存在肯定に向けた大きな収穫であった。

### 4.まとめ

栃木県栃木市星野遺跡の鹿沼軽石層より下位の層位から出土した旧石器が提供してくれた、中期旧石器研究の三つのキーワードは、多くの旧石器研究者の方々が、半世紀以上否定してきた「日本列島内に前中期旧石器遺跡は存在する」の肯定に向けた研究のキーワードの一つになると見える。これから先の日本を背負って行く若き旧石器研究者の方々に一つお願いがあります。それは、捏造問題の経験は、しっかりと根底におきながらも新たな視点で「珪岩製旧石器問題」の解決、前中期旧石器遺跡の存在証明などの研究に果敢にチャレンジしていただき日本列島の旧石器（人類史）研究に新たな1ページを加えていただくことに他ならない。

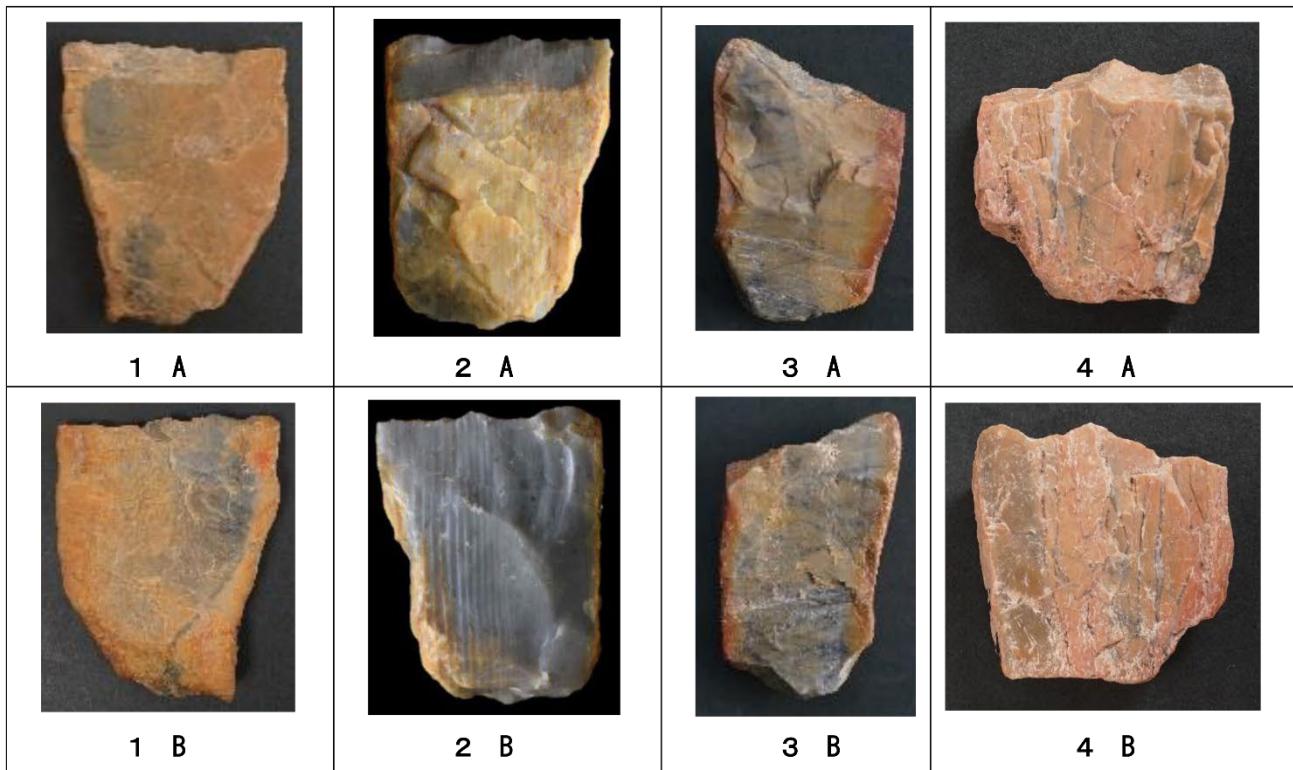
## 参考文献

- 芹沢長介 (編) 1970 「栃木市星野遺跡第3次発掘調査報告書」ニューサイエンス社
- 斎藤恒民 1982 「星野遺跡群の旧石器調査概報」
- 栃木市教育委員会 2003 「星野遺跡発掘調査報告書」—地層たんけん館建設予定地の記録保存調査—
- 多治見市教育委員会 1977 「西坂遺跡 A 地点 (第1次) 発掘調査報告書」
- 多治見市教育委員会 1997 「西坂遺跡 B 地点 (第2次) 発掘調査報告書」
- 加生沢遺跡調査会 1968 「愛知県新城市加生沢旧石器時代遺跡」言文社
- 紅村 弘 1989 「加生沢遺跡石器資料写真集」
- 岩宿文化資料館 (編) 1999 「岩宿遺跡発掘50周年記念企画展図録」—岩宿時代を遡る前中期旧石器の探求—
- 大竹憲昭 2005 「長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化」国土交通省中部地方整備局・長野県埋蔵文化センター
- 鶴田典昭 (編) 2010 「長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ」国土交通省中部地方整備局・長野県埋蔵文化センター
- 柳田俊雄、阿子島 香 2015 「群馬県鶴ヶ谷東遺跡発掘調査の研究報告」東北大学総合博物館紀要 第14巻 201-274頁
- 柳田俊雄、梶原 洋 2018 「日本列島における前期旧石器時代の両極剥離」九州旧石器第22号 67-86頁
- 梶原 洋 2022 「宮城県仙台市蒲沢山遺跡の調査成果について」第36回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集 35-40頁
- 梶原 洋 2024 「宮城県仙台市蒲沢山遺跡の調査成果について」第38回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集 13-17頁
- 佐藤宏之 2017 「日本列島の中期／後期旧石器時代移行期に関する再検討」 ラーフィダーン 第XXXVIII巻 55-60頁



星野遺跡の位置 (★)

片刃石器 (1~4)



錯交剥離 (5~7) ノッチ (8)



## 後期旧石器時代前半期前葉における『狩猟具』のコンセプト ～型式論・機能論の方法論的再整理を通して～

岩宿博物館  
鈴木 秋平

### はじめに

日本旧石器時代の歴史は、ナイフ形石器や台形様石器、尖頭器、そして細石刃などの「狩猟具」と考えられる石器の移り変わりから叙述される。特に後期旧石器時代前半期前葉の東日本において併存するナイフ形石器と台形様石器は、その素材、技術形態学的な特徴から、二極的な構造（佐藤 1988、1992）あるいは二項モード（田村 1989）をなすことが指摘され、人類の地域環境への適応と結びつけ議論してきた。

しかしながらこれらは等価な道具ではない。先行研究において、石器の機能に関しては、両者はいずれも狩猟具としての機能を持ちうることが指摘されたが（鹿又 2010・2018、佐野 2019、鈴木 2024b、戸塚 2025、Suzuki 2025 ほか）、その道具としての選択のされやすさは、器種、型式単位で叙述できるものではない。個々の資料のライフヒストリーを重視する立場からは、類型化されたかたちが、必ずしも一義的な意味を持つ訳ではないことが明らかとされている（Dibble 1987、長崎 1990）。

では、当該期における「狩猟具」とは何であるのか。異なる形態的特徴、生成要因を持つこれらの石器が同一の機能に供される時、当該期の人類は「狩猟具」をどのように認識し、運用していたのだろうか。

本論では、関東地方北西部地域を対象に後期旧石器時代前半期前葉における「ナイフ形石器」、「台形様石器」の多様性とその背景について検討を行う。

### 1 目的と方法

本論では、関東地方北西部における後期旧石器時代前半期前葉を対象として、当該期における狩猟具とはなんであるのかを検討したい。

対象となる資料として、型式学的に「ナイフ形石器」や「台形様石器」と評価してきたものを取り扱う。

これまでの使用痕研究からは、当該期に狩猟具として用いられたと考えられる石器は、柄の先端に装着、着柄しての使用が示唆されている（佐野前掲、山岡 2020）。そのため、いわゆる米ヶ森型台形様石器や台形様石器Ⅲ類とされる、基部を持たない部分加工、端部加工の台形様石器は分析対象から除外する<sup>\*1</sup>。

ナイフ形石器と台形様石器の分類、区分については、素材となる剥片剥離技術の差異からその独自性に着目して区分する立場（佐野前掲、森先 2022）、そして、その技術的共通性に着目する立場（須藤 1986、小菅 2024）が存在するが、本論においては、機能的同一性に着目して、両者を統一の基準から分類を行った（第 1 図）。狩猟具とされる石器がどのように認識されるかが議論の焦点となるため、分類にあたっては、完成形の石器の全体形状及び二次加工部位に着目している<sup>\*2</sup>。これらの分類を元に、技術形態学的特徴と機能の関係性について比較検討を行う。

### 2 分析結果

赤城山西南麓、榛名山南麓、鏑川流域を対象に、227 点の資料について分析を行った（第 2 図、Suzuki

前掲)。

対象とした 227 点の資料の内、37 点の資料に指標的衝撃剥離<sup>3</sup>が確認された(鈴木前掲、Suzuki 前掲)。これは分析対象の 16.3% にあたる<sup>4</sup>。これら資料が内包する要素間の関係の整理から、その特徴を見ていきたい。

まずその形態と先端形状に着目すると(第 1 表)、尖頭部を有する石器では、全周加工のもの(D 類、33.3%) にて衝撃剥離の出現率が突出する。次いで、二側縁加工(B 類、16.7%)、基部加工(A 類、11.3%) の順に衝撃剥離の出現率が高く、一側縁加工(C 類)では全く認められない。一方で尖頭部を有さない石器を見ると、平刃を有する撥形(G 類、25.7%)、斜刃(F 類、24.0%)、矩形(E 類、20.0%) の順で衝撃剥離の出現度が高い。

これらの長幅比を見ると、(第 3・4 図)、中・小型品に衝撃剥離の出現がまとまることが分かる。破損品を除けばおおよそ長さ 20mm~45mm、幅 13mm~30mm の間に限定される。石器の幅(第 3・4 図)に関しては、衝撃剥離の有無に関わらず、その大きさの分布がおおよそ同じような傾向を示すが、一方で、石器の長さに関しては、その大きさが 40mm を超えると衝撃剥離の出現数が激減するという非常に選択性のあり方がよく分かる。

続いて類型、石材ごとの石器の大きさを見てみたい(第 5 図)。類型ごとにその大きさにはばらつきが認められるが、D 類を除くと、おおよそ尖頭部を持つ石器(A・B・C 類)が尖頭部を持たない石器よりも大型化する傾向が見てとれる。しかしながら、衝撃剥離を持つ石器に限れば、その大きさはおおよそ 20~40mm にまとまる傾向が見られ、形態の如何に拘らず、衝撃剥離の認められた特定の類型が大きさ的に突出することはない。石材ごとに大きさを見てみると、黒色頁岩、珪質頁岩は他石材と比較して大型であり、その大きさのばらつきも大きい。対照的に、安山岩、チャート、黒耀石のものは中小型にまとまる傾向が見てとれる。

### 3 考察

分析結果に即して言えば、ナイフ形石器、台形様石器という型式学的枠組みを超えて、長さおよそ 20~40mm の中小型品で基部加工が施される石器が「狩猟具」として利用される石器と言えそうである。その意味では、機能は器種、型式、形態を超えた横断的な様相を見せる。しかしながら、狩猟具の形態的特徴は多様であり、特に尖頭状や平刃、斜刃といった先端形状の多様性を当該期の狩猟具は内包していることが明らかとなった。

これら石器はその素材獲得、利用においても多様な様相を見せる。では、当該期のヒトはどのようなイメージで狩猟具の生産、運用を行っていたのか。その理解に向けて、本論では「コンセプト」の概念を用いて検討を行いたい。

コンセプトとは、動作連鎖研究の文脈において、石器の製作者が頭の中で思い描く完成形であり、「何に使うか」という機能的目的も含意した第一意図(大場 2015・2023)と説明される。

コンセプトには階層性があるとされ、第一意図となる素材を製作する過程で生じた石刃や剥片が第二、三意図のトゥールの素材となることが指摘されている(佐川・鈴木編 2006)。つまり、連続的な行為の中で、階層的に設定された目的が実現されると言えるだろう。コンセプトはその技術形態学的特徴について言及されることが多く、そこに至る工程として「メトード」が想起され、個々のコンテキストを踏まえた上で「ジェスチャー」が選択される。言い換えれば、目的の達成のために、個々のコンテキストに応じて、無数に存在しうる選択肢の中からその場における最適解が選択されるわけである。

動作連鎖の概念の特徴として、時間的な系列を不可欠の要素とする点（阿子島 2012）が指摘されるが、これは時間的に先行する行為が後行する行為の選択を限定することを意味する。これらを踏まえれば、コンセプトは、時間的な不可逆性を特徴としながら、複数の選択肢を許容しうる「幅」を持った概念であると言えるだろう。

筆者は、コンセプトの概念は石器製作に留まらず、その用途、運用まで一貫して適用可能な概念であると考えるが、本論で着目したいのは、コンセプトが許容しうる「幅」である<sup>5</sup>。

分析結果に照らして言えば、当該期の狩猟具のコンセプトとして重要視されるものは、その大きさと基部への加工、つまり着柄部の作り出しであり、その全体形状の重要性は相対的に低い。特に先端形状については、多様性を許容しうることが、当該期の狩猟具のコンセプトであると言える。より個別具体的な素材生産工程の分析が必要にはなるが、狩猟具の素材として石刃以外の多様な素材が利用されうるのは、この幅を持った形態的コンセプトによるものと評価することもできるだろう。

加えて、中小型の石器が優先的に狩猟具として用いられる一方、大型品には機能的に排他的な様相を見てとれた。当該期の石刃は當時生産されるものではなく、工程別異所戦略によって生産、運用されるものと考えられる。実際に、本論で対象とした資料のうち、遺跡内で明確な石刃剥離が認められるのは三和工業団地 I 遺跡のみであり、その他については、工程別異所戦略による搬入品である可能性が高い。

各石器の刃部残存率（鈴木前掲）も踏まえれば、長大な刃部を持つ石刃を素材とした基部加工ナイフ形石器（本論における分類では、A 類の大型品）は衝撃剥離の出現率が低く、狩猟具としての運用よりも、長大で未加工の縁辺を刃部とした長期間の運用が想定される。

具体的な運用方法については、個別の機能研究が必須となるためやや飛躍した議論にはなるが、本論で明らかとされた狩猟具のコンセプトを踏まえると、当該期において狩猟具が中小型品にまとまりながら多様な形態が許容されること、そして多様な形態の素材が利用されうるのは、この長期間の運用が行われる長大な刃部を持つナイフ形石器への素材、石刃供給が優先されるからではないだろうか。

## まとめ

「先史考古学における不確定性原理」（阿子島前掲）という言葉がある。これは、一方を見ようと突き詰めれば、もう一方が見えなくなってしまうという、物理学史に由来する言葉であるが、多様な様相を一元的な視点から理解することは難しいという方法論的指摘である。この言説はいずれの方法論においても当てはまるものと言えよう。その意味では、多様な様相を多様なまま認識する技術組織（阿子島 1989）的検討が不可欠である。本論においては、型式、機能及びそれらの運用という異なる視点を組み合わせることで、後期旧石器時代前半期前葉における狩猟具のコンセプトの一端を明らかとすることことができた。動作連鎖の概念における「時間的な系列を不可欠の要素とする」（阿子島前掲）ことを踏まえれば、先行する工程は後行する行為の選択に影響を与える。その意味で言えば、素材の剥離工程が重要な要素となるが、本論では詳述できなかった。これは今後の課題として、別稿にて議論したい。

黙して語らない石器からヒトの姿を探すことは容易ではない。本論は、このヒトの姿を探すための試論である。今後より個別具体的な検討を通して、より鮮やかでドラマチックなヒトの姿を描き出すための一つの基礎となれば幸いである。

\*1 これら石器については、組み合わせ道具としての機能が指摘されているが、現在まで日本国内において、これら石器が組

## 第2部

み合わせ道具として狩猟に供されたという痕跡は発見されていない。小石刃についても同様の理由から分析対象からは除外している。

\*2 石器型式は、研究者が資料内に特徴的な要素を見出し、その共通性や差異に着目することで設定する区分であると言える（横山 1985、鈴木 2018）。あくまで区分であるため、異なる型式として設定されたものは、両者が異なるものであるという差異が重要となる。

しかしながら、特徴的な要素の組み合わせであるため、型式の”外縁部”に行けばいくほど、その特徴は曖昧となる。もちろん、研究者が現代の視点から区分した分類であるため、当時の認識との合致は難しい。加えて、差異を強調する考え方では、異なるものが重複すると言う考え方は許容しがたい。

筆者は、「共通言語」と言う意味合いを除けば、型式は個々の研究において個々の目的の実現に向けて個別に設定されるべきであり、問われるのはその妥当性と客観性であると考えている。その意味で型式は相対的に評価されるべきであり、全てを説明しうる真の型式を目指すための検討は本論では行わない。

本論では、どのような形態的特徴を持つ石器が「狩猟具」として認識されるかを明らかとすることが目的であるため、全体形状（特に先端形状を重視）と二次加工部位に着目した分類を行った。そのため、ペン先形ナイフ形石器（芹沢 1967、奥村 1987）や台形様石器Ⅱ類（佐藤前掲）とされる石器は、A 類の小型の一群という扱いになり、いわゆる基部加工ナイフ形石器と同列に扱うこととする。

\*3 指標的衝撃剥離の認定にあたっては、Sano (2009) を元にした。この指標は多様な石材に適応可能なものとされるが、実際には石材の強度や粘りといった材料的特性から、その出現の様相は一様ではない可能性も指摘されている（鈴木 2024a）。そのため今後はより多様な石材を用いた実験によって、個々の資料の特性に応じた参考枠を作成していく必要がある。

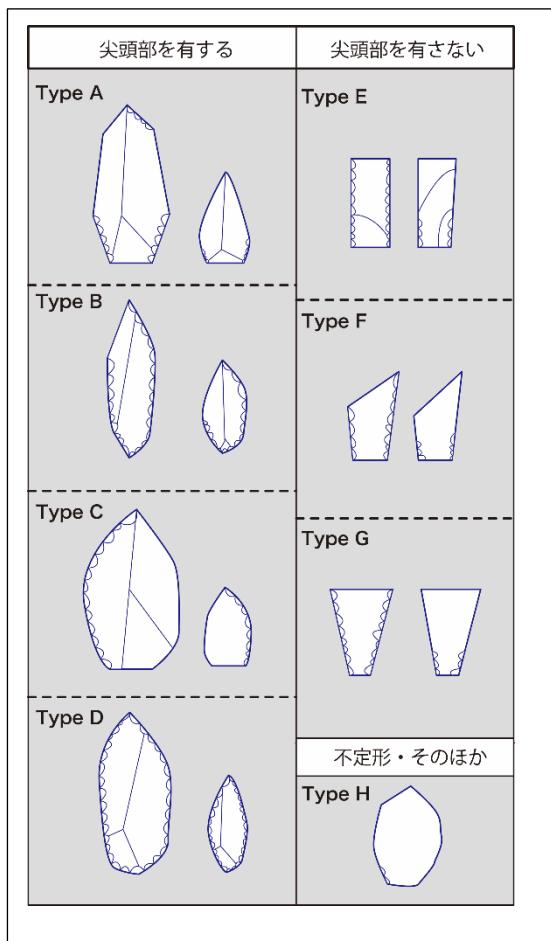
\*4 紙面の都合により、具体的な対象資料及び衝撃剥離の様相については割愛した。鈴木 2024、Suzuki 2025 を参照されたい。

\*5 岩瀬は（2018・2021）、蘭越形細石刃核を伴う石器群と杉久保形石器群を対象にした石器群の使用痕分析から、前者の石器群においては器種ごとの使用部位と使用方法、被加工物の結びつきの多様性が低く機能的に特殊化している（多用途性が低い）こと、一方で後者の石器群では機能的特殊化の程度が低いことを指摘している。この結果を本論におけるコンセプトの概念で説明をすれば、前者の石器群においては、石器のコンセプトが許容する選択肢の幅が狭く、極めて限定された運用が行われており、後者の石器群では、対照的に石器のコンセプトの幅が広く、運用上の多様性が許容されていたと評価できる。

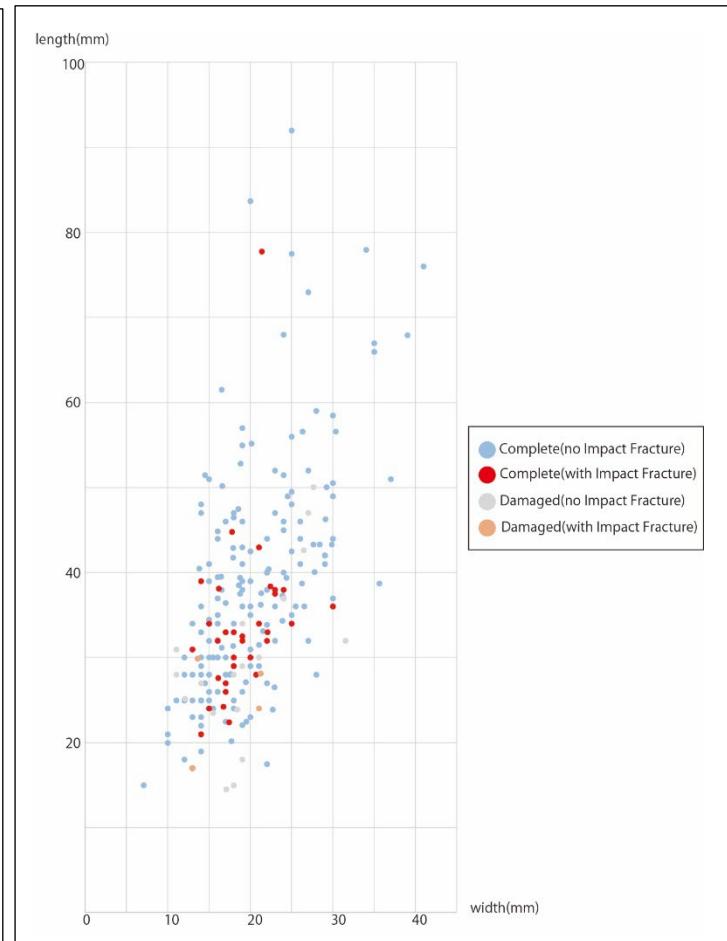
### 引用・参考文献

- 阿子島香 1989 『石器の使用痕 考古学ライブラリー56』、ニューサイエンス社
- 阿子島香 2012 「技術組織論・動作連鎖論の人類学的背景と考古学的適用」『第 26 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集, pp.19-25, 東北日本の旧石器文化を語る会
- 岩瀬 樊 2018 「古本州島東半部における後期旧石器時代の石器使用の変異性とその含意」『旧石器研究』14, pp.51-64, 日本旧石器学会
- 岩瀬 樊 2021 『最終氷期最盛期の石器使用痕研究』、同成社
- 大場正善 2015 「動作連鎖の概念に基づく技術学の方法－考古学における科学的方法について－」『研究紀要』7, pp.97-115, 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 大場正善 2023 「細石刃の作り方の基本－石器技術学におけるメトードの観点から－」『研究紀要』15, pp.3-22, 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 奥村吉信 1987 「東日本のペン先形ナイフ形石器を伴う石器群」『旧石器考古学』35, pp.27-36, 旧石器文化談話会
- 鹿又喜隆 2010 「後期旧石器時代前半期石器群の機能的考察」『第 24 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』, pp.57-69, 東北日本の旧石器文化を語る会

- 鹿又 喜隆 2018 「旧石器の機能研究の成果と展望－東北日本の事例を中心に－」『東北日本の旧石器時代』, pp.381-395, 東北日本の旧石器文化を語る会
- 小菅将夫 2024 「岩宿時代 I 期のナイフ形石器－趣旨説明とともに－」『岩宿フォーラム 2024/シンポジウム 「ペン先形ナイフ」の再検討』, pp.14-22, 岩宿博物館
- 佐川正敏・鈴木雅編 2006 『日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究 1－縄文時代草創期の槍先形尖頭器を中心とする石器製作址の様相－』, 東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール・山形県東置賜郡高畠町教育委員会・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3, pp.1-37, 日本考古学会
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』, 柏書房
- 佐野勝宏 2019 「旧石器時代の狩猟具の同定方法」『磨斧作針 橋本博文先生退職記念論集』, pp.1-18, 六一書房
- 鈴木秋平 2024a 「石材と機能の関係性の理解に向けたマイクロフレイキングの実験考古学的研究-その 1-」『岩宿博物館研究 紀要 岩宿』5, pp.11-26, 岩宿博物館
- 鈴木秋平 2024b 「赤城山麓を中心とした「狩猟具」の形態的多様性とその含意」『岩宿フォーラム 2024/シンポジウム 「ペン先形ナイフ」の再検討』, pp.64-75, 岩宿博物館
- 鈴木 隆 2018 「旧石器研究における「かたち」の理解－タイポロジーから「状況」の理解へ－」『東北日本の旧石器時代』, pp.119-132, 東北日本の旧石器文化を語る会
- 田村 隆 1989 「二項モードの推移と巡回－東北日本におけるナイフ形石器成立期の様相－」『先史考古学研究』2, pp.1-52, 阿佐ヶ谷考古学研究会
- 須藤隆司 1986 「群馬県藪塚遺跡の石器文化－ナイフ形石器の型式学的考察－」『明治大学考古学博物館館報』2, pp.27-50, 明治大学考古学博物館
- 芹澤長介 1967 「日本の旧石器(4)」『考古学ジャーナル』2, pp.7-11, ニューサイエンス社
- 戸塚瞬翼 2025 「後期旧石器時代前半期の関東地方における狩猟具の種類と時期的変遷」『旧石器研究』24, pp.53-73, 日本旧石器学会
- 森先一貴 2022 『旧石器社会の人類生態学』, 同成社
- 長崎潤一 1990 「後期旧石器時代前半期の石斧－形態変形論を視点として－」『先史考古学研究』3, pp.1-33, 阿佐ヶ谷考古学研究会
- 山岡拓也 2020 「台形様石器の分析からわかる初期現生人類の技術と行動」『石器痕跡研究の理論と実践』, 御堂島正編, pp.85-110, 同成社
- 山田しよう 2008 「太郎水野 2 遺跡の石器の使用痕と表面状態の分析」『地坂台遺跡・下中田遺跡・太郎水野 1 遺跡・太郎水野 2 遺跡発掘調査報告書』, 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 166 集第二分冊, pp.60-219
- 横山浩一 1985 「3 型式論」『岩波講座日本考古学 1 研究の方法』, pp.43-78, 岩波書店
- Dibble, H. L., 1987 The Interpretation of Middle Paleolithic Scraper Morphology. *American ANTIQUITY*, 52-1, PP.109-117.
- Sano, K., 2009 Hunting evidence from stone artifacts from the Magdalenian cave site Bois Laiterie, Belgium: a fracture analysis. *Quartär*. 56, 67-86.
- Suzuki, S., 2025 The diversity and relationship of hunting tools in the Northern Kanto region during the early Upper Palaeolithic. *Program and Abstract of the 12th Meeting of the Asian Paleolithic Association*, 87.



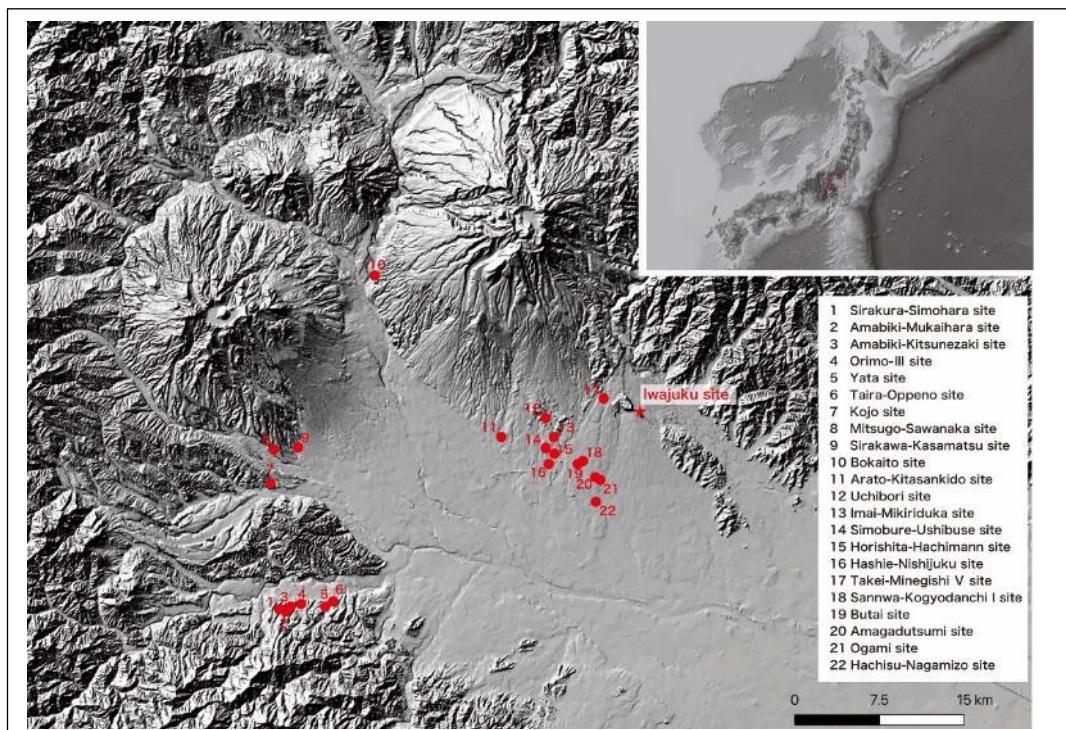
第1図 本論における石器分類



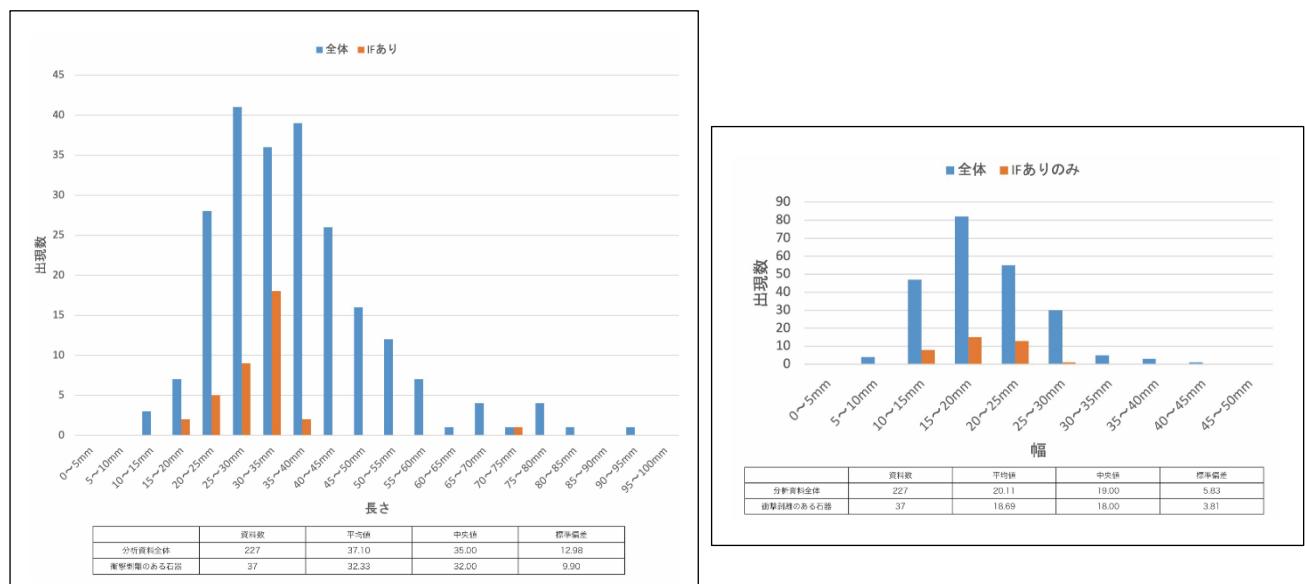
第3図 分析資料の長幅散布図 (Suzuki 2025)

第1表 類型・石材別の衝撃剥離出現率

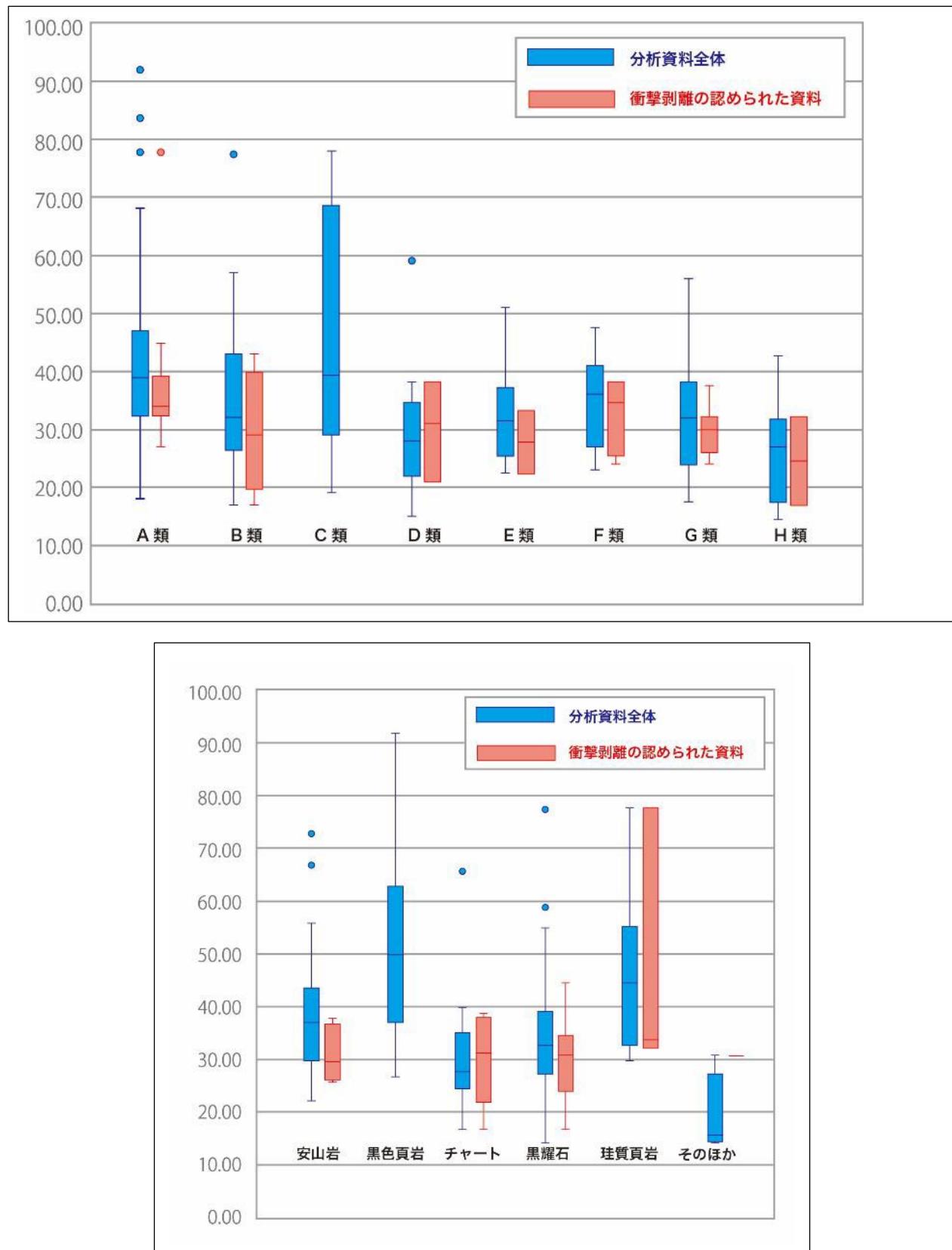
石材 / 類型	尖頭部を有する石器					尖頭部を有さない石器					その他・不定形		総計					
	A		B		C		D		E		F		G		H			
	衝撃剥離を 有する石器 の数 (資料 総数)	衝撃剥離を 有する石器 の出現率																
安山岩	1(29)	3.4%	1(6)	16.7%	0(7)	0.0%	0(0)	0.0%	0(3)	0.0%	3(13)	23.1%	0(11)	0.0%	0(3)	0.0%	5(72)	6.9%
黒色 頁岩	0(16)	0.0%	0(4)	0.0%	0(3)	0.0%	0(0)	0.0%	0(0)	0.0%	0(0)	0.0%	0(1)	0.0%	0(2)	0.0%	0(26)	0.0%
チヤー ト	1(9)	11.1%	1(5)	20.0%	0(2)	0.0%	1(4)	25.0%	0(0)	0.0%	2(7)	28.6%	0(3)	0.0%	1(4)	25.0%	6(34)	17.6%
黒耀石	6(39)	15.4%	2(5)	40.0%	0(1)	0.0%	2(4)	50.0%	2(7)	28.6%	1(4)	25.0%	8(19)	42.1%	1(4)	25.0%	22(83)	26.5%
珪質 頁岩	3(4)	75.0%	0(2)	0.0%	0(1)	0.0%	0(1)	0.0%	0(0)	0.0%	0	0.0%	0(0)	0%	0(0)	0.0%	3(8)	37.5%
その他	0(0)	0.0%	0(2)	0.0%	0(0)	0.0%	0(0)	0.0%	0(0)	0.0%	0	0.0%	1(1)	100.0%	0(0)	0.0%	1(4)	25.0%
総計	11(97)	11.3%	4(24)	16.7%	0(14)	0.0%	3(9)	33.3%	2(10)	20.0%	6(25)	24.0%	9(35)	25.7%	2(13)	15.4%	37(227)	16.3%



第2図 分析対象遺跡 (Suzuki 2025)



第4図 類型（左）、石材（右）別の石器の長さ



第5図 類型（上）、石材（下）別の石器の長さ

## 基部加工を主体としたナイフ状石器の様相—AT 下位の石刃石器群との関連性—

愛知学院大学名誉教授

白石 浩之

### はじめに

30,000 年より前に遡る立川ローム層の下底には台形様石器をはじめペン先形ナイフと呼ばれた基部調整尖頭石器、ナイフ状石器、局部磨製石斧等がツウール・キッドになった石器群が列島に広く席巻していた。これらの石器については型式学的視点で検討したことがある (白石 2011a・b, 2012, 2013, 2017)。一方ナイフ状石器は資料化していたが、コロナ禍で頓挫したので、今回のシンポジウムで検討することにした。

本稿ではナイフ状石器について基部加工を主体としたナイフ状石器と呼称し (1) 出土層位と  $^{14}\text{C}$  年代等の成果に基づく編年、(2) 基部加工を主体としたナイフ状石器の様相、(3) 不定形剥片製の実態、(4) 基部加工を主体としたナイフ状石器と石刃の関連性についてまとめたものである。

### (1) 出土層位と $^{14}\text{C}$ 年代の成果に基づく基部加工を主体としたナイフ状石器の変遷

近年国武貞克によって長野県佐久市香坂山遺跡で 36,846cal BP の黒色安山岩製の石刃製石器群が暗色帶中から発掘された (国武 2021・2022)。これらの最古級の石刃石器群が発掘されたことでその系譜を IUP の石器群に対比した研究 (国武 2018・2019、佐藤 2020)、国内における関連遺跡を  $^{14}\text{C}$  年代によって摘出、整理した国武貞克、國木田大、佐藤宏之によって二つの大きな流れ、つまり石刃石器群と台形様石器を主体とした剥片石器群による二極化によって成立している点が捉えられた (国武・國木田・佐藤 2022)。この変遷観は実年代に基づいた石器群の序列である点で説得力がある。年代と出土層位をもとに整理する。

黒色安山岩の原産地に近い香坂山遺跡からは AT 下位に堆積した暗色帶の下半部から多量の石刃に伴って基部加工尖頭形石器と称された基部加工を主体としたナイフ状石器が少量出土した (国武前掲)。また香坂山遺跡から凡そ 0.8Km 離れた黒色安山岩原産地遺跡の八風山遺跡群 II 遺跡では八ヶ岳 4 テ フラ (Yt-pm4) の白色軽石を含む粘質褐色土とその下層の亜角礫を含む層から多くの石刃に伴って基部加工を主体としたナイフ状石器がまとまって出土した<sup>(1)</sup>。 $^{14}\text{C}$  の年代は 36,322cal BP で (須藤編 19994・須藤 2021、国武・國木田・佐藤前掲)、香坂山遺跡より後出になる。

武藏野台地に位置する東京都杉並区高井戸東遺跡 X 層で石刃製の基部加工を主体としたナイフ状石器がまとまって出土している。 $^{14}\text{C}$  の年代は 36,207cal BP で八風山遺跡群 II 遺跡よりやや後出である (小田編 1977、工藤 2012)。後述する武藏台遺跡 X b 層より古い。

対して静岡県沼津市井出丸山遺跡 SCIV～BBVII 層から出土した石器群は 37,478cal BP (池谷 2011) または 38,240-36,180cal BP (高尾編 2011)、同市富士石遺跡 BBVII 層下部の石器群は台形様石器と共に基部加工を主体としたナイフ状石器が出土した。 $^{14}\text{C}$  年代は 37,430-35,560cal BP (阿部編 2010) で、香坂山遺跡に匹敵ないし上回る年代である<sup>(2)</sup>。

石刃石器群に後続する石器として不定形剥片が多い東京都武藏台遺跡 X b 層の  $^{14}\text{C}$  は 35,358cal BP の年代である (尾田編 2018、国武・國木田・佐藤前掲、横山・川口 1984)。また吉岡遺跡群 D 区 B5 層ではチャート製の不定形剥片を素材とした基部加工を主体としたナイフ状石器や台形様石器が出土している (白石・加藤 1996)。この石器群は吉田政行や仲田大人が挙げた吉岡遺跡群 2 次調査の B5 層上面で 35,040-33,980cal BP の年代測定 (吉田 2003、仲田 2018) や麻生順司による大和市配水池遺跡の

S2S直上で 37,100–36,080cal BP(麻生 2015)が参考になる。ただし吉岡遺跡群 D 区は上部からの出土ではなく、下部の砂混じりの青灰色めいた B5 層で出土しているので、36,000cal BP ないしそれを超える年代の可能性がある<sup>(3)</sup>。

35,000 年前は基部加工を主体としたナイフ状石器や台形様石器を主体とした石器群が環状ブロックによる集落を形成する。東京都東久留米市川岸遺跡北側環状ブロック群 X b 層は 35,260–34,250cal BP (佐藤編 2024) の年代が測定されている<sup>(4)</sup>。相前後する遺跡としては日本で最大級の環状集落の大きさを有する栃木県佐野市上林遺跡第 2 文化層で赤城-鹿沼テフラ (Ag-KP) より上部に堆積する BB1L 層 (出居 2004)、また群馬県伊勢崎市下触牛伏遺跡第 II 文化層は岩宿層に対応する暗色帶中 (岩崎 1986)、東京都調布市野水遺跡は立川面の IX (第 2 暗色帶) 層下部から基部加工を主体としたナイフ状石器が出土している (小池 2006)。

## (2) 基部加工を主体としたナイフ状石器の様相

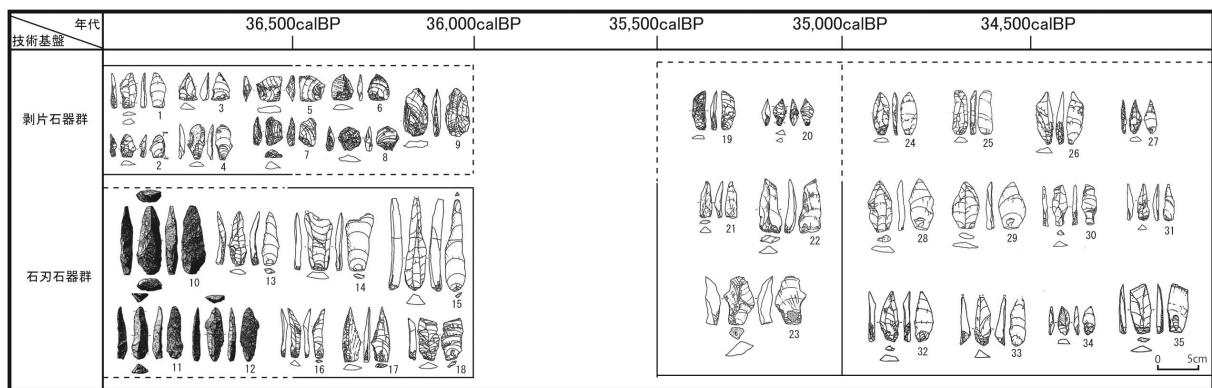
先の <sup>14</sup>C 年代ないし火山灰層序に基づいて最も古い基部加工のナイフ状石器からその特徴を見てみよう。最古級の井出丸山遺跡では SCIV～BBVII 層 (第 I 文化層) において、台形様石器と基部加工を主体としたナイフ状石器が出土している (図 1・2-1・2)。4cm を少し超える長さのホルンフェルス製の Y 字状稜線を持つ石刃の基部片側に細部加工が施される (1)。神津島産黒曜石を用いたナイフ状石器は 2.8cm 長の二側縁の基部下間に加工が施される (2)。ホルンフェルス製の石材は台形様石器にも共用されている<sup>(5)</sup>。

富士石遺跡 BBVII では台形様石器が発達しているが、基部加工を主体としたナイフ状石器も見受けられる (阿部編前掲、池谷・佐藤編 2020)。ただし素材は剥片製である (図 1・2-3・4)。4.8cm 長を計る柏崎産黒曜石で縦長剥片の一側縁下半部、他側縁は上半部に細部加工が施される (3)。神津島産黒曜石を用いて剥片の礫面を残した端部を利用している (4)。基端部ないし基部両側は錯向剥離の細部加工を施している<sup>(6)</sup>。

香坂山遺跡の基部加工を主体としたナイフ状石器は基部加工尖頭形石器として取り扱われている (図 1・2-10～12)。黒色安山岩製で大形の石刃を素材としている。黒色安山岩の原産地遺跡であるので、9.6～6cm 長と全体的に大きい。12 f グリッドの出土例は、石刃の基部に正面が両側縁から、裏面は平坦な加工が施される。先端部にも一側縁に粗い加工が認められる (10)。D 区の出土例は基部を両側から細部加工を施したものである (11)。12 i グリッドでは先端部が尖り、基部は一側縁の基端に裏面から正面にかけての加工、他側縁は胴部下半まで正面から裏面にかけて細部加工が施される (12)。

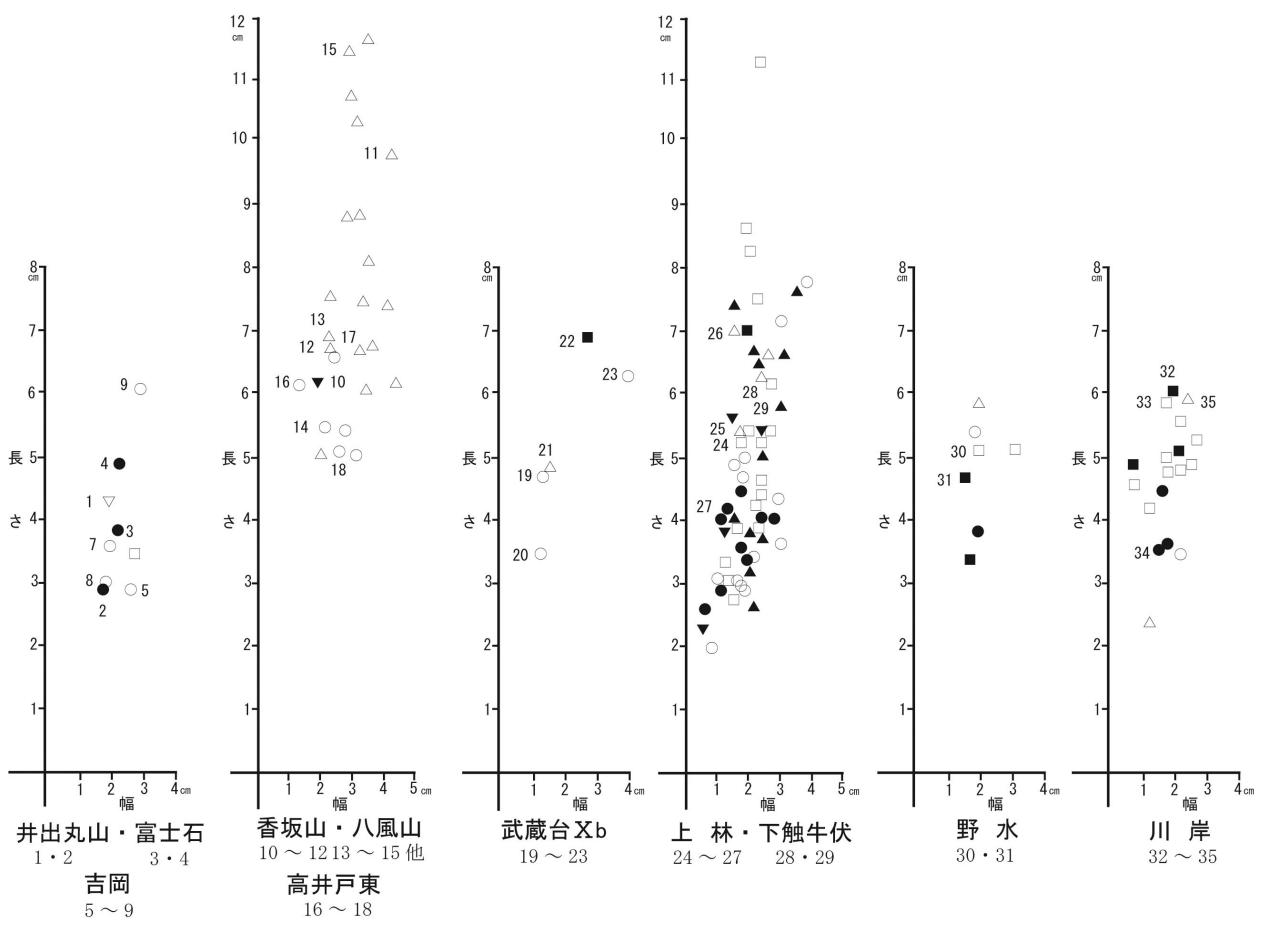
黒色安山岩の原産地遺跡である八風山遺跡群 II 地点では香坂山遺跡同様ナイフ状石器の出土量に比して石刃が多い。黒色安山岩を主石材とした基部加工を特徴としたナイフ状石器が 2 形態よりなる点を須藤隆司により指摘されている (須藤前掲)。大きさとしては長さ 4.8～11cm を超え、多様である (図 1・2-13～15)。Y 字状の稜線が顕著な石刃の打面を基部として、先細った先端に加工を施したもので、打面を残した基部は両側ないし片側に加工が施される (図 1・2-13・15)。基部を打面とし、打面方向からの剥離面と相対する端部方向からの剥離面の形成により端部は斜位を呈したものがある (14)。基部加工は不規則であるが、両側に施したもの (13・15)、打縁から器体下半部まで一側縁加工 (14) である。

高井戸東遺跡 X 層では長さ 5.0～6.5cm のチャート製や粘板岩製を用いた石刃の一側縁ないし端部に加工が施される (図 1・2-16～18)。基部は打縁からの加工が顕著である (16)。基部一側縁途上までの加工が顕著で、正面から裏面にかけて加工が施された例がある (17)。八風山遺跡群 II 遺跡でも見



1・2 静岡県井出丸山遺跡 SCIV～BBVII層、3・4 静岡県富士石遺跡 BBVII層、5～9 神奈川県吉岡遺跡群 D区 B5層、10～12 長野県香坂山遺跡暗色帶、13～15 長野県八風山遺跡群II八ヶ岳4テフラ、16～18 東京都高井戸東遺跡X層、19～21 東京都武藏台遺跡X層、24～27 栃木県上林遺跡、28～29 群馬県下触牛伏遺跡暗色帶、30・31 東京都野水遺跡第2暗色帶層下部、32～35 東京都川岸遺跡北側環状ブロック群第2暗色帶層下部

図1 年代からみた基部加工を主体としたナイフ状石器



□頁岩系 (頁岩・珪質頁岩・黒色頁岩・硬質頁岩・珪質岩)、△安山岩系 (安山岩・黒色ガラス質安山岩・黒色安山岩)、○チャート、●黒曜石、▲流紋岩、▽ホルンフェルス、▼その他 (碧玉・黄玉・赤玉・メノウ)

図2 基部加工を主体としたナイフ状石器の長幅関係

られた先端が先細る石刃の基部ないし末端部に加工を施した例と打面と 180 度異なる方向からの剥離面により末端が緩やかな斜位になった例がある (18)。

### (3) 不定形剥片製の実態

吉岡遺跡群 D 区 B5 層の石器群はチャート製を主体とした不定形な剥片 (図 1・2-5~9) を素材としている (白石・加藤 1996)。しかし中には 1 条の稜線を持つ石刃の打面部に細部加工が施される。端部を切断していることから、石刃製の基部加工を主体としたナイフ状石器を再加工した可能性がある (5)。その他 6 点は不定形で寸詰まりの縦長剥片や横長剥片を用いたもので、基部加工を主体としたナイフ状石器または基部調整尖頭石器と思われる (6~9)。

武藏台遺跡 Xb 層も不定形縦長剥片を用いている (横山・川口 1984)。縦長剥片の基部右側縁の加工と左側縁の微細な加工が施される (図 1・2-19)。VI類とされた切断剥片を用いて尖頭部を作出し、基部一側縁ないし裏面にも加工が施されている。先端部の有樋は使用による剥離面の可能性があろう (図 1・2-20)。

なお、尾田識好が調査した武藏台遺跡の発掘調査では (尾田 2018・2019)、D10-SX20 ブロック 7 から安山岩製の尖頭形石器 (図 1・2-21)、ブロック 9 から凝灰岩製の尖頭形石器 (図 1・2-22)、珪質頁岩製の基部加工石器 (図 1・2-23) 等の石器が出土している。縦長剥片ないし石刃 (21) を素材としている。

### (4) 基部加工を主体としたナイフ状石器と石刃の関連性

次段階の北関東地方に位置する上林遺跡第 II 文化層は日本最大の規模を持つ環状ブロック群による集落を形成している。基部加工を主体としたナイフ状石器は 99 点と多く、使用石材は主にチャート、次いで黒曜石や流紋岩、ガラス質安山岩、硬質頁岩等多様である。大きさは 6cm を超える例は黒色頁岩、チャート、流紋岩、黒色安山岩等に見られる。とりわけ黒色頁岩製の 1 点は 11cm 大を測る。平坦な打面から剥離したものが主で、先細る縦長剥片を剥いだ石刃が多い (図 1・2-24~27)。流紋岩製、硬質頁岩製、ガラス質黒色安山岩製の中には加工が打面縁部 (24)、一側縁 (25・26) に施した例。黒曜石製は 4.4~1.7cm の小形の縦長剥片を二側縁加工したもの (図 1-27) 等がある<sup>(7)</sup>。

下触牛伏遺跡第 II 文化層は安山岩を主とし、他に黒色頁岩、凝灰岩、黒曜石、チャートを用材としている (岩崎 1986)。石器は台形様石器と基部加工を主体としたナイフ状石器で構成されるが、台形様石器は安山岩を主石材にしているにもかかわらず、基部加工を主体としたナイフ状石器は安山岩製が 1 点のみで、他は黒色頁岩ないし凝灰岩で製作されている (図 1・2-28・29)。先端が先細る石刃を用い基部両側に僅かな加工 (図 1-28)、基部両側に加工が施されたもの (28)、基端からの平坦な加工と一側縁のみ施したもの、基端の一部を施し、一側縁に僅かな加工が施したもの (29) よりなる。

南関東の野水遺跡では IX 層下部から多量に石器が出土している (図 1・2-30・31)。基部加工を主体としたナイフ状石器は 11 点が出土しているのに対して台形様石器は僅か 1 点にとどまる。1 条ないし 2 条の稜線を有し、1 条は Y 字状をもつ例は石刃が多い。先端は先細る例と平坦ないし斜位が相半ばする。加工は基部両側縁の加工が多いが (30)、一側縁が裏面寄りの加工、他側縁が正面よりの加工が目立つ (31)。一側縁加工も見受けられる (小池 2006)。使用石材は珪質頁岩、チャート、硬質細粒凝灰岩、ガラス質黒色安山岩の他に黒曜石製が 1 点見られる。ガラス質黒色安山岩製は 6cm 長を計る (図 2)。

川岸遺跡北側環状ブロック群では基部加工を主体としたナイフ状石器が 20 点、台形様石器は 8 点

が出土している（佐藤前掲）。ナイフ状石器は基部加工が 12 点と多く、他に一側縁加工、二側縁加工 3 点、錯向調整の加工 2 点、基部裏面に調整の入った 3 点よりなる（佐藤 2024）。これらのナイフ状石器は先端が先細るものが多いが平坦な例もある（図 1-32～35）。石材は凝灰岩、頁岩系、黒曜石、安山岩系と多様だが、頁岩や黒曜石も多い。頁岩系や安山岩系は 6cm に近い例がある（図 2）。

### （5）まとめ

以上 37,000～33,000 年前の基部加工を主体としたナイフ状石器についてみてきた。基本的には石刃石器群と剥片石器群の技術基盤よりなる。前者は基部加工を特徴としたナイフ状石器、後者は台形様石器を作り出すための素材生産が多い。しかし不定形剥片製の大凡 36,000～35,000cal BP では技術基盤が相互に影響しあい、基部加工を主体としたナイフ状石器や台形様石器を作り出した時期もある。そして 35,000～33,200cal BP では石刃石器群と剥片石器群の二様によって、基部加工を主体としたナイフ状石器と台形様石器の一群が量的な偏りを持ちながら共存していく。下総台地では国指定史跡の墨古沢遺跡を代表する台形様石器を主体とした環状ブロック群が目立つ（酒井・村井編 2019）。台形様石器を主体とした石器群は恐らく石刃石器群の影響によって寸詰まりの縦長剥片を加工して基部調整尖頭石器が製作されよう。

石刃石器群を主体とした遺跡では基部加工を主体とした先端を先鋒にしたナイフ状石器が凌駕する。<sup>14</sup>C 年代が測定された石刃素材を持つ基部加工を主体としたナイフ状石器は、香坂山（36,846cal BP）⇒八風山 2（36,322cal BP）⇒高井戸東（36,207cal BP）⇒川岸（35,000cal BP）の流れが捉えられる。香坂山遺跡では鋭利になった剥片の先端をもった基部加工尖頭形石器（国武前掲）のみで構成されるが、八風山Ⅱ以降打面方向と異なる剥離により水平ないし緩やかな斜刃のナイフ状石器が製作されるようになる。狩猟具と加工具の二様が石刃生産の目的に加わる。

他方剥片素材による台形様石器を主とした井出丸山遺跡や富士石Ⅱ遺跡は 38,000～37,000cal BP まで遡る（松藤 2004）。石の本遺跡もそのグループに位置づけられよう。その剥片石器群は一段と不定形な剥片を主とした吉岡遺跡群 D 区 B5 層の石器も位置づけられ、しばしそのような石器群が継起していた蓋然性が高い。吉岡遺跡群 D 区の年代測定が待たれる。そして 35,000～33,000cal BP で環状ブロックによる集落が形成する頃は黒曜石や在地の石材を取り入れて中形ないし小形の石刃生産となり、ナイフ状石器が基部加工から側辺加工つまりナイフ形石器へと発展させる素地を作りだしたのであろう。

### おわりに

本稿は基部加工を主体としたナイフ状石器の様相を国武等が試みた <sup>14</sup>C 年代を基に見てきた。今後 <sup>14</sup>C 年代測定の増加を経てさらに詳細な様相が把握されるものと思われる。

なお文末であるが長澤有史氏に図面作製でお世話いただいた。東京都埋蔵文化財センターでは報告書を閲覧させていただきました。また麻生順司、伊藤健、上敷領久、鬼頭秀暢、国武貞克、砂田佳弘、鈴木次郎、諏訪間順、堤隆の各氏にお世話いただいた。記して感謝する。

### 註

（1）筆者はナイフ形石器群以前に位置づけられることや、基部加工を主体としている点でナイフ状石器として呼称している（白石 2017）。対して須藤隆司は八風山遺跡群Ⅱ遺跡の石器をナイフ形石器（須藤 1999）と呼称する。また小田静夫も高井戸東遺跡 X 層出土例をナイフ形石器（小田 1977）としている。出居博は上林遺跡の石器をやや広い概念でナイフ状石器と

## 第2部

捉えている。また国武貞克は香坂山遺跡では先端が先鋒にした石刃を素材にした石器のみを基部加工尖頭形石器としている（国武 2020、2021）。

（2）井出丸山遺跡に先行する台形様石器を主体とした熊本県熊本市石の本遺跡の年代は 37,595cal BP（国武・國木田・佐藤前掲）である。石の本遺跡の 8 区では 39,000～36,700cal BP の年代があたえられている（森先 2021）。

（3）武藏台遺跡 Xb 層と吉岡遺跡群 D 区 B5 層では前者が剥片石器と石刃石器、局部磨製石斧を主要な組成としているのに對して、後者は剥片石器が主になっている。武藏台遺跡 Xb 層の年代が明らかになったので、その年代から推定して 35,500～36,500cal BP に位置づけたが、剥片石器群の初頭期まで遡る可能性もある。

（4）台形様石器を主体とした千葉県墨古沢遺跡の  $^{14}\text{C}$  年代は 34,000～33,200cal BP（酒井 2025）、長野県日向林 B 遺跡の  $^{14}\text{C}$  年代は 33,197cal BP の中央値が示されている（国武・國木田・佐藤前掲、大竹・谷 2000）。

（5）井出丸山遺跡の台形様石器と基部加工を主体としたナイフ状石器は報告書のカラー写真を見る限り（高尾 2011）、風化度が酷似し、同一母岩で製作されていたように見える。似て非なるものか。

（6）富士石遺跡の台形様石器は和田鷹山産の黒曜石、基部加工を主体としたナイフ状石器は柏崎産の黒曜製を用いている（阿部前掲、池谷・佐藤編前掲）。

（7）埼玉県清河寺前原遺跡では黒曜石製が卓越し。ナイフ形石器と台形様石器の区分が難しい点が指摘されている（西井 2009）。

### 主な引用文献

- 麻生順司 2008 『神奈川県大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡 I 発掘調査報告書』全 346 頁 大和市 No.199 遺跡発掘調査団  
阿部敬 2010 『富士石遺跡 I』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 232 48-102 頁 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
池谷信之・佐藤宏之編 2020 『愛鷹山麓の旧石器文化』全 407 頁 敬文舎  
出居博 2004 「第 5 章旧石器時代」『上林遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書 30 25-675 頁 佐野市教育委員会  
岩崎泰一 1986 「4. 第 II 文化層の調査」『下触牛伏遺跡』79-148 頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大竹憲昭・谷和隆 2000 「日向林 B 遺跡」『上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書 16-信濃町内 その 2』215-220 頁  
小田静夫・伊藤富治夫・C.T. キリー・重住豊編 1977 『高井戸東遺跡』高井戸東遺跡調査会 全 121 頁  
尾田識好編 2018 『府中市武藏台遺跡・武藏国分寺関連遺跡第 1 分冊旧石器時代編』全 404 頁 東京都埋蔵文化財センター  
尾田識好 2019 「武藏野台地における後期旧石器時代初頭の編年と行動論—武藏野台地を中心として—」『旧石器研究』15 107-122 頁 日本旧石器学会  
工藤雄一郎 2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—』新泉社 全 373 頁  
国武貞克編 2021 『香坂山遺跡 2020 年発掘調査成果報告書』中央アジア旧石器研究報告 7 全 205 頁  
国武貞克編 2022 『香坂山遺跡 2021 年発掘調査成果報告書』中央アジア旧石器研究報告 8 全 261 頁  
国武貞克 2021 「ユーラシア大陸の初期石刃石器群と長野県香坂山遺跡」『日本列島における石刃石器群の出現』岩宿フォーラム 2021/シンポジウム予稿集 3-16 頁  
国武貞克・國木田大・佐藤宏之 2022 「石刃石器群の起源からみた日本列島における後期旧石器文化の成立」『考古学研究』69-2 56-73 頁 考古学研究会  
小池聰 2006 『都立武藏野の森公園埋蔵文化財調査—野水遺跡第 1 地点—』報告書 調布市遺跡調査会 全 254 頁  
酒井弘志・大村大海 2019 『墨古沢遺跡総括報告書—下総台地に現存する日本最大級の環状ブロック群—』酒々井町教育員会 全 183 頁  
酒井弘志 2025 『墨古沢遺跡』新日本の遺跡 6 全 150 頁 同成社  
佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3 1-37 頁 日本考古学会  
佐藤宏之 2020 「IUP 研究の現状と香坂山：日本列島後期旧石器時代の成立に関する展望」『中央アジア旧石器研究報告 7 香坂

- 山遺跡 2020 年発掘調査報告書』190-202 頁 独立行政法人国立奈良文化財研究所
- 佐藤悠登 2024 「IX II 総括」『東久留米市川岸遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 387 215-233 頁
- 白石浩之・加藤千恵子 1996 「第 2 節 D 区 B5 層の調査」『吉岡遺跡群 II 旧石器時代 1』かながわ考古学財団調査報告 7 12-41 頁
- 白石浩之 2012 「槍先形狩猟具の変化から狩猟文化を探る—2. 狩猟具とその様相」『神奈川考古』48 1-30 頁
- 白石浩之 2013 「旧石器時代における局部磨製石斧の特徴とその意義—主として関東地方から見た局部磨製石斧の様相—」『日本先史学論集—市原壽文先生傘寿記念—』1-28 頁
- 白石浩之 2017 「関東地方における最古級の石器群と狩猟具の展望」『国立歴史民俗博物館研究報告』206 1-37 頁
- 須藤隆司 1999 『ガラス質黒色安山岩原産地遺跡八風山遺跡群』佐久市埋蔵文化財調査報告書 75 全 619 頁
- 須藤隆司 2021 「第 1 節 大陸系石刃技術の日本列島化：香坂山遺跡と八風山 II 遺跡の関連性」『香坂山遺跡 2020 年発掘調査成果報告書』中央アジア旧石器研究報告 7 164-173 頁
- 諫訪間順 2006 「旧石器時代の最古を考える—『X 層』研究の意義」『岩宿時代はどこまで遡れるか—立川ローム層最下部の石器群—』予稿集 2-12 頁 岩宿フォーラム 2006/シンポジウム
- 高尾好之 2011 『井出丸山遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 100 全 120 頁
- 仲田大人 2018 「研究ノート後期旧石器時代開始期における石器伝統とその意味」『古代』143 33-51 頁 早稲田大学考古学会
- 西井幸雄 2009 『清河寺前原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 366 全 278 頁
- 松藤和人 2004 『日本列島における後期旧石器文化の始原に関する基礎的研究』科学研究費補助金基盤研究 C 研究成果報告書 143 頁
- 森先一貴・國木田大・池田朋生・長谷部善一・村崎孝宏 2020 「石の本再訪—日本列島後期旧石器時代の開始に関する研究」『旧石器研究』16 43-58 頁 日本旧石器学会
- 横山裕平・川口潤 1984 「第 8 節 X b 文化層」『武藏台跡 I』38-64・320・321 頁 都立府中病院内遺跡調査会

## 南三里塚宮原第1遺跡の現在一下総台地の後期旧石器時代前半期を考える－

大成エンジニアリング株式会社

宇井 義典

### はじめに

千葉県成田市に所在する南三里塚宮原第1遺跡は発掘調査が実施され20年以上が経過した。報告書においては十分な考察がなされているとは言えず、遺跡が持つ重要性を評価しきれていないのが現状と考えている。複数の環状ブロック群が確認されたことや局部磨製石斧が出土したことは現在でも色褪せることのない石器群の内容であるが、実際にはそれだけに留まらない石器群の内容を持ち得ている。当時評価しきれなかった石器群の内容をあらためて行い、遺跡の重要性を提示する。

そして、後期旧石器時代前葉のメルクマールの一つとして捉えられる環状ブロック群が数多く確認されている下総台地では、立川ローム層X層段階よりそれらの遺跡の形成が確認されている。列島内でのホモサピエンスの流入・拡散の初期段階に当たる時期に展開を見せている状況は注視する必要があろう。

### 1 南三里塚宮原第1遺跡の地理的環境

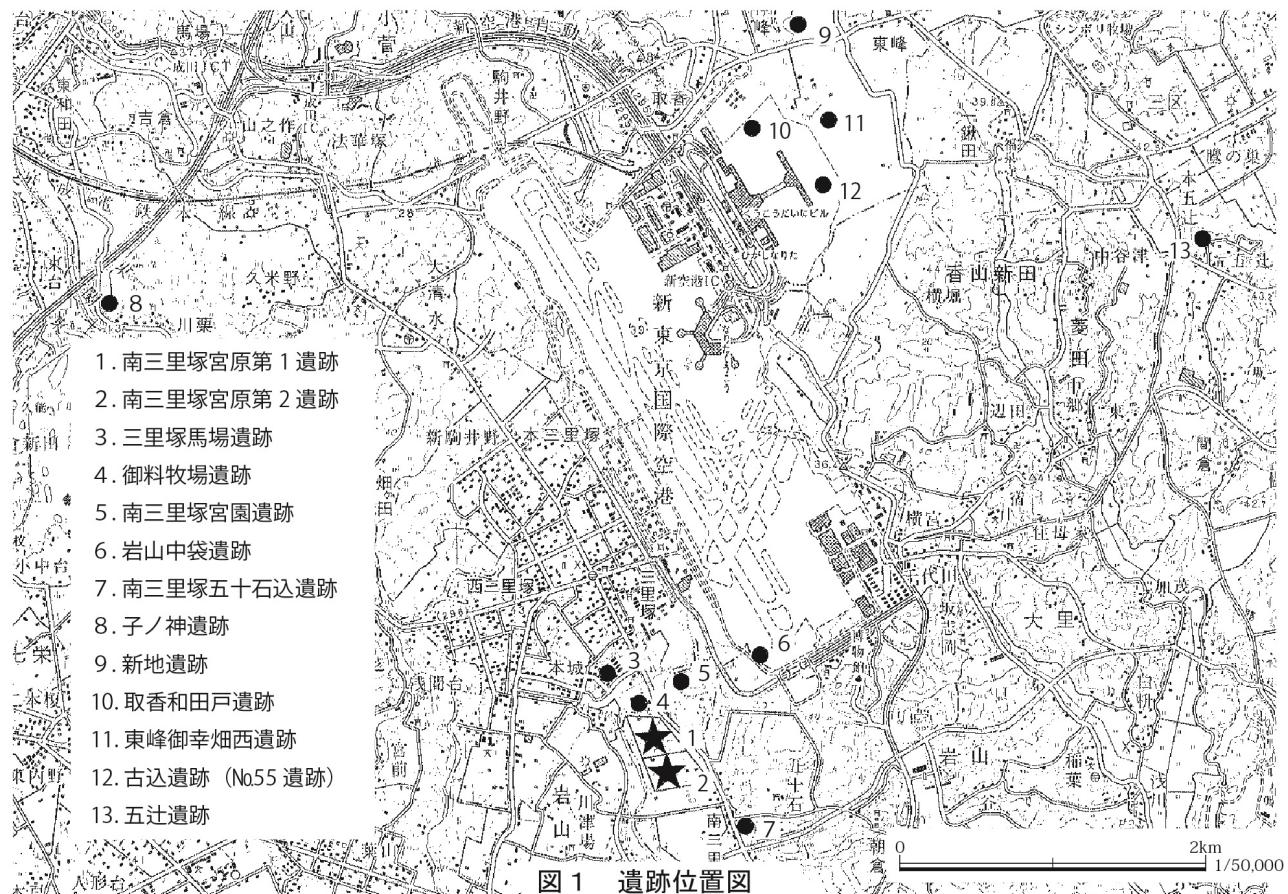
下総台地を有する房総半島は、北に台地、南に丘陵という対照的な地理的環境にあり、3方を海に囲まれた半島地形は独特である。平坦で広大な台地は太平洋-東京湾分水界と土気-銚子分水界により水系を「Y字」状に分けている。単に分水と言うだけではなく前者を下野-北総回廊、後者を北総-南総回廊とも称されるように、半島を東西・南北に移動できる交通網の要ともなってきた。南三里塚宮原第1遺跡は北総-南総回廊側に位置する新東京国際空港に近接した台地で確認された。この回廊を起点として太平洋へと注ぐ河川は複雑で樹枝状に入り組んだ小支谷を形成し、櫛歯のように並行し流下している。そのうちの木戸川上流の湧水地点の近くで当該遺跡が確認された。

新東京国際空港が建設された場所は広大で平坦な台地であるだけではなく、河川の谷津頭や小支谷が集中するところもある。そのような環境でもあることから、周辺地域は県内でも後期旧石器時代の遺跡が確認される有数の場所となっている。当該遺跡だけではなく空港No.55遺跡、取香和田戸遺跡、東峰御幸畑西遺跡、東峰御幸畑東遺跡、天神峰奥之台遺跡など著名な旧石器時代の遺跡があり、枚挙に暇がない(図1)。立地環境が非常に良好であったことを示していよう。そのような地理的環境下に南三里塚宮原第1遺跡も所在したのである。木戸川左岸の小支谷に区画された台地に位置し、第1環状ブロック群は台地の北側にあり、第2・3環状ブロック群は約150m南側に離れた箇所に所在する。また、河川と台地との比高差は約5mを測る(図2)。

### 2 各石器群について

表題の遺跡は3基の環状ブロック群が確認されている。石器群の内容を鑑みると単一の石器群より局部磨製石斧・打製石斧が20点出土している点からも第3環状ブロック群に注目が行くが、第1環状ブロック群の規模や整然と環を形成する様子は大規模であり注目されるものと言つてよい。また、第2環状ブロック群はほかの2基とは石器群を構成する石材が大きく異なっていることが注目される。いずれの石器群も特徴があり相互に近接して同時期に営まれていることを検討していきたい(図3)。

**第1環状ブロック群** 台地北西の標高約40mの緩斜面にある。東西約48m×南北約41mの楕円形を呈し、外円を形成する27箇所のブロックと円内の2箇所のブロックの計29ブロックからなる。出



土石器は 634 点、3253.49 g を測る。石材は安山岩、トロトロ石、流紋岩、チャート、メノウ、粘板岩、珪質頁岩、凝灰岩、黒曜石など 15 石材、72 母岩に分類している。

主要石材は安山岩 206 点 (1203.76g)、チャート 150 点 (1127.23g)、頁岩・珪質頁岩 34 点 (102.07g)、黒曜石 117 点 (114.26g) であり、点数では約 80%、重量では 78% を占める。

**第2環状ブロック群** 台地南西の標高約 39m の急斜面にある。東西約 21m × 南北約 22m の楕円形を呈し、外円を形成する 8 箇所のブロックからなる。出土石器は 135 点、955.57 g を測る。石材は流紋岩、チャート、珪質頁岩、頁岩、玉髓、黄玉石など 8 石材、20 母岩に分類している。

主要石材は黄玉石 18 点 (120.11g)、玉髓 23 点 (94.18g)、チャート 64 点 (149.2g)、頁岩 12 点 (70.96g) であり、点数では約 86%、重量では 45% を占める。

**第3環状ブロック群** 台地北西の標高約 39m 緩斜面にある。東西約 24m × 南北約 19m の楕円形を呈し、外円を形成する 9 箇所のブロックと円内の 1 箇所のブロックのおよび遠隔のブロック 1 箇所の計 11 ブロックからなる。出土石器は 303 点、6937.31 g を測る。石材は安山岩、トロトロ石、流紋岩、チャート、粘板岩、珪質頁岩、凝灰岩、緑色凝灰岩、蛇紋岩、ホルンフェルス、黒曜石など 17 石材、81 母岩に分類している。

主要石材は黒曜石 116 点 (462.61g)、緑色凝灰岩 107 点 (2374.42g)、珪質頁岩 24 点 (272.25g)、チャート 15 点 (251.95g) であり、点数では約 86%、重量では 48% を占める。

主に各石器群の石器石材の点数・重量を記したが、第1環状ブロック群の安山岩、チャート、頁岩・珪質頁岩の主要石材は下総台地の後期旧石器時代前葉における普遍的な石材と言える。この中で、黒曜石が一定数確認されていることが特徴である。この点は第3環状ブロック群でも同様で出土点数的には最も多く確認された。これらの黒曜石は明治大学の杉原先生に産地同定を依頼し、一定の成果を得ている。両石器群併せて 233 点の黒曜石が確認され、そのうち第1環状ブロック群 68 点、第3環状ブロック群 93 点を産地同定の分析に供出した。161 点を分析し 3 点測定不可、156 点が神津島恩馳島系、2 点が高原山系という結果であった。高原山系黒曜石は成田市東峰御幸畑東遺跡第1文化層 (IX 層) で主体的に用いられていることから、若干ではあるが当遺跡にも展開していることは納得がいくことである。一方大多数を占めた神津島恩馳島系の出土を考えると獲得方法を含め石材獲得の行動範囲をあらためて検討する必要がある。

以前より石材原産地の存在が確実ではなかったが、詳細な現地踏査の成果により珪質頁岩の原産地が明らかにされた。嶺岡層群白滝層から採取される珪質頁岩であるが、下総台地では草刈遺跡最下層の石器群で既に用いられているところから、下総台地では後期旧石器時代初頭より石器石材に組み込まれていたことは確実であろう。あらためて南三里塚宮原第1遺跡から出土した珪質頁岩を見てみると白滝層の珪質頁岩に類似している。回廊を通り上総丘陵まで至っていったことは検討に値しよう。

上記で見てきたように共通する石器石材を保有している一方で、様相が異なるのが第2環状ブロック群である。安山岩・黒曜石は石材に含まれず、チャートや良質な玉髓や黄玉石が組成している。下野・北総回廊の存在や第1環状ブロック群の高原山系黒曜石が入っていることを考慮すると北関東系の石材が想定される。

### 3 石器組成と剝片剥離

下総台地での環状ブロック群では規模と石器点数に必ずしも正の相関関係があるわけではない。大形遺跡の範疇に含まれる遺跡であっても、石器の出土点数は 1000 点以下であることが大部分である。柏市大松遺跡、酒々井町墨古沢遺跡、印西市泉北側第3遺跡、印西市（旧本塙村）角田台遺跡などは

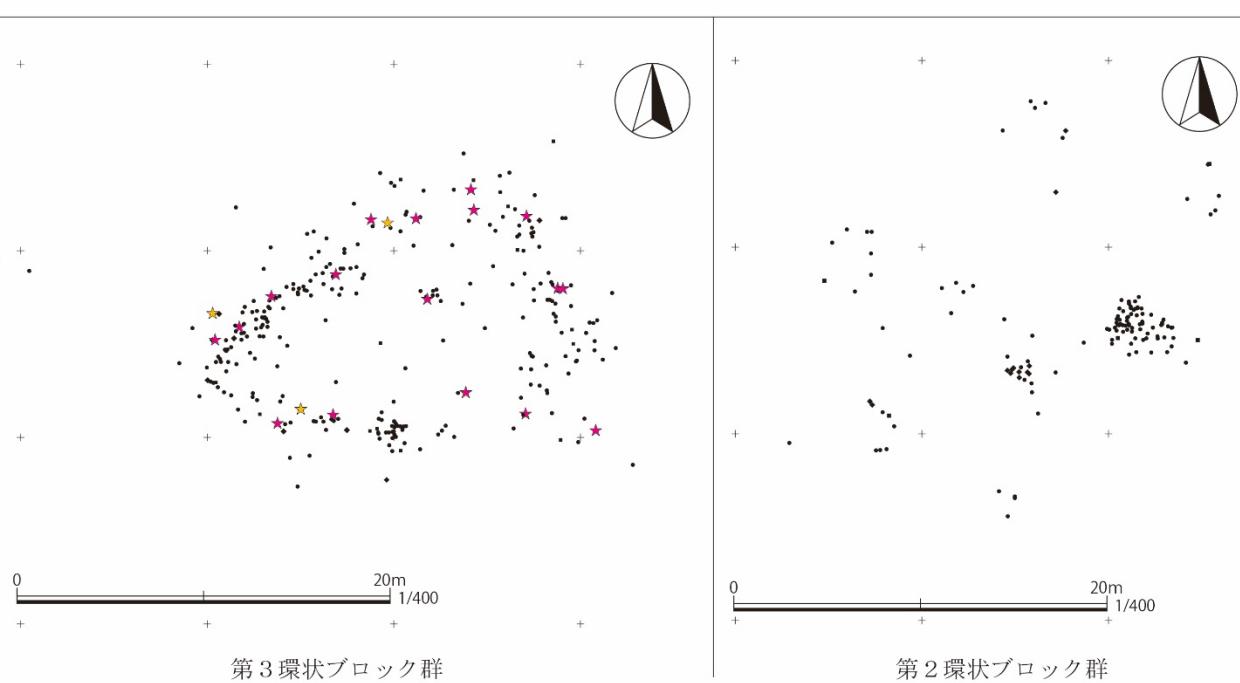
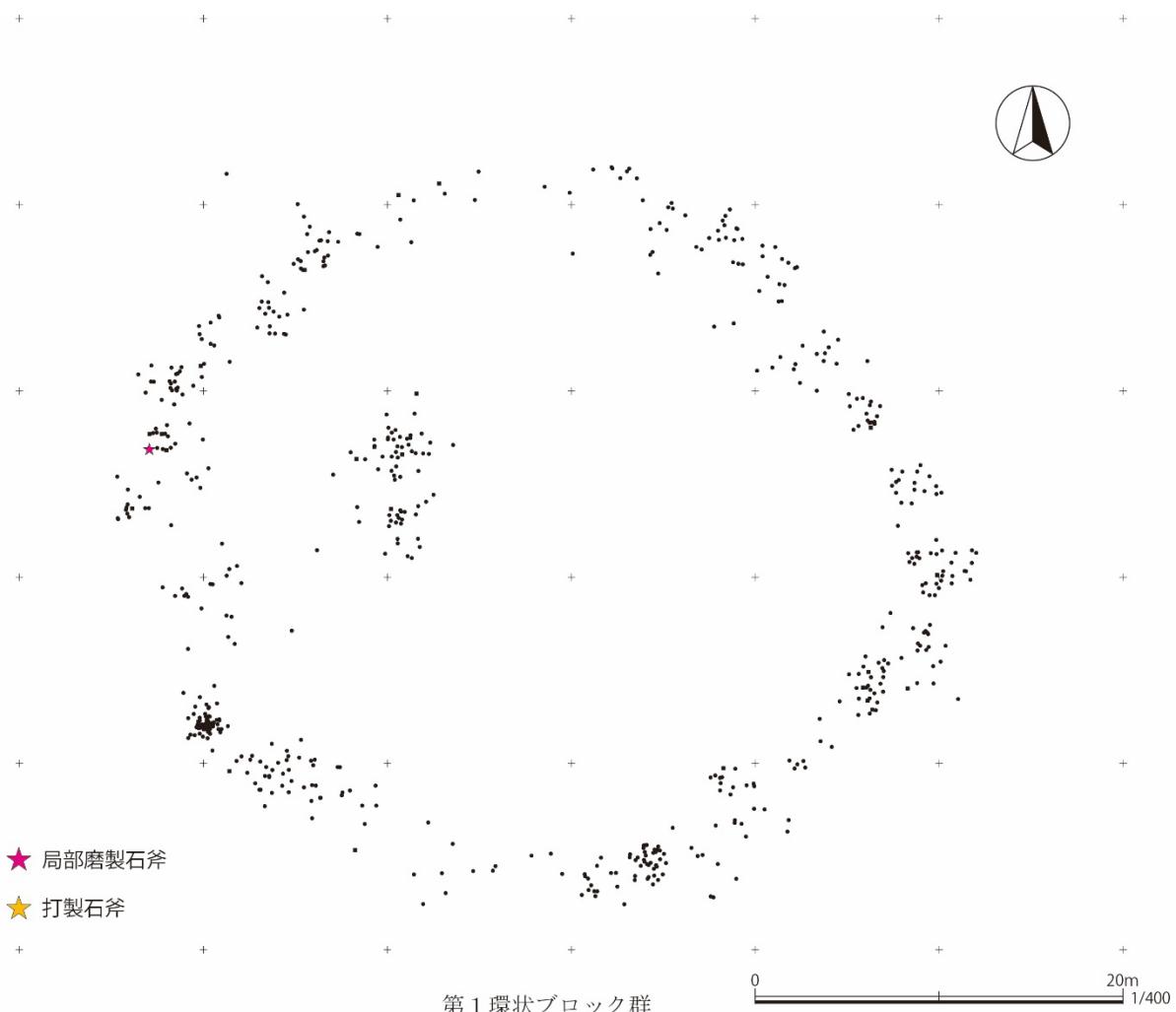


図3 南三里塚宮原第1遺跡石器分布図

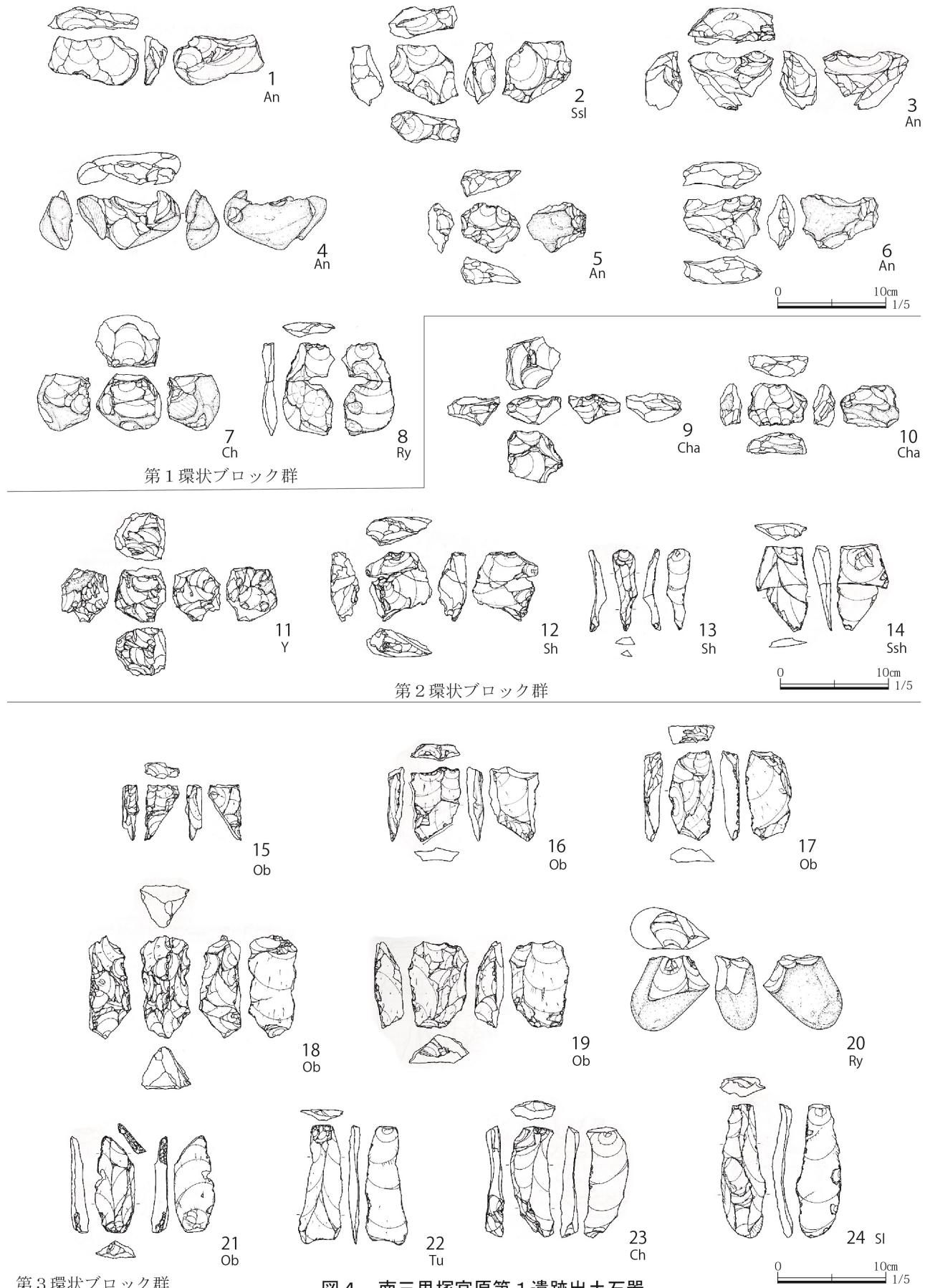


図4 南三里塚宮原第1遺跡出土石器

出土石器が 1000 点を超えており、遺跡の規模も当該跡と同等かそれ以上の規模であり、相対的には石器は少ないと言えよう。南三里塚宮原第 1 遺跡の石器点数は上述のとおりであるが、全体的には石刃や縦長剥片自体は少なく、石刃石核は認められない。一方で横長剥片や矩形を呈する剥片は卓越する。台形様石器に分類される石器は第 1 環状ブロック群で 31 点 (4.9%) 確認され、ナイフ形石器や石刃に分類される石器は第 3 環状ブロック群でそれぞれ 10 点 (3.3%) と 8 点 (2.6%) 確認された。各環状ブロック群の間でも器種組成に偏向する様子が見られる。剥片剥離という根本的には違いただけではなく、行動自体の違いにも直結していると言えよう。

その行動や行為を現わすであろう石器に注目し検討してみる。各環状ブロック群で組成する石核は第 1 環状ブロック群 : 25 点 (4.0%)、第 2 環状ブロック群 : 5 点 (3.7%)、第 3 環状ブロック群 : 16 点 (5.2%) であった。第 1 環状ブロック群では安山岩製 9 点、チャート製 7 点、黒曜石製 4 点などが出土した (図 4-1 ~ 7)。厚手の板状剥片を用いた盤状求心石核、小口面の広大面側横長剥片石核、ブロック状石核が見られる。安山岩製石核のほとんどに自然面が遺存し形状を観察する限り、手のひらを超えるサイズの原石を分割していると判断される。4・7 の様に小形の原石から直接剥片剥離を行っている例もある。8 は石刃に分類したもので被熱している。数は少ないが縦長系の石器が搬入され、サーマルフラクチャーも観察できる。

第 2 環状ブロック群では玉髓製 2 点、頁岩製・チャート製・黄玉石製各 1 点である (図 4-9 ~ 12)。盤状求心石核、小口面狭小面側縦長剥片石核、小口面広大面側縦長剥片石核、ブロック状石核が見られる。前項でも記したように良質な石材を用いていることが特徴である。10 は上下両小口面から小形縦長剥片を連続的に剥離した形跡を持つ。別途接合例を見ると上下の打面を入替え剥離を繰り返している。小形縦長剥片のほとんどは持ち出されている。12 は接合例であるが、矩形厚手剥片に側面調整を施し、小口面狭小面から連続的に縦長剥片を作出している。13 は 12 と同一母岩の縦長剥片である。幅が狭く 12 のような小口面狭小面から剥離された可能性がある。

第 3 環状ブロック群では黒曜石製 10 点、珪質頁岩製・チャート製各 2 点、流紋岩製・赤玉石製各 1 点である (図 4-15~20)。小口面狭小面側縦長剥片石核、小口面広大面縦長剥片石核、横長剥片石核が見られる。15 の狭小面側に小形縦長剥片の作出がみられ、16・17・19 には広大面側に幅広の縦長剥片が作出された形跡がある。18 は分割面を打面として両側面に矩形・横長剥片を連続的に作出し、20 では拳大円礫の一端を打ち欠き矩形・横長剥片を連続的に作出している。小形縦長剥片や矩形・横長剥片は遺跡内での製作が確認されるが、21~24 のナイフ形石器・石刃は搬入される。明確に石材選択と行動戦略が採られている様子が見られる。

石核一つとっても 3 者 3 様であり、石材獲得から石器製作に至る一連の行動に差異がある中、環状ブロック群を形成する。これは石器製作とは異なる行動原理に基づいた結果に起因すると言えよう。

#### 引用・参考文献

- 宇井義典ほか 2004 『南三里塚宮原第 1 遺跡 南三里塚宮原第 2 遺跡』, 204 頁, 財団法人印旛郡市文化財センター  
 杉原重夫ほか 2005 「南三里塚宮原第 1 遺跡出土旧石器時代黒曜石遺物の産地推定」『財団法人印旛郡市文化財センター年報 21-平成 16 年度-』, 43-53 頁, 財団法人印旛郡市文化財センター  
 宇井義典 2012 「環状ブロック群の遺跡構造と究極要因」『考古学論叢 I』, 70-91 頁  
 宇井義典 2016 「環状ブロック群の系譜」『阿部朝衛先生還暦記念論集』, 70-91 頁  
 酒井弘志 2025 『墨古沢遺跡』新日本の遺跡 6, 150 頁, 同成社

## 2つの環状ブロック群－清河寺前原遺跡と津久井城跡馬込地区－

石器文化研究会  
西井 幸雄

### はじめに

群馬県下触牛伏遺跡の報告書が1986年に刊行され、AT降灰以前に径50mの環状に石器集中が並ぶ姿は、多くの研究者に衝撃を与えた。その後、下触牛伏遺跡が特殊なのではなく、多くの遺跡で環状に並ぶ石器集中が確認され、環状ブロック群と呼称された。そして、その性格・成り立ちに「大型獣狩猟説」「石材交換説」「外部警戒説」「社会的・行動生態的リスク回避戦略」等の解釈がされた。資料の蓄積が進む中で環状ブロック群とはという問い合わせから、環状ブロック群の類型的分析、構成する石器集中の分析が進められ今日に至っている。今、遺跡ごとにその成り立ちを考えることの必要が高まっている。本稿で取り上げた2遺跡は、それぞれ違うコンテクストのなかに位置づけられる。統合ではなく2つの物語を語りたい。

### 1 2つの環状ブロック群のあらまし

ここで取り上げる2つの環状ブロック群は、埼玉県と神奈川県に所在する。環状ブロック群は関東地方に多くみられるが、その中で発見例が少ない地域である。

本稿ではこの2つの環状ブロック群を比較することが目的ではなく、環状ブロック群とされている遺跡がどのように成り立っているのかをみてゆく。

清河寺前原遺跡は、大宮台地では唯一の環状ブロック群として認識されている。遺跡は大宮台地南部の滻沼川流域に位置する（第1-1図）。滻沼川の流路は約2.5kmと小規模であるが、流域には大宮台地では少ない後期旧石器時代前半期の遺跡がまとまっており、大宮台地に最初に入植した人達の拠点であったと考えられる。

津久井城跡馬込地区は相模川と串川の合流地点、城山の南側に位置する（第2-2図）。石斧14点と多数の接合資料から「石斧製作・メンテナンスの場」とし「他の同規模の環状ブロック群と比べ特異である」と評価している（高屋敷 2013）。

### 2 清河寺前原遺跡について

清河寺前原遺跡は、第2暗色帯中から径約15mの環状ブロック群が検出された。調査区西側は駐車場によって削平されており、調査できたのは環状の約8割である（第1-2図）。石器1,474点、石器集中は11か所検出され、分布の散漫の部分はエリアとした。説明の必要から石器を帰属させるため、石器集中とエリアという異なる基準を設けたが、石器集中を分析単位とする時に基準の曖昧さを残してしまった。この点に関して、水村雅功（2025）がクラスター分析を用いてQGISで遺物分区を新しく行っている。石器集中の区分は報告書担当者によって基準が異なることが問題となっており、一定の客観性をも持たせるためにも、有効な方法である。

石器群はナイフ形石器、台形様石器、搔・削器、石錐、敲石と剥片類で環状ブロック群に伴うことが多い石斧は検出されていない。しかし、砂岩製の剥片は石斧の調整剥片の可能性がある。なお、報告書ではナイフ形石器と台形様石器と分類したが、その区分は漸移的である（西井 2024）。

石器石材は、黒曜石が1,293点と全体の88%を占めている。次いでガラス質黒色安山岩137点、トロトロ石27点である。

石器石材と遺物分布の関係をみると（第1-3図）。ガラス質黒色安山岩はクラスター1と4（遺物集中の区分は水村2025に従う）にまとまり、環状ブロック群の南側に広がっている。トロトロ石はクラスター5にほぼ収束する。ホルンフェルスは2点とも敲石で、環状の北側に独立するクラスター10にまとまる。

黒曜石の産地推定は、蛍光X線分析によってほとんどが諏訪星ヶ台というデータが得られている（須藤2025）。大宮台地南部は、黒曜石の原産地との直線距離で約130kmに位置する。黒曜石の搬入ルートを群馬県側と想定すると、その距離は約160kmになる。この様な遠隔地にある清河寺前原遺跡で黒曜石が1,293点と多数出土しており、原石の形状が分かる接合資料があることから遺跡内に原石の状態で持ち込まれていることが伺える。また、剥片剥離の初期段階には正面に自然面の残す割合が高いと想定できることから、剥片正面の自然面残置状況を確認する。剥片455点の内262点、57.6%で自然面が残っており、自然面の割合を便宜的に1/4から4/4の4分割しその傾向をみた。1/4は120点で自然面を残す剥片の45.6%、2/4は59点22.5%、3/4は42点16.0%、4/4は41点15.6%となった。大宮台地の他の遺跡で同じような統計を取っていないので比較はできないが、自然面を残す率が高い印象である。次に分布を確認すると、1/4は点数も多く全体に分布している。2/4はクラスター4・8・9の中央部に分布している。3/4は2/4の分布とほぼ同じである。4/4は2/4・3/4と比べ集中は無く外縁部のクラスター2・11にまで散漫に広がっている（第1-4図）。

黒曜石の次に多いガラス質黒色安山岩は、明花向遺跡、西大宮バイパスNo.6遺跡等では拳大の円礫を分割して求心状剥離で貝殻状の剥片を剥離しているのに対し、原石の大きさは一回り大きく小口面から縦長剥片を剥離している接合資料がみられる。

### 3 津久井城跡馬込地区について

津久井城跡馬込地区第6文化層A区（以下、馬込地区6Aと省略）は、B4相当層から径約28mの環状ブロック群が検出された。石器は1,356点、礫254点が出土し、遺物集中7か所、礫集中15か所が検出された。

石器群の内容は、ナイフ形石器、台形様石器、搔・削器、彫器、楔形石器、局部磨製石斧、打製石斧、台石、敲石、磨石と剥片類である。石器石材は22岩種で硬質細粒凝灰岩888点、ホルンフェルス127点、珪質頁岩147点が主石材で、他に黒曜石48点、チャート27点、ガラス質黒色安山岩24点等である。

馬込地区6Aに関しては、すでに多くの論文で取り上げられており、それを参考に遺物の分布を検討する。

報告書で遺物の垂直レベル差が約1.5mあり、一部が第5文化層に編入される可能性もあるとしながら、平面分布、断面分布から同一文化層としている。麻生順司は「断面分布のピークが二枚に分離できるような状況が認められ」、北側は約146.0m、南側は144.5mにピークがあり、それぞれほぼ水平に遺物が分布していると指摘している（麻生2015）。これに対し、鈴木次郎は報告書の断面への遺物投影が南北方向のみで東西方向が記載されていないことと、遺跡の地形が東向の傾斜地であることから、層位的同時性は問題ないとしている（鈴木2023）。本稿では、遺物のレベルを0.5m単位で区切り、遺物の分布がどうなるかを確認した。それによると146.0m以上の遺物は西側に分布し、145.5～145.0mは全域に分布し、145.0m以下は東側にまとまり、遺物のレベルが西から東に順次低くなることが確認でき、鈴木の指摘を追認することができた。

石器群の詳細な分析が畠中俊明（2010）と鈴木次郎（2023）によって行われている。鈴木は石器群

を剥片生産と石斧製作、石器製作の工具の3つに分けて、石器石材との関係を述べている。剥片生産は硬質細粒凝灰岩（本石材は石斧製作の主体でもある）、珪質頁岩、黒曜石、チャート、ガラス質黒色安山岩、水晶、瑪瑙、粘板岩等のである。

石斧製作はホルンフェルスと硬質細粒凝灰岩、細粒凝灰岩、中粒凝灰岩、粗粒凝灰岩（なお、細粒凝灰岩、中粒凝灰岩、粗粒凝灰岩は敲石が含まれる）である。

石器製作の道具は安山岩、頁岩、砂岩、富士玄武岩、輝緑岩、変質輝緑岩、閃緑岩、斑鰐岩と細粒凝灰岩、中粒凝灰岩、粗粒凝灰岩である。凝灰岩以外はそれぞれ数点で台石、敲石、磨石として使用するために遺跡内に持ち込まれたことが分かる。

剥片生産に関わる石材は、黒曜石、ガラス質黒色安山岩、水晶、瑪瑙など遠隔地石材が持ち込まれているが、石器製作の道具に使われた石材は、重量もあり近在の石材が使われている。石斧製作にかかる石材も相模川流域で採取できる凝灰岩であるが、これは石斧に適した石材として重要であり、本遺跡がこの地点に所在する意味、必然性が問われる。

3つの石材の分布をみていく。

**石器製作の道具** 台石、敲石、磨石である。台石はAブロックの遺物密集部の南側とC・Dブロック、調査区西端から出土しており、遺物密集部から若干離れている。敲石と磨石はAブロックの密集部周辺とB・C・Dブロックから出土している。また、Eブロックの珪質頁岩の密集部から1点出土しており、石斧関連以外の剥片剥離に関連する敲石の可能性も高い。遺物の分布の希薄なFブロックから出土している点も注目される。

**石斧製作に関連する資料** 石斧と剥片類の接合資料ホルンフェルスと凝灰岩の分布傾向をみてみると、ホルンフェルスは4つの母岩に区分されている。Ho-01はAブロック密集部とCブロックの東側に偏る傾向がみられる。Ho-02はAブロック密集部の北側にまとまり、Ho-03はAブロック密集部の西側にまとまっている。Ho-04は点数が少ないが、Cブロックの東側に小さくまとまっている。

硬質細粒凝灰岩は22母岩に区分されている。石斧に関連すると思われる接合資料は、HTF-01、03、05、11、12の5母岩である。この母岩資料の分布をみると、Aブロック密集部にHTF-01、05、11が集中しHTF-02はAブロック密集部を中心とするがBブロックにも分布している。一方、HTF-03はGブロックを中心にCブロックにも分布している。細粒凝灰岩はAブロック密集部にまとまる傾向がみられる。中粒凝灰岩はA・Bブロック、C・Dブロックに散漫に分布している。

次に局部磨製石斧と打製石斧をみると、Aブロック密集部から出土した石斧は未製品の接合資料と思われる。Bブロックでは打製石斧の完成品2点が出土している。GブロックはHFT-03の分布の北側に3点の石斧がまとまっている、何れも破損した石斧がまとめられている感じである。Cブロックは局部磨製石斧が出土している。Fブロックで1点完成品が出土している。多くは、剥片剥離作業の周辺からの出土である。

**剝片生産** ナイフ形石器、台形様石器等の定型的石器と剥片類である。硬質細粒凝灰岩は点数が多いので第5図には掲載しなかったが、Aブロック密集部とBブロックの一部からまとまって出土し、C・D・Gブロックにも多く分布している一方でEブロックからは出土していない。珪質頁岩はEブロックに密集し、他はA・Bブロックに広がっている。黒曜石は東側の広い範囲から出土している。チャートはEブロックの密集部と他は散漫な分布である。ガラス質黒色安山岩はEブロックの密集部とA・Bブロックから散漫に分布している。

以上、3つの石器群の分布から、馬込地区6Aでの作業空間を概観する（第2-6図）。ヒートマップから全体の遺物分布の偏在をみると、西側（山側）の散漫な分布域（Fブロック）と東側（崖線側）

の遺物が密に分布する部分に大きく分けられる。そして、東側はA・Bブロック（北東側）とC～E・Gブロック（南東側）の間に遺物分布が希薄なラインがあり2つに区分できそうである。この3グループは、石斧製作で顕著な違いがみられる。石斧製作の主な空間は北東側のA・Bブロックにまとまり、南東側はホルンフェルスがCブロック、硬質細粒凝灰岩がG・Dブロックと分布を違えている。局部磨製石斧、打製石斧はA・Bブロックの密集部周辺とC・Dブロックから出土している。Gブロックでは破損した石斧がまとまって出土しており、石斧の再加工の跡かもしれない。

剥片生産をみると、Eブロックで珪質頁岩の密集部があり、チャートとガラス質黒色安山岩が含まれるが硬質細粒凝灰岩は出土していない。

石器製作の道具をみると、台石は密集部に入らずその周辺から出土する傾向がみられた。敲石・磨石は密集部に伴うが、分布の散漫なFブロックから出土している。

#### 4 収束

以上、清河寺前原遺跡と津久井城跡馬込地区の環状ブロック群をみてきた。

環状ブロック群とは何かといった解釈ではなく、また環状ブロック群の類型的比較をするのではなく、個別の環状ブロック群とされている遺跡から何が読みとけるのかを重視したい。清河寺前原遺跡は、大宮台地南部に位置し黒曜石原産地から約130kmの遠距離に位置する。剥片正面の自然面の残置状況から、剥片剥離の初期段階と考えられる資料が多く、接合資料は原石の産状が復元できる。遺跡内に原石が持ち込まれ、集中的に剥片剥離が実施されたと考えられる。大宮台地の旧石器時代遺跡で他に類例は無く、後期旧石器時代初期段階の入植者が黒曜石原産地を含めて広域に移動していたことが伺える。遠隔地石材と言えば吝嗇的消費と考えがちだが、清河寺前原遺跡からは原産地近隣の遺跡を彷彿させるような資料である。現在、清河寺前原遺跡を一次的拠点とし、そこから派生すると思われる遺跡はみつかっていない。今後その様な遺跡が発見されることを期待するが、同時に黒曜石を携えた集団にとって、大宮台地は活動領域としては資源が貧弱であったのかもしれない。短期的に入植したが、地元の石材を開発まで行かず関東山地から中部高地に戻ってしまったとも考えられる。

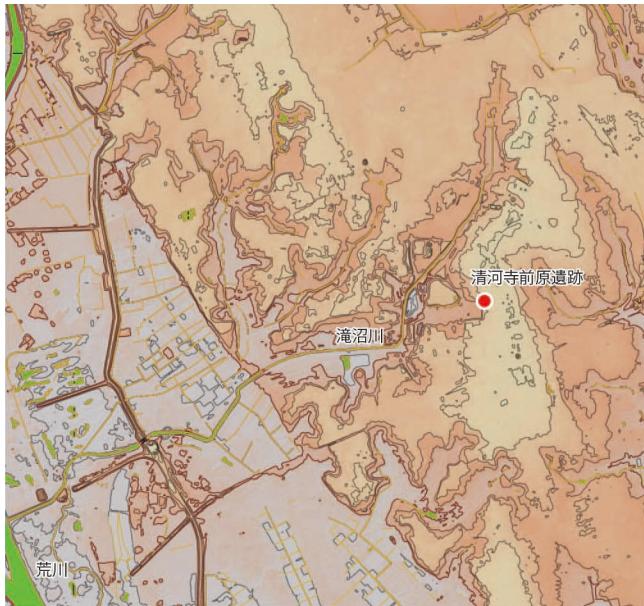
津久井城跡馬込地区は、石斧の製作遺跡としての評価もある。西関東地域の石斧には凝灰岩とホルンフェルス（緑色岩）が多く使われている。津久井城跡馬込地区は石材採取地点に近く石斧の供給地点としての位置付けが考えられる。武藏野台地側における石斧製作遺跡との関連も含め検討する必要がある。

#### 引用・参考文献

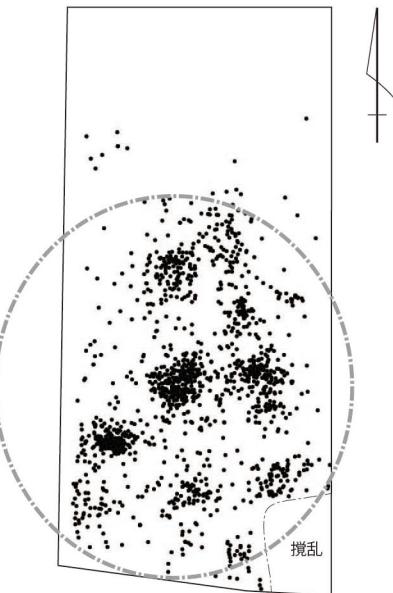
- 麻生順司 2015 「大和市を中心とした旧石器時代の変遷—上草柳遺跡群大和配水池内遺跡の調査事例を基に—」,『大和市史研究』, (39), 1-44頁, 大和市役所文化スポーツ部文化振興課市史・文化財担当  
かながわ考古学財団 2010 『津久井城跡馬込地区』, かながわ考古学財団調査報告書 249  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2009 『清河寺前原遺跡』,埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第366集  
須藤隆司 2025 「日本列島の後期旧石器時代初頭石器技術システム」『資源環境と人類』, No.15, 97-126頁,明治大学黒曜石研究センター  
鈴木次郎 2023 「相模野における旧石器時代前半期の集落」『神奈川考古』,第59号, 1-34頁, 神奈川考古同人会  
高屋敷飛鳥 2013 「旧石器時代環状ブロック群の研究動向」『古代文化』, (第65巻第1号), 122-129頁, 古代学協会  
西井幸雄 2024 「大宮台地の台形様石器」『岩宿フォーラム 2024／シンポジウム 「ペン先形ナイフ」の再検討』,33-42頁, 岩宿博物館

## 第2部

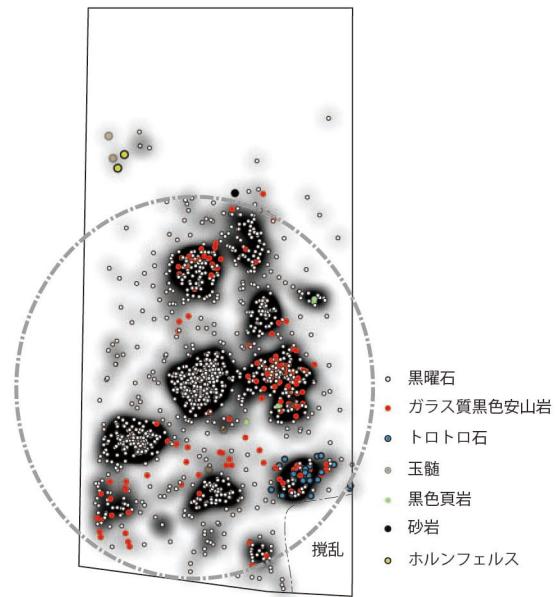
- 橋本勝雄 2010 「ナイフ形石器文化前半期の住居様式」『日本の考古学講座 2 旧石器時代（下）』, 229-252 頁, 青木書店  
 畠中俊明 2010 「ナイフ形石器文化期のムラ①—環状ブロック群と石斧の生産—」『平成 21 年度考古学講座 かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る』, 9-18 頁, 神奈川考古学会  
 水村雅功 2025 「清河寺前原遺跡における環状ブロック群の再検討」『研究紀要』, 第 39 号, 1-32 頁, 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



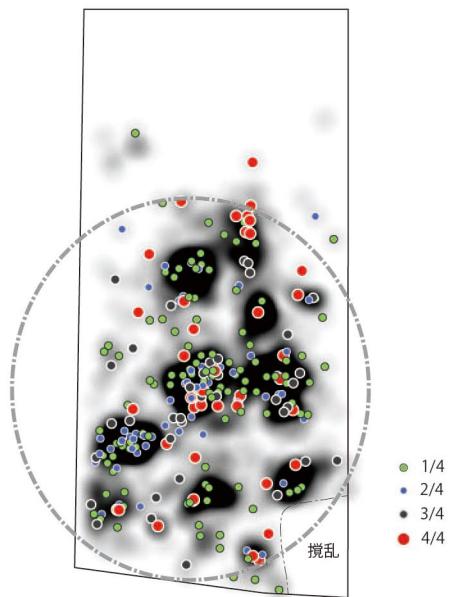
第1-1図 遺跡位置図（5万分の1）



第1-2図 環状ブロック群範囲推定線（400分の1）

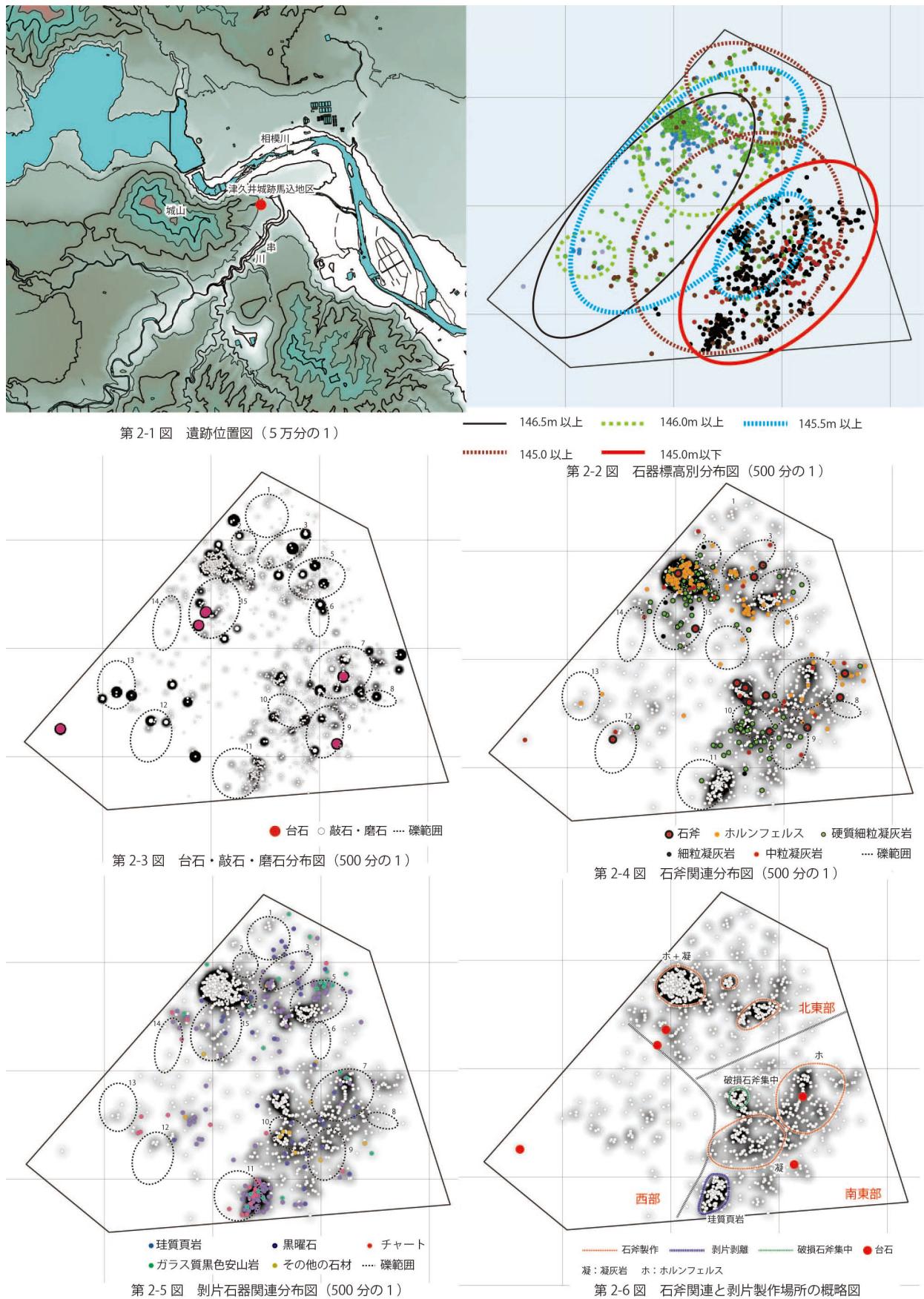


第1-3図 石材別分布図（400分の1）



第1-4図 黒曜石剥片正面の自然面残存状況（400分の1）

第1図 清河寺前原遺跡



## 相模野旧石器時代前半期の再整理

玉川文化財研究所

麻生 順司

### はじめに

相模野台地の旧石器時代編年は、1972年的小園前畠遺跡の調査報告書に相模野第Ⅰ期～Ⅴ期に区分された相模野編年の骨子が示されたことを端緒として(相模野考古学研究会 1972)、1976年に発表された「相模野台地における先土器時代研究の現状」(矢島・鈴木 1976)と1978年に発表された「先土器時代の石器群とその編年」(鈴木・矢島 1978)の2本の論文により相模野旧石器時代編年が確立された。そしてこの相模野編年は、1988年に発表された「相模野台地における石器群の変遷について一層位的出土例による石器群の段階的把握ー」(諏訪間 1988)によって石器群の変遷を12段階に区分した段階編年により細分された。

この3本の編年案は、その後の相模野台地における旧石器調査の基準となり、2001年に行われたシンポジウム「相模野旧石器編年の到達点」(神奈川県考古学会 2001)の開催によって相模野旧石器時代研究の総括が行われ、その後も鈴木次郎氏による「相模野における旧石器時代前半期の集落」(鈴木 2023・(続)2024)によって各遺跡の石器内容の再整理が行われている。

この様な中で筆者は、玉川文化財研究所において40年以上相模野台地の旧石器時代遺跡の調査を行ってきた成果を「神奈川の旧石器時代調査」(麻生 2024)として発表し、上記の3編年を基に各期・各段階の旧石器時代の移り変わりを提示した。その中で、従来の編年の再検討(矢島 1999、鈴木 2000)が行われて相模野第Ⅰ期が前半と後半に細分された部分を見落としていたことから、今回のこの報告で訂正した編年図を公表し(図1・2)、それに伴ってこの相模野第Ⅰ期前半・Ⅰ期後半・Ⅱ期前半の一部再整理を行ったものである(注1)。今回の報告では、この前半期の編年に関する報告を再整理したことによって確認された根下遺跡最下層文化層と相模野台地における当該期の環状ブロック群の再検討を行った。

### 1 藤沢市根下遺跡第V文化層

根下遺跡は、1986年(昭和61年)に調査が行われ、神奈川県下で初めての完形の打製石斧が発見された遺跡として注目された遺跡である(麻生 1987)。このナイフ形石器を含む打製石斧石器群が検出された文化層は第IV文化層であり、層位的には相模野B4層上部に属するものであるが、実はこの文化層のさらに下層に第V文化層が確認されている。報告書作成当時は当該期の調査例としては栗原中丸遺跡(大上・鈴木 1984)がある程度であり、根下遺跡が相模野台地の南端部に位置していることから、出土層位を確定することができなかった。今回この再整理に伴って新たに土層堆積状態を検討したところ、この第V文化層が相模野B5層上部に当たることが判明したことから(図3)、編年的にも相模野第Ⅰ期前半・段階Ⅰに属する遺物群として再報告を行うこととした。

### 2 環状ブロック群の石材組成

相模野台地において環状ブロック群を呈する遺物群が確認された遺跡としては、大和市の上草柳遺跡群大和配水池内遺跡第XIV文化層(麻生 2008)、相模原市の津久井城跡馬込地区第6文化層A区(畠中他 2010)、船久保遺跡第VI文化層(麻生 2020)の3遺跡があげられる。ここでは、この3遺跡4群の環状ブロック群の石材組成と黒曜石の産地推定分布について再検討を行うこととした。

まず、石材組成についてブロック群ごとで見ていくと（図5～8）（注2）、津久井城では凝灰岩が69%を占めて主要な石材となる。続いて大和配水池では黒曜石と凝灰岩とチャートの3種類で9割以上を占める。一方船久保第1では凝灰岩と珪質頁岩と安山岩が主要な石材となり、この3種類で8割以上を占める。そして船久保第3では黒曜石が5割以上を占めて主要な石材となり、これに安山岩とホルンフェルスを併せるとこの3種で9割近くを占める。以上のように全体的な石材組成は各ブロック群で主要となる石材の組み合わせが異なることが判る。

では、このブロック群ごとの石材組成を各ブロック別に定形石器との組み合わせを含めて見てみると、津久井城では凝灰岩が石斧製作を中心に用いられており、ナイフ形石器では多種類の石材が用いられている状況が認められる。そしてブロック別ではやはり凝灰岩が主体となるが、Eブロックのみ珪質頁岩が主体となる。続いて大和配水池ではやはり凝灰岩は石斧を中心に用いられているが、ナイフ形石器を中心とした定形石器には黒曜石が多く用いられている。ブロック別では北側のa・b・eブロックでは非黒曜石が主体をなすが、南側のc・dブロックでは黒曜石が主体をなしている。船久保第1でも凝灰岩は石斧関連遺物を中心に用いられており、ナイフ形石器には黒曜石が用いられている。ブロック別では風化が著しい在地の石材である流紋岩質凝灰岩を除いた石材では、北側の7号ブロックで凝灰岩が7割以上を占めて石斧関連遺物が認められ、石斧がまとまって検出された南側の1号ブロックでは凝灰岩とともに珪質頁岩が多く認められている。一方、船久保第3ではナイフ形石器には黒曜石が用いられているが、石斧の未製品に安山岩が用いられ、石材としては北側の28号ブロックに黒曜石が集中して検出され、中央部の32号ブロックでは黒曜石とともにホルンフェルスと安山岩が集中して確認された。この様にブロック群内のブロック別でも石材組成が異なっていることが判る。

次に、各ブロック群内における黒曜石の原産地別の搬入状況を見てみると、津久井城では50点の黒曜石が検出され、ブロック別では北側のA・Bブロックに神津島産が持ち込まれ、南側のC・D・Gブロックには信州産の黒曜石が持ち込まれて台形様石器やナイフ形石器が作成されている。その他の産地としては天城柏崎産が2点確認されている。続いて大和配水池では34点の黒曜石が検出された。ブロック別では南側のc・dブロックを中心に信州の麦草峠産が8割以上の割合を占めて搬入され、縦長剥片素材のナイフ形石器を含む剥片素材の定形石器が作成されている。その他の産地としては神津島産が2点と箱根畠宿産が1点確認されている。一方、船久保第1では信州系の黒曜石が認められず、神津島産が南側の1号ブロックを中心にまとめて搬入され、台形様石器も確認されている。また、北側の7号ブロックに点数的には少ないが高原山産黒曜石を素材とした台形様石器が検出されている。そして船久保第3では伊豆・箱根系の黒曜石が28・32号ブロックを中心に搬入され、ナイフ形石器や彫器が作出されている。そして点数的には少ないが神津島産も台形様石器の製品として搬入されている。さらに注目されるのが27号ブロックに透明度の高い星ヶ台産黒曜石が1点のみ確認され、縦長剥片を素材としたナイフ形石器として搬入されている。

## まとめ

以上のように、各ブロック群だけではなく各ブロックごとに石材組成が異なっている状況が認められ、特に原産地が想定されている凝灰岩と黒曜石の搬入状況を遺跡単位で見てみると（図4）、凝灰岩はいずれの遺跡も北西に位置する丹沢層群から搬入されているものと考えられ、主に石斧製作に用いられている。そして黒曜石はこれまで見てきたように各ブロック群ごとに搬入量が異なり、津久井城では主に信州系と神津島産で構成され、大和配水池では主に信州産のみによって構成される。そして船久保第1では神津島産を主体に高原山産が伴い、船久保第3では伊豆・箱根系に神津島産が伴う

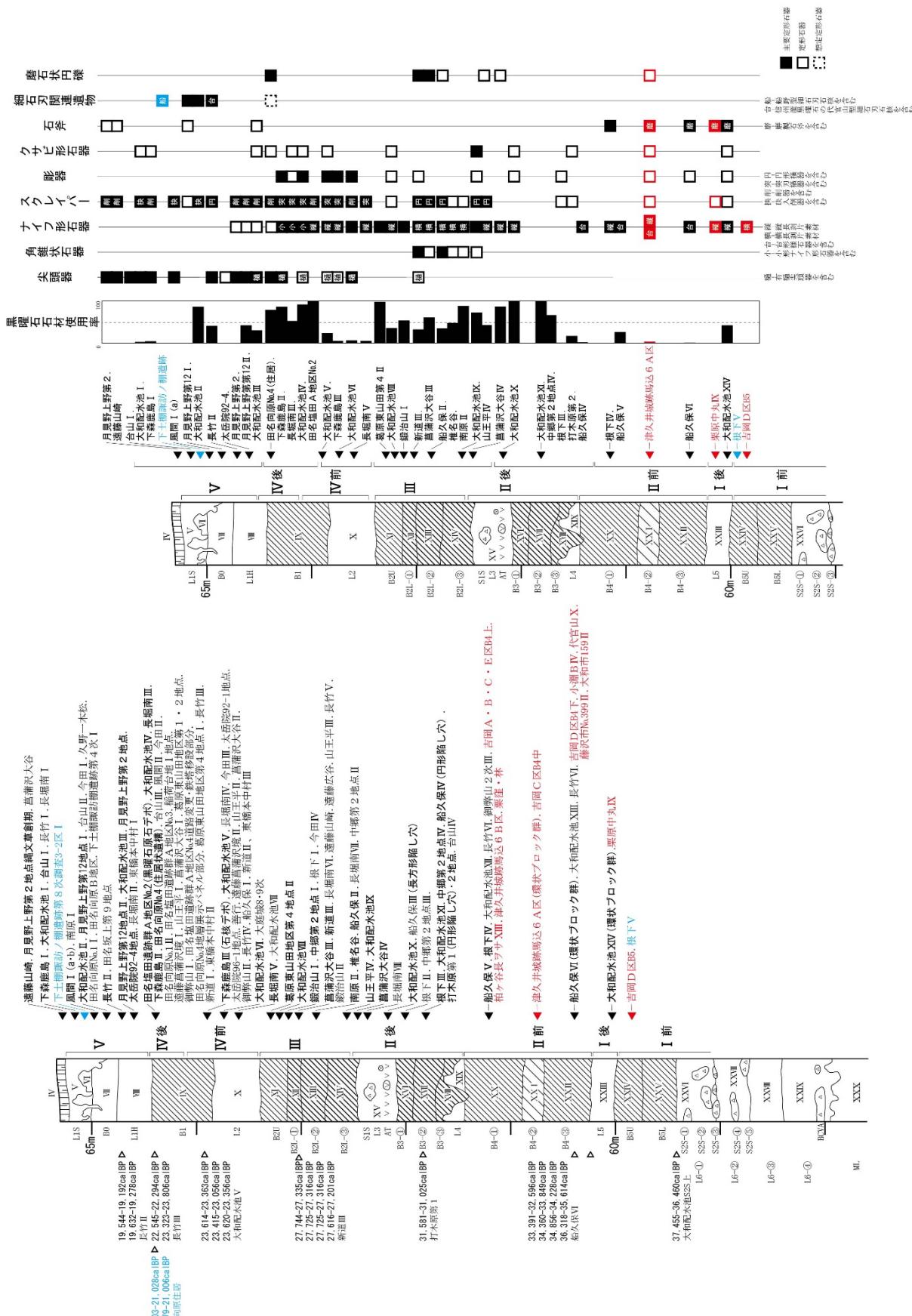


図1 層位と文化層（改訂版）（注1）

図2 文化層と主要石器（改訂版）

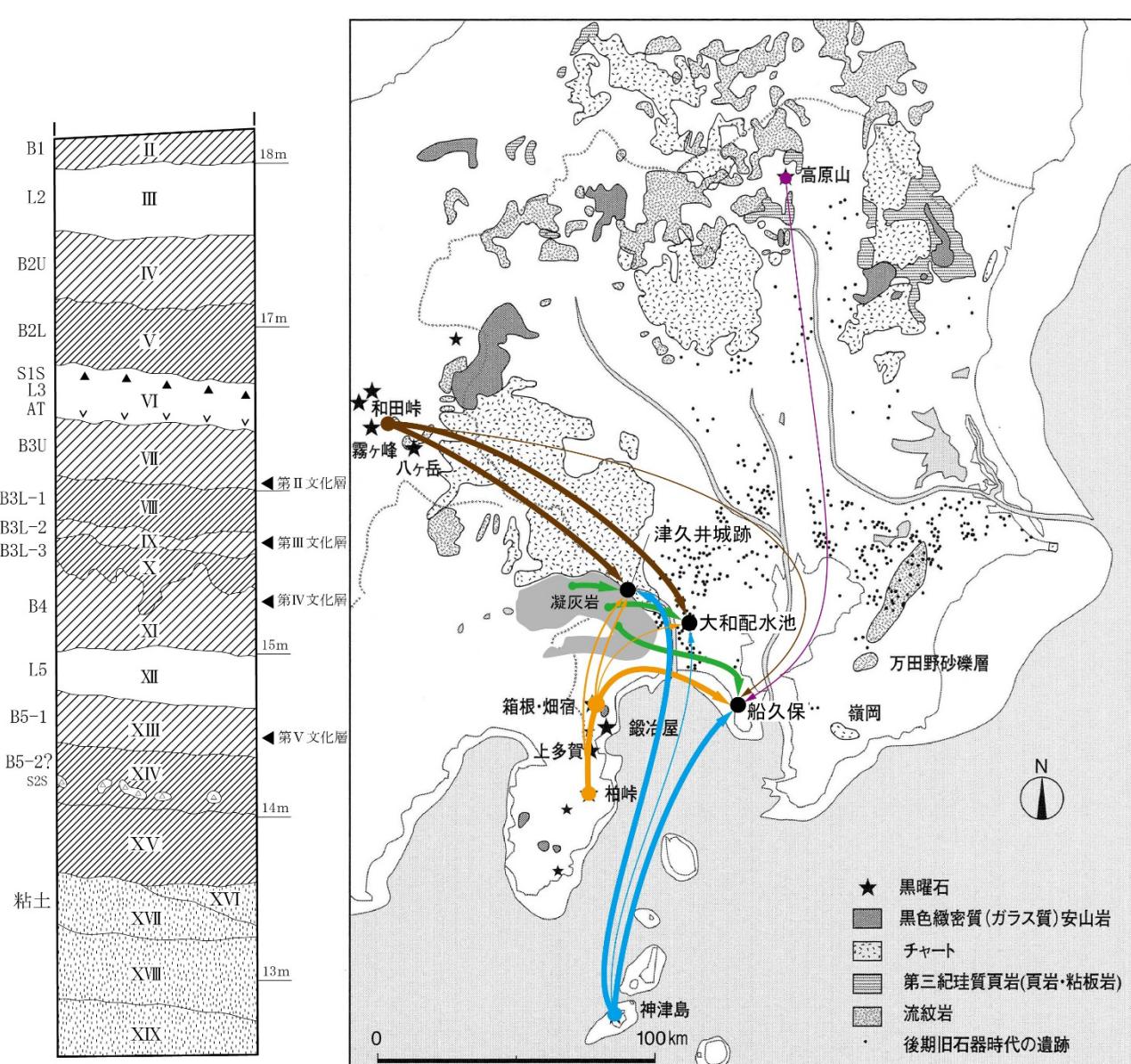


図3 根下遺跡基本層序と文化層

図4 黒曜石と凝灰岩の搬入コース

状況が認められた。そしてこのような状況の中で大和配水池と船久保第3に縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器が信州系の黒曜石とともに搬入されている点にも注目される。今後はこの様なブロック単位での石材組成の差や搬入経路の違いから人々の移動状況についても考えていく必要があろう。

注1 図1・2は改訂編年図である。青地は新たに追加された文化層、赤字は相模野台地主要文化層名である。

注2 石材組成は主要石材名にまとめて表記し、黒曜石原産地名については統一して表記した。

#### 主要参考文献

かながわ考古学財団 2010『津久井城跡馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249

鈴木次郎 2001「ナイフ形石器文化前半期の様相」『平成12年度考古学講座 相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会

諫訪間順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『同上』神奈川県考古学会

玉川文化財研究所 2014～2020『船久保遺跡～船久保遺跡第5次調査』

大和市No.199遺跡発掘調査団 2008『上草柳遺跡群大和配水池内遺跡』I

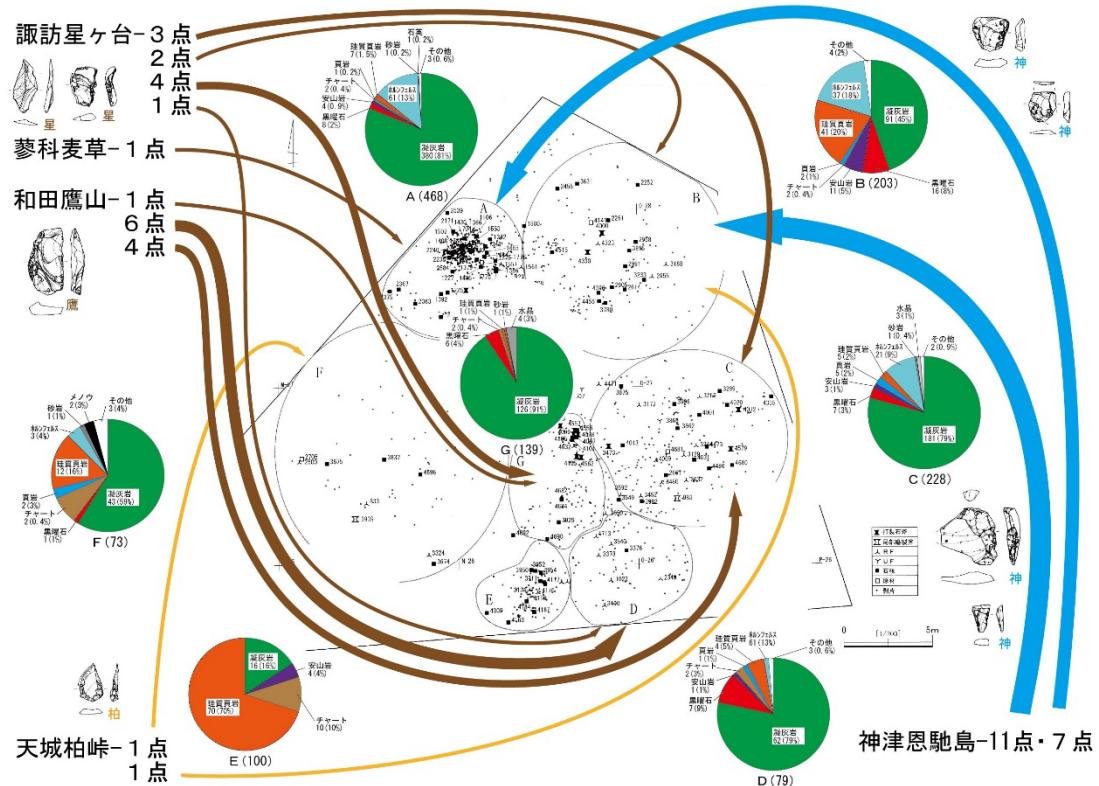


図5 津久井城跡馬込地区第6文化層A区の石材組成と黒曜石原产地

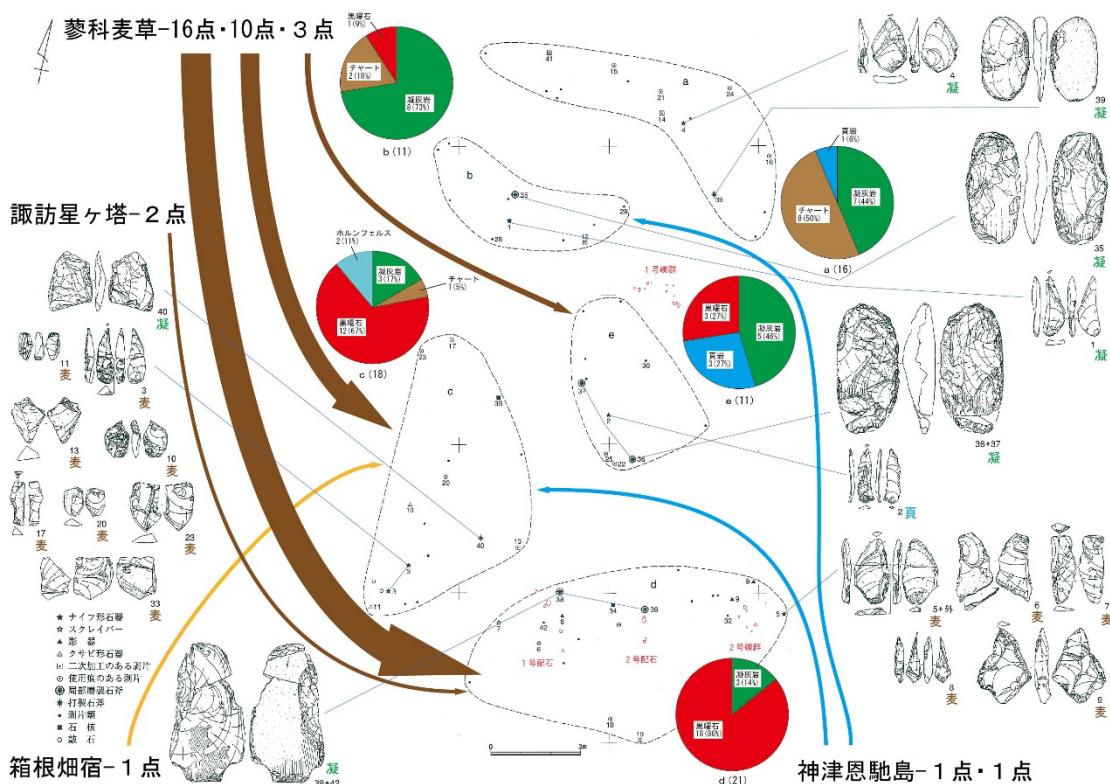


図6 大和配水池内遺跡第XIV文化層の石材組成と黒曜石原产地

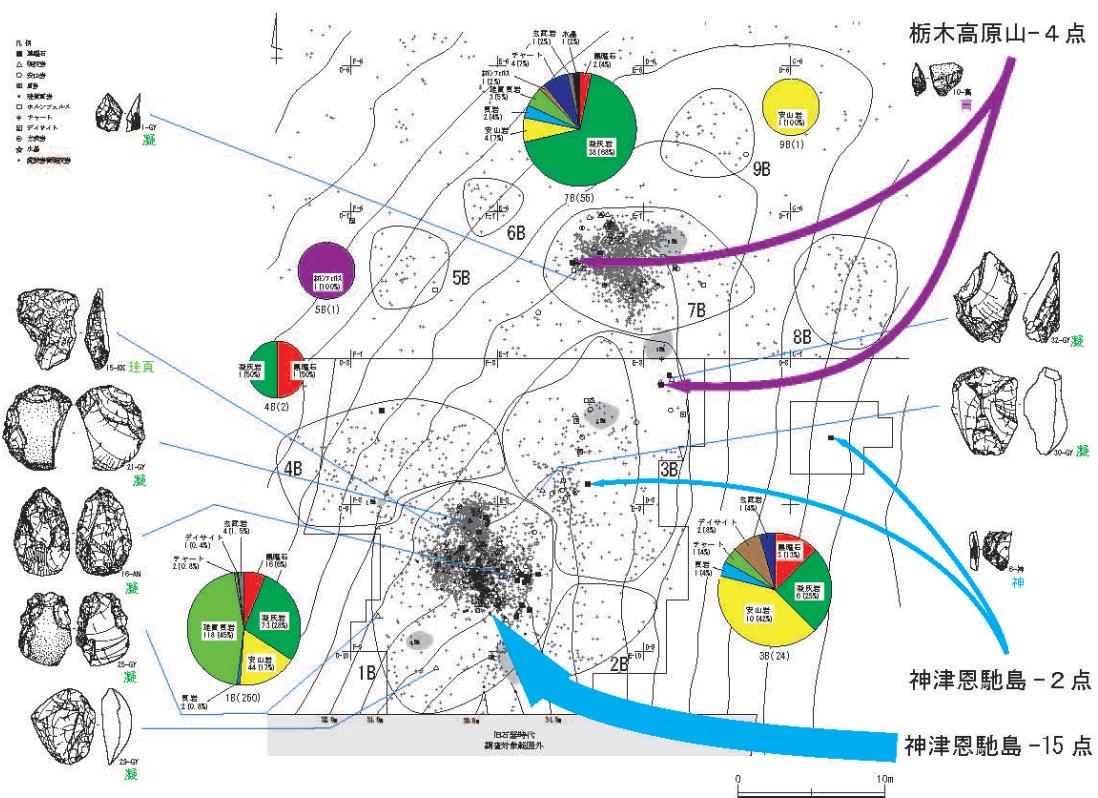


図7 船久保遺跡第VI文化層第1ブロック群の石材組成と黒曜石原产地

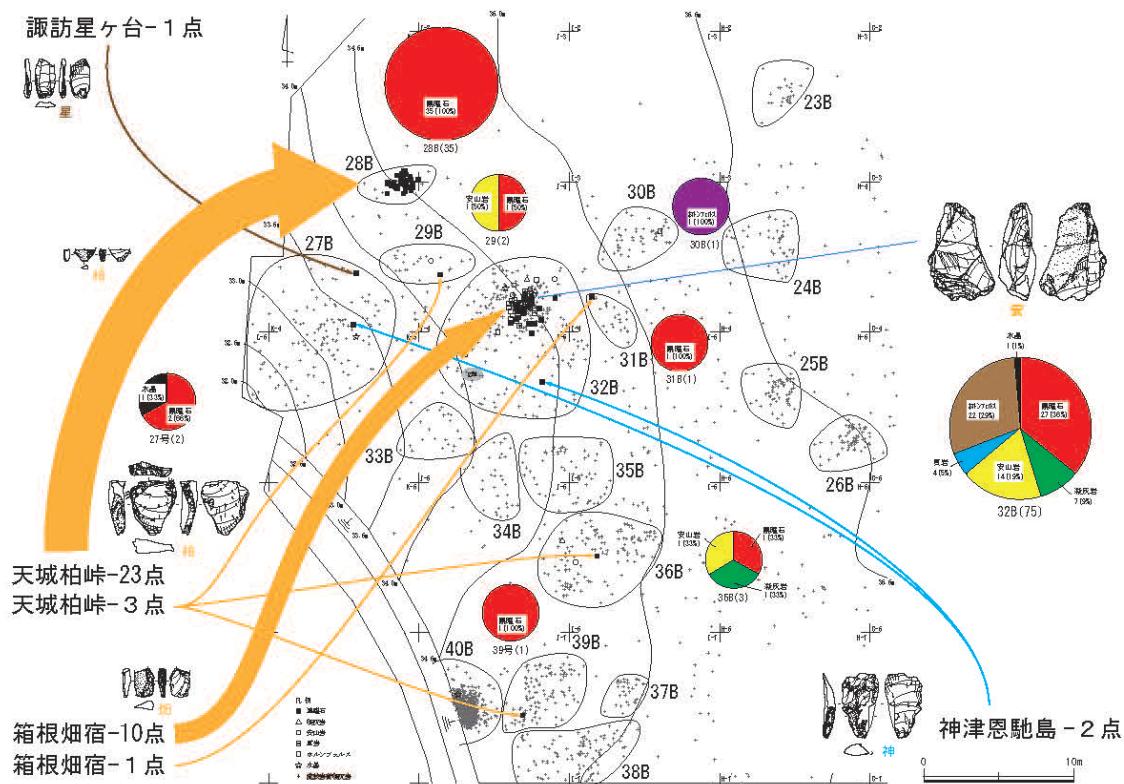


図8 船久保遺跡第VI文化層第3ブロック群の石材組成と黒曜石原产地

## 南関東の石器群編年とMIS2の環境変動

<sup>1)</sup>明治大学黒耀石研究センター、<sup>2)</sup>東京大学総合研究博物館

鈴木 美保<sup>1), 2)</sup>

### はじめに

編年研究は考古学における基礎であり、最も骨幹をなす研究であることは疑いようがない。編年研究は考古学研究の出発点であり、時間的空間的単位を抽出して行動論的研究、社会生態学的研究といったより解釈論的研究への入口となる。一方で、編年研究は考古学研究の到達点であるともいえる。考古学が歴史学である以上、ある時空間の歴史的叙述は究極の到達点である。ただし、たとえ同じ時代、同じ地域を扱っていたにせよ、その解答は一つではない。例えば、道具（石器）の製作技術の変革と変遷に焦点を当てた従来の編年に対して、資源やそれにまつわる行動、すなわち先史時代の経済活動に注目してヨーロッパの旧石器時代から新石器時代の新たな編年枠組みを提示したデネルの研究（Dennell 1983, デネル 1995）が高く評価されたように（穴澤 1988）、どの側面に焦点を当てて時間の流れを評価するかによって描ける歴史の見え方は変わってくる。連綿と続く時間の流れを何をもって区切り、その境界にどのような意味を与えることができるのかを明らかにすることが編年研究の到達点であると筆者は考えている。

本論は石器群の編年研究の先進地である南関東でも古利根川より西の武藏野台地、相模野台地を含む地域において確立してきた石器群編年を石器製作システムの構造的変化の視点からとらえ再編する試みであるが、今回はそのうちのナイフ形石器を主体とする石器群の時期に焦点を当てて、その変異を近年明らかになってきた氷河期の環境変動との対比という視点から再考する。

### 1 南関東の石器群編年

南関東地方、とりわけ古利根川より西に位置する相模野台地、武藏野台地は関東ローム層の供給源である富士・箱根火山に近接しているため、日本列島内でも旧石器時代の最も厚い堆積層を有し、同時に首都圏に近く、1970年代に始まった高度成長期に大規模、高密度な遺跡発掘調査が行われたため、旧石器時代の編年研究が最も進んでいる地域である。ここでは学史を詳細に記述する紙数はないが、1980年代の初頭までには70年代に爆発的に増加した資料を基準とした「武藏野編年」、「相模野編年」と呼ばれる編年の大枠が示され（鈴木・矢島1978, 赤澤ほか1980）、その後も新出資料によって、細部の補足・修正が行われ精緻化してきた。80年代の後半には基本的な枠組みは相模野編年を踏襲しつつ、新たな器種の出現、石材構成、器種構成の変化を指標に、旧石器時代から縄文時代草創期までを12段階にまとめた段階変遷案が諏訪間（1988, 2010）によって示された。諏訪間によるこの段階的変遷案では各段階間の有機的な関係についてはほとんど触れられておらず、その点ではある意味いまだ研究途上ともいえるが、層位と対比した石器群の変遷は明解で、研究の出発点となる編年案としては分かりやすく利用しやすい。

上記で取り上げた「武藏野編年」、「相模野編年」、「諏訪間段階編年」は武藏野台地、相模野台地のローム層層序を基準に対比可能であり、細部を除けば研究者間でもほとんど異論もなく、近年では高精度放射性炭素年代測定法による年代測定結果とその較正年代値により、年代観についても議論できるようになってきている（高屋敷2024）（図1）。

筆者自身もこれら編年案の時間的境界の位置についてはおおむね首肯するものであるが、その境界線に与える意味付けについては異なる考えを持っている。筆者の考える編年案は図1の鈴木編年の列

に示した。後期旧石器時代全体を大きく3時期10細分時期に区分した。今回はそのうちの2期に焦点を当てた考察となるので、細部については稿を改めたいが、今回議論する2期の後期旧石器時代の中での位置づけを明らかにするため、概要のみをここで述べる。

筆者の1~3期の大区分は石器製作システムの構造的変化が起こった時期と捉えており、その変化はおおむね古本州島全域に及ぶ変化である。言い換えれば、基本的な石器製作システムは後期旧石器時代を通じて古本州島ではほぼ共通しており、そのシステムが1期から2期、2期から3期の時期に変化したと考えている。1期から2期への変化は台形様石器、基部加工尖頭形石器、すなわち二極構造(佐藤1992) + (刃部磨製) 石斧を石器製作の主体とするシステムからナイフ形石器を石器製作の主体とするシステムへ、2期から3期への変化はナイフ形石器製作を主体とするシステムから細石刃を石器製作の主体とするシステムへの変化と捉えている。現在、AT層準以下、およそ3万年前以前を後期旧石器時代前半期とし、以降を後半期として3万年前で大きく区分するのが研究者間では一般的だが、石器製作システムの大きな変化はそれより前の相模野編年では第Ⅱ期の前半と後半の間、武藏野編年ではI b亜文化期とI c亜文化期の間に起こったと考える。この石器製作システムの構造的変化によって、地域性や石器形態の多様性が生じ、各地域の環境への適応力が高まり、遺跡数の増加へとつながった。前半期と後半期を分けているこの特徴を生み出す引き金となったのが石器製作システムの変化であることから、筆者は前半期と後半期の境界を1期と2期の間に置く方が合理的ではないかと考えている。そしてこのシステムの変化は不定形剥片と縦長剥片=石刃を場で使い分ける二極構造(佐藤1992)から、剥片モードと石刃モードを環境に合わせて選択する二項モード(田村1989, 1992)への変化であると捉えておく。

2期と3期の境界については武藏野編年では第Ⅱ文化期と第Ⅲ文化期の境界、諏訪間編年の段階VIIIとIXの境界に一致しているが、相模野編年では諏訪間編年のそのひとつ前の段階である段階VIIとVIIIの境界になっている(図1)。この微妙なずれは槍先型尖頭器の位置づけの問題と関わっているといえる。

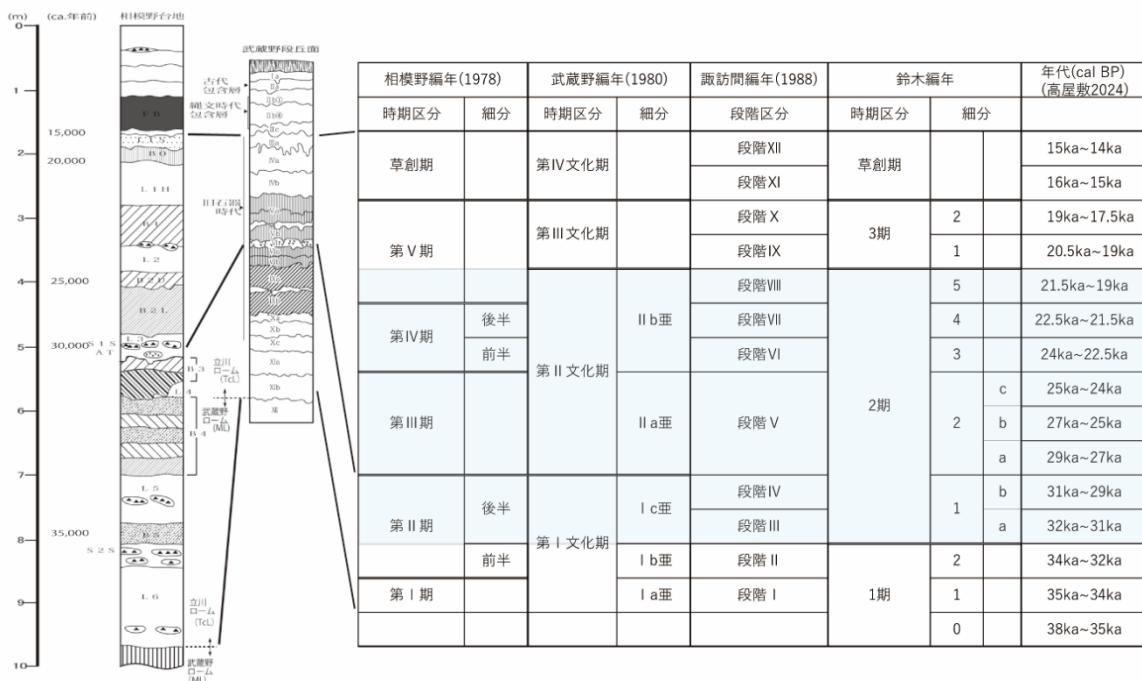


図1 武藏野台地、相模野台地の主要な編年案と放射性炭素年代値の対比

確かに2期の最後の細分期（2期-5）、諏訪間編年の段階VIIIはナイフ形石器製作が主体ではなく槍先型尖頭器製作が主体となる時期である。槍先型尖頭器が細石刃出現以降も細石刃と併存していることが近年明らかになってきており（玉川文化財研究所2019）、この境界については再考の余地があるかもしれない。しかしながら、筆者は槍先型尖頭器石器群の成立は2期の中ごろ（2期-2c）にナイフ形石器製作を主体とする石器製作システムに構造外として入ってきた有樋尖頭器石器群が次第に取り込まれて成立した可能性が高いと考えており（鈴木2025）、古本州島全域に起こった石器製作システムの変化ではないと評価しているため、2期内の細分段階（2期-5）とした。ただ、高屋敷（2024）の放射性炭素年代値の評価によれば、筆者の2期と3期の境界、すなわち諏訪間編年の段階VIIIとIXの境界のみ年代的な重複がみられており、段階差が置けるのかなお検討を要するとされている。いずれにしても今回焦点を当てるナイフ形石器製作を主体とする2期は年代的にはおよそ32,000年前ごろに始まり、20,000～1,9000年前ごろまで続き、後期旧石器時代の中でも最も長い時間幅を占める。

## 2 ナイフ形石器石器群にみられる周期的変遷

さて、筆者は石器文化研究会主催のシンポジウム『砂川：その石器群と地域性』の中で「砂川期」（2期-3）の行動論的な理解を試み、ブリードの信頼性/保守性システムのモデル（Bleed 1986）を用いて諏訪間編年の段階VからVI=「砂川期」への変化を保守性のシステムからより信頼性のシステムへの変換点と位置付けた（鈴木2000）。

ナイフ形石器素材の剥片から石刃へ転換は道具の定型化と同時に遊動時の石核の装備を可能とし、石材の効率的利用だけでなく石材をより管理的に利用することも可能にする。ビンフォードのフォレジャー/コレクターモデルに照合すれば（Binford1980）、フォレジャー型からよりコレクター型への転換である。さらに槍先型尖頭器製作の集約性を考慮して、「砂川期」以降、よりコレクター型へのベクトルでナイフ形石器石器群は展開し、尖頭器石器群が成立するという仮説を提示した（鈴木2000, 2005）。一方で、この仮説では「砂川期」の後のナイフ形石器終末期（2期-4、諏訪間編年段階VII）の様相を合理的に解釈することは難しく、筆者自身、長らくこの問題を課題と考えていた。

その後、下原・富士見町遺跡、鈴木遺跡、武藏台遺跡といった武藏野台地に位置する大規模、重層遺跡の資料を整理、考察をする機会を得て、実資料を検討する中で、鈴木編年の2期-1と2期-3、2期-2と2期-4の石器群間にナイフ形石器の素材剥片やナイフ形石器の形態をはじめとして、石器集中部の在り方や器種組成などに類似点が散見されることから、2期は、石刃を素材として比較的定型的なナイフ形石器を主体とする2期-1、2期-3（石刃モード）の石器群と不定形剥片を素材として多様な形態のナイフ形石器を主体とする2期-2、2期-4（剥片モード）の石器群が周期的変遷をしながら最終的に槍先型尖頭器石器群（2期-5）へと移行すると仮定する方が、ナイフ形石器終末期（2期-4）をより合理的に解釈できるのではないかという考えに至った（鈴木2020, 2024b）。

例え、東京都茂呂遺跡石器群はVI層段階か、砂川段階か（服部1991ほか）、埼玉県明花向遺跡C区石器群が砂川期より前か後か（西井2001）といった再検討事例にもみられるように、これまでそれぞれの時期の石器群の類似性について認識されながらも、研究の多くは両者の石器群間にどのような形態的、あるいは技術的相違が見いだされるのかという点に力点が置かれていた。そして、類似する石器群間を断絶するような様相の異なる石器群段階の中に両石器群を繋ぐように継続的に展開する様相を見出そうとしていた。筆者も同様にナイフ形石器終末期石器群の様相の中に砂川期から尖頭器石器群へと継続的に展開するベクトルを見出そうとしていたが、なかなか合理的解釈にたどり着けなかったのである。

そして今回、ナイフ形石器を主体とする石器群が保守性のシステムからより信頼性のシステムへと一方向的な展開をたどって尖頭器石器群へと変遷するのではなく、剥片モード(より保守性システム)、石刃モード(より信頼性システム)を周期的に繰り返しながら変遷するという仮説に至った背景には、2つの研究成果がある。一つは、近年目覚ましく進展した氷河期、特に最終氷期の古環境復元研究の成果でもう一つは筆者も関わったユーラシア規模での石器技術研究の成果である。筆者はこれらの研究成果と向き合う中で(鈴木2024a, Nishiaki et al. 2021)、両モードが周期的変遷をたどるという仮説にたどり着いたのである。

### 3 MIS2:最終氷期最寒冷期にみられる環境変動と石器群変遷

氷河期の古環境復元に関する研究はここ数十年の間に目覚ましく進展し、氷河期の気候変動、環境変動に関する理解は格段に深まった。ほんの半世紀ほど前までは、氷河期は数万年のスケールで氷期と間氷期を繰り返すというごく単純な図式での理解であったが、安定酸素同位体分析によってグリーンランド、南極の氷床コアや深海底コアなどから過去数十万年の気温の変動が明らかになってくると数万年の単位の氷期、間氷期の間にも数千年のスケールで寒暖を繰り返す周期的変動があることが明らかになってきた。こうした環境変動は、現在ではダンスガード・オシュガーサイクル、ハインリッヒイベントなど海洋循環や氷床の融解などに伴う全球規模での周期的環境変動として知られている(藤井2007)。また、AMS法の導入により同位体比の測定が可能になった高精度放射線炭素年代法を

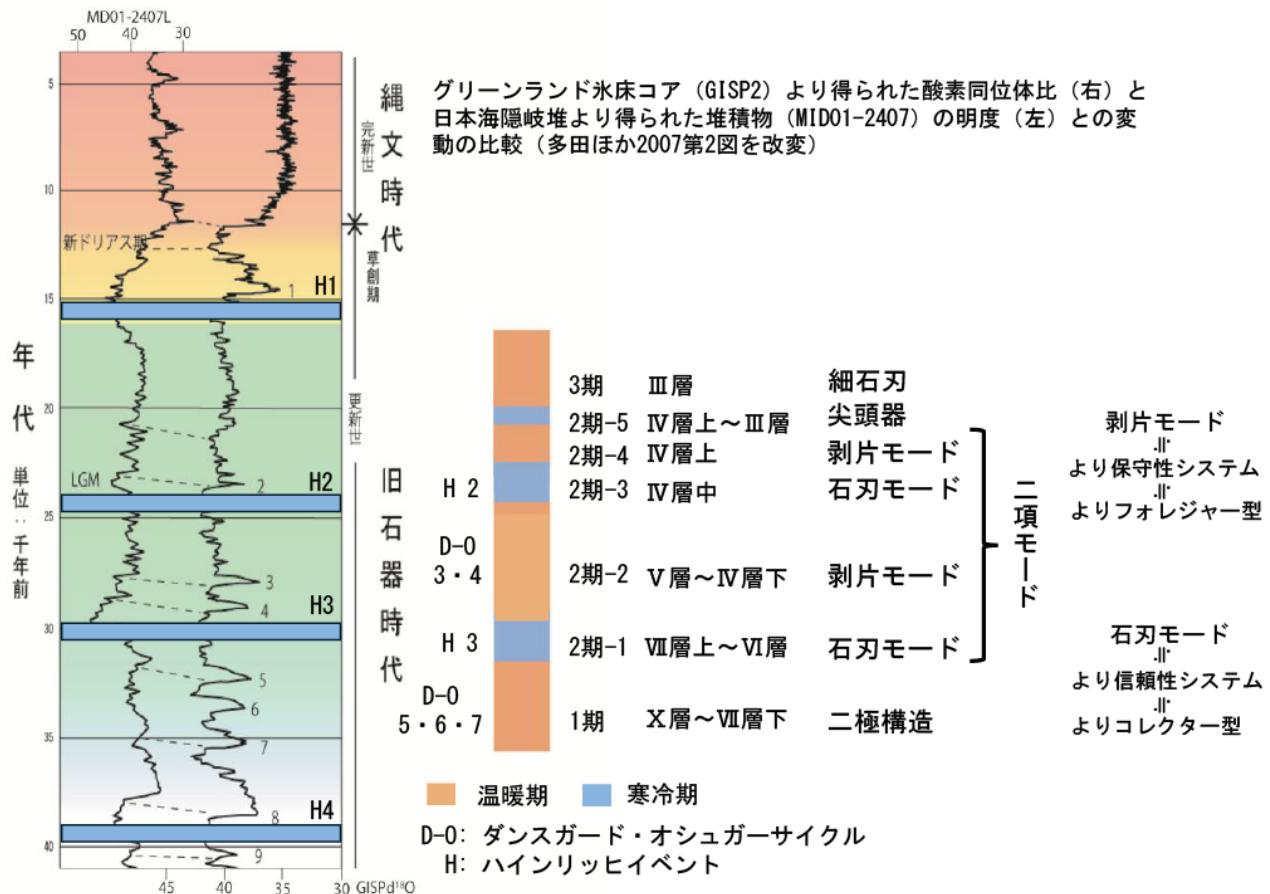


図2 南関東の石器群編年と最終氷期の環境変動との対比（模式図）

使ってこうした最終氷期の周期的環境変動と文化の関係を明らかにすることの重要性に早くから注目したのが工藤（2012）である。最近では三好（2023）も同様の視点からAMSによる較正年代値を用いて、愛鷹、南関東の石器群編年と環境変動との対比を議論している。

筆者が注目したのは古環境の変動が温暖期と寒冷期を繰り返す周期的な変動であるという点、そして、ユーラシア規模での石器技術モードの分析により、石刃技術は4万年前以降のユーラシア大陸の北方に特徴的にみられる技術モードであるということが明確になった点（Nishiaki et al. 2021）である。これまで述べてきたように、石刃モードが剥片モードに比してより信頼性のシステムを構築する要素であるとするならば、より集約性の高い狩猟活動に適した環境＝北方の環境に適応したモードであると仮定できる。そしてこうした環境変動の影響を南関東の石器群が直接的に受けた背景には、南関東の地理的位置が生物環境学的区分の境界に位置し、氷期の寒暖を繰り返す周期的変動の影響を受けて生物環境学区分を変異させるような地域であった可能性も指摘しておく。

図2に筆者が考える最終氷期最寒冷期に至る古環境イベントと石器群編年の対応関係についての仮説を模式的に表した。まだ、検証しなければならない前提や仮定が多く存在することも認識しており、環境変動にやや強引に対応させている部分もあるが、石刃モードと剥片モードが交替するように現れる南関東の石器群変遷過程を今のところ最も合理的に説明できる仮説ではないかと考えている。

### おわりに

環境と人類活動の関わりは想像するよりも複雑に違いない。地球上の様々な狩猟採集民の研究を参考すれば、環境変動が人類活動＝文化の変化をもたらす場合があるだろうが、必ずしも結びつかない場合もあるだろう。変化をもたらす場合でも、環境変動が起きてすぐに変化が起こる場合もあれば、少し時間がたってから起こる場合もあるだろう。その変化のプロセスはさまざまに違いない。

いうまでもなく今回の仮説にはまだ説明すべき論点や検証すべき課題が多くある。より多くの高精度放射性炭素年代測定値を用いて、環境変動と石器群変遷の対応関係をより一層明らかにしていくこと、南関東地域が実際最終氷期最寒冷期の環境変動によって実際どのように自然環境を変えたのかを明らかにすること、は近々の課題であろう。

また、今回は石刃モード、剥片モードに区分されるそれぞれの段階の石器群の類似性を強調したが、実際には相違点の方が多く存在する。はじめに述べたように、編年研究の到達点として、この地域の石器群の変遷過程を叙述するのであれば、その相違点をも明らかにし、説明しなければならない。

VI層段階と砂川期、V層・IV層下部段階と終末期はそれぞれ石刃モード、剥片モードのという共通のシステムをとりながら、どのような相違点があり、それはなぜなのか、そして終末期の後になぜ尖頭器石器群が成立したのか。1期から2期、2期から3期への変化はどう説明するのか。それらの解釈には環境変動への対応だけでは説明できない人類活動の多様性が存在するに違いない。本論を今後こうした課題にアプローチしていくための序章としたい。

### 引用・参考文献

- 赤澤威・小田静夫・山中一郎1980『日本の旧石器』243頁、東京、立風書房  
穴澤咲光1988「European Economic Prehistory—A New Approach / Robin Dennell(1985)」『考古学研究』34 (4) : 116-120  
工藤雄一郎2012『旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学』, 376頁、東京、新泉社  
佐藤宏之1992『日本旧石器文化の構造と進化』, 362頁、東京、柏書房  
鈴木次郎・矢島國雄1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ (1)』大塚初重・戸沢充則・佐原真編、144-

169頁、東京、有斐閣

鈴木美保2000「後期旧石器時代後半期の行動論的理解に向けて—ナイフ形石器文化の中の「砂川」—」『石器文化研究』9 : 277-289

鈴木美保2005「遊動型先史狩獵・採集民の食糧獲得—日本列島の旧石器時代」『食糧獲得社会の考古学』佐藤宏之編、東京、朝倉書店

鈴木美保2020「鈴木遺跡にみる居住形態の推移2 AT降灰以後」『鈴木遺跡 小平市埋蔵文化財発掘調査報告書』小平市教育委員会編、181-192頁、東京、小平市教育委員会

鈴木美保2024a「大地の成り立ち：氷河期の古環境（気候・地形）」『新府中市史 原始・古代通史編』府中市編、6-20頁、東京、府中市

鈴木美保2024b「最古の人々：旧石器時代」『新府中市史 原始・古代通史編』府中市編、21-53頁、東京、府中市

鈴木美保2025「野川流域における有撓尖頭器の出現と展開（1）一下原・富士見町遺跡の出土例を中心として—」『資源環境と人類』15 : 77-96

鈴木美保・小林豊・西秋良宏・田村光平2022「日本列島後期旧石器時代石器技術の時空間的位置づけ：アジアの中の日本列島」『日本旧石器学会第20回研究発表シンポジウム予稿集』日本旧石器学会編、47-48頁、東京、日本旧石器学会

諫訪間順1988「相模野台地における石器群の変遷について 層位的出土例の検討による石器群の段階的把握」『神奈川考古』24 : 1-30

諫訪間順2010『相模野台地の旧石器考古学』、295頁、東京、新泉社

高屋敷飛鳥2024「放射性炭素年代からみた相模野編年の現在」『神奈川考古』60 : 35-52

玉川文化財研究所編2019『西富岡・長竹遺跡第3次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書74、376頁、横浜、玉川文化財研究所

多田隆治・横山祐典・長島佳菜・木戸芳樹2005「4. アジアモンスターの変動とダンスガード・オシュガーサイクル」『天氣』54 : 426-429

田村隆1989「二項的モードの推移と巡回 東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相」『先史考古学研究』2 : 1-52

田村隆1992「遠い山・黒い石 武藏野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察」『先史考古学論集』2 : 1-46

デネル, R. (先史学談話会訳) 1995『経済考古学—ヨーロッパ先史時代の新しい区分—』263頁、東京、同成社

西井幸雄2001「新屋敷遺跡出土石器の再検討」『第7回石器文化研究交流会—発表要旨—』石器文化研究会編、31-38頁、沼津、第7回石器文化研究交流会しづおか実行委員会

服部隆博1991「AT降灰前後の様相—第VI層段階石器群の様相と変遷過程を中心として—」『石器文化研究』3

藤井理行2007「最終氷期における気温変動—Dansgaard-Oeshgerサイクルとハイシリッヒ・イベントー」『第四紀研究』37 : 181-188

三好元樹2023「環境変動と人類活動の対比と環境安定期における人類活動の変化」『旧石器研究』19 : 103-116

Binford, L. 1980 Willow smoke and dog's tail: hunter-gatherer settlement systems and archeological site information. *American Antiquity*, Vol. 45.4-20

Bleed, P. 1986 The optimal design of hunting weapons: maintainability and reliability. *American Antiquity*, Vol. 51.737-747

Dennell, R. 1983 *European economic prehistory: A new Approach* 217p. London, Academic Press

Nishiaki, Y., K. Tamura, M. Suzuki, M. Nakamura, S. Kato, K. Nakagawa, J. Takakura, T. Yamaoka, A. Noguchi, Y. Kondo, and Y. Kobayashi 2021 Spatiotemporal variability in lithic technology of Middle-to-Upper Paleolithic Asia: A new dataset and its statistical analyses. *Quaternary International* Vol. 596: 144-154

## 後期旧石器時代後半期前葉の編年研究－関東平野北西部を対象にして－

奈良文化財研究所

小原 傑行

### はじめに

現在の群馬県域である関東平野北西部には、榛名山や浅間山を噴出源とするテフラの堆積が顕著であり、テフラの降下年代対比は時代を問わず人類活動の解明に大きく寄与してきた。特に後期旧石器時代後半期前葉においては、浅間山の火山活動を起源とする浅間板鼻褐色軽石群（新井 1962、町田・新井 1992、2003、関口・下岡・早田 2011、以下、As-BP Group）の堆積が顕著である。筆者はこれまでの研究によって、As-BP Group は降下年代がおおよそ 29-24 ka cal BP の期間であり、立川ロームを基準とした段階編年の V 層・IV 層下部段階に相当する時期であること、本テフラ堆積層中の石器群の一部に黒色安山岩製石刃の積極的な利用が認められることなどを指摘してきた（小原 2016・2018・2023、Kohara 2025、小原・鈴木・関口 2021）。本稿では、これまでの As-BP Group 降下期である関東平野北西部における後期旧石器時代後半期前葉の石器群の筆者の編年方法を改めて整理する。

### 1 As-BP Group の年代観と堆積状況

As-BP Group は元来、噴出年代が異なる別々のテフラの便宜的総称である（早田・下岡・若井 2016）。これらは火山ガラスと斜方輝石の屈折率から、下部・中部・上部の 3 つに区分された（町田・新井 1992、2003）。As-BP Group の細別は近年では、安中市松井田町横川大林の露頭で観察された 12 層の土層をもとに、最下部を室田橙色軽石層（森山 1971、以下 MP）、より上位の As-BP Group を下位から浅間松井田テフラ 1～11（以下、As-Mt 1～Mt11）と呼称することが提唱され（早田 2016）、斜方輝石の屈折率を基にして前述した 3 区分との対比が行われている（関口・早田・下岡 2011、早田・下岡・若井 2016、下岡・早田・青木ほか 2020）。これらの対比によれば、町田・新井によって設定された As-BP Group 下部と中部及びの境界は MP 層中にある可能性が指摘されている。また、早田ら及び下岡らによれば As-BP Group 中部と上部の境は As-Mt9 と Mt10 の間におかれている可能性が高い。

As-BP Group の降下年代については、露頭や遺跡内で検出された炭化物をもとにした放射性炭素年代測定の結果が集成されている（下岡 2016、小原・鈴木・関口 2021、小原 2023）。これによると、MP の降下年代は 29-28 ka cal BP 前後であると考えられる。近年では長野県香坂山遺跡でも MP 上位から得られた炭化物を試料として放射性炭素年代測定が実施されているが、29-28 ka cal BP の期間を示し、この結果を支持する（国武・下岡・早田 2023）。また、As-BP Group 降下期間中に発生した火山性泥流である前橋泥流（新井 1967 など）の発生年代については、泥流堆積物の埋木から採取された木片を対象にした放射性炭素年代測定などから 27-26 ka cal BP、特に 26.5 ka cal BP にまとまる。そして、上限を上白井西伊熊遺跡の放射性炭素年代測定の結果からみると、As-BP Group の降下期間はおおよそ 29-24 ka cal BP に収まる。

As-BP Group の本地域における堆積状況を確認する。暗色帶上部に認められる始良 Tn 火山灰（町田・新井 1976、以下、AT）の堆積から浅間板鼻黄色軽石（新井 1962、町田・新井 2003、以下、As-YP）堆積層までの層位をみると、西進するほど浅間山から供給されるテフラの堆積層が厚くなる（図 1）。赤城山西麓・利根川上流域である中央部や、榛名山南麓である西部に関しては、As-BP Group

は2～3枚の間層を挟んで検出される。AT層準とMP層準多くの場合、間層を挟んで検出される。対照的に赤城山南麓である東部では、As-BP Groupは部分的な堆積、もしくは間層を挟まない状態で検出される。そのため、As-BP Group層中の石器群の変遷を検討する場合、まず中央部及び西部の石器群における石器製作技術と石材の傾向を層位別に分析したうえで、東部の石器群を分析する方法が妥当であると考えた。

## 2 As-BP Group 降下期の石器群の特徴

### (1) 中央部・西部の石器群(図2)

AT～MP層で検出されるのは、見立溜井遺跡第III文化層と多胡蛇黒遺跡第2文化層である。これらの遺跡では、和田峠産ないし蓼科産などの信州産黒曜石を用いた石刃製作技術と、黒色頁岩と黒色安山岩の大形剥片を素材とした剥片剥離技術が認められる。石刃製作技術に関しては、榛名山南麓においてAT層直下から出土している和田山天神前遺跡の黒曜石製石刃石器群における尖頭形石器や搔器と技術形態的特徴が類似する点から、AT降下前から継続するものであると判断される。

MP～As-BP Group(As-Mt 1～11)層には多胡蛇黒遺跡第1文化層、白岩民部遺跡、中郷遺跡、八崎日影山遺跡・分郷八崎上浅ヶ原遺跡が該当する。これらの遺跡ではいずれも、石刃及びそれに関連する石器が特徴的に認められる。特に、石刃製作の過程で生じた縦長剥片のうち、幅広かつ厚手のものを素材として搔器を製作する点が特徴的である。また、黒色安山岩と黒色頁岩においても石刃製作が顕著となる。そのため、石刃製作において製作技術的には前時期との連続的系譜を持ちながらも、石器石材には異なる傾向が生じていたと理解される。

As-Mt 1～11の間層中から検出されている石器群には上白井西伊熊遺跡第2文化層、北町遺跡第1文化層が挙げられる。黒色安山岩製の瀬戸内技法関連資料に特徴づけられるなど、本時期には大幅な変化がみられる。また、上白井西伊熊遺跡第2文化層では、瀬戸内技法関連資料と高原山産黒曜石製の涙滴型尖頭形石器や、信州産黒曜石製の男女倉型尖頭器が共伴する。

As-BP Group層直上の石器群には、房谷戸遺跡第II文化層の一部、吹屋犬子塚遺跡第2文化層、見立溜井遺跡第II文化層が該当する。縦長剥片を指向する剥片剥離技術が顕著に認められる点が特徴である。また、これらの石器群には男女倉型尖頭器も共伴するため、その共時性は高い。また、石器石材には黒色安山岩・黒色頁岩に加えて信州産黒曜石の使用も認められる。

### (2) 東部の石器群(図3)

AT～MP層の石器群に該当するのは書上遺跡第3文化層II区第4～7ブロックや大上遺跡第2文化層などである。石刃や縦長剥片を指向した石器製作が卓越した特徴を有する。これらの石器群では、黒曜石と黒色頁岩では石刃生産をもとにした尖頭形石器が製作され、遺跡内外に搬出入されるなどの管理的な運用形態が認められる。これに対し、黒色安山岩では石刃状の縦長剥片を生産するものの、尖頭形石器製作の素材とされていないのに加えて、黒色安山岩は原礫を遺跡内に持ち込んで残核まで

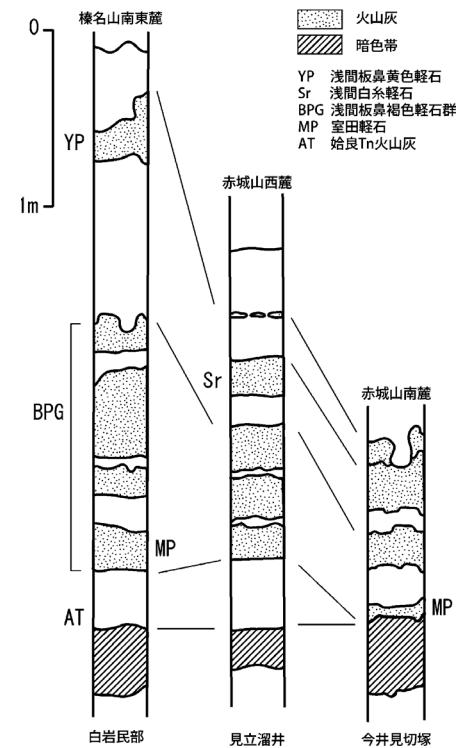


図1 関東平野北西部のテフラ  
堆積状況

消費を行うなど、消費的な運用形態にあるなど対照的な特徴を示す。

MP～As-BP Group (As-Mt 1～11) 層の石器群では、石刃石器群が前時期から引き続き卓越するなかで、黒曜石ないし黒色安山岩製の石刃製作技術で生じた、縦長剥片を素材とした搔器が見受けられた。これらの特徴を有する石器群は波志江西宿遺跡 II 期第 1 ブロック、書上遺跡第 3 文化層 II 区第 1～3・8 ブロック、江木下大日遺跡、書上遺跡第 2 文化層である。これらの石器群では黒色頁岩製石刃が利用されるなど前時期からの傾向が継続する反面、黒色安山岩の分割礫から石刃が積極的に生産される。同時に、共伴する黒曜石製尖頭形石器が前時期と比較して小形化するだけでなく、消費される黒曜石の原石のサイズがそもそも小形である。これらのことから、本期は持ち込まれる黒曜石のサイズが縮小する半面、石刃生産に関する黒色安山岩の消費が増大する点が特徴である。

As-Mt 1～11 層の石器群について、東部では切出形石器と角錐状石器が主に出土する。これらの大型品が伴う石器群には前道下遺跡 C 地点や峯山遺跡第 1 文化層が該当する。その一方、今井見切塚遺跡第 III 文化層 1a 地点などでは、更に石刃製作技術による所産のものが共伴する。また、花園遺跡 A 地点第 III 文化層、荒砥北三木堂 II 遺跡第 II 文化層、天ヶ堤遺跡第 2 文化層、萱野 II 遺跡第 2 文化層などでは、As-BP Group 層中から直上付近にかけて石器群が出土している。これらの石器群は縦長剥片を素材とした小形の尖頭形石器で構成される。以上 3 種の石器群では、石器製作の素材となる原礫が、石材の種類を問わず小形化する傾向が共通して見受けられる。また、前時期では使用が低調であったチャートも併用される。

As-BP Group 層中～直上では石神遺跡第 2 文化層などが該当する。信州産黒曜石を用いた尖頭形石器が出土しているが、その形態から砂川期のものと判断される。

#### まとめ特に MP～As-BP Group (As-Mt 1～11) 層中の石器群について—

前項で抽出された石器群のうち、MP～As-BP Group (As-Mt 1～11) までの石器群に注目すると、黒色安山岩と黒色頁岩を用いた石刃の生産が顕著となることが認められた。共伴する信州産黒曜石製の尖頭形石器が前時期と比較して小形化する点や、そもそも消費される黒曜石の原石のサイズが小形である点も特徴的である。尖頭形石器は大形と中・小形という二項的な様相を呈しており、前段階からの傾向がやや趣を変えながらも継続していると考えられる。これらの石器群はその特徴や MP の降下年代から、関東平野南部の V 層・IV 層下部段階の細別編年のうち、V 層下部段階に相当すると考えられる。関東平野南部の立川ローム層中では、本時期の石器群は前後する時期の石器群と層位的に重複しながら出土するが、関東平野北西部では As-BP Group の間層からの層位的な出土例をもって検証可能であるといえる。

本時期は黒色安山岩を用いた石刃生産が他の時期と比べても顕著である。しかし、波志江西宿遺跡 II 期第 1 ブロックでは、素材となる分割礫の接合資料が、元の状態にほぼ完形で復原されていた。このことから、黒色安山岩を用いた石刃生産の過程では、破損するリスクが顕著であったと推定される。加えて、出土した尖頭形石器には黒色安山岩製の石刃が素材として用いられていないことからも、黒色安山岩の分割礫を用いた石刃生産は効率性が芳しくなかったと理解される。

黒色安山岩の石刃生産の利用は、最終氷期最盛期（以下、LGM）の狩猟採集民の生業戦略・居住形態の変化の結果として理解することが可能である。MP が降下する 29-28 ka cal BP は LGM 直前の短期間の温暖化 (IS 3・4) の時期と一致する。MP 降下後の急速な温暖化が一時的に進行する時期、関東平野南部での生業活動の集中から起きる移動領域の縮小に伴って、石刃生産に向く黒色頁岩礫を利根川上流域で採取するよりも、生業領域内で比較的容易に獲得可能な黒色安山岩を代替石材として使

用していた可能性が考えられることを指摘した（小原 2023）。また、これが一時的な利用として留まつたのも、As-BP Group 降下後に石材の利用可能性に対する石器製作技術の対応が行われたためと推定される。

近年、関東平野北西部に隣接する長野県香坂山遺跡においても、MP と As-BP Group (As-Mt 1 ~ 11) の間層中から黒色安山岩製の石刃や信州産黒曜石製の尖頭形石器が検出されている（国武・下岡・早田 2023）。香坂山遺跡は八風山産安山岩であるため、本地域の黒色安山岩の石刃利用とは背景が異なる。しかし、八風山という中央高地と関東平野の経路上での石材原産地開発が 29-28 ka cal BP という短期間において起きたということは、当該期に狩猟採集民の移動領域の再編や生業形態に大きな変化が起きたことを示唆するものであると考えられる。

#### 引用・参考文献（遺跡の報告については割愛した）

- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』,10: 1-79
- 新井房夫 1967 「前橋泥流の噴出年代と岩宿 I 文化期」『地球科学』,70: 46
- 国武貞克・下岡順直・早田勉 2023 「長野県香坂山遺跡における始良 Tn 火山灰層上位の石刃石器群」『日本考古学』,57: 103-114
- 小原俊行 2016 「関東平野北西部における浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」『ナイフ形石器文化の発達期と変革期－浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群－ 予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会編、28-41 頁、みどり、岩宿博物館
- 小原俊行 2018 「関東平野北西部における As-BP Group 降灰期石器群の編年試論」『古代』,143: 87-115 頁
- 小原俊行 2020 「後期旧石器時代の石器製作技術の変化と古環境変遷の対応の解明に向けて－関東平野北西部における古環境分析を中心に－」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』,38: 1-20 頁
- 小原俊行 2023 『旧石器狩猟採集民の環境適応史』,330 頁、東京、同成社
- 小原俊行・鈴木茂・関口博幸 2021 「後期旧石器時代の古環境変遷とテフラ年代研究の現状－群馬県萩原遺跡の分析結果を中心に－」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』,39: 1-20 頁
- 下岡順直 2016 「浅間板鼻褐色軽石群と前橋泥流の年代観－放射性炭素年代を中心に－」『ナイフ形石器文化の発達期と変革期－浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群－』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会編、20-26 頁、みどり、岩宿博物館
- 下岡順直・早田勉・青木かおり・若井明彦 2020 「浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group) の岩石記載と放射性炭素年代」『地球環境研究』,22: 57-65
- 関口博幸・早田勉・下岡順直 2011 「群馬の旧石器編年そのための基礎的研究－関東地方北西部における石器群の出土層位、テフラ層序、数値年代の整理と検討－」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』,29: 1-20 頁
- 町田洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰－始良 Tn 火山灰の発見とその意義－」『科学』,46: 339-347 頁
- 町田洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス－日本列島とその周辺』,276 頁、東京、東京大学出版会
- 町田洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス－日本列島とその周辺』,336 頁、東京、東京大学出版会
- 森山昭雄 1971 「榛名火山東・南麓の地形－とくに軽石流の地形について－」『愛知教育大学地理学会地理学報告』,36・37: 105-116
- Kohara, T. 2025 Study of the Relationship between Large-scale Disasters and Archaeological Sites' Location: To What Extent Should We Consider the Large-Scale Paleolithic Disasters Have Affected the Occupation of Hunter-Gatherers?, *Program and Abstracts of the 12th Meeting of the Asian Paleolithic Association*, edited by K. Sano, p.58, Sendai, Japanese Palaeolithic Research Association

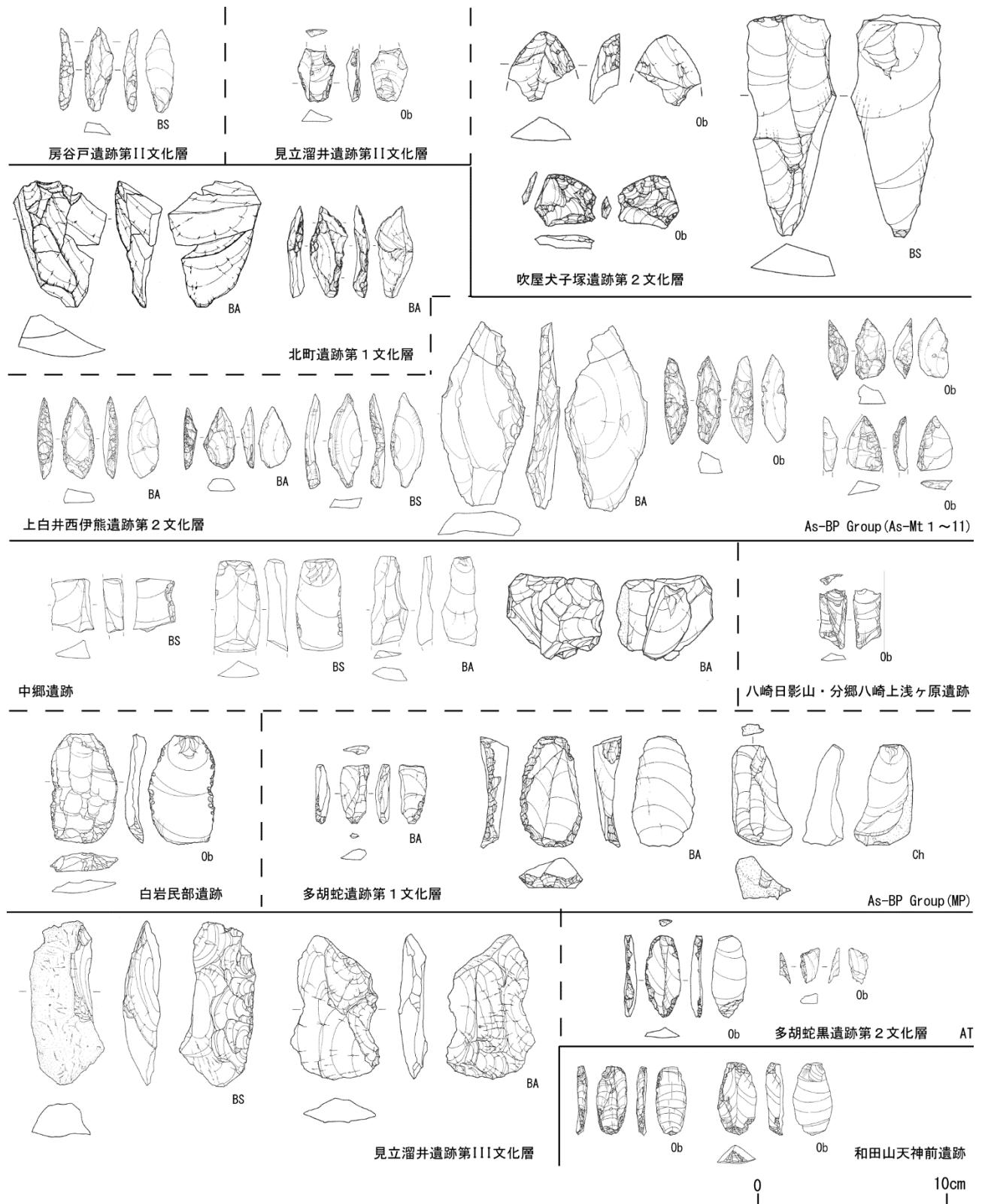


図2 中央部・西部の石器群

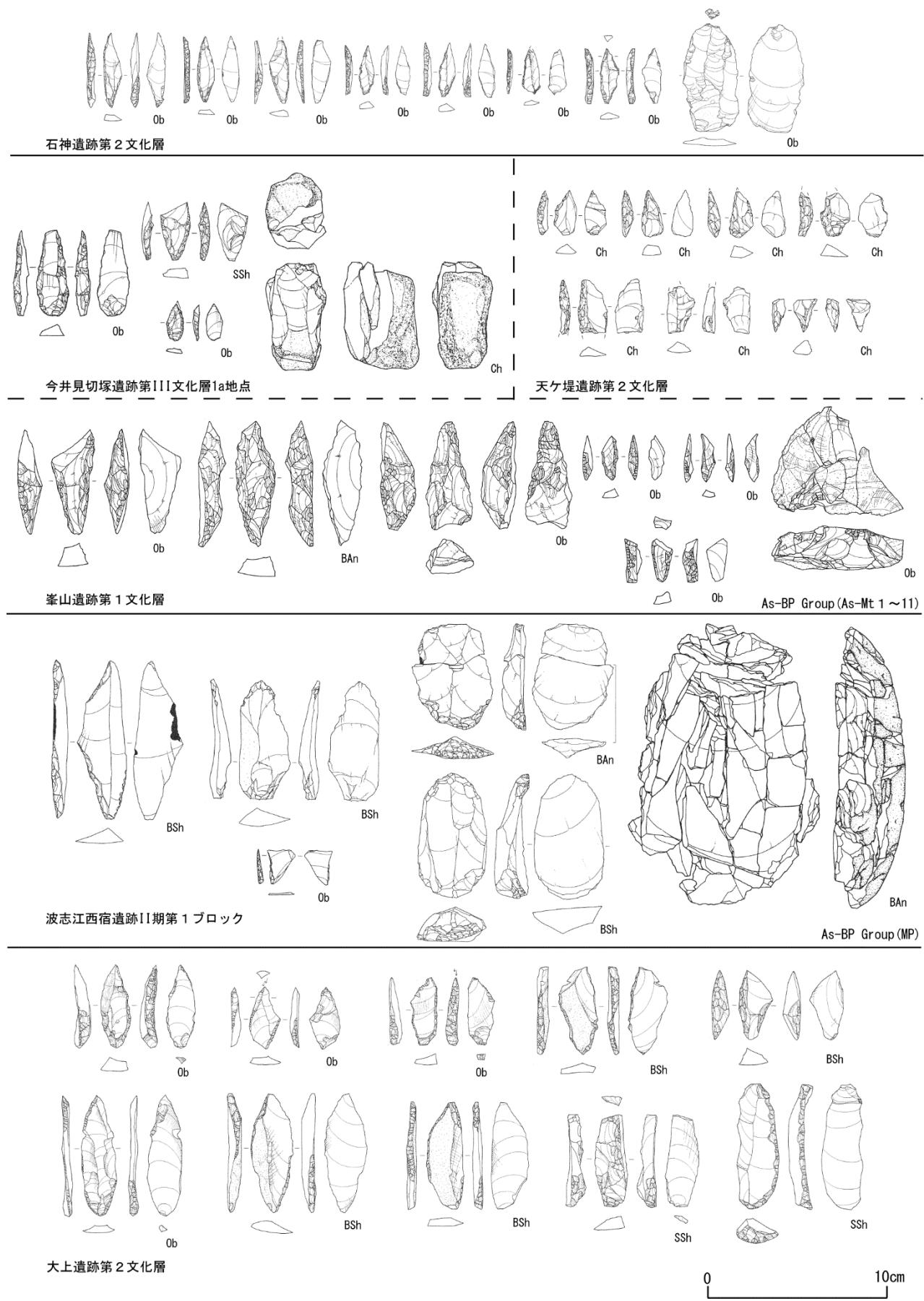


図3 東部の石器群

## 相模野台地における最終氷期最寒冷期前後の諸活動

公益財団法人かながわ考古学財団

井関 文明、脇 幸生

### はじめに

日本の旧石器時代研究において遺物集中は、「石器製作の痕跡を示す」「まとまりから主として構成されている」といわれる（佐藤宏 2019）。一方、石器集中は、「生活道具である石器をつくる過程で生じた破片の散らばっている箇所」（森先 2021）とされている。本稿における遺物集中は、石器を中心とする遺物のブロックとし、石器集中は、石器のみで構成されるブロックとする。

近年、相模野台地において最終氷期最寒冷期以前（後期旧石器時代前半期）の石器を中心とする遺物集中を「集落」として捉える研究が進展している（鈴木次 2023・2024）。平面分布の視覚的なあり方を元に識別される遺物集中を石器の器種や石材の母岩個体等の関係において集落構成や居住様式を思考することで、集団の規模や性格が推定され、諸活動の構造的な側面が明らかにされている。

本稿では、これらの集中における諸活動の最終氷期最寒冷期以前をそれ以後まで射程に入れて機能的な側面を中心として明らかにすることを目的とする。

### 1 諸活動の類型

旧石器時代は、狩猟・採集を基盤とする生活を中心として成立する社会であると一般的に考えられているが、狩猟・採集に関係する諸活動は、作業（ワーキングあるいはワーク）の準備・完了・中断の大きく異なる3つ段階（局面）に分けられるのではないかと仮定される。これらの諸活動の段階を作業準備地点、作業完了地点、作業中断地点と大きく3つに分類して諸活動の3類型とし、それを相模野台地の当該期の遺物や石器の集中の石器製作－使用の痕跡において見出すことでそれぞれの場の機能を推定し、各地点の関係を論じることで当該社会のあり方の一端を明らかにしたい。

以下では、B5層～B4層上部（X・IX層段階）、B3層下部～L3層（VII・VI層段階）に位置付けている石器群の遺物や石器の集中において、どの類型の諸活動が見出されるかを検討する。

### 2 B5層～B4層上部（X・IX層段階）における諸活動

吉岡遺跡群D区B5層（以下、吉岡D区B5） 報告された（白石他 1996）6箇所の石器集中が「環状を呈する」ことから、「環状ブロック群を形成する石器群」とされる（鈴木次 2023）。

狩猟具（ナイフ状石器か台形様石器）が各石器集中にみられ、そのうちの1石器集中（1ブロック）に狩猟具（ナイフ状石器・台形様石器）と加工具（削器・彫器）等の製作痕跡が確認されている。

以上の内容から本石器群は、「1集団によって遺された石器製作ブロック1箇所の小規模な集落」と解釈された（鈴木次 2023）が、狩猟具・加工具とともに石器製作の痕跡がみられる1石器集中に狩猟・採集に関係する作業の開始直前の状況がうかがえることから、作業準備地点と捉えることが可能ではないかと考えられる。

大和配水池内遺跡第XIV文化層（以下、大和配水池L5） 吉岡D区B5と同様、報告された（麻生 2008）5箇所の石器集中が「環状に近い配置」であることから「環状ブロック群を形成する石器群」とされる（鈴木次 2023）。

狩猟具（ナイフ形石器）と石斧が各石器集中にみられ、「剥片剥離を伴う石器製作」や「石斧の製作（刃部再生等を除く）を行っていない」ことが確認されている。5石器集中は、凝灰岩が多いa・b・

e ブロックと黒曜石を主体として加工工具（スクレイパー・彫器・楔形石器）・石核・叩石を伴う c・d ブロックの 2 つの構成が異なるまとまり（ユニット）に区分されている。

以上の内容から本石器群は、「礫群をもつ」「短期間滞在のワーキングキャンプ」ではなく、「引地川源流部という立地条件から」、「ある程度長期滞在」の可能性がある「石器製作を行って道具装備の補充を行う前」の「2 集団による集合集落」と解釈された（鈴木次 2023）が、5 石器集中で石器製作の痕跡がみとめられないことから、作業中断地点と考えられる。

**栗原中丸遺跡第IX文化層**（以下、栗原中丸 L 5） 報告された（鈴木他 1984）1 箇所の石器集中が「1 箇所のブロックで構成される石器群」とされ、「局部磨製石斧の刃部断片（刃部再生剥片）1、削器1、剥片6、台石1、磨石1の合計10点」から「出土石器は全て他の遺跡から持ち込まれ」、「削器は剥片素材の石核の可能性も」あることが指摘されている（鈴木 2023）。

以上の内容から本石器群は、「1 ユニットとして捉えられる」と解釈された（鈴木 2023）。「刃部再生」からわずかに石器製作の痕跡がみられるが、台形様石器かナイフ形石器等の狩猟具もしくは石斧本体（「完成品」）・「定型」加工工具がみられないことから、狩猟・採集に関係する何らかの道具類が遺跡から「持ち去られた」状況がうかがえ、作業完了地点と捉えることが可能ではないかと考えられる。

**吉岡遺跡群 D 区 B 4 層下部**（以下、吉岡 D 区 B 4 下）・**鷺ヶ峰遺跡第 II 文化層**（以下、鷺ヶ峰 B 4 下） それぞれ報告された（白石他 1996・吉田 1995、服部 1999）4 箇所（吉岡 D 区 B 4 下）の石器集中と 3 箇所（鷺ヶ峰 B 4 下）の遺物集中が接合資料を含む母岩個体の共有関係から「ともに 1 ユニットと捉えられる」「3・4 箇所のブロックで構成される石器群」とされる（鈴木 2023）。吉岡 D 区 B 4 下では狩猟具（台形様石器）と石斧、鷺ヶ峰 B 4 下では台形様石器、ナイフ形石器と器種が異なる狩猟具がともに集中を違えてあることと小規模な石器製作の痕跡が少ない接合資料からみられる。

以上の内容から、これらの石器群は、「小規模な石器製作を行って装備の補充」する「1 集団が短期間居住した小規模な集落」と解釈された（鈴木次 2023）が、吉岡 D 区 B 5 と同様に、石器製作の痕跡から、作業準備地点と考えられる。

**津久井城跡馬込地区第 6 文化層 A 区**（以下、馬込 6 A 区 B 4 中） 報告された（畠中・砂田 2010）7 箇所の「散漫な礫群ともいえる礫集中」を含む遺物集中が「環状を呈する」ことから、「環状ブロック群」とされる（鈴木次 2023）。石斧・剥片石器の製作に関連すると想定される凝灰岩類・ホルンフェルス等の石材が各遺物集中のいずれかにみられ、2 遺物集中（D・E ブロック）を除き狩猟具（ナイフ形石器か台形様石器）と石斧が確認されている。7 遺物集中は、A～G 遺物集中が母岩個体の共有・接合関係から同時性に問題がない（母岩個体の Ho01 が A・B・F・C、HFT07 が B～G、SSh01 が A・C～G 等のブロックにみられる等）とされる一方で、北西寄りの A・B・F と南東寄りの C～E・G の遺物集中が黒曜石（神津島産が A・B 中心、柏崎産が B・F ブロックにみられる等）・水晶（C・G ブロックにみられる）等の分布と母岩個体の接合関係の多寡から 2 ユニットに区分されている。

以上の内容から本石器群は、狩猟具と石斧が「居住開始時に持ち込まれた」が、各遺物集中で石器製作の痕跡がみられることから、それらの石器が「移動時に持ち去られた」とともに、「礫群ともいえる礫集中」も各遺物集中にみられることから、「石器製作拠点としての性格をもつ」、「比較的長期間にわたって居住した遺跡と想定され」、大和配水池 L 5 と同様、「2 集団による集合集落」と解釈された（鈴木次 2023）。吉岡 D 区 B 5 と同様に、石器製作の痕跡から、作業準備地点とみられるが、狩猟具と石斧が「居住開始時に持ち込まれた」ともみられることから、作業の終了地点とも考えられ、作業終了・準備双方が介在する地点と考えられる。

**吉岡遺跡群A～C・E区B4層上部**（以下、吉岡A～C・E区B4上） それぞれ報告された（砂田他 1996、白石他 1996）2箇所の石器集中（吉岡A・E区B4上）と1箇所の石器集中（吉岡B・C区B4上）が接合資料を含む母岩個体の共有関係から、各石器集中が「いずれも1ユニットと捉えられ」「1・2箇所のブロックで構成される石器群（1箇所の石器集中は「1箇所のブロックで構成される石器群」）とされる（鈴木 2023）。吉岡A・E区B4上では狩猟具（ナイフ形石器）と石器製作、吉岡B・C区B4上では加工具（彫器）、吉岡C区B4上では石斧・剥片がみられる。なお「石器点数の少ない」吉岡B・C・E区B4上と異なる吉岡A区B4上では「ガラス質黒色安山岩2個体（安1・安2）で集中的に石器製作を行っている（石器点数189点）ことや「叩石・台石等の石器加工具」があることに加えて「凝灰岩・黒曜石・頁岩」がみられる（鈴木 2023）。

以上の内容から、これらの石器群は、吉岡A区B4上が「石器製作以外の活動も行っていた」、「短期間の小規模な集落（ベースキャンプ）、吉岡E区B4上が「小規模な石器製作を行った」、「ごく短期間居住した小規模な集落（ベースキャンプ）、あるいは一時的な野営地」、吉岡B・C区B4上が「石器製作作業を行っていない」定型（彫器）・不定型（一部の剥片）の「加工具を駆使したワークキャンプ」等と解釈された（鈴木 2023）。狩猟具と石器製作の痕跡がみられる吉岡A・E区B4上は、作業準備地点、それらのいずれもがみられない吉岡B・C区B4上は、作業完了地点と考えられる。

### 3 B3層下部～L3層（VII・VI層段階）における諸活動

**打木原遺跡Va層**（以下、打木原B3下） 報告された（佐藤明 2002）8箇所の遺物集中が「ともに直線状」となる南（3集中）・北（5集中）で2集中群を形成する「多数（5箇所以上）のブロックで構成される石器群」とされる（鈴木 2024）。南北両集中群は、接合関係を含む各集中間と2集中群を跨いだ母岩個体の共有関係から、「南北の両ブロック群がそれぞれ1ユニットとして捉えられ」狩猟具（ナイフ形石器）を伴う1集中と全集中で唯一石核を伴わない1集中がみとめられる比較的石器が少ない南集中群と定型加工具（搔器）を伴う1集中と石器加工具（台石）を伴う1集中がみとめられる比較的石器が多い北集中群にユニットが分かれる。また南集中群から北集中群への「時間的推移が推測され、その間に移動を行って違う地点で活動・居住したと考えられ」ている。各集中では「硬質細粒凝灰岩を中心とする石材」による「集中的な」「剥片生産」の痕跡が確認されている（鈴木 2024）。

以上の内容から、本石器群は、「線状のユニットが近接して複数遺され」た、「石器製作作業（剥片生産中心）の拠点的な遺跡」の「1集団が回帰的移動により2回にわたって居住した集落」で、比較的石器が多い北集中群は、石器製作作業に特化したユニットと解釈された（鈴木 2024）。両ユニットは、移動前後のユニット間における「時間的推移」の関係から、石器製作の痕跡が確認されるものの狩猟具がみられる南ユニットが作業完了地点で、加工具と石器製作の痕跡がみられる北ユニットが作業準備もしくは中断地点と考えられる。

**地蔵坂遺跡第VII文化層**（以下、地蔵坂B3下） 報告された（矢島他 1974・矢島 1996）2箇所の「ともに散在する礫を伴」う遺物集中が、「1・2箇所のブロックで構成される」、「石器製作を行っていない石器群」とされる（鈴木 2024）。炭化物集中を伴う5点の石器で構成される1号集中（ブロック）と狩猟具（茂呂系ナイフ形石器）を伴う6点の石器で構成される2号集中が、ガラス質玄武岩の母岩個体の共有関係から、「1ユニットと捉えられる可能性もある」が「30mも離れて2箇所同時に遺されたとするよりも、1集団が2度にわたって同様の活動を行って遺した2ユニットと捉える方が妥当と考えられ」ている。

以上の内容から、本石器群は、両集中が「30m余りも隔てて」いることから「同時に存在した」と

するより「回帰的移動によって2度にわたって」「同一集団」によって遺された「2ユニット」と解釈された（鈴木 2024）。両集中形成の時間的推移が示されなかつたが、その関係性の観点を導入すると、欠損がみられない狩猟具を伴う2号集中は、後出的に位置付けられることから、作業準備もしくは中断地点で、1号集中は、前出的に位置付けられることから、作業完了地点と考えられる。

**寺尾遺跡第VI文化層**（以下、寺尾B3上） 報告された（鈴木 1980）5箇所（1箇所に小礫8点を伴う）の遺物集中が「多数（5箇所以上）のブロックで構成される石器群」とされる（鈴木 2024）。第1集中（ブロック）と第2～5集中は、前者と35mの距離を隔てられた後者が直線状に並び分布が異なる。石器製作の痕跡がみとめにくく狩猟具（ナイフ形石器）と定型加工工具（彫器）を含むガラス質黒色安産岩・ホルンフェルス製の石器10点で構成される第1集中とそれぞれの集中に「剥片生産とナイフ形石器を中心とした石器製作地点が推測され」かつ多数の狩猟具（茂呂系ナイフ形石器中心）と石器加工工具（叩石）を伴って信州系を中心として少数の柏崎産黒曜石・硬質細粒凝灰岩・チャートの母岩個体の接合・共有関係がみとめられる石器1,888点で構成される第2～5集中は、「それぞれ1ユニットとして捉えられ」ている。

以上の内容から、本石器群は、第1集中と第2～5集中が「同一集団によって遺されたものではなく、前者は、「短期間滞在したワークキャンプ地」で、後者は、「礫群等の遺構は遺されておらず、狩猟具（ナイフ形石器）は多いものの加工工具は少なく、居住期間はそれほど長くなかった」「相互に関連するものの独立」した各集中が「同時に存在した」「4人（世帯）の集団による拠点的な石器製作地点の集落」と解釈された（鈴木 2024）。第1集中は、石器製作の痕跡がみとめにくく、かつ先端が破損している全体の三分の二を占める狩猟具（ナイフ形石器）を伴うことから、第2～5集中と別集団であるとしても作業完了地点、第2～5集中は、それぞれで石器製作の痕跡が著しくかつ狩猟具を多数伴うことから、作業準備もしくは中断地点と考えられる。

**橋本遺跡第V文化層**（以下、橋本L3） 報告書（金山他 1984）から区分された8箇所（集中1～5・A～Cの2箇所に炭化物集中を伴う）の遺物集中が、「直線状に近接して並」ぶ東（A・4・5）・西（1～3）とその間（B・C）で3集中群を形成する「多数（5箇所以上）のブロックで構成される石器群」とされる（鈴木 2024）。全遺物集中の「分布域の中央から北側」には「炉址の可能性もある土坑3基と炭化物集中4箇所」が検出され、石器が多い「東列」集中群の各集中に信州系黒曜石の石器製作と狩猟具（ナイフ形石器）、石器が少ない「西列」集中群の各集中に柏崎産を中心とする天城・箱根系黒曜石の石器製作がみとめられ、その間の石器が少ない集中群には石器製作の痕跡がみとめられないものの狩猟具（ナイフ形石器）が確認されている。ともに線状ユニットとなる東西両集中群は、石器製作の痕跡等からそれが1ユニット、西列集中群の狩猟具（ナイフ形石器）がみられない集中5は、石器製作地点として用意された場、炭化物集中が重複・近接する北側の集中1・Aは、居住の場、それ以外の集中は、石器製作に関連する場と捉えられた。なお遺構外の集中A・B間に国府系ナイフ形石器の破損品、集中3・C間の南に刃部再生削器が単独で出土していることが特筆される（金山他 1984）。

以上の内容から、本石器群は、東西両列集中群（ユニット）が「配置構成が共通することから同一集団の回帰的移動により遺された」「小規模な集落」で、各集中に狩猟具を伴う東列集中群が石器製作地点を伴う西列ユニットへと時間的に推移する等と解釈された（鈴木 2024）。東西両列ユニットは、移動前後のユニット間における「時間的推移」の関係から狩猟具を伴う東列ユニットが作業完了地点で、石器製作地点を伴う西列ユニットと東西間の集中群は、作業準備もしくは中断地点と考えられる。

#### 4 まとめ

B 5層～B 4層上部では、同じ環状集中（ブロック）群とされる集中群でも狩猟・採集に関係する諸活動の作業準備（吉岡D区B 5・馬込6A区B 4中）・完了（馬込6A区B 4中）・中断（大和配水池L 5）と集中する場所（遺跡）によって異なるあるいは同じ地点でも異なる段階が区別される。このような準備・完了・中断という3つの段階を遺物集中において識別することは、集中=イエ、集中群=ムラかは別としても「短時間の（石器）製作作業」でも「小規模なブロックが形成される」（御堂島 2011）、作業空間外縁にゴミを廃棄した結果が環状集中群である（田村 2012）、「同じ場所が異なる目的で何回も利用されると、見かけ上の大遺跡が形成される」（長崎 2015）等の問題解決に向けた試みになったと考えられる。馬込6A区B 4中に準備と完了の双方の作業がみとめられたことは、VII層段階の特徴とされる「環状ブロック群を起点としたベースキャンプとワーキングキャンプの二重性」（伊藤 2025）の萌芽をみることも可能と思われる。狩猟具・石斧が各集中に伴う大和配水池L 5に「ある程度長期滞在」（鈴木次 2023）が想定されることから作業中断地点とみなされたが、中断理由は、「祭りを行ない、分配する」（白石 2002）等のある種の儀礼的な活動が背景にあった可能性が考えられる。当該期で3・4箇所及び1・2箇所の集中で1ユニットとされる集中群（吉岡D区B 4下・鷺ヶ峰B 4下・吉岡A・E区B 4上）で作業準備、1箇所の単独とされる栗原中丸L 5等の集中で作業完了とそれぞれの場所等によって作業の段階が異なるあり方も確認された。作業準備地点とされるユニットでは各集中に狩猟具、作業完了地点とされる集中では加工工具か石斧（刃部）が伴う。石斧が「解体」（白石 2002）用か「海洋渡航にも関連する」「伐採・加工」（山田 2008）用か等の問題は別としても、狩猟・採集活動と関係する諸活動の作業場（ワーキングキャンプもしくはロケーションか）は、ベースキャンプ（活動拠点）とは別の場所に設営されていたことが考えられた（羽生 1990）。

B 3層下部～L 3層では、地蔵坂B 3下を除いて線（列）状ユニットが含まれる2・3のユニットで狩猟・採集に関係する作業完了（打木原B 3下南ユニット・地蔵坂B 3下1号集中・寺尾B 3上第1集中・橋本L 3東列ユニット）と作業準備もしくは中断（打木原B 3下北ユニット・地蔵坂B 3下2号集中・寺尾B 3上第2～5集中・橋本L 3西列ユニット・東西間の集中群）とが一つの石器群で分布を違えて区分される複数化するあり方が見出された。ユニット単位でかつ異なる作業の段階が各石器群で複数化されることは、B 5層～B 4層上部の石器群にみられなかった狩猟・採集に関係する諸作業の構造的な変化ともいえるが、その背景にはやはり「ベースキャンプとワーキングキャンプ」が重なる（伊藤 2025）活動領域に適応する集団の機能的な変化に求められると考えられる。狩猟具の多数の茂呂系を中心とした信州系黒曜石製ナイフ形石器を伴う寺尾B 3上第2～5集中は、ナイフ形石器の過剰生産の保管場（伊藤 2025）としても位置付けられるであろう。橋本L 3では遺物集中外の国府系ナイフ形石器の分布と近接する全遺物集中域の中央に位置する「炉址の可能性のある土坑」（鈴木次 2024）を中心に石器群を俯瞰すると、近接するB集中を除いた全集中が外縁部のゴミ廃棄場（田村 2012）とも想定される。以上、本段階の石器群の集中で見出された諸作業は、後続するB 2層（V・IV下層段階）及びL 2層～B 1層（砂川段階）の「基本的に遺跡の形成単位」であるとされる「ブロック」（鈴木美 2005）にもみとめられるが、B 2層では「大規模の集落」（鈴木次 2024）と目される柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IX文化層やS F C遺跡第文化層の集中からそれを読み解いていきたい。

最後に、本稿掲載の機会をいただいた伊藤 健氏と編集を担当して下さった高屋敷飛鳥氏、長澤有史氏に御礼申し上げます。また、本稿の執筆中にご逝去されました鈴木次郎氏には心よりご冥福をお祈りいたします。

## 引用・参考文献

- 麻生順司 2008「第II章第14節 第XIV文化層」『神奈川県大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡発掘調査報告書I』大和市No.199 遺跡発掘調査団編、296-321頁、神奈川、大和市No.199 遺跡発掘調査団
- 伊藤 健 2025『後期旧石器時代の新たな遺跡構造論 東京の遺跡を中心に』、370頁、東京都、新泉社
- 金山喜昭他 1984『橋本遺跡 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会編、346頁、神奈川、相模原市橋本遺跡調査会
- 佐藤明生 2002「IV 旧石器時代の遺構と遺物（2）－始良Tn 火山灰降灰以前の石器ブロックの調査－」『打木原遺跡』横須賀市教育委員会編、53-104頁、神奈川、横須賀市教育委員会
- 佐藤宏之 2019『旧石器時代 日本文化のはじまり』ヒスカルコレクション考古1、128頁、東京都、散文舎
- 白石浩之 2002『旧石器時代の社会と文化』日本史リブレット1、102頁、東京都、山川出版社
- 白石浩之他 1996『吉岡遺跡群II』財団法人かながわ考古学財団編、286頁、神奈川、財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木次郎 1980「第V章第VII節 第VI文化層」『寺尾遺跡』神奈川県教育委員会編、184-291頁、神奈川、神奈川県教育委員会
- 鈴木次郎 2015「公開セミナー全体総括」『平成24年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー－ 講演録』公益財団法人かながわ考古学財団編、67-71頁、神奈川、公益財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木次郎 2023「相模野における旧石器時代前半の集落」『神奈川考古』、59、1-34頁、神奈川考古同人会
- 鈴木次郎 2024「相模野における旧石器時代前半の集落（続）」『神奈川考古』、60、1-34頁、神奈川考古同人会
- 鈴木次郎他 1984『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター編、330頁、神奈川、神奈川県立埋蔵文化財センター
- 鈴木美保 2005「遊動型先史狩猟・採集民の食料獲得－日本列島の旧石器時代－」『食料獲得社会の考古学』佐藤宏之編、33-49頁、東京都、朝倉書店
- 砂田佳弘他 1996『吉岡遺跡群I』財団法人かながわ考古学財団編、198頁、神奈川、財団法人かながわ考古学財団
- 田村 隆 2012「ゴミ問題の発生」『物質文化』、92、1-37頁、物質文化研究会
- 長崎潤一 2015「日本旧石器時代の社会と集団 環境・生業・遊動」『平成24年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー 講演録』公益財団法人かながわ考古学財団編、45-60頁、神奈川、公益財団法人かながわ考古学財団
- 畠中俊明・砂田佳弘 2010「第5章第7節 第6文化層」『津久井城跡馬込地区』財団法人かながわ考古学財団編、381-531頁、神奈川、財団法人かながわ考古学財団
- 羽生淳子 1990「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』、53、1-14頁、物質文化研究会
- 服部隆博 1999「多摩丘陵南東部における後期旧石器時代の一様相」『川崎市市民ミュージアム紀要』、12、1-56頁、川崎市民ミュージアム
- 御堂島 正 2011「小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群（速報） コメント」『かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る』神奈川県考古学会編、76-74頁、神奈川、神奈川県考古学会
- 森先一貴 2021『日本列島四万年のディープヒストリー 先史考古学からみた現代』朝日選書1024、216頁、東京都、朝日新聞社
- 矢島國雄 1996「第2章第2節6（9）地蔵坂（No.104）遺跡」『綾瀬市史9 別編 考古』綾瀬市編、185-205頁、神奈川、綾瀬市
- 矢島國雄・鈴木次郎・宮塚義人 1974『地蔵坂遺跡発掘調査報告書』綾瀬町教育委員会編、32頁、神奈川、綾瀬市教育委員会
- 山田しよう 2008「石器の機能から見た旧石器時代の生活」『旧石器研究』、4、49-60頁、東京都、日本旧石器学会
- 吉田好孝 1995『鷺ヶ峰遺跡 北東地区第2次調査報告書』日本窯業史研究所編、84頁、神奈川、日本窯業史研究所

## 相模野台地における砂川期からナイフ形石器終末期にかけての石器群の様相と年代

神奈川県教育委員会

高屋敷 飛鳥

### はじめに

相模野台地を中心とする神奈川県内では、砂川期～ナイフ形石器終末期（月見野期）の石器群が多数確認され、年代測定事例も多い。

小稿では、相模野台地を中心に、当該期の石器群の様相と放射性炭素（AMS）年代を整理したい。

### 1 「ナイフ形石器終末期」の編年研究と石器群の概要

砂川期及びナイフ形石器終末期は、相模野第IV期の石器群として、当初まとめてナイフ形石器終末期と呼称された。1979年には「ナイフ形石器文化終末期の問題」と題してシンポジウムが開催され（神奈川考古同人会 1979・1980）、そのシンポジウム上で田中は武藏野台地IIb期前半を「砂川期」と設定した（田中 1979）。また、その際に議論された剥片剥離技術や尖頭器の共伴等を足掛かりとして、鈴木次郎は相模野第IV期を三段階に細分した（鈴木 1984）。これに対し諏訪間と堤は、「砂川期」という時期を設定するのであれば、「砂川型刃器技法」を技術基盤にする石器群に対して設定されるべきとし、尖頭器の共伴を根拠とした鈴木の第一段階と第二段階を統合した段階を前半期、第三段階（幾何形ナイフ形石器）ともう一つのグループ（涙滴形ナイフ形石器）を統合した段階を後半期として、二時期に細分することが適当であると主張した（諏訪間・堤 1985）。その後諏訪間は相模野台地の編年を整備する中で、上記の前半期を段階VIの砂川期、後半期を段階VIIのナイフ形石器終末期に相当するとして区分した（諏訪間 1988・2001）。同時期に鈴木と矢島も相模野編年を見直し、前半を砂川期に、後半をナイフ形石器終末期として第IV期を細分している（鈴木・矢島 1988）。

その後ナイフ形石器終末期については、白石が砂川期に後続する石器群を「月見野期」と設定し、三段階に細分した（白石 1995）。また、当該期の石器群は変異が大きいため、ナイフ形石器の形態や黒曜石産地などによっていくつかのグループ分けが行われている（鈴木 1986、諏訪間 1995、白石 1995など）。これらの多様性については、時期差とする意見（白石 1995など）と、機能差とする意見がみられる（国武 1999など）。

上記編年で提唱された砂川期の石器群は、L2層～B1層中部で主に出土し、「砂川型刃器技法」による石刃石器群で、規格的な二側縁加工尖頭形石器と部分加工石器を主体とし、彫器などの加工工具を豊富に伴い、有樋尖頭器を少数伴う点が特徴であるとされている。石材は凝灰岩やチャートなどの近傍石材を主体とし、黒曜石やメノウ・玉髓などの遠隔地石材も用いられる。

対して、ナイフ形石器終末期の石器群は、B1層上部～上面で主に出土し、下九沢山谷型と呼ばれる涙滴形の尖頭形石器と小形幾何形石器を主体とし、加工工具は少なく、尖頭器が一定数伴う点が特徴とされる。石材は黒曜石が大半を占める場合が多く、尖頭形石器と尖頭器の製作技術の共有がみられる。諏訪間によるグループ分けでは、箱根畠宿産黒曜石主体で涙滴形尖頭形石器中心のもの、信州産黒曜石主体で涙滴形尖頭形石器中心のもの、信州産黒曜石主体で小形尖頭器中心のもの、尖頭器を含まない石器群などがあるとされている（諏訪間ほか 2010）。

本稿では、上記の研究を踏まえ、当該期の石器群について年代測定されている石器群を中心とし、二側縁加工尖頭形石器の技術形態的変化や石材産地、尖頭器の状況などに注目し、検討を行う。

表1 砂川期～ナイフ形石器終末期の神奈川県内のAMS年代値一覧

時期区分	段階	遺跡名	文化層	出土位置	層位	評価	試料	測定番号	$^{14}\text{C}$ 年代	$\delta^{13}\text{C}$	較正年代		文献
											IntCal20, 2 $\sigma$		
終末期	VII	田名向原No.4地点			B1上部	A	木炭	Beta-127792	17650±60	-27	21712	21028	田名塙田遺跡群発掘調査団
						A	木炭	Beta-127793	17630±50	-26.6	21640	21006	2004
						A	炭化材	IAAA-71611	17980±90	揭露せず	22119	21463	
						A	炭化材	IAAA-71612	17940±90	揭露せず	22067	21445	小林2008
						A	炭化材	IAAA-71613	17960±90	揭露せず	22090	21454	
終末期	VII	小倉原西		2号石器集中部	B1相当	A	炭化物	IAAA-120256	17920±60	-26.41±0.45	22015	21462	(公財)かながわ考古学財団
終末期	VII	上柏屋・石倉中 第3次	第II文化層	C区第1号炭化物集中	B1中部	A	炭化物	IAAA-170093	18035±57	-26.96±0.21	22142	21804	株式会社2017
終末期	VII	福田丙二ノ区	第I文化層	1号礫群	B1上部	A	炭化物	Tka-11607	18100±210	補正なし	22426	21405	
?	?	新道	第II文化層	3区A 2号礫群	B1下部	A	炭化物	pal-14622	17792±60	-30.18±0.26	21862	21386	株式会社2024
?	?	小保戸	第I文化層 PRE3(第2号遺物集中地点)	B0(2)	A	炭化物	IAAA-111472	19402±57	-25.82±0.49	23743	23110	(公財)かながわ考古学財団1999c	
終末期	VII	小保戸	第2文化層 PRE9(第15号遺物集中地点)	B1(1)	A	炭化物	IAAA-111471	18164±54	-22.12±0.37	22274	21985	2013b	
終末期	VII	当麻第1地点	第III文化層	第1石器集中	B1上部	A	炭化物粒	IAAA-92728	18337±71	-27.08±0.43	22426	22122	
						A	炭化物粒	IAAA-92729	18681±71	-26.42±0.66	22885	22413	(公財)かながわ考古学財団
						A	炭化物粒	IAAA-92730	18343±76	-25.88±0.60	22434	22120	2013a
						A	炭化物粒	IAAA-92731	18643±77	-26.70±0.82	22868	22384	
						A	炭化物粒	IAAA-93027	18559±74	-26.45±0.44	22745	22307	
?	?	葛原滝谷	第IV文化層	第2大形炭化物集中部3	B1下部	B	炭化物	Beta-169466	18810±60	-24.5	22945	22518	株式会社2003a
砂川	VI	宮ヶ瀬中原	第V文化層	P1炉址	B1下部	A	炭化物	Beta-97118	18920±100	-26.7	23020	22539	株式会社2007a
砂川	VI	西富岡・長竹第3次	第III文化層	1号ブロック	B1上部	A	炭化物	pal-11198	18537±53	-24.80±0.17	22546	22326	株式会社2019
砂川	VI	小保戸	第3文化層	1号礫群 2号礫群 3号礫群 4号礫群 5号礫群	B1(3)	A	炭化物	pal-11199	19114±55	-26.92±0.32	23137	22921	
						A	炭化物	IAAA-90268	19094±84	-24.92±0.59	23220	22880	
						A	炭化物	IAAA-90269	19211±85	-25.44±0.48	23683	22943	
						A	炭化物	IAAA-90270	19320±86	-26.92±0.55	23728	23004	(公財)かながわ考古学財団
						A	炭化物	IAAA-90271	19407±85	-23.33±0.54	23744	23100	2013b
砂川	VI	用田鳥居前	第IV文化層	大形炭化物集中地点 第3石器集中部	B1	A	炭化物	IAAA-90272	19364±90	-22.07±0.63	23740	23034	
						A	炭化物	IAAA-111468	19046±63	-26.33±0.42	23096	22876	
						B	炭化材	NUTA-5102	19440±220	-25.46	23835	22972	
						B	炭化材	NUTA-5103	19540±170	-24.62	23841	23075	
						B	炭化材	NUTA-5104	19390±170	-25.62	23767	23015	
砂川	VI	宮ヶ瀬上原	第V文化層	P1炉址 P1礫群	B1下部	B	炭化材	NUTA-5109	18730±170	未測定	22979	22365	
						B	炭化材	NUTA-5127	19350±170	-25.42	23755	22995	株式会社2002a
						A	炭化材	NUTA-5451	19740±190	-25.9	24210	23226	
						A	炭化材	NUTA-5490	18980±160	-24.86	23253	22456	
						A	炭化材	NUTA-5296	19370±150	-25.92	23750	23020	
砂川	VI	福田丙二ノ区	第I文化層 (ブロック直下)	5～7ブロック直下 5ブロック直下	B1下部	A	炭化材	NUTA-5297	19570±150	-26.11	23846	23136	
						A	炭化材	NUTA-5300	17910±130	-25.88	22128	21379	
						A	炭化材	Beta-97117	19240±100	揭露せず	23709	22951	株式会社1997b
						A	炭化材	Beta-97118	19470±100	揭露せず	23771	23155	株式会社1997b
						B	炭化物	Tka-11525	18960±480	補正なし	24096	21962	
砂川	VI	福田丙二ノ区	第II文化層	2号礫群 4号礫群 5号礫群 第7ブロック隣接 1号礫群	B1下部	B	炭化物	Tka-11594	19410±250	補正なし	23908	22906	
						B	炭化物	Tka-11600	19480±490	補正なし	24710	22422	
						B	炭化物	Tka-11609	18380±470	補正なし	23663	21007	
						B	炭化物	Tka-11597	18820±290	補正なし	23700	22188	
						A	炭化物	Tka-11591	19440±430	補正なし	24470	22471	
砂川	VI	大和配水池内	第V文化層	小豎穴状造構	B1下部	A	炭化物	Tka-11598	18970±440	補正なし	23915	22035	
						A	炭化物	Tka-11601	19240±700	補正なし	25176	21809	株式会社1999c
						A	炭化物	Tka-11602	18770±330	補正なし	23715	22060	
						A	炭化物	Tka-11603	19220±330	補正なし	23854	22456	
						A	炭化物	Tka-11611	19300±270	補正なし	23839	22641	
砂川	VI	大和配水池内	第V文化層	L2上面	B1下部	A	炭化物	Tka-11537	19660±440	補正なし	24926	22766	
						B	炭化物	Tka-11548	19340±350	補正なし	24089	22522	
						B	炭化物	Tka-11595	18900±270	補正なし	23714	22316	
砂川	VI	大和配水池内	第V文化層	小豎穴状造構	B1下部	A	炭化材	IAAA-10071	19610±60	-25.4±0.6	23812	23363	大和市No.199遺跡発掘調査団
						A	炭化材	IAAA-10072	19360±60	-24.5±0.7	23730	23056	2008
						A	炭化材	IAAA-10073	19600±60	-25.9±0.6	23809	23356	

※ $^{14}\text{C}$ 年代は基本的に $\delta^{13}\text{C}$ 補正後の値。暦年較正用(数値を丸めていないもの)がある場合は暦年較正用の値を記載。

## 2 砂川期～ナイフ形石器終末期にかけてのAMS年代

発表者は以前相模野台地を中心とする神奈川県内の放射性炭素(AMS)年代を集めて、検討を行ったことがある(高屋敷2024)。そこでは、砂川期～ナイフ形石器終末期の資料は13遺跡61点あり、年代的には砂川期は約24,000～22,500 cal BP、ナイフ形石器終末期は約22,500～21,500 cal BPになるとまとめた。今回もこれらの資料を用いて検討を行う。

当該期のみのAMS年代値一覧を表1に、AMS年代プロット図を図1に示した。用いた暦年較正プログラムはOxcal 4.4(Bronk Ramsey 2021)、較正年代は標準偏差2 $\sigma$ の値である。

次節以降は、ここで得られた年代値を適宜参照し、当該期の石器群の様相をみていきたい。

## 3 砂川期の石器群

砂川期の資料で、古い年代値のものは大和配水池内遺跡第V文化層の資料で、約23,500 cal BP前後になる。一方、新しい年代値のものは西富岡・長竹遺跡第3次調査第III文化層の資料で、約22,700

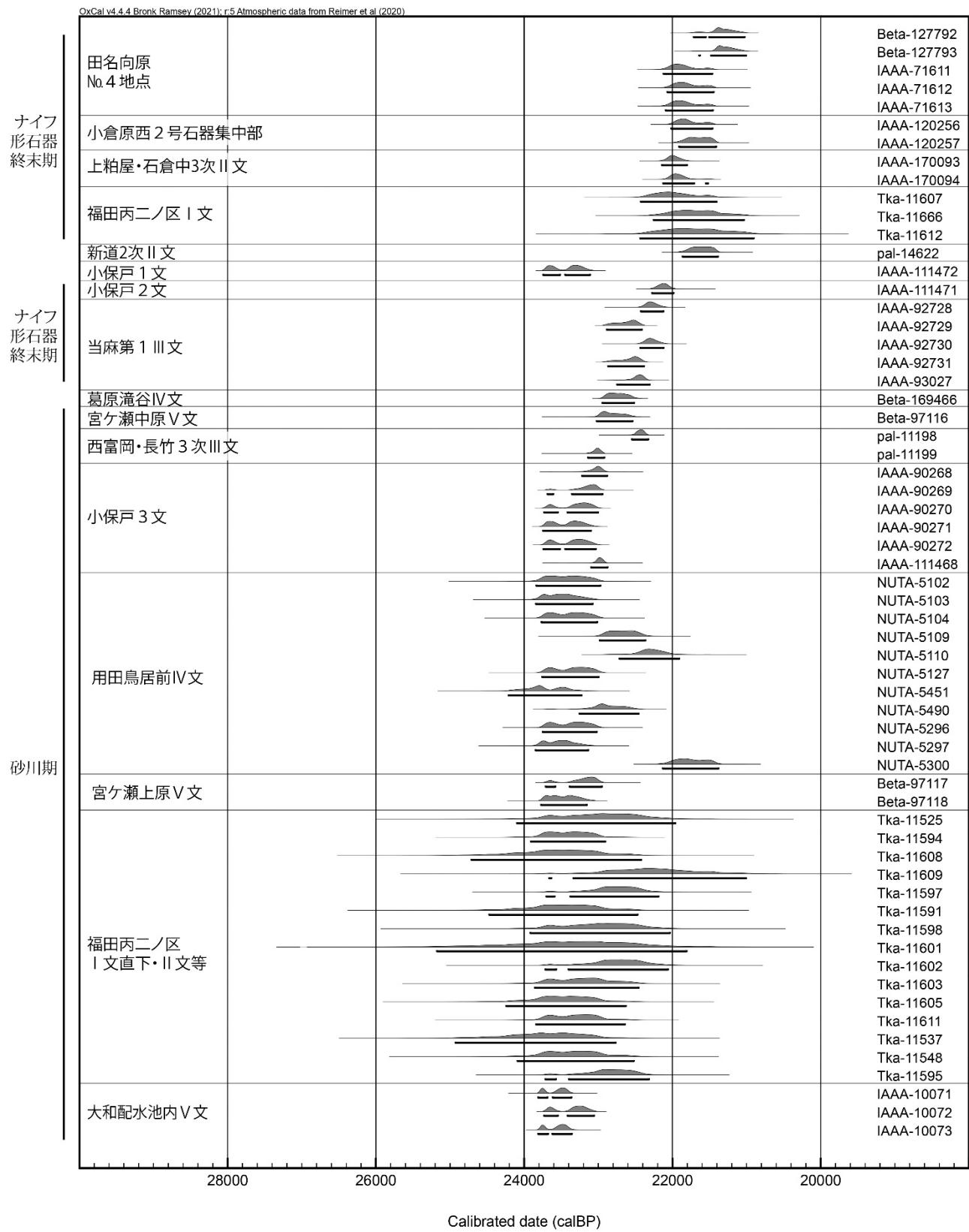


図1 砂川期～ナイフ形石器終末期のAMS年代プロット図

cal BP 前後となっている。

これらの資料の二側縁加工尖頭形石器をみると、共に石刃素材であるものが主体だが、大和配水池内遺跡は規格的で基部が尖り、裏面調整や切断などにより打面が残らないものが多く、対向調整も頻繁に用いられる（図 2-2・3）。長さ 5 cm 以上の大形品がみられ、左右非対称の肩があるもの（図 2-3）がみられる。それに対し、西富岡・長竹遺跡は基部が丸くなり打面が残置されるものが増え、長さ 5 cm 未満の中・小形品のみとなっている（図 2-11～13）。

また、福田丙二ノ区遺跡では同位体補正がなされていないものの、第 II 文化層の資料で古めの年代が出ており、約 23,300 cal BP となる。二側縁加工尖頭形石器をみると、大和配水池内遺跡と同様に規格的で大形品（図 2-5）や肩があるもの（図 2-6）がみられ、典型的な砂川期の資料である。

一方、小保戸遺跡第 3 文化層は大和配水池内遺跡第 V 文化層より新しいが、福田丙二ノ区遺跡第 II 文化層とは年代値だけをみると時期差の判断が難しい。ただし、二側縁加工尖頭形石器が全体的に小形になる特徴がみられ、形態にややばらつきがみられる（図 2-8・9）。

以上の状況をみると、約 23,500 cal BP 前後の砂川期の典型的な石刃石器群がみられる時期（砂川期前半）から、23,000 cal BP 前後の二側縁加工尖頭形石器の規格性が薄れると共に形態に変化がみられ、大形品が見当たらなくなる時期（砂川期後半）に推移する様相がみてとれる。

なお、黒曜石の割合に関しても従来時期差の指標となる可能性が指摘されているが、この点については典型的な砂川期の資料で砂川期前半と考えられるもの（中村遺跡第 V 文化層、月見野遺跡群第 II 遺跡など）でも黒曜石が 4 割、6 割を占める場合もあるため、時期的な指標とするのは難しいようである。これは石材が遺跡の立地や機能差にも多分に影響されるためであると推測される。ただし、大枠では終末期に近づくにつれて黒曜石の割合が増えると理解される。

尖頭器については、大和配水池内遺跡第 V 文化層で有樋尖頭器 2 点を含む尖頭器 6 点が確認されている。有樋尖頭器は両面加工で長さ 6.2 cm の大形品（図 2-1）と、長さ 3.5 cm の小形品で、それぞれチャートと黒曜石で製作されている。また、年代測定されていないが、中村遺跡第 V 文化層で黒曜石製の男女倉型有樋尖頭器 1 点（図 2-7）を含む尖頭器 5 点が確認されている。同遺跡同文化層は二側縁加工尖頭形石器の形態等から前述の砂川期前半と考えられる資料である。

一方、橋本遺跡第 III 文化層と第 II 文化層で尖頭器が出土している。両文化層はそれぞれ二側縁加工尖頭形石器の形態や部分加工石器の存在等から砂川期前半、後半に相当すると考えられる資料である。第 III 文化層では両面加工と周縁加工の大形の尖頭器 2 点が出土しているのに対して、第 II 文化層では片面加工や周縁加工の中・小形尖頭器が出土している。

これらの状況から、同じ砂川期でも前半では大形で樋状剥離のある両面加工の尖頭器が多く、後半では中・小形の片面・周縁加工が多くなる傾向があるようである。

#### 4 ナイフ形石器終末期の石器群

ナイフ形石器終末期の資料は、当麻遺跡第 1 地点第 III 文化層が約 22,500 cal BP、小保戸遺跡第 2 文化層が約 22,100 cal BP で、2 万 2 千年前を遡り古手の年代である。当麻遺跡第 1 地点は点数が少ないものの、石刃技法がみられず尖頭形石器も形態に変異が大きい終末期的様相を示す一方、黒曜石が 1 点もなく砂川期からの移行期的な石器群であると思われる。小保戸遺跡は小形幾何形石器と涙滴形尖頭形石器が多いが、こちらも主体となるのは凝灰岩で約 7 割を占める。黒曜石は約 1.5 割で、箱根畠宿産が主体である。ただし、両遺跡は共に相模川上流部の凝灰岩産地に近いため、黒曜石の割合が低いのは立地の問題も考えられる。



図2 砂川期～ナイフ形石器終末期の石器群

約2万2千年前以降は、主体となる石器や黒曜石産地で主に3つのグループに分けられる（表2）。すなわち、①箱根畠宿産黒曜石製の涙滴形尖頭形石器と幾何形石器（あるいはそのどちらか）を主体とするグループ、②信州産黒曜石製の涙滴形尖頭形石器と幾何形石器（あるいはそのどちらか）を主体とするグループ、③信州産黒曜石製の小形尖頭器を主体とするグループ、である。なお、幾何形石器は②よりも①のグループで数が多くなる傾向があるようである。このうち、①については最も数が多いが、年代測定が行われていない。②は小倉原西遺跡第2文化層と福田丙二ノ区遺跡第I文化層が該当し、共に約21,700 cal BPである。③は田名向原遺跡No.4地点住居状遺構と上柏屋・石倉中遺跡第3次調査が該当する。田名向原遺跡は約21,700 cal BPと約21,300 cal BPの二つにまとまりがみられ、小倉原西遺跡は約21,700 cal BPにまとまりがみられる。これらの年代値を勘案すると、信州産黒曜石製の涙滴形尖頭形石器と幾何形石器を主体とする石器群（①）と、小形尖頭器を主体とする石器群（③）は終末期の中でもより後出である可能性がある。

なお、小形幾何形石器は従来後出として考えられることが多かったが、今回の年代値を見る限りそ

表 2 ナイフ形石器終末期石器群の主体となる刺突具・黒曜石産地一覧

遺跡名	文化層・地区	出土層位	総数 (縦除く)	尖頭器		「ナイフ形石器」					主体となる 刺突具	主体となる 黒曜石産地
				合計	合計	尖頭形石器 二側縁	一側縁・ 基部等	幾何形	部分加	その他 石器 工石器 ・不明		
下鶴間長堀	第Ⅱ文化層	B1上部～上面	1372	43	23	7	4	9	0	3	尖頭器	信州産
田名向原	No.4地点 住居状遺構	B1上部	2981	193	21	8	10	0	3	0	尖頭器	信州産
上柏屋・石倉中	第Ⅱ文化層	B1中部	144	0	0	0	0	0	0	0	尖頭器？	信州産
下森鹿島	第Ⅱ文化層	B1上部	726	46	49	22	6	17	0	4	尖頭器・涙滴形・幾何形	信州産
下九沢山谷	第Ⅳ文化層	B1中部	158	1	17	12	1	1	1	2	涙滴形	信州産
福田丙二ノ区	第Ⅰ文化層	B1上部	678	8	58	28	14	3	2	11	涙滴形	信州産
小倉原西	第2文化層	B1中部	1966	4	69	33	12	19	0	5	涙滴形・幾何形	信州産
深見諏訪山	第Ⅲ文化層	B1上部～上面	約1500	14	74	16	2	28	3	25	幾何形・涙滴形	箱根畠宿産
寺尾	第Ⅲ文化層	B1上部～上面	111	0	19	0	0	13	0	6	幾何形	箱根畠宿産
中村	第Ⅳ文化層	B1上面	2235	21	140	46	15	30	15	34	涙滴形・幾何形	箱根畠宿産
吉岡	A区	B1	6	0	6	4	2	0	0	0	涙滴形	箱根畠宿産？
福田札ノ辻	第Ⅱ文化層	B1上部～上面	121	1	11	4	3	2	0	2	涙滴形	箱根畠宿産
台山	第Ⅲ文化層	B1上部	264	0	13	5	7	1	0	0	涙滴形	箱根畠宿産
代官山	第Ⅳ文化層	L1H下部～B1上部	658	15	48	16	9	0	1	22	涙滴形	箱根畠宿産
新道	第2次調査1区B第Ⅰ文化層	B1上部	97	0	4	1	3	0	0	0	涙滴形	？
小保戸	第2文化層	B1上部	1135	0	54	15	19	17	0	3	幾何形・涙滴形	箱根畠宿産
当麻第1	第Ⅲ文化層	B1	273	2	3	1	2	0	0	0	不明	-

のような傾向は認められなかった。また、小形の石刃・石刃状剥片素材の二側縁加工尖頭形石器がみられる B1 層上部出土の石器群（西富岡・長竹遺跡第3次調査第Ⅲ文化層、橋本遺跡第Ⅱ文化層、月見野上野遺跡第1地点第V文化層、長堀南遺跡第Ⅲ文化層など）は従来終末期に区分されることが多かったが、発表者は上述の西富岡・長竹遺跡の年代や、当該石器群に石刃技法がみられ、部分加工石器などの砂川的要素が強く認められることから、砂川期後半に位置付けて考えている。

### おわりに

砂川期とナイフ形石器終末期について検討し、主に年代と二側縁加工尖頭形石器の形態等から、砂川期を前半（23.5ka 前後）と、後半（23ka 前後）に区分した。また、ナイフ形石器終末期は、主体となる石器と黒曜石産地から主に3つのグループに分かれる傾向があり、信州産黒曜石製の尖頭形石器と幾何形石器を主体とする石器群と、小形尖頭器を主体とする石器群については、後出の可能性があることを指摘した。

今後は両時期の石器群変化の背景についても検討を行いたい。特にナイフ形石器終末期石器群は内容が多様であり、引き続き検討が必要と思われる。

### 引用文献 ※記載のない引用文献及び報告書は、高屋敷 2024 を参照

神奈川考古同人会 1979・1980 『神奈川考古』 7・8

国武貞克 1999 「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡の類別—行動論的理解に向けた分析法の試み—」『考古学研究』 46-3、35-55 頁

白石浩之 1995 「関東地方におけるナイフ形石器終末期の様相—月見野期を中心として—」『古代文化』 47-1、14-29 頁

鈴木次郎 1984 「第V文化層の特徴と問題点」『栗原中丸遺跡』 278-288 頁

鈴木次郎 1986 「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現—相模野第IV期石器群の構造的理解—」『神奈川考古』 22、79-102 頁

諫訪間順 1995 「関東地方における AT 上位石器群の変遷」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』 予稿集 341-359 頁

諫訪間順・堤隆 1985 「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第IV文化層の石器群について」『旧石器考古学』 30、85-108 頁

諫訪間順・野口淳・島立桂 2010 「関東地方南部」『講座日本の考古学 1 旧石器時代（上）』青木書店、381-437 頁

高屋敷飛鳥 2024 「放射性炭素年代からみた相模野編年の現在」『神奈川考古』 60、35-52 頁

田中英司 1979 「武藏野IIb期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』 7、65-74 頁

## 悉皆集成による武藏野編年第Ⅱb～Ⅳ期の再構成

ITS 先史研究所  
伊藤 健

### はじめに

本発表は、2025年に著した武藏野台地を対象とした遺跡構造論「後期旧石器時代の新たな遺跡構造論」（伊藤 2025：以下前著とする）を継承するもので、とりわけ「第5群」（武藏野編年第Ⅱb期～第Ⅳ期）に焦点を当て、予察的に編年的位置づけを試みるとともに、新たな視座を提示する。

武藏野台地の旧石器時代編年は小田静夫氏を中心とする研究によって確立され、出土層位および石器型式から各期の特徴が整理されてきた（小田 1980）。しかしながら第Ⅱb期前半（砂川期）に特徴的な石器が第Ⅲ層上部という浅い層位から出土する事例が報告されるなど、出土層位と石器の特徴との間に齟齬が認められていた。武藏野編年第Ⅱb期から第Ⅳ期までの編年的枠組みに対し再検討の必要を感じている。

### 1 研究史と石器群類型

武藏野台地では、野川遺跡の層位的発掘を起点として野川Ⅰ期～Ⅲ期が設定、「層序×型式」のハイブリッドな編年モデルが提示された（小林ほか 1971）。その後、調査事例の蓄積を経て第Ⅰa期から第Ⅳ期に至る体系化が図られた（小田 1980）。第Ⅰ・Ⅱ期がナイフ形石器、第Ⅲ期が細石刃、第Ⅳ期が尖頭器を主体とする時期である。このうち第Ⅱb期は石刃を台形・三角形に切断して製作されたナイフ形石器を中心に特徴づけて前半と後半に分けられ、前半を「砂川期」とされた（織笠 1977、田中 1979）。

一方、相模野台地では鈴木次郎氏らによって小園前畠遺跡の発掘調査に端を発する編年体系により第Ⅰ～Ⅴ期が設定され、諏訪間順氏によって12段階に細分された（小野・鈴木・高橋他 1972、鈴木・矢島 1978、諏訪間 1988）。その編年では、最終段階で尖頭器→細石刃→再び尖頭器と遷移し、武藏野編年と合致しない部分もあるが、武藏野台地も概ね相模野編年と同じ変遷を辿ると理解されており、かつ両編年は現在でも南関東地方の後期旧石器時代研究の基礎として君臨している。

とはいえるが、武藏野台地の編年研究は1980年代以降ほとんど停滞したままで、それ以降の発掘資料を反映した検討がなされていない。そこで調査報告書から新旧調査の当該資料を悉皆的に集成し再検討する。対象範囲は東京都内の武藏野台地の当該資料、前著で扱った第4群（Ⅴ層・Ⅳ層下部段階）より後、上層の石器群である。2024年までに刊行された報告書から集成し、前著と同様に石器5点以上で構成される石器集中部を対象に石器出土点数、器種組成、石材組成を集計する。

武藏野台地の立川ローム層の層序は遺跡・小河川流域間で異なる傾向にあり、特に第Ⅴ層より上位では石器群の出土層位がその時期確定の決め手にならない。とは言え集成された石器群を類型分類しなければ分析できないので「刺突具」と考えられるナイフ形石器・尖頭器・細石刃の出土点数に基づき、改めて当該石器集中部を以下の第5群から第7群までに分類する（第4群までは前著で論述）。

**第5群**：ナイフ形石器・尖頭器・細石刃の三者の中でナイフ形石器が最も多い。概ね武藏野編年第Ⅱb期に相当。

**第6群**：三者の中で尖頭器が最も多い。概ね武藏野編年第Ⅳ期に相当（ただし小田氏は第Ⅱb期の終末期でも尖頭器を多出するとしている）。

**第7群**：三者の中で細石刃が最も多い。ただし「細石刃」数点だけでは単なる小さな石刃が紛れ込

んでいる可能性があるため、4点以下の場合を除外。概ね武藏野編年第Ⅲ期に相当。

なお第Ⅱb期前半(砂川期)・後半に対応させるため、第5群をナイフ形石器の形態的特徴によって区分する。第5群のナイフ形石器は、突基斜刃形二側縁加工ナイフ形石器、円基斜刃形二側縁加工ナイフ形石器、斜刃形基部一側縁加工ナイフ形石器、平刃形二側縁加工ナイフ形石器、幅広形切出形石器、涙滴形ナイフ形石器、先端加工ナイフ形石器と多様である(図1)。しかし集成資料を検討すると、突基斜刃形二側縁加工ナイフ形石器と先端加工ナイフ形石器を組成する石器集中部ではそれ以外の形態を組成することはほとんどなく、反対にそれ以外はそれだけで組成する形態に差があるものの突基斜刃形二側縁加工ナイフ形石器と先端加工ナイフ形石器を組成しない。従って第5群は、突基斜刃形二側縁加工ナイフ形石器と先端加工ナイフ形石器を組成する**第5a群**(第Ⅱb期前半・砂川期相当)と、それ以外の形態を組成する**第5b群**(第Ⅱb期後半相当)に分けることができる。

また「刺突具」が出土しない、器種同数、不明瞭そして判断が困難なものは除外する。

## 2 石器組成

集計の結果、石器集中部件数は第5a群:243件、第5b群:193件、第6群:106件、第7群:40件、石器出土点数は第5a群:33,518点、第5b群:22,690点、第6群:27,021点、第7群:8,419点である。石器集中部1件あたりの石器出土点数は第5a群:137.9点、第5b群:117.6点、第6群:254.9点、第7群:210.5点である。石器集中部件数、石器出土点数ともに第5a群が最も多く、第7群が最も少ない。ちなみに、相模野台地では石器出土点数は四群ともほぼ同数である。

器種組成において、以前からナイフ形石器と尖頭器、尖頭器と細石刃が共伴する場合があると言われていた。各群のナイフ形石器・尖頭器・細石刃の比率は、第5a群:ナイフ形石器91.2%、尖頭器7.0%、細石刃1.8%、第5b群:ナイフ形石器81.3%、尖頭器17.1%、細石刃1.6%、第6群:ナイフ形石器23.0%、尖頭器71.4%、細石刃5.7%、第7群:ナイフ形石器6.0%、尖頭器5.5%、細石刃88.5%である(「刺突具」内の比率 図2上)。広く共伴していることがわかる。

石材組成は図2下のとおりである。黒曜石の組成比率は第5a群:31.7%、第5b群:68.7%、第6群:25.1%、第7群:53.6%で、第5b群と第7群が黒曜石の比率が高く第5a群と第6群が低い。第Ⅱb期前半(第5a群)は多摩川流域で採取できる頁岩、チャートが主体、尖頭器石器群(第6群)はチャート・頁岩とともに安山岩が主体であると言われてきたので、それを追認する結果である。

石材組成の一般的傾向として近傍の石材を主に用いても黒曜石を一定量組成し、また黒曜石を多用しても近傍石材を一定量有するなど、石材確保をめぐるリスク管理がなされている。しかし、例えば第5a群で黒曜石が多数を占める石器集中部が全体の約2割存在し、石材確保の契機には複数のパターンがあることがわかる。第6群でも同じで、頁岩、チャート主体の槍先形尖頭器石器群が多い一方で黒曜石を素材とする槍先形尖頭器石器群も一定量ある。こうした石材組成の「二者」はその編年的位置づけと関連するので、第5章で再度述べたい。

## 3 出土深度と相模野編年

編年が何を示すのかは難しい問題である。従来の考え方によればその編年の各時期・段階は、それを担うのが同一集団であるか異なる移住集団であるかを問わず、環境変動によって社会構造の変化が惹起され、それに連動して石器を巡る技術構造がある画期に忽然と、実際には百年程度の移行期間を経て変化した石器群であると理解されていると言えよう。前著でも第2群(VII層段階)、第3群(VI層段階)、第4群(V層・IV層下部段階)の変化を移住集団の存在を想定しつつ、そう解釈してきた。

では第5群以降でも同様に画期をもって順々に変化したのか。

武藏野台地立川ローム層ではソフトローム層と第1黒色帶（第V層）の層厚が遺跡・地域によって異なり、第III層下部、第IV層上部…という層準はあまり編年構築の参考にならない。そこで、集成された資料の出土深度を計測する。報告書に示された各石器集中部の垂直分布図とそれに付随する層序図から、「第III層上面から石器集中部の出土面（ビーナスラインに基いた生活面想定面）までの深さ」(a)と「第III層上面から第V層下底（第VI層上面）の厚さ」(b)を計測し、 $a \div b$ を出土深度とする。0.00は第III層上面、1.00は第V層下底である。0.10の石器集中部は0.50よりも概ね新しいと考えることができる。それを石器出土点数の多寡を加味した上で、箱ひげ図に示す（図3）。

相模野台地の立川ローム層層序は安定的で、石器群も相模野段階編年段階VIはB1層下部、段階VIIはB1層上部と「層序×型式」が対応しているとされている。藤沢市域を除く相模野台地の石器集中部の出土深度を計測したところ、第5a群（段階VI相当）と第5b群（段階VII相当）は重なりを見せながらも中心となる深度は上下関係にある（図3左）。第5b群と第6群（段階VIII以降）とはその中央値が0.01しか違わず、時間的な重複が想定される。「終末期ナイフ形石器」と槍先形尖頭器は連続的な系統にあると言えようか。第6群（尖頭器石器群）と第7群（細石刃石器群）はその分布は重なりを見せる。箱ひげ図では表現できていないが、第6群が0.11～0.15で減少しその上下に増えるのに対し第7群は0.11～0.15に集中するので、尖頭器石器群がL1H層とL1S層に分かれ、細石刃石器群がB0層に相当することを示している。

このように相模野台地においては、段階VIと段階VIIの間の連続性を除けば、忽然と変化するとは言い切れないが従来の編年を追認するものである。

#### 4 武藏野台地の出土深度

埼玉県域を除く武藏野台地の石器集中部の出土深度の箱ひげ図に示したものが図3中である。第5a群と第5b群の比較では、第5a群が最小値:0.10、第1四分位数:0.26、中央値:0.34、第3四分位数:0.38、最大値:0.56、第5b群が最小値:0.07、第1四分位数:0.25、中央値:0.3、第3四分位数:0.38、最大値:0.43である。第5a群の最大値が大きく又中央値が0.04分異なるもののそれ以外の両者の分布は近く、同時に並存を想起される。第5a・b群と第6群との間では、前者の最小値～第1四分位数が後者の第1四分位数～第3四分位数に該当し重複を示しつつも、第6群が後続する様相を想起させる。しかし第5群にも0.10があるなど、石器群の特徴が時期区分をもって変化すると言えない側面もある。第6群は中央値0.15を中心にはらつきは小さく、期間の短さを想起できる（図4右も参照）。第6群と第7群の間では、その中央値は0.01しか違わないものの四分位範囲はずれており、第7群が第6群に後続することが理解できる。相模野台地の段階XI以降に相当する石器群が武藏野台地ではきわめて少ないから、第6群の上層にまで第7群が広がらないのである。

武藏野台地では相模野台地と異なり、第5a群と第5b群が並存すること、第5b群と第6群の間は並存期間があるものの概ね時間的前後関係にあること、第7群は第6群に後続することが特徴としてあげられる。ちなみに、前著で扱った第4b\_k群（V層・IV層下部段階後半）は第5a群と四分位範囲が0.10以上も離れており、明確に前段階に位置することがわかる。また、第m1群（面取尖頭器製作址）は第4b\_k群と第5a群の中間に分布する。

#### 5 群間の相互関係

ただ立川ローム層の土壤堆積は一定ではなく、小河川流域単位の地域間で堆積速度などが異なる可

能性がある。武藏野台地が相模野台地の約四倍も広いため、土壤堆積に変異が大きく各群間が重なってしまうのかもしれない。そこで相模野台地の面積にほぼ匹敵する小河川流域、エリア 4 (野川・仙川流域) とエリア 2 (白子川・石神井川流域) を抜き出しそれぞれに出土深度を計測する (図 3 右)。ただしエリア 2 では第 6 群の石器集中部が 4 件、第 7 群が 6 件しかないので、今回は第 5a 群・第 5b 群だけ比較する。すると第 5a 群と第 5b 群は、四分位数範囲がエリア 4 で 0.01、エリア 2 で 0.06 重なるものの上下関係がある。武藏野台地全体の値とは異なり、第 5a 群が先行し終期は第 5b 群が遅く、従って前後関係にあり並立期間はより短いと見ることができそうである。しかし、それでも相模野台地のように画然とは分かれない。

第 5b 群の文化層が第 5a 群の下位から検出された事例は一つもない。ただ、多聞寺前遺跡では第 5a 群の文化層と第 5b 群の文化層の層位差は 5 cm 未満で、その文化層は型式的検討によって設定されたことが理解できる。今回、武藏野編年の基準となった野川遺跡、西之台遺跡 B 地点、前原遺跡は石器集中部単位の情報がなく出土状況も明らかになっていないので本集成には含めなかったが、どのように文化層設定がなされたのか再検討する必要があろう。

ところで第 5a 群は近傍の石材を利用する傾向、第 5b 群は黒曜石を利用する傾向がある。ただ、一定数の黒曜石が多数を占める第 5a 群石器集中部、近傍の石材が多数を占める第 5b 群石器集中部があるのも事実である。そこで石器集中部をその組成に対する黒曜石の比率によって 1/3 未満 : I 類、1/3 以上 2/3 未満 : II 類、2/3 以上 : III 類に分け、その出土点数の合計と出土深度の関係を折れ線グラフにしてみる (図 4 左)。すると、その出土深度の上位、概ね 0.30 で第 5a 群に III 類、第 5b 群に I ・ II 類が増加する。両者の関係が交錯する時期があることを思わせる。

第 5b 群と第 6 群との間は相模野台地では出土深度のばらつきが連続的であった。黒曜石製の涙滴形ナイフ形石器と槍先形尖頭器が相半ばして出土し、段階 VII か段階 VIII か判然としないまま報告する事例も認められた。一方で武藏野台地ではナ/尖相半ばする事例は少なく、第 6 群の尖頭器は安山岩もしくは近傍の石材で製作されたものが多い。武藏野台地の第 5b 群の第一四分位数と第 6 群の第三四分位数は 0.06 離れていて、第 6 群が後続する前後関係、間隙があると理解できる。第 6 群と第 7 群の間では互いに尖頭器と細石刃を共伴するものの、出土深度の四分位範囲はほとんど重ならない。先述したとおり第 III 層上面の縄文時代草創期にかかる尖頭器石器群が少ないといためである。

## 6 行動様態を絡めた編年観の見直し

武藏野台地の第 5a 群から第 7 群への変遷は概ね従来の編年のとおりであるが、武藏野編年や相模野段階編年に示されたような画期をもって順々に遷移していくとは言えない。時間幅の中に閉じ込めることはできない。ナイフ形石器・尖頭器・細石刃を共伴する、二つの群が同時並行する、間隙があるなど交錯した状況を看取できる。ここには環境変動の影響で結果的に石器群の特徴が必ず一斉に変化していくという編年モデルは適用できない。一斉変化の時期もある一方で、複層的、錯綜する状況、異なった装備を持つ複数の集団が同時に存在することなどが含意できる。

相模野台地では確固とした立川ローム層の層準から、編年のとおりに石器群が検出される傾向にある。そうした状況からみれば武藏野台地はただ層序が安定しないだけにしか見えないかもしれない。しかし、相模野台地段階 VI の文化層に指定されながらも実際は B1 層上部出土、石器群の型式的特徴は第 5b 群でありながらも B1 層下部であるため段階 VI の文化層と指定されたものなど、編年に無理に当てはめようとする事例もある。近年伊勢原台地の遺跡の L1H 層上部で細石刃石器群と尖頭器石器群の共伴が確認されたように、言われているほど「画期的編年」ではないことがわかつてきた (麻生 2019)。

とは言え。なぜ武藏野台地と相模野台地では第5a群から第7群の変遷は、平行期間や間隙などが異なる可能性があるのであろうか。武藏野台地は相模野台地の約4倍の面積であるが、石器出土点数は約2倍である。相模野台地では第5a群～第7群の各石器出土点数はほぼ同じであるが、武藏野台地では第5a群を最多に概ね減少していく。第5a群以前では、前著で示したとおり相模野台地でB2U層からL2層までは極端に少ない。第4群に関しては、相模野台地の調査事例が少ないと抜きにしても武藏野台地が圧倒的に多い。石器出土点数が人口や単位集団の数に直結するとは言えないものの、地域間で単位集団の存否・人口の多寡が異なっていることを示していると考えられる。並行する集団の同時並存、無人期間などが各地域間の短い時間幅で明滅するように変化し、それらが出土深度を通じてこれらの現象として捉えられるのではないだろうか。そうした交錯した様相は領域性が発達しつつも新石器時代へ脱皮しつつある、後期旧石器時代後半期特有の状況かもしれない。

今さらながらではあるが、南関東地方の編年研究は画期を設けて時期の違いを見極めるレベルを脱却し、並存関係を是認し、単位集団の行動様態を見据えつつ構造の変化として理解するステージへ進む必要がある。

#### 引用・参考文献

- 麻生順司 2019 「第II文化層（L1H層上部）」『西富岡・長竹遺跡第3次調査』, 57-267頁, 神奈川, 株式会社玉川文化財研究所  
 伊藤 健 2025 『後期旧石器時代の新たな遺跡構造論 東京の遺跡を中心』, 367頁, 東京, 新泉社  
 小田静夫 1980 「武藏野台地に於ける先土器文化」『神奈川考古』, 8, 11-27頁, 神奈川, 神奈川考古同人会  
 織笠 昭 1977 「第IV上層文化」『新橋遺跡』, 27-32頁, 東京, 国際基督教大学考古学研究センター  
 亀田直美 2005 「南関東の研究現状」『石器文化研究』, 12, 157-172頁, 神奈川, 石器文化研究会  
 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』, 10巻4号, 231-270頁, 東京, 日本第四紀学会  
 白石浩之 1995 「関東地方におけるナイフ形石器文化終末期の様相－月見野期を中心として」『古代文化』, 47巻1号, 14-29頁, 京都, 古代學協会  
 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ（1）』, 144-169頁, 東京, 有斐閣  
 謙訪間 順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による石器群の段階的把握－」『神奈川考古』, 24, 1-30頁, 神奈川, 神奈川考古同人会  
 田中英司 1979 「武藏野台地IIb期前半の石器群と砂川期に設定について」『神奈川考古』, 7, 65-74頁, 神奈川, 神奈川考古同人会

集成対象の遺跡調査報告書は割愛する。

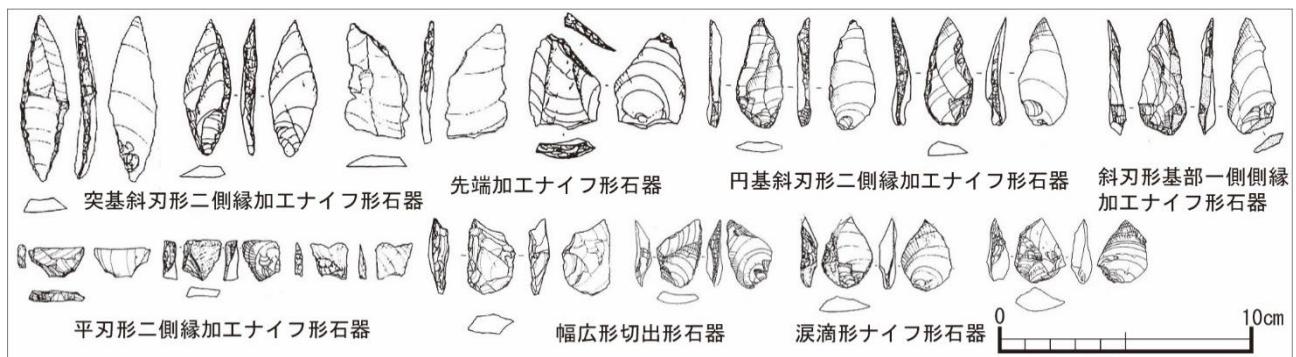


図1 ナイフ形石器の形態

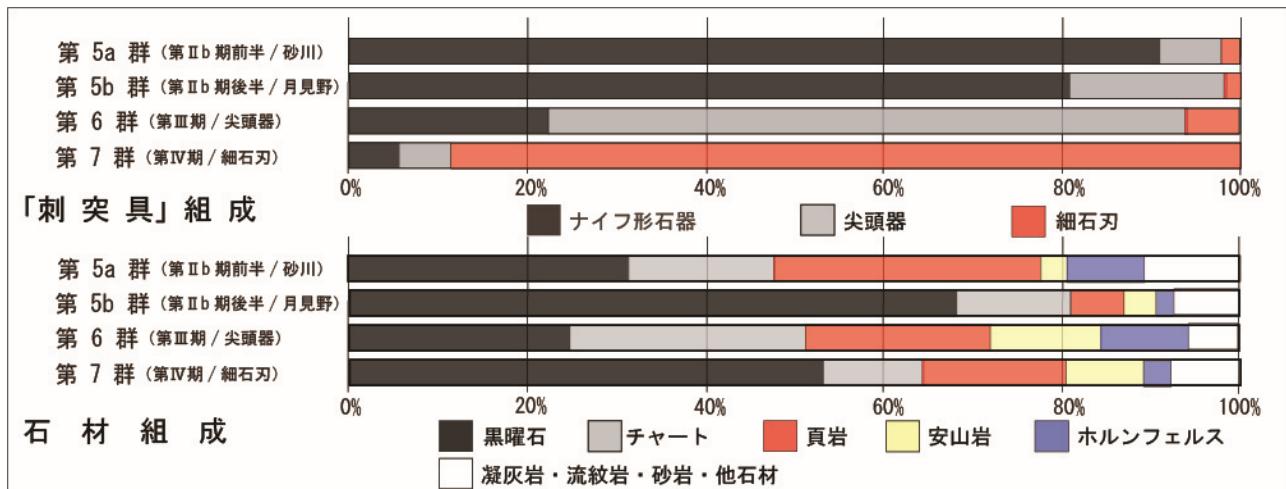


図2 各群の石器組成

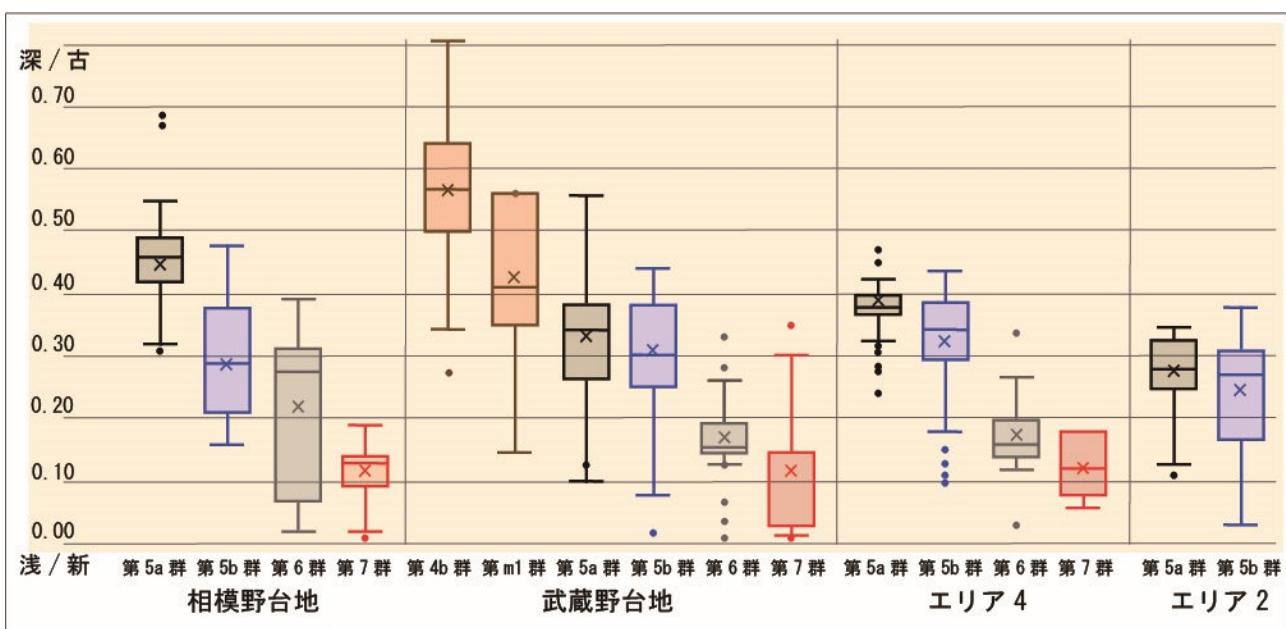


図3 各群の出土深度

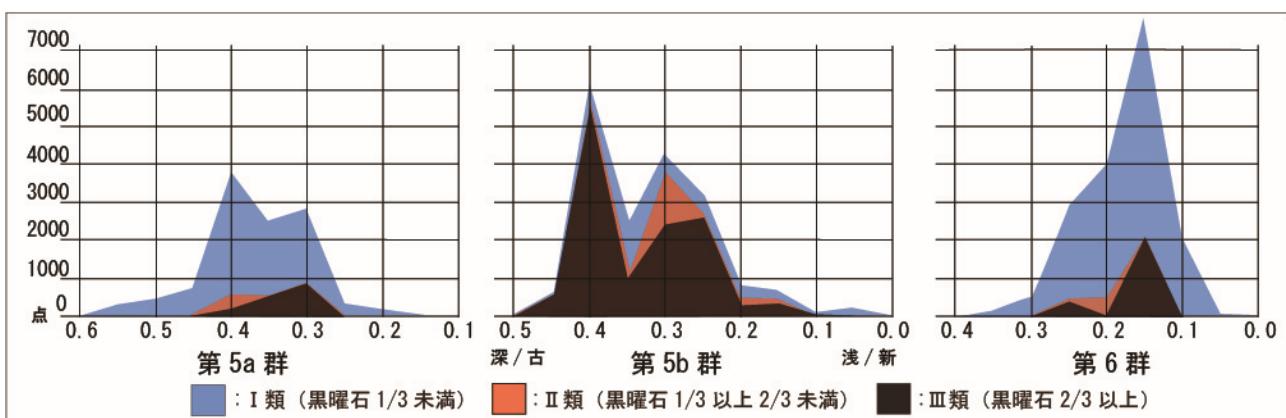


図4 黒曜石占有率別の出土深度

## 静岡県磐田原台地における旧石器時代石器群編年の再検討

静岡県埋蔵文化財センター

富樫 孝志

## はじめに

磐田原台地は、静岡県袋井市、磐田市にまたがる南北長約11km、東西幅は最大で約5kmの二等辺三角形を呈する台地である。台地の西側を中心に旧石器時代の遺跡が集中している（図1）。

勾坂中遺跡（鈴木1994、鈴木・竹内1996）、高見丘III・IV遺跡（富樫1998）、高見丘遺跡群（竹内・渡邊2013）では、合計で15万m<sup>2</sup>を超える面積が発掘調査され、台地上にブロックや礫群が連綿と続く状況が明らかにされた。同時に、厚さ1m弱の包含層に、複数時期の石器群、礫群が含まれていることも明らかになった。この状況を克服するため、勾坂中遺跡の発掘調査では、平面的に遺物群を区切り分析単位とする「エリア」が設定された。この概念は、その後の発掘調査でも実践された。

エリアは、磐田原台地での旧石器時代の編年を検討する単位となるが、「指標的な要素を欠く」（鈴木・竹内1996）エリアの編年的位置は、勾坂中遺跡の報告書で今後の課題とされ、現在に至っている。

本稿では、「指標的な要素を欠く」石器群の実態を検討し、その編年把握と理解を試みる。

## 1 旧石器時代遺物の出土状況と編年

遺物の出土状況の例として、高見丘III遺跡の状況を示す（図2）。標準土層は図2に示した通りで、包含層（土層断面図のトーンを掛けた部分）の厚さは1mに満たない。遺物は、浅い谷をはさんだ東西の丘陵上で多量に出土している。遺物は、断面投影図のとおり、包含層中に集中している。

これが一般的な出土状況であるため、出土レベルをもとにした編年は困難を極めるが、1996年、磐田原台地での編年が提唱された（表1、進藤1996）。この編年は、静岡県考古学会によるシンポジウムの収録集に修正案という慎重な表現で掲載されたものであるが、大枠は現在でも変わっていない。

筆者は、磐田原台地での旧石器時代編年を再検討し、別の解釈の余地があることを指摘した（富樫2016）。その中で、勾坂中遺跡の「指標的な要素を欠く」エリアを、同遺跡の報告書で「ナイフ形石器文化K2期」として、瀬戸内技法を連想させる横長剥片剥離技術や角錐状石器が存在する時期に位置づけたことについて、「指標的な要素を欠く」石器群を不定形剥片系石器群と捉え直すと、編年上、別の位置づけが可能であることを示した（富樫2016）。

表1 磐田原台地の旧石器時代編年（進藤1996を改変）

時期案	主な石器群（報告書記載名称）	相模野編年	武藏野編年
⑥	寺谷遺跡細石器群 広野北遺跡細石器文化	V	III
⑤	広野北遺跡尖頭器文化	IV V	II b
④	寺谷遺跡ナイフ形石器群 山田原II遺跡 勾坂中遺跡ナイフ形石器文化K3期 広野北遺跡ナイフ形石器文化（K2）第III期 広野北遺跡ナイフ形石器文化（K2）第II期	IV	II b
③	京見塚遺跡（未報告） 勾坂中遺跡ナイフ形石器文化K2期 広野北遺跡ナイフ形石器文化（K2）第I期	III	II a
②	広野北遺跡ナイフ形石器文化（K3）	II	I c
①	道下遺跡VI層下部	I	I a

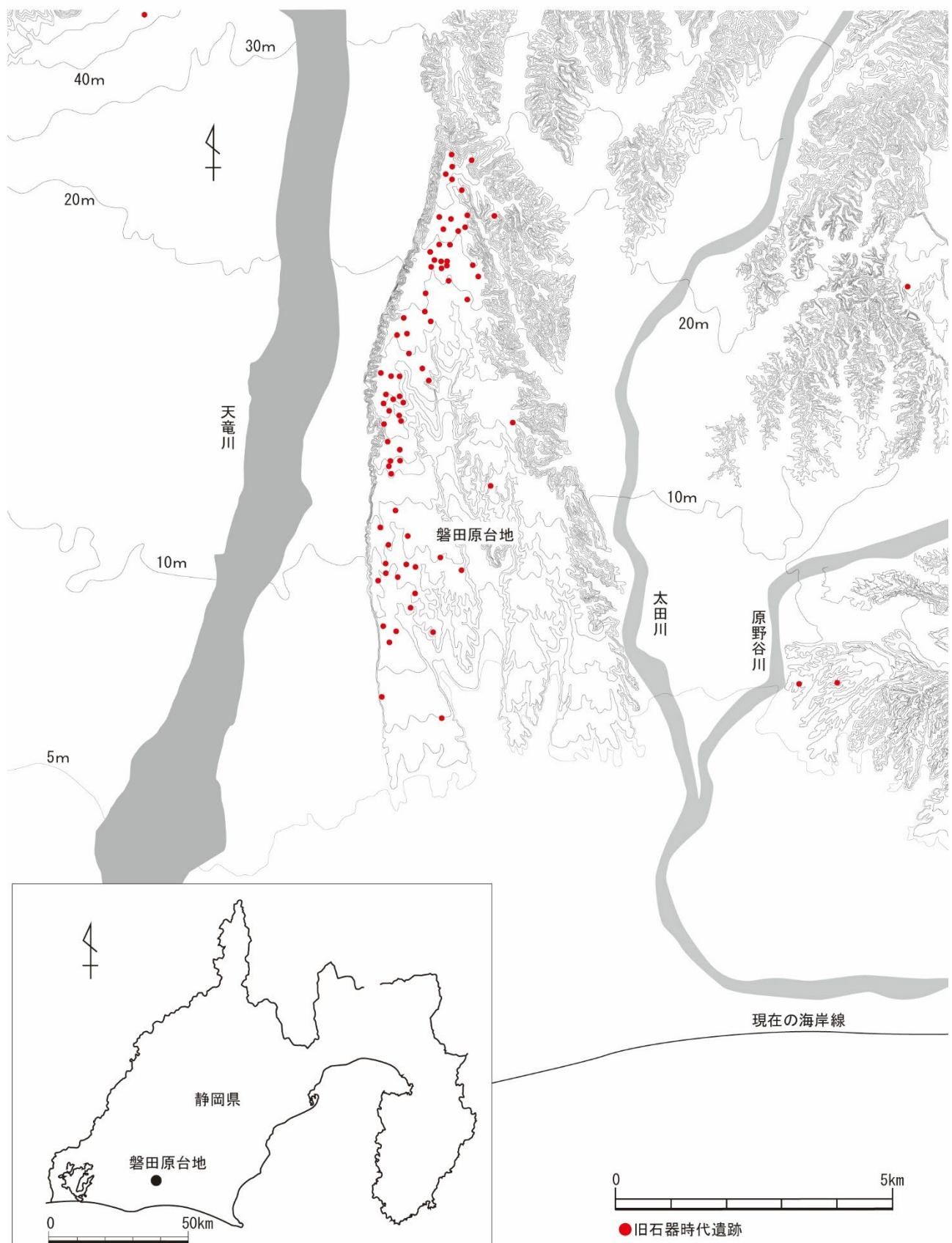


図 1 磐田原台地の地形と旧石器時代遺跡の分布

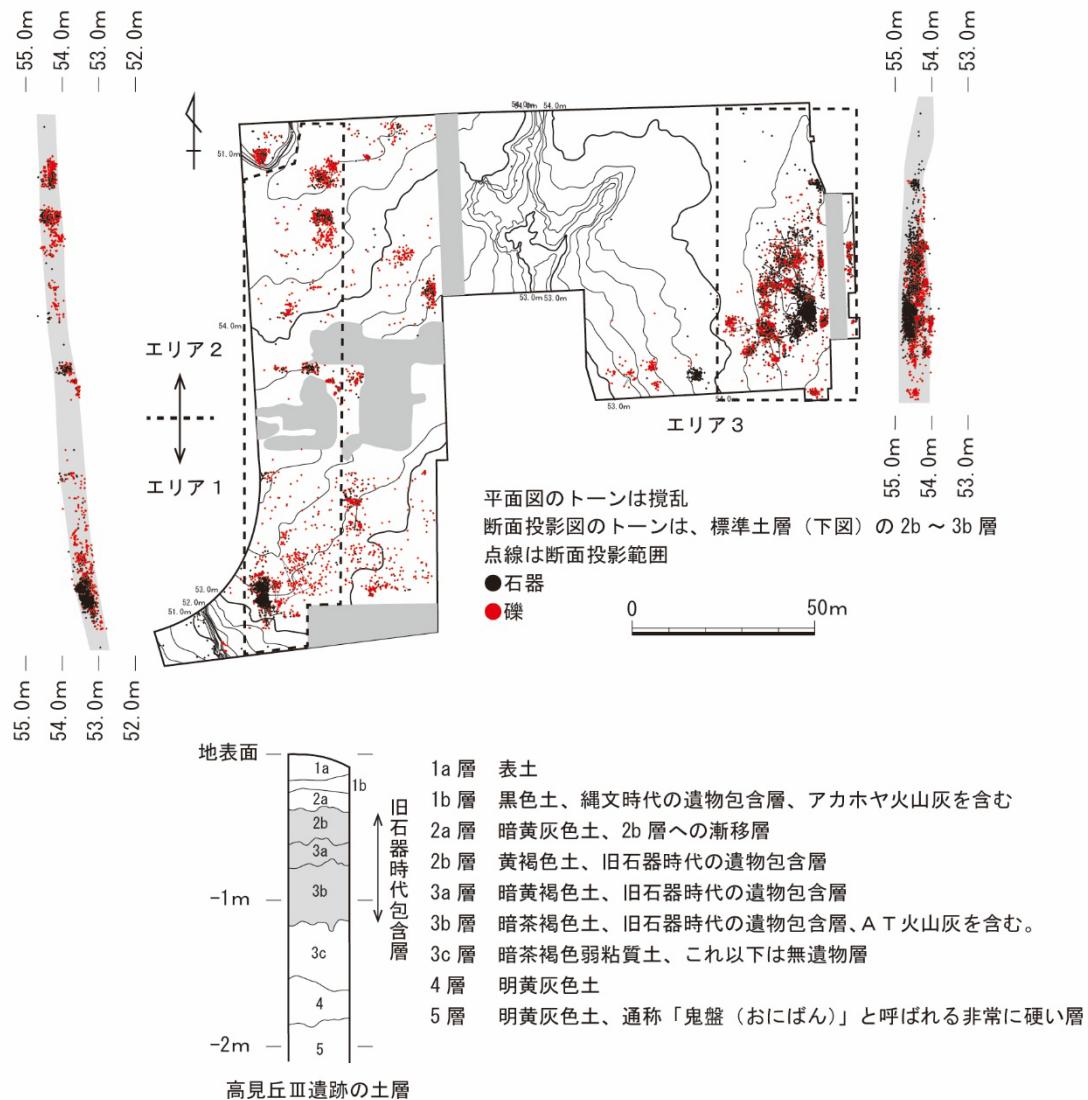


図2 高見丘Ⅲ遺跡での遺物出土状況

## 2 不定形剥片剥離技術・不定形剥片製石器を主体とする石器群の把握

本稿では、勾坂中遺跡で「指標的な要素を欠く」という表現に該当する石器群を不定形剥片剥離技術・不定形剥片製石器を主体とする石器群と読み替え、以下では、「不定形剥片系石器群」とする。その例として、高見丘Ⅲ遺跡のエリア3（図2）で出土した石器のうち、シルト岩の個体別資料Si1-Si001として報告した石器群（図3）を検討する。この個体別資料167点の内訳は次のとおりである。

ナイフ形石器 11点 加工痕もしくは使用痕のある剥片 3点 石核 11点 剥片・碎片 142点

この個体別資料は、原石もしくは分割した原石の状態で搬入され、搬入後、さらに分割して複数の石核を製作している（図3-1、2）。石核に残る剥片剥離痕からは、小型の縦長剥片や不定形剥片が剥離されたと考えられる。剥片剥離を示す接合資料（図3-3）は例が少ないが、小型の縦長剥片や幅広の縦長剥片を剥離したことを見出している。ナイフ形石器（図3-4～9）の素材の形態を復元すると、小型の縦長剥片や不定形剥片を使用したと考えられる（富樫 2010）。

このように、個体別資料Si1-Si001からは、原石を搬入して小型の縦長剥片や幅広の縦長剥片、不

定形剥片を剥離したことがうかがえ、主要な石器であるナイフ形石器もこれらの剥片を素材にして製作されたと考えられる。また、エリア3で出土した他の個体別資料には、断面を転移しながら不定形剥片を剥離した接合資料がある。

一方、エリア3では通常の縦長剥片（図4-1～3）も出土している。これらはいずれも単独個体であること、エリア3では縦長剥片を連続剥離したことを示す資料がないことから、これらが剥離されたのはエリア3以外の場所である。例として、谷をはさんでエリア3の向かい側にあるエリア1（図2）では、縦長剥片を連続剥離したことを示す接合資料が複数得られている（図4-8～10）。そして、エリア1で出土したナイフ形石器も縦長剥片を素材としている（図4-4～7、ナイフ形石器の素材については、富樫2010）。

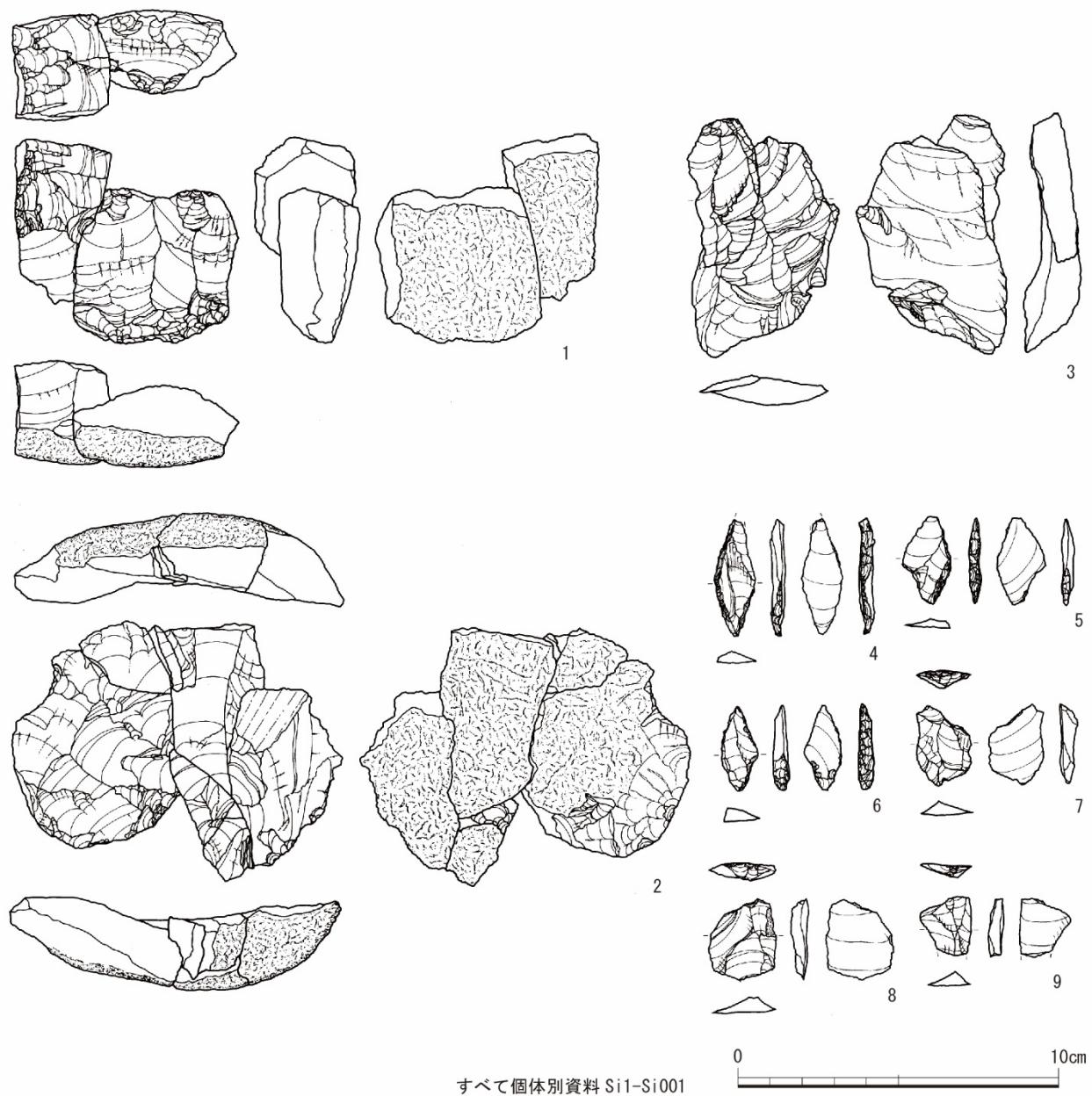


図3 高見丘Ⅲ遺跡エリア3出土の石器

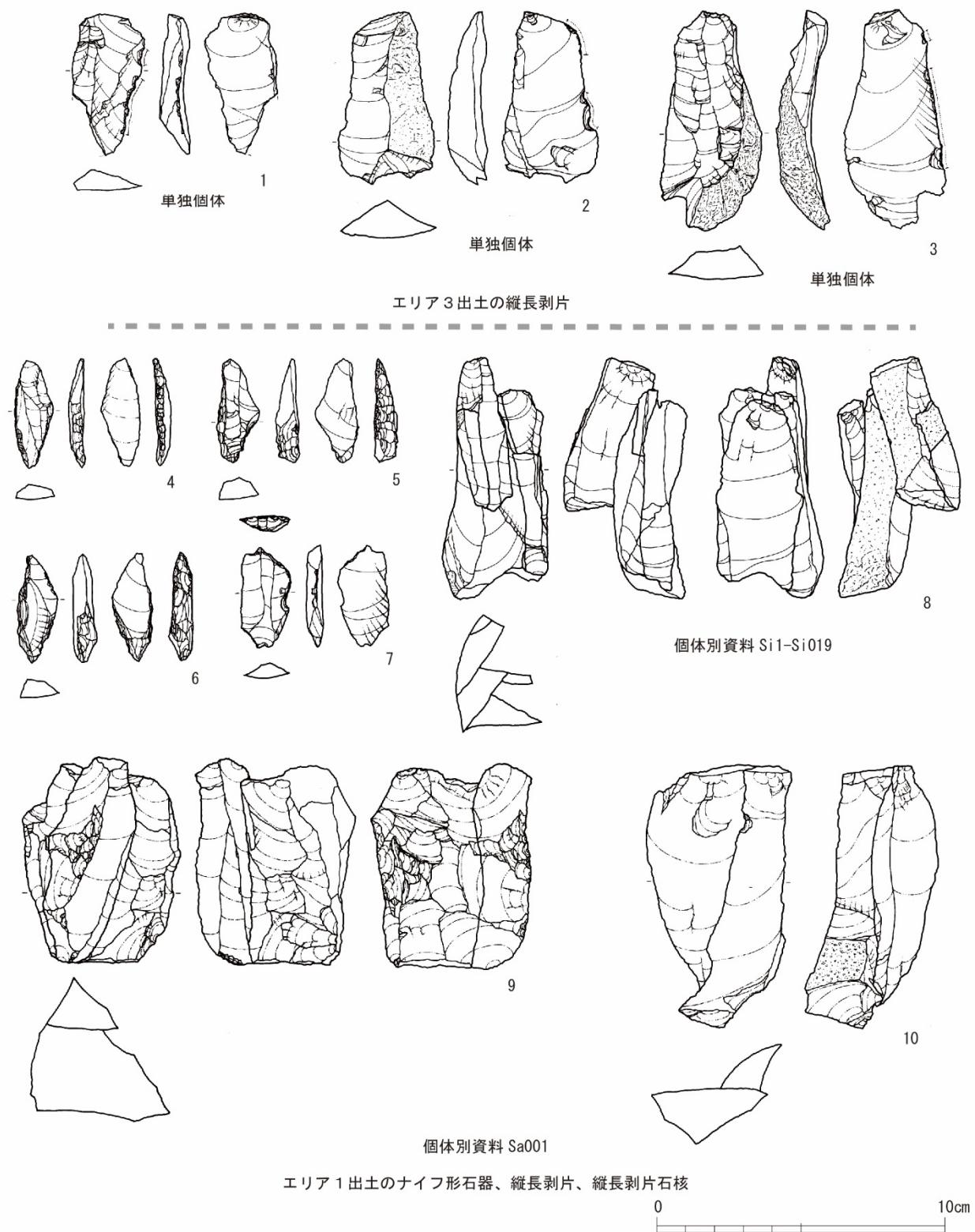


図4 高見丘Ⅲ遺跡エリア3出土の縦長剥片、エリア1出土の石器

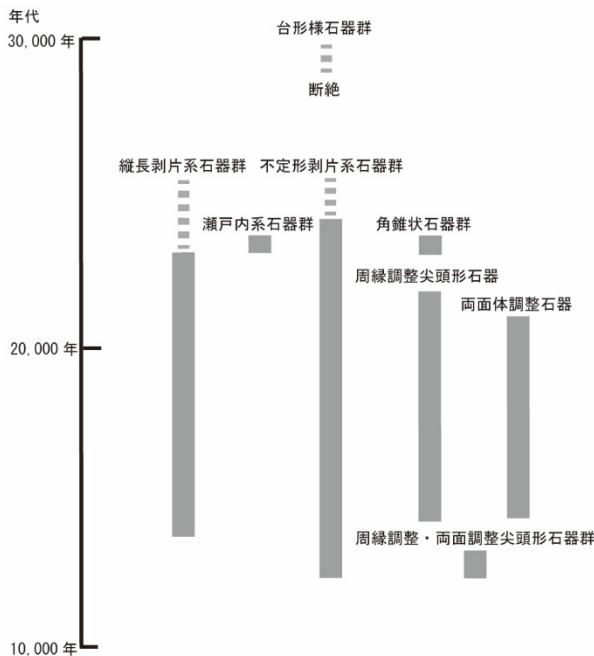


図5 磐田原台地における石器群の変遷（富樫 2016 を改変）

### 3 不定形剥片系石器群の編年的位置と存在意義

不定形剥片系石器群は、編年上に特定の位置を与えるのではなく、時期を通じて普遍的な存在と考えた方が理解しやすい。定形剥片を連続剥離して定形的な石器を量産する技術は、規格性、画一性が優れている一方、技術上の融通幅が狭いため、石材の消費効率が劣り、石材不足への対応の点で課題がある。そのため、これを補完する石器群の存在が不可欠である。不定形剥片剥離技術は、規格性や画一性が少ないため、技術上の融通幅が広く、石材の消費効率が良く、石材不足に柔軟に対応できる。

このように、規格性のある技術と柔軟性のある技術の二本立てからなる構造が成立していたことによって、技術の安定が担保されていたと考えられる。これが不定形剥片系石器群の存在意義である。

不定形剥片系石器群は、形態を意図した石器の集合体ではないため、特徴的な石器の変遷に着目した編年では居場所がない。人間の行動に伴う石器群の消長に着目した時、その存在が浮上する（図5）。

筆者自身、「モノとしての石器群の変遷から大きく離陸し、むしろモノを媒介とする人間の行動の歴史」（田村 2006）への転換を図りたい。

#### 引用・参考文献

- 進藤貴和子 1996 「磐田原台地の石器群編年をめぐって」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』 51-52, 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
- 鈴木忠司編 1994 『勾坂中遺跡群発掘調査報告書』静岡県企業局、磐田市教育委員会
- 鈴木忠司・竹内直文編 1996 『勾坂中遺跡発掘調査報告書II』静岡県企業局、磐田市教育委員会
- 竹内直文・渡邊武文編 2013 『高見丘遺跡群発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 田村隆 2006 「関東地方の地域編年」 『旧石器時代の地域編年研究』 7-60, 同成社
- 富樫孝志編 1998 『高見丘III・IV遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 富樫孝志 2005 「東海地方におけるナイフ形石器文化終末期石器群の変動」 『石器文化研究 12』 65-90, 石器文化研究会
- 富樫孝志 2010 「高見丘III遺跡出土石器群の石材消費行動」 『静岡県考古学研究 41・42』 11-24, 静岡県考古学会
- 富樫孝志 2016 『後期旧石器時代 石器群の構造変動と居住行動』 226 頁, 雄山閣

## 関東地方における北方系細石刃石器群

(株) 東京航業研究所文化財調査課

諸星 良一

### 1 遺跡分布（図1）

#### （1）地形单位の行動展開

本州の北方系社会集団の一部は、東北地方、新潟県、長野県方面から、山を越え、異郷から、道具装備の機能が限界に達するまで南下し、狩猟採集活動を展開し、関東各地にその痕跡を残した。現在、その遺跡数は百か所以上が確認されており、複数の集団が一定期間に時期を違え、関東地方各地に到来している。

#### （2）認知地図・景観学習・経路探索

北方系社会集団は、基本的に関東地方の地理、生態系、気候に不慣れな余所者（Meltzer2021, 諸星2020）であった。不慣れな土地で、彼らは最初に、故地から関東地方に通ずる経路、景観を探索し、生態系を理解し、脳裏に認知地図を形成し知識を蓄え、生業を展開した。彼らの中には、景観学習が成功し、地域石材を獲得して、石器石材の補充や埋め込み戦略を可能にした集団もいただろう。遺跡の残存状態を考慮すると、河川沿いに線形ルート（Golledge2003, Kelly2003）が形成されたが、現状では拠点的場所に反復的に回帰した可能性は低く、活動の領域（district, Lynch1960, 森1991）が形成できたか不明である。

おそらく、北関東地方から経路を南下すると、多くの台地上で判読性（legibility）（Lynch1960, Golledge2003）が高く視認しやすい、場所を特徴づける特徴的な地形（landmark）、環境が存在しないことが要因であった可能性がある（Golledge2003, Lynch1960, 森1991）。

### 2 石器群の技術構造（図2・3）

#### （1）技術構造の特徴

北方系細石刃石器群は、有機質尖頭器の植刃（細石刃）、尖頭器、剥片製石器と礫器、斧形石器などの道具組成とこれらを生産する細石刃生産技術、剥片生産技術、石刃技術により構成されている。細石刃石核は、細石刃の生産性の維持、生産停止のリスク分散のために、複数の技術型式により階層的に構成された分散並行システム（諸星2022b・2023a・2024a）を保有し、石材資源の保有量、生態系や生業活動、移動場所に応じて、「札滑型」細石刃石核、「峠下型」細石刃石核、簡易形細石刃石核などの技術型式に可変的に置換し、植刃生産技術の「公差」（Kuhn and Shimelmitz 2023）の制御と均衡を指向したものと推定される。

#### （2）細石刃石器群の細石刃石核の構成

関東地方の北方系細石刃石器群は、以下の細石刃石核の技術型式で構成されている。

- ①「札滑型」細石刃石核
- ②「札滑型」+「幌加型」細石刃石核
- ③「札滑型」+「峠下型」細石刃石核
- ④「幌加型」+「峠下型」細石刃石核
- ⑤「幌加型」細石刃石核
- ⑥「白滝系」細石刃石器群

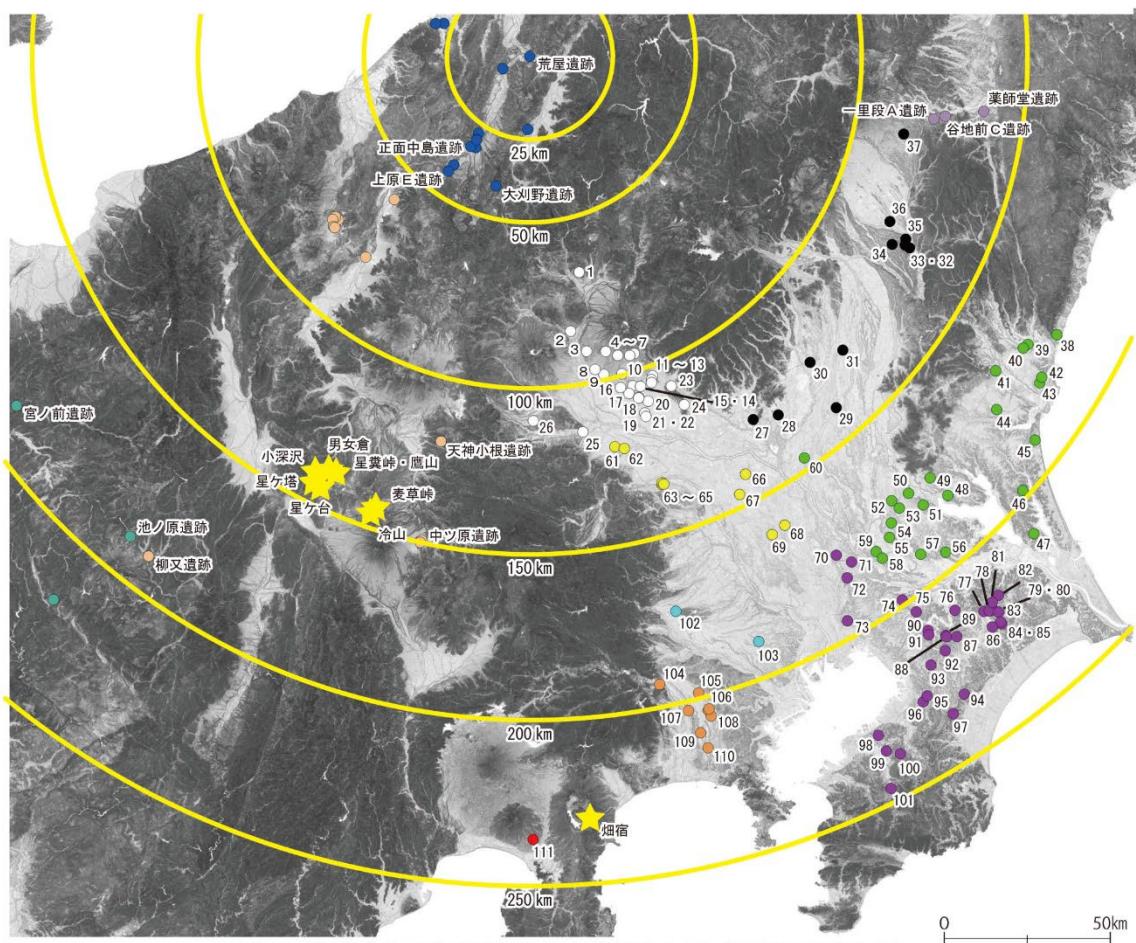


図1 関東地方の北方系細石刃石器群分布図（周辺地域を含む）

No.	遺跡名・群馬県	No.	遺跡名・栃木県	No.	遺跡名・茨城県	No.	遺跡名・千葉県	No.	遺跡名・静岡県
1	三峰山遺跡	29	寺野東遺跡	57	沖餅遺跡	84	加茂台遺跡		
2	押手遺跡	30	八剣遺跡	58	柏原遺跡	85	一ツ塚遺跡		
3	上原遺跡	31	権現山遺跡	59	郷州原遺跡	86	上宿遺跡		
4	龍ノ口遺跡	32	星の宮A遺跡	60	行屋西遺跡	87	墨古沢遺跡		
5	芳見沢遺跡	33	三輪御城跡	61	浅見山I遺跡	88	高岡大山遺跡		
6	桟形遺跡	34	タヤ久保I遺跡	62	将監塚遺跡	89	高岡大福寺遺跡		
7	栗原東遺跡	35	那須官衙閑連遺跡	63	白草遺跡	90	間野台貝塚第2次		
8	新田上遺跡	36	片府田富士山遺跡	64	鞍ヶ谷戸遺跡	91	吉見台A遺跡		
9	鳥取福藏寺II遺跡	37	逆室上東畠遺跡	65	北篠場遺跡	92	木戸場遺跡A地点		
10	日光道東遺跡	No.	遺跡名・茨城県	66	道上遺跡	93	木戸先遺跡		
11	稻荷山V遺跡	38	宮脇遺跡	67	下崎中郷遺跡	94	桟形遺跡		
12	和田遺跡第1地点	39	額田大宮遺跡	68	逆井遺跡	95	六通神社南遺跡		
13	馬見岡遺跡第12地点	40	富士山遺跡	69	天神前遺跡	96	草刈六之台遺跡		
14	社南遺跡	41	馬場尻遺跡	70	野中遺跡	97	中鹿子第2遺跡		
15	今井見切塚遺跡	42	向野No.1遺跡	71	聖人塚遺跡	98	美生遺跡群第6地点		
16	頭無遺跡	43	後野遺跡	72	市野谷芋久保遺跡	99	東上泉遺跡		
17	下触牛伏遺跡	44	羽黒山遺跡	73	雷下遺跡(8)	100	和良比本山遺跡第IV地点		
18	光仙房遺跡B区	45	荒地遺跡	74	一本桜遺跡	101	向郷菩提遺跡		
19	三和工業団地IV遺跡	46	木工台遺跡	75	松崎VII遺跡	No.	遺跡名・東京都		
20	大雄院前遺跡	47	今林遺跡	76	台方下平I遺跡	102	狹山遺跡		
21	八ヶ入遺跡	48	寺畠遺跡	77	駒井野荒追遺跡	103	大ヶ谷戸遺跡		
22	下田遺跡	49	原田北遺跡	78	取香和田戸遺跡	No.	遺跡名・神奈川県		
23	上渕名裏神谷2遺跡	50	東岡中原遺跡	79	東峰御幸畠西遺跡	104	大保戸遺跡		
24	下渕名塚越遺跡	51	十三塚A遺跡	80	一鉢田甚部衛山遺跡	105	古淵B遺跡		
25	上落合上野遺跡	52	面野井北ノ前遺跡	81	大安場V遺跡	106	月見野上野遺跡		
26	落合遺跡	53	手代木田向西遺跡	82	キサキ遺跡第4地点	107	勝坂遺跡第45次調査		
No.	遺跡名・栃木県	54	西栗山遺跡	83	大栄十余三新堀遺跡	108	長堀北遺跡		
27	エグロ遺跡	55	鎌田遺跡	84	寺尾遺跡	109	寺尾遺跡		
28	赤羽根遺跡	56	岡坪遺跡	85	下土棚諫訪ノ棚遺跡	110			

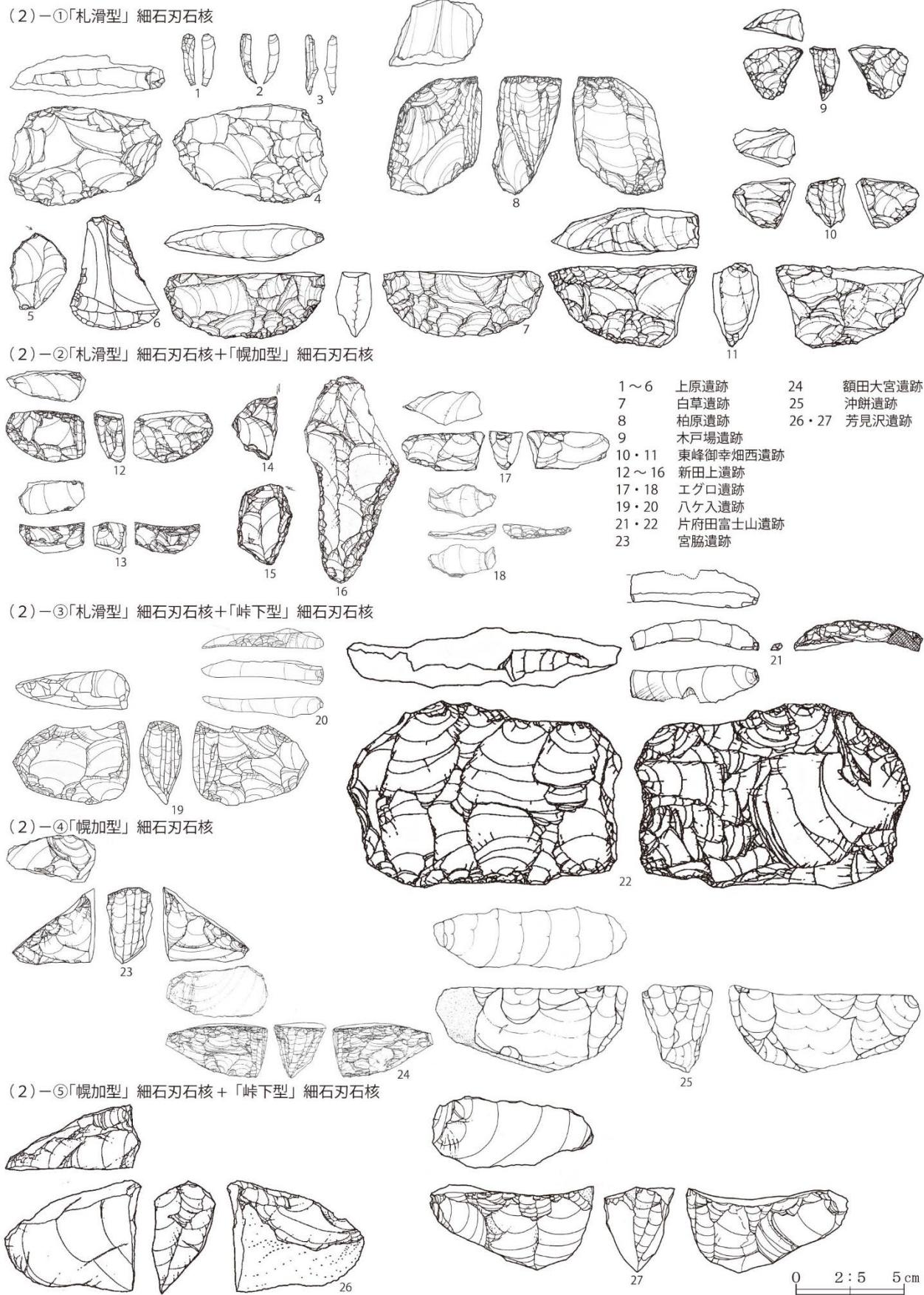


図2 関東地方の細石刃石核の構成 (1)

- ⑦ その他の細石刃石器群
- 「荒川台型」細石刃石器群
  - 「相模野系」細石刃石器群

### 3 関東地方の北方系細石刃石器群の年代的スケール（図4）

関東地方の北方系細石刃石器群は、地域火山灰の降灰層位との石器群の出土層位との相対的関係で理解が可能である。

- (1) 第1段階—浅間白糸軽石 (As-Sr) 降灰以降～浅間板鼻黄色軽石 (As-YP) 降灰以前
- (2) 第2段階—浅間板鼻黄色軽石 (As-YP) 降灰以降
- (3) 第3段階—浅間草津黄色軽石 (As-K) 降灰以降

### 4 結論

- ・北方系細石刃石器群は関東地方で文化的適応できたのか？

関東地方における当該石器群の分布、貢岩類の保有状況、各類型の石器群の分類、技術型式変遷の予察を実施した。これらの石器群は、降灰火山灰の層位と降灰年代との相対的関係で整合的に布置され、「札滑系」細石刃石器群の到来から、寡少な「白滝系」細石刃石器群の到来で終焉している。その期間は、約 5,000～6,000 年間であり、短期間に関東地方で生業活動を展開した後、その生業痕跡が消滅している。

これらの石器群は、組成、珪質貢岩製細石刃石器群の保有量、細石刃石核の数量の傾向から、北関東地方に到達するまでに、手持ちの石器群の大部分が消費されていた可能性があるが、南関東地方の房総地方にまで南下している。僅かに、地域石材を使用した細石刃石核が存在するようだが、経路探索と地域石材資源の開発に成功した痕跡は、各遺跡の組成を確認した現状では過少である。だが、足尾山地のチャートの原産地、房総半島の珪質貢岩や他の石材原産地に到達した社会集団が存在した可能性は否定できない。

筆者は、現状では「札滑系」北方系細石刃石器群は、獲物を求めて越山し南下したが、地域石材の局所的分布の経済的制約により、細石刃石核の製作、生産する細石刃のサイズの「公差」が維持できず、北関東地方以南には適応できなかつた可能性を指摘しておきたい。おそらく、彼らは、南関東地方では、タッチ・アンド・ゴーのような行動で狩猟活動を実施し石器群が機能しなくなる寸前でリスクに対処するために (Torrence 1983, Weissner 1982)、経路を引き返すか、進路や生業を変更した可能性がある。

### 謝辞

本稿を草するにあたり、岩宿博物館、相模原市立博物館、鈴木秋平氏、小菅将夫氏、長澤有史氏からは資料実見に際してご配慮を賜った。早田 勉氏からは、図4のダイヤグラムを監修して頂き、火山灰編年学、古気候・古環境について種々のご教示を賜った。栗原伸好氏からは、大保戸遺跡の報告書を恵在して頂きご教示を賜った。末筆ではありますが、皆様に心よりお礼を申し上げます。

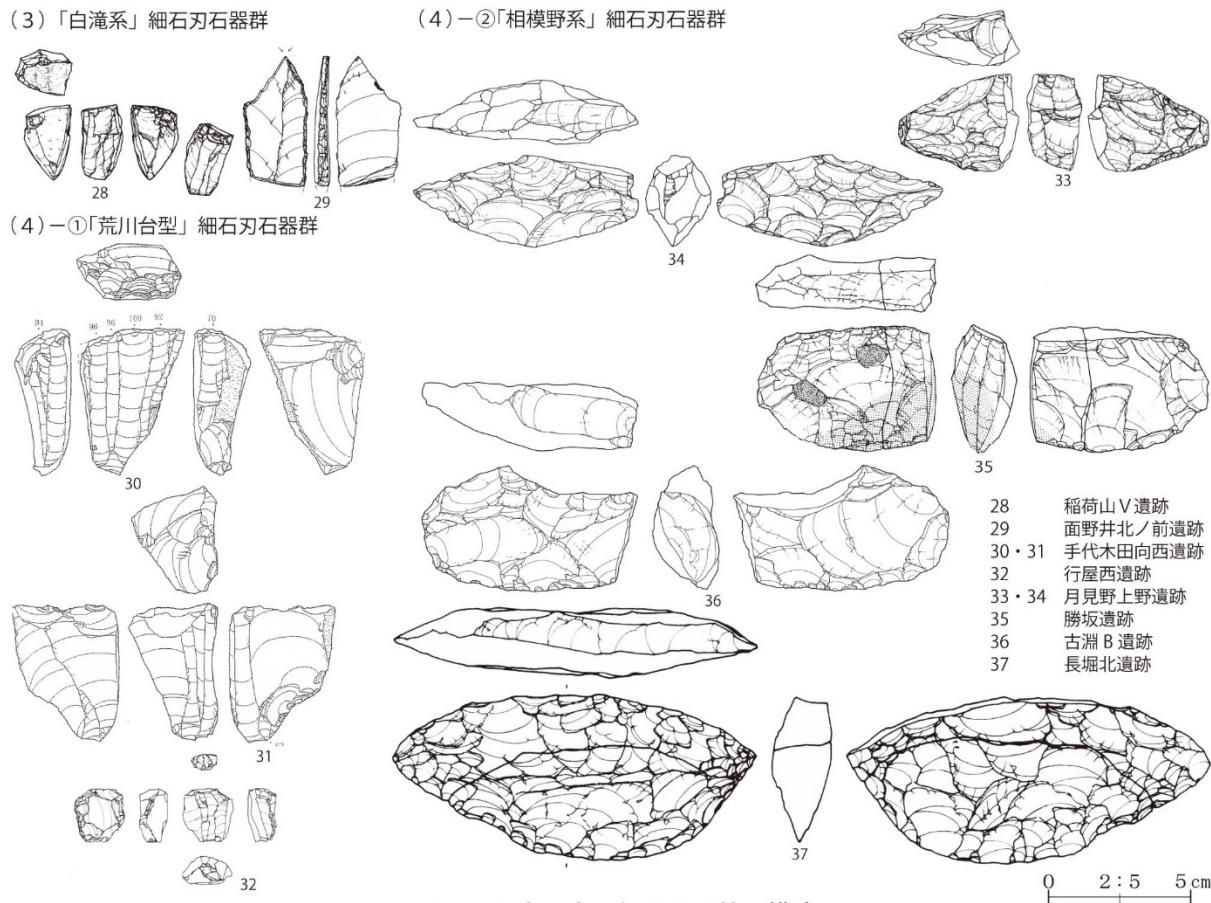
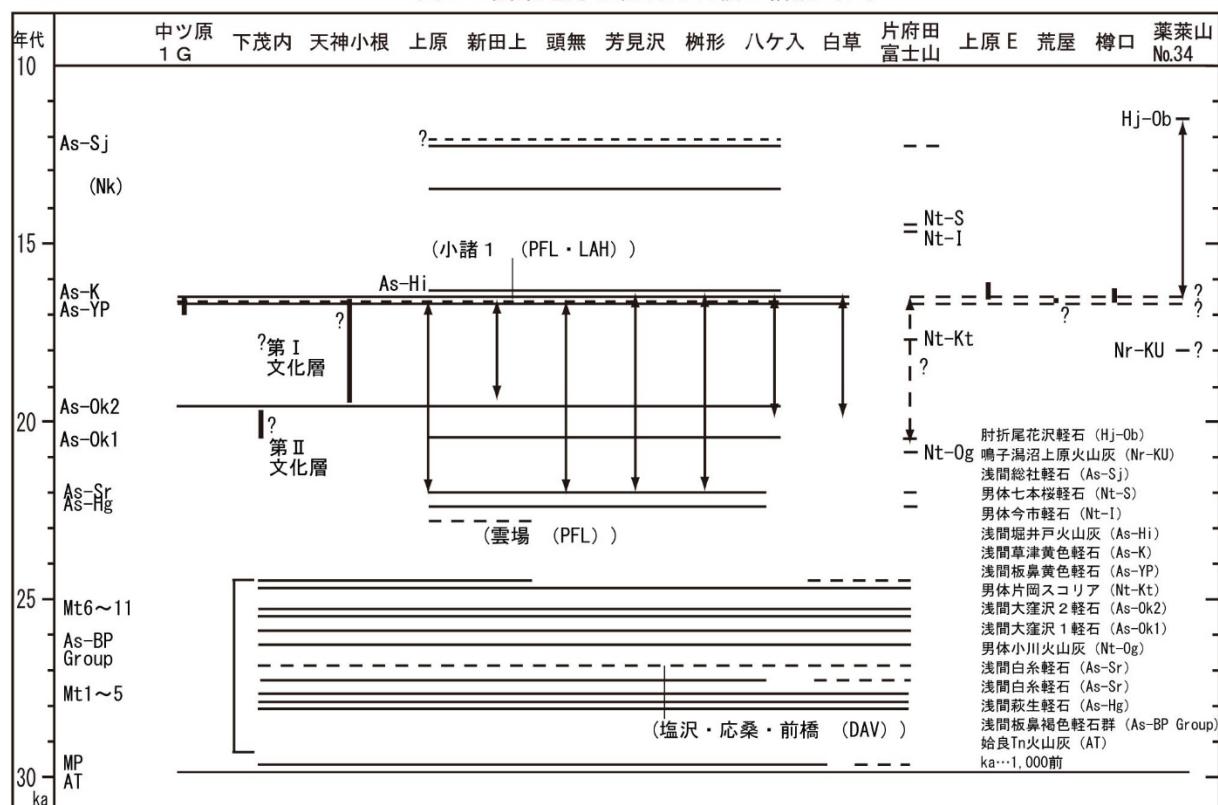


図3 関東地方の細石刃石核の構成 (2)



※本図は筆者が作成し早田勉氏が監修した。

図4 降下火山灰および石器群出土層位ダイヤグラム (諸星 2024a を改編)

## 引用・参考文献

(※報告書・一部の論考、図の出典は、紙面の容量の都合から非掲載、割愛させていただいた。ご海容願いたい。)

邦文

東 浩紀 2023a 『訂正可能性の哲学』, 359 頁, 東京, ゲンロン

東 浩紀 2023b 『訂正する力』, 243 頁, 東京, 朝日新聞社

岡本耕平 1982 「認知距離の研究」『人文地理』, 第 34 卷第 5 号, 45-64 頁

小塩隆士 2012 『効率と公平を問う』, 235 頁, 東京, 日本評論社

田辺晋・石原与四郎 2020 「東京低地南部における沖積層の基盤地形」『地質調査研究報告』, 第 71 卷第 3 号, 201-213 頁

羽生和紀 2013 「環境認知」『環境心理学研究』, 第 1 卷第 1 号, 12-18 頁

村越 真 1987 「認知地図と空間行動」『心理学評論』, 30 卷 2 号, 188-207 頁

森 晃徳 1991 「認知地図」『認知科学のフロンティア I』, 93-101 頁, 東京, サイエンス社

諸星良一 2020 「赤城山南麓の北方系細石刃石器群の文化受容」『シンポジウム 旧石器から縄文へ - 中部日本の地域的様相』

予稿集, 1-8 頁, 東京, 明治大学黒曜石研究センター

諸星良一 2022a 「5. 関東地方からみた魚沼地域の細石刃石器群」『晩水期・細石刃文化の資源利用』, 70-76 頁, 津南町, 苗場山ジオパーク振興協議会

諸星良一 2022b 「上原 E 遺跡の剥片製細石刃石核の技術形態の分析」『苗場山麓ジオパーク研究集録』, 4, 57-77 頁, 津南町, 苗場山ジオパーク振興協議会

諸星良一 2023a 「樽口遺跡の A-MS 石器群の技術構造の分析」『三面川流域の考古学』, 20, 1-34 頁

諸星良一 2023b 「北方系社会集団が海を渡った時…」『日本列島における細石刃石器群の展開』, 69-73 頁, 東京, 明治大学黒曜石研究センター

諸星良一 2024a 「本州における「峠下型」細石刃石核の実存」『法政考古学』, 第 50 集, 29-44 頁, 東京, 法政考古学会

諸星良一 2024b 「山形県湯の花遺跡の黒曜石製細石刃石核の再検討」『旧石器研究』, 20, 69-78 頁

諸星良一 2025 「山形県湯の花遺跡の黒曜石製細石刃石器群」『利根川』, 第 47 号, 91-106 頁

英文

Alberta, P.G., D. McLean, H.M. Buckland, T. Suzuki, G. Jones, R. A. Staff, S. Vineberg, I. Kitaba, K. Yamada, H. Moriwaki, D. Ishimura, K. Ikehara, C. J. Manning, T. Nakagawa and V. C. Smith 2024 Cryptotephra preserved in Lake Suigetsu (SG14 core) reveals the eruption timing and distribution of ash fall from Japanese volcanoes during the Late-glacial to early Holocene. *Quaternary Science Reviews*, 324, pp.1-24.

Bettinger, R. L., M. A. Baumhoff. The Numic Spread; Great Basin Cultures in Competition. *American Antiquity*, Vol.47, No.3, pp.485-503.

Bettinger, R. L. 2009 Hunter-Gatherer Foraging: Five Simple Models. 111p, New York, Eliot Werner publications, Inc.

Bleed, P. 1986 The Optimal Design of Hunting Weapons: Maintainability or Reliability. *American Antiquity* Vol.51, No4, pp. 737-747.

Bleed, P. 2002 Cheap, Regular, and Reliable: Implications of Design Variation in Late Pleistocene Japanese Microblade Technology. *Archaeological Papers of the American Anthropological Association*, Volume 12, Issue 1 pp.95-102.

Golledge, R. G. 2003 Human Wayfinding and Cognitive Maps. *Colonization of Unfamiliar Landscape*, edited by Rockman, M., J. Steele, pp.25-43, New York, Routledge.

Jennings, T. A., C. D. Pevny, W. A. Dickens. 2010 A Biface Core Efficiency Experiment implications for Early Paleoindian Technological Organization. *Journal of Archaeological Science*, 37, pp.2155-2164.

Kelly, R.L. 1988 The Three Sides of a Biface. *American Antiquity*, Vol.53, No.4, pp.717-734.

## 第2部

- Kelly, R.L.1995 The Foraging Spectrum; Diversity in Hunter-gatherer Lifeways. 382p, Washington DC, Smithsonian Institution Press.
- Kelly, R. L.2003 3 Colonization of new land by hunter-gatherers. Colonization of Unfamiliar Landscape, edited by Rockman, M., J. Steele, pp.44-58, New York, Routledge.
- Kuhn, S.L., R. Shimelmitz.2023 From hafting to retooling: Miniaturization as tolerance control in Paleolithic and *Neolithic blade production*. Journal of Archaeological Method and Theory. Volume 30, pp.678-701.
- Lynch, K. 1960[1990] The Image of the City. 202p, Massachusetts, The M.I.T. Press.
- Meltzer, D. J.2009[2021] First peoples in a new world Second Edition. 514p, Texas, Cambridge university press.
- Rockman, M. 2003 1 Knowledge and learning in the archaeology of colonization. Colonization of Unfamiliar Landscape, edited by Rockman, M., J. Steele, pp.3-24, New York, Routledge.
- Speth, J.D.2016 Paleoindian Bifaces and Mobility; Are We Baking Up the Wrong Tree? History and Archaeology- Connecting the Dots; Papers in Honor of David H. Snow. edited by Brown, E. J., C. J. Condé and H. K. Crotty, pp.251-262, Papers of the Archaeological Society of New Mexico 42. New Mexico, Archaeological Society of New Mexico.
- Torrence, R. 1983 Chapter 3 Time budgeting and hunter-gatherer technology. Hunter-gatherer economy in prehistory: A European perspective. edited by Bailey, G, pp.11-22, Cambridge, Cambridge University Press.
- Torrence, R. 1989 Chapter 7 Retooling; towards a behavioral theory of stone tools. Time, Energy and Stone Tools, edited by Torrence, R, pp.57-66, New York, Cambridge University Press.
- Wiessner, P.1982 Beyond Willow Smoke and Dogs' Tails: A Comment on Binford's Analysis of Hunter-gatherer Settlement System. American Antiquity Vol.47, No.1, pp.171-178

## 相模野台地における狩猟具の様相—L1S 層出土石器群を中心とした予察—

相模原市立博物館

長澤 有史

## はじめに

相模野台地における旧石器時代終末～縄文時代草創期初頭の狩猟具は、尖頭器と細石刃の2種類が出土しており、これまで多くの議論が重ねられている（近年の例として白石 2003、2018、2023、鈴木 2021、堤 2011、仲田 2016 など）。論点の一つに大形尖頭器や大形石斧を標式とする神子柴・長者久保系石器群の定義がある。神子柴・長者久保系石器群の特徴である尖頭器・石斧・石刃技法による加工具、これらをすべて有する石器群は相模野台地では顕著ではない。実態として尖頭器あるいは細石刃が主体の遺跡や、両者が共伴する遺跡が認められる。そこで本発表では L1S 層を対象とし、両石器群の様相をまとめ、どのような解釈ができるのか予察を行う。

## 1 L1S 層出土石器群への視点

筆者は出現期土器段階と隆線文土器段階および B0 層上部～L1S 層下部の石器群について石器製作の様相や、尖頭器・細石刃の共伴関係を検討し、意見をまとめている。まず出現期土器段階（L1S 層相当）と隆線文土器段階（FB 層下部相当）での石器群を狩猟具と石斧の観点から整理し、尖頭器+細石刃から、尖頭器+有舌尖頭器+石鏃といった狩猟具が複数器種にまたがる点を追認した（長澤 2024）。

そして、相模野台地周辺部の B0 層上部～L1S 層下部から出土した 3 遺跡 4 文化層を対象に、尖頭器と細石刃の共伴関係を指摘し、尖頭器と細石刃の製作技術から剥片剥離技術の共通性を確認した。具体的には尖頭器の厚みを減ずる剥離と細石刃核の器体成形剥離が共通する点である（砂田 1993、長澤 2025a）。それでは尖頭器と細石刃が L1S 層上部と下部でどのような様相なのか整理し、それぞれの変化を素描する。以下に行う検討では、尖頭器石器群、細石刃石器群として狩猟具の比率から便宜的に二分し、記載する。

## 2 尖頭器石器群の概要

- ① L1S 層下部：下森鹿島遺跡第 I 文化層、用田鳥居前遺跡、吉岡遺跡群 A 区
- ② L1S 層上部：寺尾遺跡第 I 文化層、相模野 No. 149 遺跡 L1S 層上部、栗原中丸遺跡第 I 文化層、  
勝坂遺跡第 45 次調査、月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点第 II 文化層、  
長堀北遺跡第 II 文化層（L1S 層中位）ほか

尖頭器は FB 層下部の隆線文土器段階まで出土しており、製作技術、平面形態など緩やかな変化を続けながら利用された。L1S 層出土の尖頭器の形状は、木葉形を基本とし、長堀北 II では幅広木葉形が主である<sup>(1)</sup>。いずれも器体中央軸付近まで達する平坦剥離がみられる。上層の一群では、形状が多様化する傾向がみられ、特に舌部付近が逆三角形になるものに勝坂 45 次がある。また栗原中丸 I ではホルンフェルス製の大振りな尖頭器が出土しており、表面の中央部に高まりが残置し、それを除去する際に折損し廃棄されたことがうかがえ、製作途上の折損品と考える。後続する吉岡遺跡群 C 区（漸位層～FB 層最下部相当）では、木葉形を中心に、最大幅が基部付近にあるものや両側縁並行尖頭器が加わり、平面形態が多様化する。L1S 層出土の尖頭器群の特徴に、尖頭器単一の遺跡が少ない点が指摘できる。上記で上げた遺跡では、L1S 層下部の吉岡 A 区が該当する。それ以外の遺跡では多様な形態の細石刃核や細石刃が認められ、細石刃核の形状は一様ではない。それらの検討は後述する。

### 3 細石刃石器群の概要

①L1S層下部：大保戸遺跡第1文化層、下鶴間長堀遺跡第I(a)文化層、相模野No.149遺跡L1S層下部、下土棚諏訪ノ棚遺跡

②L1S層上部：上和田城山遺跡第I文化層

細石刃石器群はいずれも凝灰岩を主体としたものが多い。ここでは石核成形の状況を基準に4類型を設定する。

A類：分割個体や肉厚な剥片を素材とし、打面部および下端部から石核成形を行うもの。舟底状となるものも含む。

B類：分割個体や肉厚な剥片を素材とし石核成形があまり行われないもの。A類よりも粗雑な成形で、分割面・礫面などが部分的に残置し、特定の形状に集約できない一群も便宜的に含める。

C類：剥片を折取り、その小口面から細石刃剥離を行うもの。細石刃剥離に先行し、稜形成の後に削片を取ることで、細石刃作業面を整える一群も含める。

D類：角柱形もしくは稜柱形の一群。素材が不明なものが多い。

大保戸ではA類、C類が認められ(図1-1・9・10)、C類の素材とみられる縦長剥片が出土している。遺跡付近を流れる相模川にて獲得した凝灰岩が定型的な石刃状剥片などの素材として考えられ、原産地付近での剥片獲得とその利用がうかがえる。下鶴間長堀I(a)はA~D類が認められ、形態的なバリエーションが多く、全体的な傾向ではB類が多い(図1-2・5・6・11・12)<sup>(2)</sup>。下土棚諏訪ノ棚ではA~C類が伴って出土している。特に目立つのが整ったA類と、C類が挙げられる(図1-3・4・13・14)。C類の細石刃核原形、すなわち剥片を折取り成形したものが十数点確認でき、注目される。また、上記の3遺跡には大形剥片や石刃状剥片が含まれ、特に下鶴間長堀では10cmを超える大形スクレイパーが6点出土している。これらはスクレイパーとして報告されているが、その大きさや反りの少なさから、C類の細石刃核素材としても評価できる。相模野No.149ではD類がみられ、頁岩・チャートが主石材である。まとめるとL1S層下部ではA~C類の細石刃核に、石刃状もしくは縦長剥片が伴う事例が主体的にみられ、一部にD類が含まれている(図2)。

L1S上層の上和田城山ではB類が主体であり、C・D類が含まれる(図1-7・8・18)。下層の一群とは様相が異なり典型的な舟底状とはいいにくい。円礫まで復元可能な接合資料が3例あり、肉厚な分割体から、打面および作業面が確保できればそのまま細石刃剥離を行うものが多くA類が認められない。さらに大形剥片や石刃状剥片も下層に比べると少数である。この点から、細石刃核の成形および剥片獲得の様相に差異がみられる。これらの細石刃石器群が複数の技術構成を有している点は仲田大人民により指摘されている(仲田2003)。

### 4 尖頭器の変化と細石刃核の変化

尖頭器の形態はどちらも木葉形が基本とし、L1S層の上下でやや変化がみられる。上層では細身木葉形のもの、基部付近に最大幅があるもの、基部を逆三角形もしくはV字状に仕上げるものなどがある。変化する点は舌部付近の仕上げが挙げられる。また上層・下層の共通点は尖頭器のサイズ差があり、大きく大形と小形に二分できる。おそらくは素材剥片の大きさや、製作中の破損に伴う再加工がその要因として想定される。

細石刃核は複雑な様相を呈する。L1S層下部の細石刃主体の一群では上記のA~D類が見られ、多様な細石刃核が出土している。さらに尖頭器石器群に伴う一群から、以下の2類型を追加する。

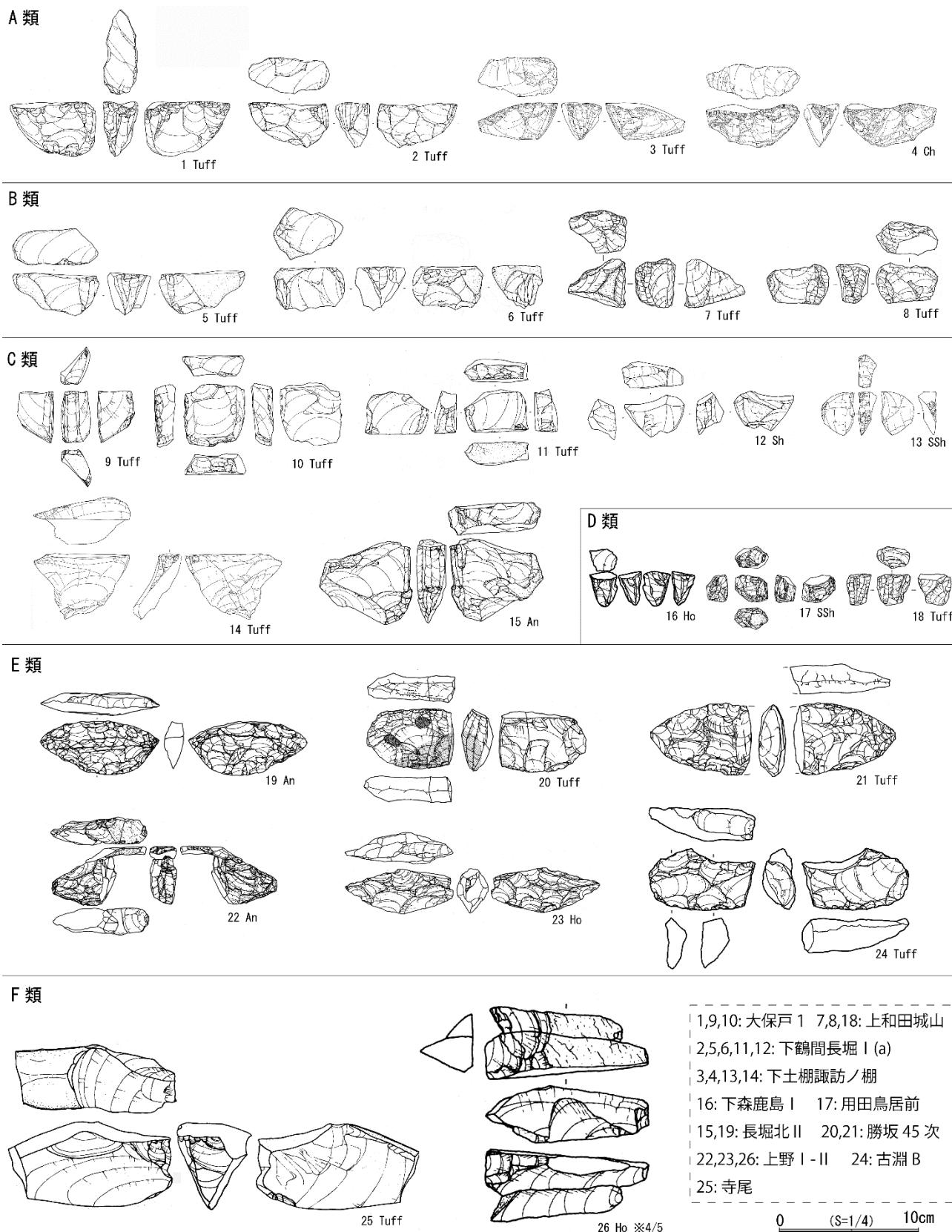


図1 L1S層における細石刃核の分類（細石刃核原形含む）

E類：両面加工体から削片を剥離し、打面形成をしたのちに細石刃剥離を行うもの。

F類：石核成形が乏しく、剥片素材の端部から細石刃剥離を行うもの。一部に細石刃作業面を整えるものを含む。

L1S層下部の下森鹿島I、用田鳥居前ではD類の角柱・稜柱形の一群が出土しており、L1S上層の尖頭器石器群では確認できない。下森鹿島Iではホルンフェルスを素材とし、細石刃剥離面が側面に位置している（図1-16）。用田鳥居前では、頁岩製のD類（図1-17）以外にも、珪質頁岩を利用し正面に細石刃剥離面を有するものが出土しており、細石刃剥離後は細石刃剥離面を切る調整加工により刃部を作出し、スクレイパーとしている。かなり異質な形状であり、上記の6類型に含められない。

L1S層上部になると、最も特徴的なものはE類の長堀北IIである（図1-19）。これは湧別技法によるものと評価でき（白石1993、栗島1993a・b）、さらに削片が11点出土していることから、複数の両面加工体からの細石刃剥離がうかがえる。勝坂45次でも削片系細石刃核が1点出土しており（図1-20）、細石刃は出土していないものの、同様に削片剥離の前段階と推測されるものもある（図1-21）。古淵Bでは凝灰岩製の削片系細石刃核が出土している（図1-24）。これは両面加工体の折れ面から長軸に沿って加撃し、打面を作出している（長澤2025b）。残念ながら出土位置の情報がなく伴う石器も不明であり、参考に留める。他にも尖頭器製作の失敗品を転用しているE類が月見野上野1-IIにて確認できる。この資料はステップが表裏に顕著であり、器体の厚みがうまく除去できず、尖頭器製作を断念したものを素材としている（図1-23）。他にも両面加工体から削片剥離を行い、細石刃を複数枚剥ぎ取るものが1点あり、細石刃核に削片・作業面再生剥片が接合している（図1-22）。さらに別個体の削片が1点あることから、E類の素材が複数あったことが想定できる。F類は、剥片の小口面から細石刃作業面を形成した後に細石刃剥離をしているものに寺尾I、月見野上野1-IIが該当する。寺尾Iでは、肉厚な凝灰岩の端部に細石刃剥離面が認められ、石核形成は乏しい（図1-25）。月見野上野1-IIでは小ぶりの縦長剥片の下端部に細石刃剥離面を設定し、複数剥ぎ取っている（図1-26）。また栗原中丸Iでは、単独出土の頁岩製削器において、下端部に細石刃状の剥離を留めるものを確認しており、ここでは関連資料としてふれる。またC類は長堀北IIの1例のみとなる。

総じて、細石刃核の素材・石核成形の状況は、L1S層上部では多様であることが指摘できる（図2）。尖頭器石器群に共伴するものは、単一の石核成形技術に集約できず、剥片を折取るもの、石核成形が乏しいもの、剥片素材によるもの、両面加工体によるものなど、素材への適応性が高く、さらに細石刃の有用性も高かったことが考えられる。資料実見の中で、月見野上野1-IIでは、報告では細石刃とされているものに、肉厚で横断面が蒲鉾状を呈し尖鋭な側縁ではないもの、平坦打面を有し横断面が整った三角形状のものなどが含まれ、細石刃剥離面の作業面調整を意図した剥片であった可能性がある。これは稜線の整備が円滑な細石刃剥離に必要であったことが、その要因として考えられる（長澤2025a）。この点は細石刃剥離に関する作業面をいかに整えるのか重要な視点として考えている。その反面、尖頭器は形状や成形技術に顕著な差異は認められない。また尖頭器の主石材は安山岩、頁岩、チャート、凝灰岩、ホルンフェルスであり、細石刃核では凝灰岩が主体とし一部に頁岩、チャート、ホルンフェルスなどを利用しており、凝灰岩においてはいくらか使用比率に差異があるが、相互に排他的な石材利用とは評価できない。これは、石材獲得の地理的範囲が大きく異ならず、石材産地とキャンプ地が形成される範囲が大きな差がなかった状況にあったと考えられる。特に黒曜石の僅少さは細石刃石器群の画期として評価する。

## 5 共伴する要因とその歴史的位置づけ

なぜ尖頭器と細石刃は共伴したのか。その要因は明瞭ではない。今回の検討結果を通じて、L1S 層上部の事例を「狩猟具の一時的な補完」として考えることはできないだろうか。細石刃剥離について上和田城山 I の事例から、打面と作業面が適切であれば細石刃剥離を行っていたことが確認でき、石核成形が比較的簡略化されていることが分かる (B 類主体)。L1S 層上部の尖頭器石器群に含まれる細石刃核も同様で、特に寺尾 I 、月見野上野 1-Ⅱ の F 類は素材剥片の端部を利用し、石核成形は顕著ではない。さらに E 類の状況から、両面体製作の中から削片系とするもの、尖頭器として仕上げるものといった石器製作工程上の選択が考えられる。

両石器群の共伴関係は、細石刃集団や尖頭器集団の交流といった「集団論」としての解釈も想定されうる。しかし L1S 層上部の石器群からは、尖頭器が主体の遺跡が多いこと、両石器器種の共伴関係、E 類 (両面加工体) と尖頭器の技術的類似性、F 類での石核成形工程の簡略化などから、その可能性は低く单一集団ではないかと推測している。L1S 層下部では尖頭器石器群が多くなく、具体的な説明が難しい。ただ下鶴間長堀 I (a) と下森鹿島 I では同様の形態のスクレイパーがみられ、共通する剥片剥離技術があったと考えられる。集団論への言及に関して、鈴木次郎氏は B0 層出土の石器群を検討する中で、両石器群が同じ遺跡で共存する例は少なく、分布が異なる場合もあることから両石器群の違いは機能や季節性、あるいは異系統の石器群を有する集団の存在を示唆した (鈴木 1995)。L1H~L1S 層の出土事例からは尖頭器主体の遺跡や細石刃主体の遺跡があり、各層序を時間的な単位とした際に、狩猟具相互の関係性をいかに捉えるのか、今後の課題とする。後続する FB 層下部の隆線文土器段階では木葉形尖頭器・有舌尖頭器・石鏃が共伴し、狩猟具の重複は L1S 層での狩猟具の重複が器種を変えながらも継続していることが確認できる。筆者は製作技術の観点から、細石刃剥離の押圧剥離が有舌尖頭器・石鏃へと援用された可能性を指摘した (長澤 2024) <sup>(3)</sup>。

尖頭器と細石刃の重複関係は、後続する隆線文土器段階の狩猟具構成へ継続し、製作技術では直接打撃による成形と押圧剥離による細部調整へ受け継がれたと推測する。特に押圧剥離による成形技術は有舌尖頭器の舌部形状の多様化にみるように、縄文時代草創期の狩猟具製作に少なからず影響を及ぼしたものと考えられる。

	尖頭器石器群	細石刃石器群
L1S 層上部	C E F	
L1S 層下部	A: 舟底状 (成形強) B: 略舟底状 + 不定形 C: 剥片素材・折取成形 D: 角柱形・稜柱形 E: 両面加工体 F: 剥片素材 (成形弱)	B C D

図 2 L1S 層における細石刃核の連続性

## 謝辞

本発表にあたり、大和市教育委員会文化振興課の金澤浩平氏、大島彩華氏、神奈川県埋蔵文化財センターの長瀬拓明氏、八島知江氏には、資料閲覧に関して格段のご配慮をいただきました。記して感謝申し上げます。

## 註

- (1)長堀北IIは出土層位がL1S層中位であるが、ここでは便宜的に上部の一群に含めて検討する。
- (2)橋本勝雄氏は大保戸1や下鶴間長堀I(a)の細石刃核および石刃をホロカ型細石刃石器群と関連するものとした(橋本2015)。
- (3)須藤隆司氏は勝坂45次の削片系細石刃核を忍路子技術によるものとし、後続する隆線文土器段階などの有舌尖頭器・石鏃石器群に押圧剥離が用いられた点を指摘する(須藤2009)。筆者との相違は、相模野台地外部からの影響か否かであり、筆者はL1H~B0層出土の細石刃石器群の延長にあり、外部からの影響は想定していない。

**引用・参考文献** 紹紙幅の都合上、多くの研究論文および発掘調査報告書は割愛させていただきました。ご容赦ください。

栗島義明 1993a 「湧別技法の波及—削片系と在地系の細石刃核について—」『土曜考古』:1-37, 埼玉, 土曜考古学研究会

栗島義明 1993b 「細石器文化の終焉」『細石刃文化研究の新たな展開』II:86-102, 長野, 八ヶ岳旧石器研究グループ

白石浩之 1993 「細石器群の終末と神子柴・長者久保系石器群の関連性について」『細石刃文化研究の新たな展開』II:75-87, 長野, 八ヶ岳旧石器研究グループ

白石浩之 2003 「石器と土器の出会いの世界—移行期の様相—」『季刊考古学』83:18-22, 東京, 雄山閣

白石浩之 2018 「第I部 基調講演 大形石槍の発展的意義と解体の真相を探る」『大形尖頭器の技術組織—岩宿時代社会の終焉を探る—予稿集』:2-14, 群馬, 岩宿博物館岩宿フォーラム実行委員会

白石浩之 2023 「西南日本における船野期細石器群の展開」『九州旧石器』第27号:179-188, 福岡, 九州旧石器文化研究会

鈴木次郎 1995 「旧石器時代終末における石器群の諸問題(続) 3. B0層の石器群の様相」『神奈川の考古学の諸問題(II)』:18-20  
かながわの考古学第5集, 神奈川, 神奈川県立埋蔵文化財センター

鈴木次郎 2021 「相模野台地およびその周辺地域の旧石器時代終末期-槍先形尖頭器石器群と細石刃石器群の展開について-」『神奈川考古』第57号:1-36, 神奈川, 神奈川考古同人会

須藤隆司 2009 「細石刃技術-環日本海技術と地域技術構造と組織-」『旧石器研究』第5号:67-97, 東京, 日本旧石器学会

砂田佳弘 1993 「細石器の出現—相模野の検証—」『細石刃文化研究の新たな展開』II:21-59, 長野, 八ヶ岳旧石器研究グループ  
堤 隆 2011 「第1章 細石刃石器群の展開 第2節 相模野台地の細石刃石器群」『最終氷期における細石刃狩猟民とその適応戦略』:27-5, 東京, 雄山閣

長澤有史 2024 「縄文時代初頭の石器群について—相模野台地を中心に—」『考古学フォーラム』26号:7-30, 愛知, 考古学フォーラム

長澤有史 2025a 「相模野台地周辺部における尖頭器石器群・細石刃石器群の検討-相模原市風間遺跡群・小倉原西遺跡・大保戸遺跡の分析から-」『神奈川考古』第61号:1-26, 神奈川, 神奈川考古同人会

長澤有史 2025b 「資料紹介 古淵B遺跡出土の追加石器資料について」『相模原市立博物館研究報告』第33集:30-37, 神奈川, 相模原市立博物館 (<https://sagamiharacitymuseum.jp/wp-content/uploads/2025/03/p30-p37.pdf>)

仲田大人 2003 「相模野細石刃石器群の技術構成」『考古論争神奈川』第11集:1-38, 神奈川, 神奈川県考古学会

仲田大人 2016 「関東地方の旧石器・縄文移行期をめぐる問題」『旧石器研究』第12号:135-154, 東京, 日本旧石器学会

橋本勝雄 2015 「東日本におけるホロカ型細石刃石器群の様相とその時間的位置づけ」『旧石器考古学』第80号:31-48, 京都, 旧石器文化談話会

## 下茂内第Ⅱ文化層尖頭器石器群の較正年代と南関東との編年的対比

明治大学黒耀石研究センター

堤 隆

### はじめに

上信越自動車道が関東山地を貫いて上州から信州へと顔を出す八風山トンネル出口には、高地の降雪影響などを考慮した広いチェーン脱着スペースが設けられている。長野県佐久市香坂地積にあたるこの場所が下茂内遺跡で、この高速道の開通に伴い、1988年から1989年にかけて、長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施され、1992年に発掘調査報告書が刊行されている（長野県埋蔵文化財センター1992）。

発掘調査の結果、多量の降下軽石層（仮称：下茂内軽石 SmP）の上下から石器群が検出され（図1）、降下軽石層の上層のものが第Ⅰ文化層、下層のものが第Ⅱ文化層と命名された。双方とも大型の尖頭器を主体とする石器群で、遺跡では同域に分布する良質なガラス質黒色安山岩を用い、尖頭器製作がなされていた（図2）。その整理過程において、両文化層とも良好な接合資料が得られ、詳細な製作プロセスが明らかにされた（近藤1992）。

### 1 問題の所在

下茂内軽石 SmP とされた黄色の軽石層は、最大層厚 20cm をもって上下の文化層を分離している。この軽石は、早田勉によって、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率により浅間-大窪沢第2軽石：As-P02（中沢ほか 1984）と比定された（早田 1992）。浅間-大窪沢第2軽石は、浅間-板鼻黄色軽石（13,000–14,000 y BP）より下位から検出される軽石層だが、実態が不明であり詳細な検討が必要だろう。

また、第Ⅱ文化層の第1炭化物集中については（図3）、名古屋大学中村俊夫氏の AMS による年代測定では、16250 ± 180 y BP の年代値が得られた。IntCal20 によって較正年代を算定すると 20154–19210 calBP ( $2\sigma < 95.4\%$ ) となり、約2万年前の年代値が与えられる。この尖頭器石器群は、報告書においては大型尖頭器をもつ神子柴石器群との対比が念頭に置かれてか「先土器時代末～縄文時代草創期」の石器群の章に自明のものとして記載がなされており（長野県埋蔵文化財センター 前掲）、年代との齟齬が未解決の課題として残されていた（近藤 1992b）。

堤は、その年代を精査すべく、第Ⅱ文化層の第1炭化物集中について、新たに2点の年代測定を実施し、あわせてその編年の位置について論じることにした。

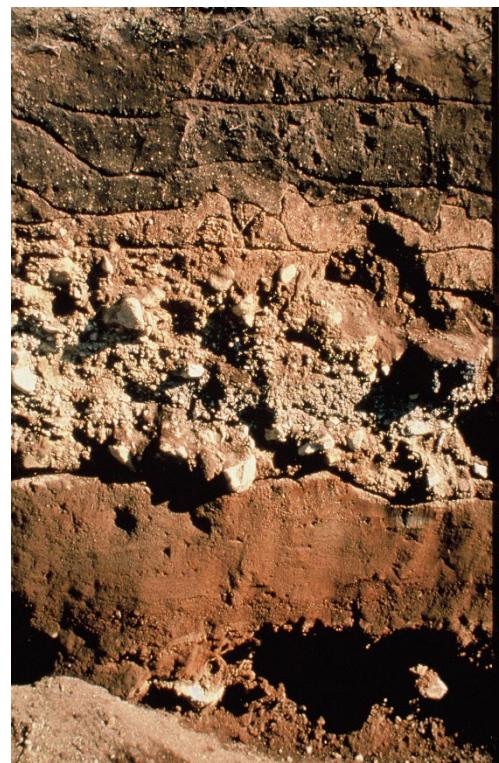


図1 下茂内軽石 SmP（写真中央）



図2 第Ⅱ文化層5号ブロック  
尖頭器未成品の出土状況

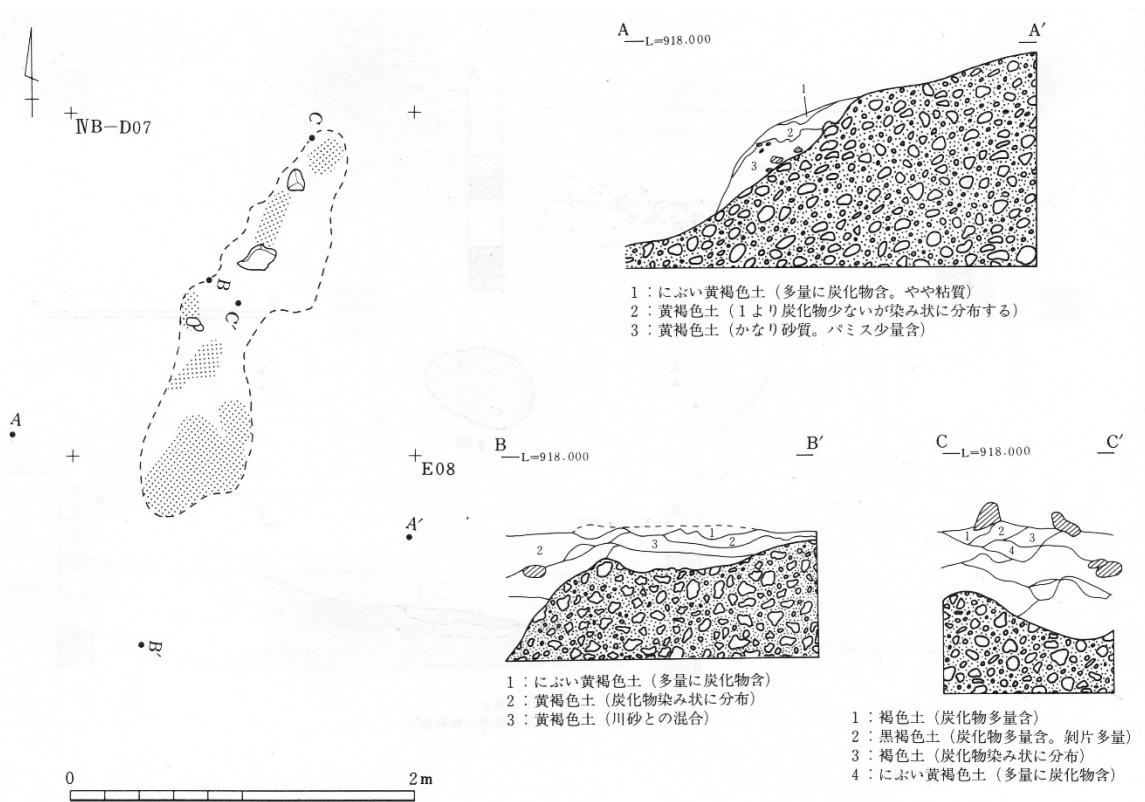


図3 下茂内第Ⅱ文化層第1炭化物集中区 (長野県埋蔵文化財センター-1992)

## 2 下茂内遺跡第Ⅱ文化層の年代測定

下茂内遺跡の年代を明らかにするため、放射性炭素年代測定を実施した。発掘資料は、現在長野県立歴史館に保管されているが、そのうち「DSM 第Ⅱ文化層先土器末～縄文草 炭化物集中区（炭化物・礫・土壤サンプル）」と書かれたコンテナの中から、下記の試料2点を抽出し、加速器分析研究所に依頼して年代測定を実施した。

対象試料は、記載からも明らかなように、第Ⅱ文化層のBD07グリッドで発見されているまとまった第1炭化物集中区出土の炭化物で、多量の尖頭器製作のなされた5B号石器ブロックの分布も重なる地点である（図4）。

測定試料の概要は以下のとおりである。

測定試料：第Ⅱ文化層炭化物集中区（図1）中の炭化物2点（以下）

試料番号：#D108-4（注記：DSM IV BD07 炭Aブロック 番外 890120）

試料番号：#D108-5（注記：DSM BD07 689 炭化物）

得られた年代測定結果を表1・表2に示す。得られた2点の年代は、かつて下茂内の発掘調査報告による年代、 $16250 \pm 180$  y BPとほぼ変わりない年代を示していた。したがって、これら3点の年代から、下茂内第Ⅱ文化層が展開した時期は、およそ2万年前とすることができます。

なお、上記2点の樹種同定を、明治大学黒耀石研究センターの能城修一氏に依頼した。#D108-4点は属は不明だが針葉樹、#D108-5はトウヒ属、と同定された。約2万年前は、LGMに該当する最寒冷期であり、下茂内第Ⅱ文化層のトウヒ属の材は、周囲における亜高山帯針葉樹林の存在を示している。

表1 下茂内遺跡 第II文化層 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{14}\text{C}$ 、C年代(Libby Age)、 $\text{pMC}$ )

測定番号	試料番号	試料内容	処理方法	$\delta^{14}\text{C}$ (%) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age(yrBP)	$\text{pMC}$ (%)
AAA-242234	# D108-4	木炭	AAA	$-28.25 \pm 0.39$	$16,580 \pm 60$	$12.70 \pm 0.09$
AAA-242235	# D108-5	第II文化層 木炭	AAA	$-28.25 \pm 0.49$	$16,490 \pm 60$	$12.84 \pm 0.09$

表2 下茂内遺跡 第II文化層 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	試料番号	暦年較正用 (yrBP)	較正条件	$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
AAA-242234	# D108-4	$16,576 \pm 55$	OxCal v4.4 IntCal 20	20111-19926calBP(68.3%)	20216-19868calBP(95.4%)
AAA-242235	# D108-5	$16,490 \pm 55$	OxCal v4.4 IntCal 20	20050-19835calBP(68.3%)	20115-19780calBP(80.9%) 19755-19616calBP(14.6%)

### 3 下茂内第II文化層の尖頭器石器群の評価

約2万年前という較正年代が得られた下茂内第II文化層の尖頭器石器群の評価について論ずる。

その年代をもとに南関東との編年的対比を行うと、層位的出土例の最も整った相模野台地においては、L1H層との対比が妥当で、諏訪間段階VIII（諏訪間 1988）の尖頭器石器群との並行関係が想定される。したがって当該石器群は、細石刃石器群の出現以前の尖頭器石器群として評価されよう。

諏訪間段階VIIIの尖頭器石器群で、まとまった出土例が知られる月見野遺跡群上野遺跡第1地点第IV文化層では、 $16,370 \pm 680$  y BP、 $16,380 \pm 730$  y BP、 $16,470 \pm 470$  y BPという16,000 y BP代の放射性炭素年代が3点得られており、年代的に並行するものと考えられる。ただ、上野例は10cm以下の中・小型の尖頭器によって構成され（相田編 1986）、未成品もあるが10cm以上の大型尖頭器が数多く含まれる下茂内第II文化層とはサイズ感が大きく異なり、双方の差が顕著であるように思える。しかし、下茂内のような原産地遺跡と、原産地から離れた上野遺跡とではサイズと距離の反比例の関係を示す「男女倉エフェクト」（堤 2004）がみられるのはむしろ当然で、こうしたサイズ差に関してはリダクション・シークエンスを考慮して捉える必要がある。

### おわりに

下茂内第II文化層の理解にあたり、大型尖頭器=神子柴型尖頭器=縄文草創期といった従来の固定的な枠組みに捉えられ過ぎていた感がある。しかし、2万年前を遡る男女倉技法においても原産地遺跡群にあっては10cm以上の大型品が存在するように、リダクション・シークエンスを伴う両面調整体について、サイズのみで型式や時期を語るには危険性があることが再認識される。

なお、本稿はシンポジウムの発表要旨であり、記載は予稿的なものにとどめ、詳細は発表時および投稿中の長野県考古学会誌の論文に譲ることにしたい。

本研究の遂行にあたっては、以下の助成金を使用させていただいた。受入研究者である東北大学中村美千彦教授、共同研究者である安井真也日本大学教授、樹種同定を行っていただいた明治大学黒耀石研究センター能城修一客員研究員に御礼を申し上げる次第である。

また、年代測定の実施および図1・図2の使用に関しては、長野県立歴史館より許可をいただいた

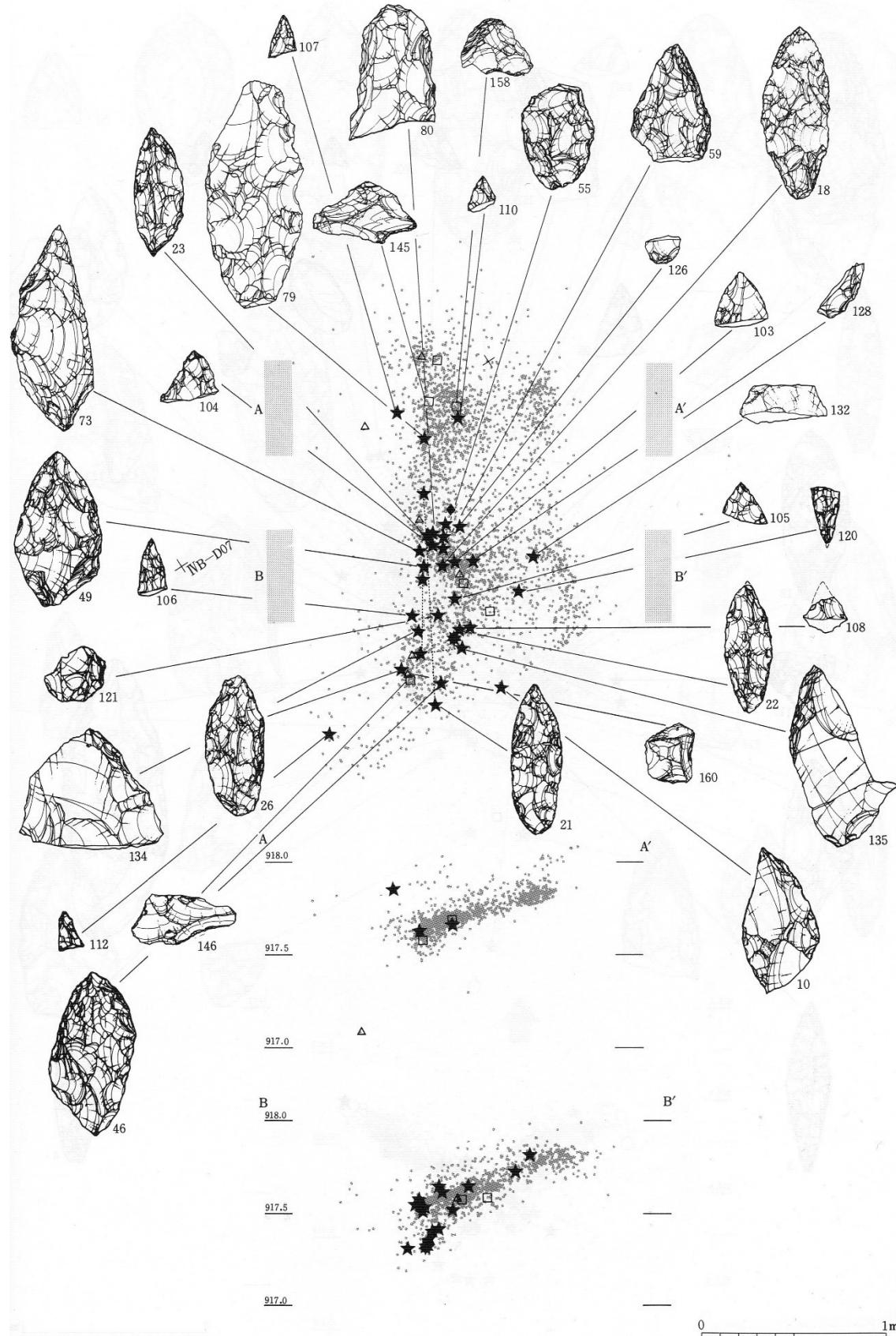


図4 下茂内第Ⅱ文化層5A・5B号石器ブロックの石器分布 (長野県埋蔵文化財センター 1992)  
同じIVB-D07グリッドに、第1炭化物集中区が重複する

いる。長野県立歴史館および同館の桜井秀雄・大竹憲昭氏に感謝の意を表する次第である。

助成金名称：令和 6 年度「文部科学省火山研究人材育成等支援事業」

研究代表者：堤 隆（明治大学黒曜石研究センター）

研究テーマ：「過去の浅間火山噴火と地域社会罹災の究明に基づく火山防災」

#### 引用文献

相田 薫編 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点』 P752 大和市教育委員会

近藤尚義 1992a 「第 3 節 下茂内遺跡の槍先形尖頭器製作」『下茂内遺跡：上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1』

pp. 211-224 長野県埋蔵文化財センター

近藤尚義 1992b 「第 5 節 下茂内遺跡の編年的位置にかかる諸問題」『下茂内遺跡：上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1』 pp. 235-241 長野県埋蔵文化財センター

諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について-層位的出土例の検討による石器群の段階的把握-」『神奈川考古』 24 pp. 1-30

早田 勉 1992 「第 2 節 下茂内遺跡のテフロクロノロジー」『下茂内遺跡：上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1』 pp. 205-210 長野県埋蔵文化財センター

堤 隆 2004 『黒曜石 3 万年の旅』 NHK ブックス 1015 P236

中沢英俊・遠藤邦彦・新井房夫 1984 「浅間火山、黒斑～前掛期のテフラ層序」『日本第四紀学会講演要旨集』 14 pp. 69-70

長野県埋蔵文化財センター 1992 『下茂内遺跡：上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1』 P257



# ポスターセッション

*Poster Session*



## 瀬戸内技法研究の現在－東日本への波及を考える－

公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター

絹川 一徳

### はじめに

2021年1月に発行された旧石器文化談話会編『旧石器考古学辞典 四訂版』では、「国府石器群」の項は「(国府遺跡の)石器群は国府型ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核など比較的単純な石器組成からなり、翼状剥片と同石核の接合資料をふくむ。石材は全て二上山産の水磨されたサヌカイト円礫を用いる。国府遺跡や高槻市郡家今城遺跡の石器群のように瀬戸内技法を主要な剥片生産基盤とする国府石器群は二上山北麓や香川県国分台を中心とした瀬戸内地域に分布している。この文化や文化期を表すものとして国府(石器)文化、国府文化期という用語も使われる」とある(松藤2021)。この説明は半世紀近く変わっていない(松藤1985)。国府石器群の主要な剥片生産基盤とされた瀬戸内技法も同様で、「翼状剥片石核の素材となる大形剥片の獲得(第1工程)にはじまり、それらを石核に転じて規格的な翼状剥片を量産し(第2工程)、最後に翼状剥片に整形剥離を施して国府型ナイフ形石器に仕上げる(第3工程)一連の工程」という定義に変わりはない(前掲)。

国府石器群と瀬戸内技法に関する研究は1990年代までは技術形態学的な観点からナイフ形石器や剥片剥離技術の時間的・地域的な変容が論じられたが、2000年以降は羽曳野市翠鳥園遺跡(高野・高橋編2001)をはじめとする新資料の増加と全国的な後期旧石器時代の編年網が形成されるに至り、「瀬戸内技法」に対するさまざまな異議が示されるようになった。とりわけ「瀬戸内概念」の提唱(高橋2001)は、瀬戸内技法を単立の技法と見るのでなく、工程間の連結を解いて最大公約数的な共通項で捉えられる技術要素だけに限定するもので、瀬戸内技法はあくまでも「二上山で導かれた理念モデル」として否定され、国府型ナイフ形石器製作の共通基準になりえないとした(森先2010・2011)。しかし、果たして瀬戸内技法という「実体」はないと断じえるのであろうか。また、瀬戸内技法なくして国府石器群は評価が可能なのであろうか。

同様の問題は瀬戸内技法だけではなく、近畿・瀬戸内地方の編年研究においても起こっている。国府石器群の出現・終焉について、年代決定の材料が乏しいこともあるが、瀬戸内技法の位置づけや評価の違いが同じ横剥ぎ石器群の位置づけに齟齬を来している。そこで瀬戸内技法と瀬戸内概念の関係を整理・再検討することで新たなアプローチを見出せないだろうか。

近年になって、豊富な<sup>14</sup>C較正年代の援用を受けて、瀬戸内地方に隣接する東南九州を中心に入戸火碎流・AT火山灰前後の石器群の詳細な変遷が明らかになった(松本2023・松藤2025)。それは国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法、角錐状石器の共伴関係や出現年代について見直しを迫るもので、それまで停滞ぎみであった瀬戸内技法研究にも新たな材料を加えることとなった(沖野2021・松本2023・秋成2025)。こうした最新成果を射程に入れつつ、瀬戸内技法と国府石器群が抱える研究課題について再考したいと思う。

### 1. 瀬戸内技法と瀬戸内概念

瀬戸内技法には国府石器群において果たす石器製作における「役割」があって、大型のナイフ形石器の集中的な製作が求められたことで、一貫性をもつシステムティックな工程へ集約しながら生産基盤が構築され、「技法」としてのかたちが具現化したと筆者は考えている(絹川2013)。ゆえに瀬戸内技法を定立した石器製作技術として捉えた松藤和人の定義(松藤2021)にしたがう。そして、その契

機は環境変動の中で求められた大型刺突具の登場であり、国府石器群とのつながりは森先一貴（2010）が指摘したとおりで、筆者もその見解を支持する。こうした前提のもと「瀬戸内技法」に対峙する「瀬戸内概念」とはどのようなものかを以下に示しておく。

翠鳥園ではほぼ原礫の状態に復元できる豊富な接合資料が提示されたが、高橋章司は翼状剥片剥離と盤状剥片剥離の過程がともに変化に富み、礫形状に影響を受けて様々な方法が取られたとし、瀬戸内技法第2工程にあたる翼状剥片剥離のバラエティを包括できる技術要素のみに絞って「瀬戸内概念」を設定した（高橋 2001）。「瀬戸内概念」を立論の下敷きとする森先一貴は、瀬戸内技法を「二上山北麓遺跡群の表採資料から属性分析に基づいて理念的に復元されたこの図式的手順」が、国府型ナイフ形石器製作の「典型的手法」であるとは立証されていないと断じ、より包括的な「瀬戸内概念」を近畿・瀬戸内地方の国府石器群とそれに関係する石器群に共通する基準的な構造概念として用いるべきとした（森先 2005・2007・2010・2011）。

## 2. 消費地における瀬戸内概念と国府型ナイフ形石器の製作

翠鳥園は消費地的な傾向をもつ遺跡であって、出土遺物は翼状剥片とともに国府型ナイフ形石器が優勢であるものの、それ以外のナイフ形石器も多い（絹川 2017）。瀬戸内技法第二工程が行われた接合資料が存在するが、国府型を含めた一側縁・二側縁、大小様々な形態のナイフ形石器を同一母岩で生産した接合資料がある（接合資料 38-401、23-005 など）。同様の事例は大阪市長原遺跡 97-12 次にもある。ここでも典型的な第二工程がみられるが、横剥ぎ技術とともに石刃技法や縦長・短形剥片剥離技術が共伴しており、瀬戸内技法以外の技術が優勢である（絹川編 2000）。うち接合資料 JAB-4 は粗い打面縁の調整が施され石核幅一杯に翼状剥片を剥離したのち大型ナイフ形石器へ加工しているが、残った石核からは縦長剥片を剥離し、もう一つの石核は寸づまりの短形剥片を剥離している。JAB-1 は残核が出土しなかったが、連続的に幅広の剥片を剥離した後に石刃の剥離へと移行し、幅広の剥片からは粗い山形の打面縁調整と翼状剥片剥離が行われている。

いずれの接合資料も単一または数枚の翼状剥片を剥離して国府型ナイフ形石器を製作する。搬入された原石の消費が進む過程で臨機に応じて別技術が選択されていることが重要である。量産に拘らなければ、瀬戸内技法とは呼べない石核で翼状剥片と同型の剥片剥離は可能であり、石核形状や消耗の状態によって柔軟に技術の選択が行われた結果である。森先のいう「国府型ナイフ形石器製作に通底する動作連鎖」（森先 2010）にも通じるものだ。しかし、翠鳥園・長原 97-12 では「典型的な」瀬戸内技法第二工程も認められる。それは「瀬戸内概念」を含む有底横長剥片剥離技術と石刃技法や短形剥片などの剥離技術に加えて「典型的な」瀬戸内技法が同居しているような印象がある。

## 3. サヌカイト原産地で顕在化する瀬戸内技法の各工程

香芝市鶴峯荘第1地点遺跡（佐藤編 2004）や藤井寺市国府遺跡第3地点（石神 1990）のように瀬戸内技法第一工程から第三工程が主体となった遺跡は確実に存在する。とくに鶴峯荘 1 ではサヌカイト礫採掘坑から国府型ナイフ形石器・翼状剥片・同石核・盤状剥片・同石核からなる石器遺物が接合資料を伴って出土した。重要なのは第一工程である盤状剥片の連続剥離が認められ、原礫分割からナイフ形石器の製作が連動・集中して実施されたことである。国府 3 も第一工程が占める比率は石器類の 28%を占め、盤状剥片石核の最終形態は交互剥離による典型的なものである。両遺跡ともに国府型以外のナイフ形石器は殆ど認められない。また、利用されたサヌカイト礫も大きい。森川実によると二上山北麓遺跡群で入手された原礫は幅 10 cm 程度で形状が人頭大程度のものが多数を占めるようだ

(森川 2007)。

鶴峯荘第 1 や香芝市桜ヶ丘第 1 地点遺跡（奈良県立橿原考古学研究所編 1979）のような二上山北麓のサヌカイト原産地遺跡では国府型以外のナイフ形石器の製作は貧弱であってアトリエ的製作と評される（松藤 1985）。そのことは逆に国府型ナイフ形石器の集中生産と第一から第三工程がシステムティックに連結する瀬戸内技法との強い相関を示している。

#### 4. 瀬戸内技法は独立した技術とみなせるのか？

瀬戸内技法が認められる遺跡の特徴は、（異所展開も含めて）第一から第三工程が連結して認められることである。近畿・瀬戸内地方では、有底横長剥片を素材に背部加工をしたナイフ形石器の製作は AT 降灰以前の石器群に認められ交互・並列剥離からなる横剥ぎ技術が基盤として成立していた。大型品ではなく量産を行わない類翼状剥片（有底横長剥片）の剥離は、この段階の横剥ぎ技術の中でも生産が可能である。AT 降灰以降に多様な剥片剥離技術を駆使して石材消費が進行する中で、翼状剥片・国府型ナイフ形石器の生産を単発・間歇的に行う段階から、山形の打面縁調整と石核幅一杯に剥離を行う瀬戸内技法第二工程を、部分的に有底横長剥片剥離の中に組み込んだ「横剥ぎ技術複合」という段階へと変遷していく過程は、いわば国府石器群の成立過程として、石材消費の傾向が強いキャンプサイトのような遺跡で認めることができる。

一方、原産地を中心に典型的な瀬戸内技法によって翼状剥片剥離・国府型ナイフ形石器製作が行われた遺跡が明確に存在する。そして、その技法の実施にあたっては、瀬戸内技法という「範型(model)」となる工程の履行を前提に、素材や石核の状態によって臨機に対応する補完・調整技術からなる「態勢(arrangement)」を組み合わせて、原礫分割による盤状剥片剥離から国府型ナイフ形石器の製作にいたる一貫性と集中生産が維持された。「典型的」とは見なせない個別の技術要素の例外も現れるが、個別の動作連鎖の中で選択された臨機的対応が反映されたもので、製作方法の多様性を示す変異として並立させるのではなく、瀬戸内技法を維持する「態勢」を作動させた振り戻しの技術要素として包括的に捉えるべきである。

狩猟具として大型刺突具が必要とされた環境（森先 2010）の中で、瀬戸内技法は、国府型ナイフ形石器を集中的に生産できる製作場として、石材が豊富な原産地を直接利用するようになった段階で完成した。つまり大型国府型ナイフ形石器の生産を日常的な石器生産の中から独立させて、原産地と消費地を繋いで集中・量産するようになる過程が瀬戸内技法の成立と盛行期なのである。「瀬戸内概念」を否定しないが、「瀬戸内概念」で行う翼状剥片剥離は、有底横長剥片剥離を中心とする「横剥ぎ技術複合」の中に組み込まれて機能していたとみられる。したがって、「瀬戸内技法」を分解して工程間の繋がりを解消することは、瀬戸内技法のもつ独立した石器製作としての「役割」まで喪失してしまうのである。

#### 5. 瀬戸内技法と国府石器群の成立と石器群の変遷

1990 年代の近畿・瀬戸内地方の石器群の編年研究は、西日本で AT 降灰以前の石器群について資料蓄積が進み、瀬戸内技法関連資料の量的比率の多寡を先後関係に置き換え、角錐状石器の共伴段階や小型ナイフ形石器、細石器を瀬戸内技法の衰退過程の中に位置づけて基本的な枠組みを構築した（久保 1989・2014、佐藤 1989、松藤 1992、佐藤・絹川 2010）。この編年観では、国府石器群は瀬戸内技法の盛行期として AT 降灰後の最古段階の石器群として位置づけられた。

2000 年以降は、前述の長原 97-12 のような瀬戸内技法とともに横剥ぎ技術や石刃技法などが混在

し多様な形態のナイフ形石器で構成される石器群が国府石器群に先行するという見解（伊藤 2003・野口 2005・森川 2011）とともに、有底横長剥片素材の小型ナイフ形石器が主体の石器群（長原 89-37・八尾南遺跡第 6 地点）を AT 降灰前後の時期に位置づける見解が示された（森先 2005・2010、森川 2003・2011、藤野 2006、三好 2014）。

近年、東南九州を中心大きな成果が上がっている（沖野 2021・松本 2023・秋成 2025）。豊富な<sup>14</sup>C 較正年代による石器群の検討によって、入戸火碎流・AT 火山灰前後の様相が明らかになってきた。松本茂（2023）によると、東南九州では AT 直上石器群として a)二側縁加工ナイフ形石器、b)狸谷型ナイフ形石器、c)剥片尖頭器の 3 グループが認められ、国府型ナイフ形石器はこれらに後出し、角錐状石器の出現と存続は 25,700-22,700calBP の年代幅に収まる。

以上のような既往研究の動向と最近の研究成果を踏まえて、二上山の北西に広がる大阪平野の遺跡を中心として、暫定的ではあるが新たな編年案を考えてみる（図 1）。内容の詳細は別稿で論じたい。大阪平野では南部の河内台地に立地する長原・瓜破遺跡群において後期旧石器時代の各時期に比定可能な石器群が出土しており、この地域を中心に大阪平野における定点的な変遷を捉え瀬戸内技法と国府石器群が成立する過程を概観しておきたい。

**①後期旧石器時代前半期前葉** 大阪平野で最古の石器群は大阪市長原遺跡 90-62 次（松本編 2008）で、後期旧石器時代の前半期前葉に位置づけられる。AT 火山灰濃集層準より下層の暗色帶下位から出土しており、長原 14 層石器群とも呼ばれる。サヌカイト製の台形様石器を含む部分加工の小形石器を組成する。剥片素材の横剥ぎ石核で有底横長剥片が剥離されるが、石核面を大きく取り込む平坦剥離がめだつ。この段階は一側縁で背部加工のナイフ形石器の生産には結びつかない。周辺地域で同時期の石器群は、長原 90-62 に先行する石器群として丹波市七日市遺跡第 I・II 文化層（久保・藤田 1990）、三郷町峯ノ阪遺跡下層石器群（西藤・宮原 1996）がある。七日市はチャート、峯ノ阪はサヌカイトがおもな石器石材として用いられナイフ形石器は認められない。

**②後期旧石器時代前半期後葉** 有底横長剥片を素材とするナイフ形石器が出現する段階である。この段階の石器群には長原 91-12 を比定しておく（松本編 1997）。旧石器層準の 13 層から出土したが、AT との関係は明確ではない。サヌカイト製の小型品を含む二側縁加工のナイフ形石器が主体であり、剥片素材の横剥ぎ石核を伴うが、石核は素材面を大きく取り込む平坦剥離のものがみられる。同時期の石器群には堺市大井遺跡（中村・松山 1987）、丹波篠山市板井寺ヶ谷下位文化層がある（山口編 1991）。大井は AT との関係は明確ではないがサヌカイト製の台形様石器と小型ナイフ形石器が出土（松藤 1992）し、板井下位ではナイフ形石器、台形様石器、刃部磨製石斧などを組成する。また板井下位では、サヌカイト製で剥片素材の打面調整が施された横剥ぎ石核とともに有底剥片素材で一側縁加工のナイフ形石器が認められる。

**③AT 降灰前後** 近畿地方では有底横長剥片を素材とする一側縁加工のナイフ形石器群の成立を明確に確認できる段階である。一方で石刃技法と石刃を素材にした一側縁・二側縁加工のナイフ形石器、極小型ナイフ形石器が主体の石器群も認められる。ナイフ形石器は総じて小型品が主体といえる。大阪平野では長原遺跡 88-4 次（森本・岡村・清水 1989）、大阪市瓜破北遺跡 07-2 次（絹川編 2009）が比定できる。いずれも旧石器層準から出土したが、AT との関係は明確ではない。サヌカイトが主要石材で、長原 88-4 では剥片素材の石核から石刃、縦長剥片、短形剥片などが剥離され、石刃を素材とした小型ナイフ形石器が認められる。瓜破北 07-2 では有底横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器や極小型で部分的な加工が施されたナイフ形石器とともに、備讃瀬戸型石刃技法による石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器が認められる。同形態のナイフ形石器は瓜破北 06-1 からも出土した

(小田木・田中編 2009)。周辺地域の同時期の石器群には奈良市法華寺南遺跡（佐川・森本・大場編 2002）、七日市遺跡第Ⅲ・Ⅳ文化層（久保弘幸・藤田淳編 1990、山本誠編 2004）がある。七日市Ⅲでは両側縁を大きく加工した極小型で細身のチャート製ナイフ形石器を主体とする石器群、法華寺南では備讃瀬戸型石刃技法による石刃を素材としたサヌカイト製の二側縁加工のナイフ形石器を主体とする石器群、七日市Ⅳでは有底横長剥片素材の一側縁加工のナイフ形石器が認められる。

**④AT 降灰直後** この段階の石器群として参考になるのは岡山県鏡野町恩原遺跡 O 文化層である。AT 直上のオドリ降下火碎物 (Od) は  $29,320 \pm 412$  calBP という年代（山元 2017）が出されており、上面の O 文化層に伴う炭化物集中からは  $28,771-28,056$  calBP という年代が得られている（三好 2014）。また O 文化層の上位には弥山軽石層 (MsP) があり堆積物の基底部で  $28,520-28,230$  calBP の年代が得られている（山元前掲）。O 文化層からは細長く V 字状の基部をもつ斜刃で二側縁加工の黒曜石製ナイフ形石器、安山岩製・玉髓製の小型ナイフ形石器が出土している。前者の特徴的なナイフ形石器は「フコウ原型」と呼ばれる（稻田 1990）。石核・剥片などに有底横長剥片剥離技術を示す明確な資料は見られない。大阪平野ではフコウ原型と同形態のナイフ形石器が枚方市藤阪宮山遺跡（桑原・久保 1987、森川 2018）で出土している。石材はサヌカイトが 80% を占めるが、剥片剥離技術は剥片素材の石核が認められるものの交互・並列剥離や周縁剥離で、瀬戸内技法など有底横長剥片剥離技術は認められない。ナイフ形石器は国府型に類似するものが 1 点あるが、主体はフコウ原型と同形態のものである。持ち込まれたサヌカイト礫も小ぶりなものが多い。この段階では翼状剥片剥離に類する剥離技術や有底横長剥片素材のナイフ形石器は存在するものの、主体的とはいえない。石刃技法や周縁剥離などの技術も併用されており、瀬戸内技法は成立していないようだ。

**⑤後期旧石器時代後半期前葉** この段階は瀬戸内技法と国府石器群が成立・盛行する段階である。大阪平野では遺跡数が増加する。それぞれの石器群の内容が相似しているが、この段階は概ね古・新の 2 段階に分けられる。古段階では有底横長剥片剥離や石刃技法、周縁剥離など多様な剥片剥離技術が認められ、多様な形態のナイフ形石器が生産される。新段階は瀬戸内技法の盛行期で、翼状剥片剥離段階も部分的に取り込まれた「横剥ぎ技術複合」が有底横長剥片素材のナイフ形石器の生産基盤となる。と同時に、瀬戸内技法による大型品を中心とした国府型ナイフ形石器の製作が通常の石器製作の循環から独立して原産地でも盛んに行われるようになる。ただし、国府型ナイフ形石器は原産地とキャンプサイトの両方で製作されており、後者では「瀬戸内概念」を組み込んだ「横剥ぎ技術複合」からも製作されることがある。

**i) 古段階の石器群**：前述した長原 97-12 が比定される。典型的な瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器がみられるが、有底横長剥片剥離や周縁剥離技術、石刃技法など多様な技術で多様な形態のナイフ形石器が生産される。同様の石器群には高槻市津之江南遺跡（大船・富成 1976）や採集資料であるが同市塚原遺跡などが認められる。

**ii) 瀬戸内技法成立段階**：古段階の過程で大型ナイフ形石器の獲得のため、石材環境に恵まれた原産地で瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器生産が行われるようになる。特に高槻市郡家今城遺跡 C 地点（大船・富成 1978）では、幅狭で断面形が三角形を呈し背部整形に対向調整を多用した「郡家今城型」（松藤 1980）と呼ばれる角錐状の刺突具を意識した国府型ナイフ形石器が認められ、瀬戸内技法と大型刺突具の強い相関を惹起させる。このグループに属する石器群は瀬戸内技法による「異所展開」が明確に見て取れる（山口 1994）。つまり、「国府石器群」である。郡家今城 A・C のほか、国府 3、藤井寺市はさみ山遺跡 85-7 区（一瀬・水野 1990）、翠鳥園、箕面市粟生間谷遺跡 BL3（新海編 2003）など角錐状石器との共伴が明確ではない石器群を充てておく。サヌカイト原産地では香芝市桜

ヶ丘1・鶴峯荘1などがある。

**iii) 新段階の石器群**：この段階は瀬戸内技法の盛行期として捉えられる。古段階と異なってサヌカイトの石材利用がいっそう進み、剥片生産基盤とナイフ形石器の製作が瀬戸内技法と横剥ぎ技術複合に集約され、他技術が目立たなくなる。角錐状石器の共伴も認められる。該当する石器群は多く、瓜破北07-3（小田木・田中編2009）、八尾市八尾南遺跡第3地点（福田編1989）、堺市南花田遺跡（安里・竹原1987）、枚方市楠葉東遺跡（枚方市文化財研究調査会編2005）、粟生間谷BL6がある。また角錐状石器が主体の遺跡には藤井寺市国府6（石上1990）、高槻市郡家川西H地点（森田編1979）があり、周辺地域では板井上位文化層（山口編1991）、峯ノ阪上層（西藤・宮原1996）の石器群が認められる。この段階までを国府石器群とする。

**⑥後期旧石器時代後半期後葉** この段階も引き続いて有底横長剥片剥離技術を中心とする横剥ぎ技術複合によりナイフ形石器の生産が行われるが、小型品が主体となるため瀬戸内技法の存在が希薄となる。原産地で小型ナイフ形石器が認められることからも首肯される。大阪平野では長原89-37（趙編1997）、八尾南6（山田編1993）が該当する。ナイフ形石器はほとんどがサヌカイト製の有底横長剥片素材で長さ5cm以内の小型品であり、国府型をそのまま小型化したような柳葉形を呈し背部加工には対向調整が施されたものが多い。八尾6では小型の角錐状石器も認められる。周辺地域ではたつの市碇岩南山遺跡（芝編1995）がこの段階の石器群である。

**⑦ナイフ形石器文化期終末** この段階も小型ナイフ形石器が主体であるが、ほとんどが長さ3cm未満の極小型品となる。形態は多様で定型的とは言い難い。有底横長剥片とは呼べない寸づまりの薄い剥片を素材とする。大阪平野では長原99-41（杉本編2002）、八尾南2（原田・長尾・三原・松藤1989）、粟生間谷BL1、交野市星田布懸遺跡（久保1983）、高石市大園遺跡（藤永・岸本・広瀬1982）が該当する。周辺地域では明石市西脇遺跡（稻原1996）がこの段階の石器群である。

## 6. 結語 一瀬戸内技法の東日本への波及を考える一

以上のように、二上山の北西に位置する大阪平野の石器群について新たな変遷案を暫定的に示したが、瀬戸内技法と国府石器群の東日本への影響について簡潔にまとめて結語としたい。

まず瀬戸内技法の成立との関係であるが、有底横長剥片素材で一側縁加工のナイフ形石器はAT下位の丹波市七日市遺跡IV文化層で認められる。ここでは国府型と同じ形態の小型ナイフ形石器とともに打面縁に調整が施された横剥ぎ石核も伴う。瀬戸内技法にかかる技術要素は出揃う。しかし③AT降灰前後の段階は有底剥片素材のナイフ形石器の存在は主体的とはいえない。また大型品は認められない。有底横長剥片剥離技術が石器群の中で剥片生産の基盤となるのは、おそらく④AT降灰直後よりで、藤阪宮山遺跡で認められたフコウ原型ナイフ形石器が出現して以降である。この年代は概ね28500calBP前後となり、V層上部段階に並行する。続く⑤後期旧石器時代後半期前葉の古段階である長原97-12石器群は、多様な剥片剥離技術と多様な形態のナイフ形石器で構成され、大型の国府型ナイフ形石器も存在する。その様相は国府型ナイフ形石器を除けば南関東のIV層下部石器群の多様性とも共通する（野口2005）。この段階を瀬戸内技法の成立のごく初期とみなし、有底横長剥片剥離技術が主体となった石器群が東日本へ影響を及ぼした段階と考える。その経路は太平洋側が想定され、石器群の影響も東海地方を挟んで東西方向で相互的に及んだとみられる。これが第1の東日本への波及段階といえるが、東海地方は瀬戸内技法の存在が希薄と言わざるをえない。したがって、瀬戸内技法が主体の「国府石器群」の波及と呼ぶには慎重にならざるをえない。さらなる検討を進めたい。

第2の東日本への波及については、群馬県上白井西伊熊遺跡第2文化層が参考になる。第2文化層

は浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group) 下部の前橋泥流堆積後に形成され、前橋泥流の年代として 27,180-26,589 cal BP (佐藤ほか 2018) が得られている。また、第 2 文化層の炭化物から 24,340-23,580calBP の年代が得られており、角錐状石器や黒曜石製有柄尖頭器が共伴する。概ね 27,000-24,000calBP という年代幅はIV下～IV中層と砂川期を含む段階に相当し、冒頭で紹介した東南九州への瀬戸内技法の波及時期と重なる (秋成 2025)。したがって、⑤後期旧石器時代後半期前葉 (IV下～IV中層と砂川期を含む段階に並行) でも新しい段階を瀬戸内技法が主体的に認められる国府石器群が東日本へ影響を及ぼした第 2 の波及段階と捉えておく。その経路として日本海側を想定する。この段階の東日本への波及は、森先一貴 (2010) が指摘するように近畿・瀬戸内地方に出自がある人間が直接関与・移動していたケースが少なからずあったと考えられる。

- 引用・参考文献** (紙幅の都合で 1999 年以前の論文と発掘調査報告書については割愛させていただいた。ご容赦されたい)
- 秋成雅博 2025 「東・南部九州における瀬戸内技法の波及と技術的変容」『旧石器考古学』89、pp.89-100、旧石器文化談話会
- 伊藤栄二 2003 「近畿地方中央部における AT 上位石器群の編年研究」『東海石器研究』第 1 号、pp.16-17、東海石器研究会
- 沖野 誠 2021 宮崎県における旧跡時代石器群の年代観—放射性炭素年代の集成と整備—『宮崎考古』第 31 号、pp.1-21、宮崎考古学会
- 絹川一徳 2013 「瀬戸内技法の成立と展開」『九州旧石器』第 17 号、pp.11-25、九州旧石器文化研究会
- 絹川一徳 2017 「国府石器群の成立と展開—大阪平野を中心として—」『考古学ジャーナル』No.698、pp.15-19、ニュー・サイエンス社
- 久保弘幸 2014 「西日本後期旧石器文化の編年と瀬戸内技法」『旧石器考古学』79、pp.17-30、旧石器文化談話会
- 佐藤興平・南雅代・中村俊夫・柴田賢・児嶋美穂・武者 2018 「木片の 14C 年代測定による前橋泥流堆積時期の再検討 (予察)」『群馬県立自然史博物館研究報告』第 22 号、pp.95-101
- 佐藤良二・絹川一徳 2010 「近畿地方」『講座日本の考古学 1：旧石器時代（上）』稻田孝司・佐藤宏之編、pp.505-543、青木書房
- 高橋章司 2001 「翠鳥園遺跡の技術と構造」『翠鳥園遺跡発掘調査報告書—旧石器編—』、pp. 192-221、羽曳野市教育委員会
- 野口 淳 2005 「後期旧石器時代Ⅲ期の石器群構造とナイフ形石器・殿山からの視点・」『県指定文化財上尾市殿山遺跡シンポジウム—石器が語る 2 万年—』埼玉考古別冊 8、pp.262-276、埼玉考古学会・上尾市教育委員会
- 藤野次史 2006 「中・四国・近畿地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年研究』安斎正人・佐藤宏之編、pp.173-206、同成社
- 松藤和人 2021 「国府石器群」「瀬戸内技法」『旧石器考古学辞典<四訂版>』旧石器文化談話会編、学生社、p.74-126
- 松藤和人 2025 「誌上シンポジウム『九州における入戸火碎流・AT 前後の文化変動』にあたって」『旧石器考古学』89、pp.1-4、旧石器文化談話会
- 松本 茂 2023 「姶良火山噴火後の九州における石器群の再編と展開—AT・A・Ito 直上石器群の再検討—」『旧石器考古学』87、pp.1-21、旧石器文化談話会
- 三好元樹 2014 「近畿・中四国における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』第 10 号、pp.89-105、日本旧石器学会
- 森川 実 2003 「近畿地方における小形ナイフ形石器の背部整形—長原遺跡 89-37 次調査地のナイフ形石器の検討から—」『考古学に学ぶ』(II)、pp.29-40、同志社大学考古学研究室
- 森川 実 2007 「瀬戸内技法とサヌカイト礫」『考古学に学ぶ』(III)、pp.17-28、同志社大学考古学研究室
- 森川 実 2011 「AT 降灰以後における横剥ぎナイフ形石器の変遷」『旧石器考古学』74、pp.13-28、旧石器文化談話会
- 森川 実 2018 「近畿地方の切出形ナイフ形石器」『実証の考古学』同志社大学考古学シリーズXII、pp.27-38、同志社大学考古学研究室

森先一貴 2005「国府石器群の成立－大阪平野周辺部の石器群再考－」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、

pp.111-127、大阪大学考古学研究室

森先一貴 2007「角錐状石器の広域展開と地域間変異」『旧石器研究』第3号、pp.85-109、日本旧石器学会

森先一貴 2010「旧石器社会の構造的变化と地域適応」、262p、六一書房

森先一貴 2011「瀬戸内技法の多様性」『旧石器考古学』74、pp.49-59、旧石器文化談話会

山元孝広 2017「大山火山噴火履歴の再検討」『地質調査研究報告』第68巻第1号、pp.1-16、産業技術総合研究所 地質調査

総合センター

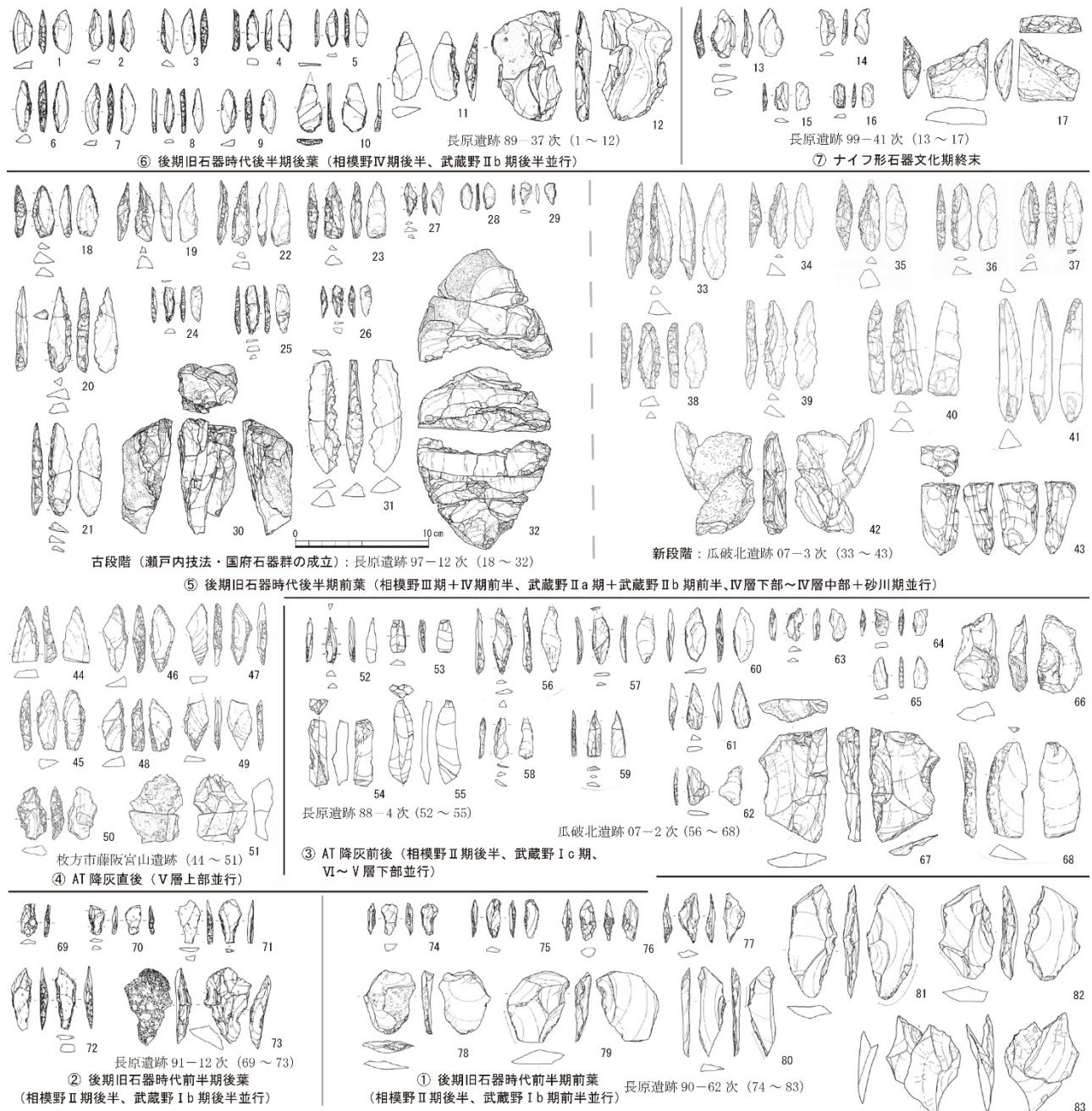


図1 大阪市長原・瓜破遺跡群における後期旧石器時代石器群の暫定編年案

# 「石槍」の三次元形態測定学

公立小松大学次世代考古学研究センター

野口 淳

## はじめに

石器の特定部位や特徴点間の距離計測的数値情報は伝統的に、長さ、幅等の独立した計測値として、または比率、示数など、形態分析・分類に用いられてきた。一方で、計測部位の特定、標準化や再現性が課題として指摘されている。その克服には、座標系を標準化した3Dモデルが有効である。本発表では、石槍、尖頭器などと分類呼称される後期旧石器時代の石器を対象として、3D計測、モデルの規格標準化、計測的数値属性の取得と解析について事例を報告する。

## 1 議論の前提

距離計測的(distometric)数値属性は石器形態の特徴を記述し分類するために多用される(Shott & Trail 2010)。石刃の定義は長さと幅の比である(Bordes 1961)。ハンドアクセスの平面形態分類に最大幅位置と端部の円形度が用いられる(Debenath & Dibble 1994)。数値基準は客観性と再現性を担保するが、一方で計測の方法、すなわち使用機器と使用方法、手順などについて課題も残る。

例えは異なる規格、精度の機器を用いる場合、精度と分解能が高いデータは丸めて利用しなければならない。マニュアル(手動)による計測では、計測機器の保持や計測場所の不一致により繰り返し精度が著しく低下する。何よりも石器の形態計測においては、異なる資料間で「同じ」場所(特徴点・ランドマーク)を指示することが困難である。

こうした課題を解決するために有効なのが3Dスキャナー等の計測結果に基づく3Dモデルである。実資料のデジタルツイン(デジタル複製)に対して標準化・規格化された座標系を適用することで、再現性が保証される。同一データに対して、座標で指示される部位から取得される計測値は常に一致するからである。なおこの場合の座標系は、各資料に固有な任意の系であるが、原点と座標軸のベクトルについて共通基準を適用することで標準化される。本発表では従来の石器図化と計測の基準と整合するように、対象に外接する直方体(バウンディングボックス)の左下隅を原点とし、最大幅軸をx、最大長軸をy、最大厚軸をzとしている(図1-1)。計測単位はmmである。

## 2 対象と方法

東京都東村山市内の11遺跡で発掘または採取された後期旧石器時代～縄文時代草創期の石槍・尖頭器(有茎尖頭器を含む)35点である(野口ほか 2025)。石器群としてまとまつたものではない。Next Engine社製卓上型光切断法スキャナーで3D計測を行い、スキャナー付属ソフトScanStudioでモデリングした。カタログ上の点群ピッチは0.127mm、実測値は400～800点/mm<sup>2</sup>の密度であった。3Dモデルから、オープンソースの3Dデータ編集ソフトCloudCompare、および統計解析用言語Rを用いて計測値取得と解析図化を行った。

## 3 数値示標の検討

**3-1. 大きさ(サイズ)** 長さをプロットした散布図で3つの区間が峻別されたので大・中・小の3分類を定義した。

**3-2. 平面形** 複数の大きさの値の比で示される、大きさを捨象した〈かたち〉である。

①幅広度(*W*) 長幅比のプロットから細身・中細・幅広の3分類を定義した。分類後の長さ・幅の線形回帰の係数  $R^2$  は当てはまり度が向上した (0.81→0.93~0.99)。

②最大幅位置(*WP*)・区間(*WR*) 最大長軸を9等分した連続断面で計測された幅(図1-2)の最大値を示す位置を、先端側(y軸遠位端)から1~9の順位値で示した(*WP*)。値が大きいほど「下ぶくれ」の形態であることを示す。また各計測位置の幅と最大幅の比(*w*)が0.8以上の区間数を示した(*WR*)。値が小さいほど局所的に幅広であることを示す。

③幅広示数( $\sigma W$ ) 全9区間の *w* の標準偏差を幅広示数とした(図1-3)。値が小さいほど全区間での幅の変化が少ない「柳葉形」のような形態であることを示し、大きい場合は三角形や菱形のように変化が大きいことを示す。先の *WP* と組み合わせることで平面形態を区分する数値示標となる。

### 3-3. 断面形 平面形に準じるが厚さに関する〈かたち〉を示す。

①厚み(*T*) 長厚比のプロットから薄手・中厚・厚手の3分類を定義した。分類後の長さ・厚さの線形回帰の係数  $R^2$  は当てはまり度が向上した (0.33→0.83~0.99)。

### ②最大厚位置(*TP*)・区間(*TR*) *WP*・*WR*と同じ。

③ねじれ度( $\sigma tw$ ) 9等分区間の左右両端が水平である(左右両端の *z* 値が等しい)場合を  $0^\circ$  として、左端を原点とした回転角  $\Delta tw$  を、右端の *z* 値が左端より大きい場合を+ (プラス)、逆を- (マイナス) として計算、9区間の標準偏差をねじれ度示数とした。 $\sigma tw$  が大きいほど器体長軸に沿ったねじれが大きいことを示す(図1-4)。

④断面積(CSA) 最大長軸に直交する *xz* 平面形を菱形に近似させ、9等分区間の連続断面の幅×厚さの平均値と最大値として示した。

⑤投射具先端横断面積(TCSA)・外周長(TCSP) Hughes(1998)と Shea(2006)の基準によりそれぞれ計算した。投射武器としての使用方法の示標とされる(橋詰 2015)。

## 4 考察

石器平面形態の定量分析には輪郭(アウトライン)の楕円フーリエ変換の応用がすでに行われている(Saragusti, et al. 2005)。3D計測モデルについても球面調和関数(Sholts et al. 2017)の応用がある。近年では3D点群を対象とする深層学習アプローチの考古資料への応用もはじまっている(Baiocchi et al. 2023)。対象とする石器形態について、より多次元かつ多量の情報を扱うこれら新しい研究方法に対して、3Dモデルを単純な距離計測的数値に還元する本発表の手法は取得したデータを使い切っていないと言える。一方で、複雑な数理を簡潔に要約した分かりやすさもある。複雑な石器形態の特徴をより単純な示標に要素分解する手段とも言える。従来手法が注目してきた示標に新しい計測技術によるデータをレトロフィットさせることで客観性と再現性が担保され、より高次の情報を全体的(holistic)に扱う新しい方法論と対置可能なものとなる。単純だがロバストな還元的(reductive)方法論として、石器形態の特徴と変化の把握に有効な示標を見出すための手段となり得る。

## 引用・参考文献

- 千葉 史・横山 真 2019 「石器形態 3D 情報の解析：量的データ処理のための R 言語プログラムの構築」『(かたち)を測る・分ける・読み解く』JSPS 科研費基盤 (C) 「3D 石器形態研究の確立による日本列島後期旧石器時代の生活・技術・文化的な解明」(代表者：野口 淳)：5-8.
- 野口 淳・横山 真・千葉 史 2025 「東村山市内考古学資料の三次元計測-市内出土・採集尖頭器（石槍）-」『東村山市市研究』,34: 1-32
- Baiocchi, A., S.Giagu, C.Napoli, M.Serra, P.Nardelli & M.Valleriani 2023 Artificial neural networks exploiting point cloud data for fragmented solid objects classification. *Machine Learning: Science and Technology*, 4(4): 045025. doi: 10.1088/2632-2153/ad035e.
- Bordes, F. 1961 *Typologie du Paléolithique ancien et moyen*. 85pp, Bordeaux, Delmas.
- Debénath, A. & H.L.Dibble 1994 *Handbook of paleolithic typology*. 212pp., Pennsylvania, Univ. Museum, Univ. of Pennsylvania
- Hughes, S.S. 1998 Getting to the point. *Journal of Archaeological Method and Theory*, 5(4): 345-408.
- Saragusti, I., A.Karasik, I.Sharon & U. Smilansky 2005. Quantitative analysis of shape attributes based on contours and section profiles in artifact analysis. *Journal of Archaeological Science*, 32(6): 841-853.
- Shea, J.J. 2006 The origins of lithic projectile point technology. *Journal of Archaeological Science*, 33: 823-846.
- Sholts, S. B., J.A.M.Gingerich, S. Schlager, D.J.Stanford & S.K.T.S.Wärmländer 2017 Tracing social interactions in Pleistocene North America via 3D model analysis of stone tool asymmetry. *PLOS ONE*, 12(7): e0179933. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0179933>
- Shott, M.J. And B. W. Trail 2010 Exploring new approaches to lithic analysis: laser scanning and geometric morphometrics. *Lithic Technology*, 35(2): 195-220.

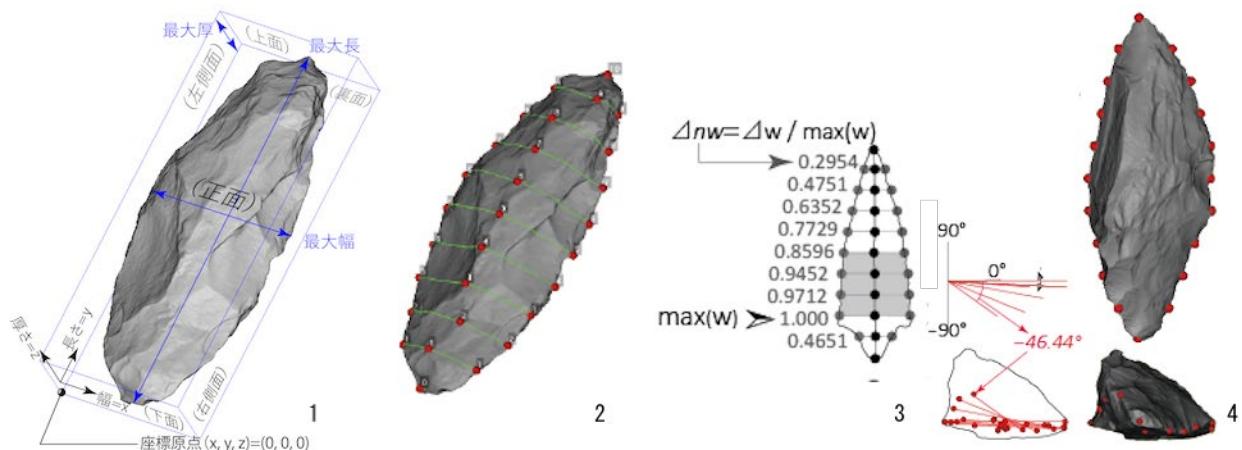


図 1 原点と座標系の設定(1)、連続断面の取得(2)、幅広示数の例(3)、ねじれ度の例(4)

## 緑色凝灰岩および緑色岩を使用した石斧の分布と原産地の調査

日本考古学協会  
前嶋 秀張

### はじめに

東海東部から南関東では、後期旧石器時代前半期（約38,000～28,000年前）の遺跡から刃部を磨いた石斧類が出土する。この石材は比重が重く、木などを叩き切っても壊れにくい石材を選択している。本稿では東海東部から南関東における石斧の分布と原産地の調査をとおして、採取可能な範囲を明らかにし、石材から石斧を製作する遺跡と製作した石斧を消費する遺跡について概観していく。

### 1 研究方法

本調査の研究方法は以下の手順で実施した。対象は後期旧石器時代前半期の遺跡から出土した石斧の石材を調査した（図1、図2）。石材調査は天竜川から那珂川までの石材を調査し、石斧の石質に類似する石材を特定した。石斧と石材の比較は実体顕微鏡や偏光顕微鏡を用いて観察し、比重、磁性、色調等を比較した。

### 2 調査結果

#### 緑色凝灰岩製石斧（図3）

原産地は丹沢層群を流下する酒匂川水系河内川流域等に分布する。石材特性は比重が2.4～3.0/cm<sup>3</sup>で、磁性がなく、板状に割れる片理があり、細粒で硬質である。石斧製作遺跡は愛鷹山麓の梅ノ木沢遺跡があり、石斧の未製品等が出土している。消費遺跡は愛鷹山麓の中見代第I遺跡や相模野台地の藤沢市No.399遺跡等がある。

#### 緑色岩製石斧（図4）

原産地は相模湖層群を流下する相模川、御殿峠段丘堆積物を流下する大栗川等に分布する。石材特性は比重が2.8～2.9で、磁性があり、貝殻状に割れやすく、細粒で硬質である。石斧製作遺跡は津久井城跡馬込地区、多摩ニュータウンNo.72遺跡、野水遺跡第1地点があり、石斧の未製品等が出土している。消費遺跡は武藏野台地の鈴木遺跡や相模野台地の大和配水池内遺跡等がある。

### まとめ

石材の分布と利用の関係は、丹沢層群の緑色凝灰岩と相模湖層群の緑色岩が石斧の製作に影響を与えており、地質的な条件が石材選択に大きく関与していることが示唆される。

石材の物理特性と用途は、後期旧石器時代前半の人々は比重が重く、木などを叩き切っても壊れにくい物理的な特性を理解し、用途に応じて適切な石材を選択していることが明らかになった。

### 引用・参考文献

- 佐藤宏之 2020 「はじめに」『愛鷹山麓の旧石器文化』株式会社 敬文舎 10-12頁
- 中村由克 2015 「後期旧石器時代における透閃石岩製石斧のひろがり」『旧石器研究』日本旧石器学会 第11号 65-78頁
- 中村由克 2015 「東日本における緑色凝灰岩製石斧を持つ遺跡群」『日本旧石器学会第13回研究発表・シンポジウム予稿集』日本旧石器学会
- 長崎潤一 2022 「後期旧石器時代前半期の大規模遺跡と石斧」『考古学ジャーナル』764 ニュー・サイエンス社 6-10頁
- 川手新一・河尻清和・山下浩之 2021 「丹沢山地の地質－古伊豆・小笠原北端の衝突帯に関連して－」『神奈川県立博物館調査研究「報告書（自然科

学』16 13-34 頁

中村由克 2017 「石器石材の研究とジオパーク」『資源環境と人類』第 7 号 明治大学黒耀石研究センター 87-93 頁

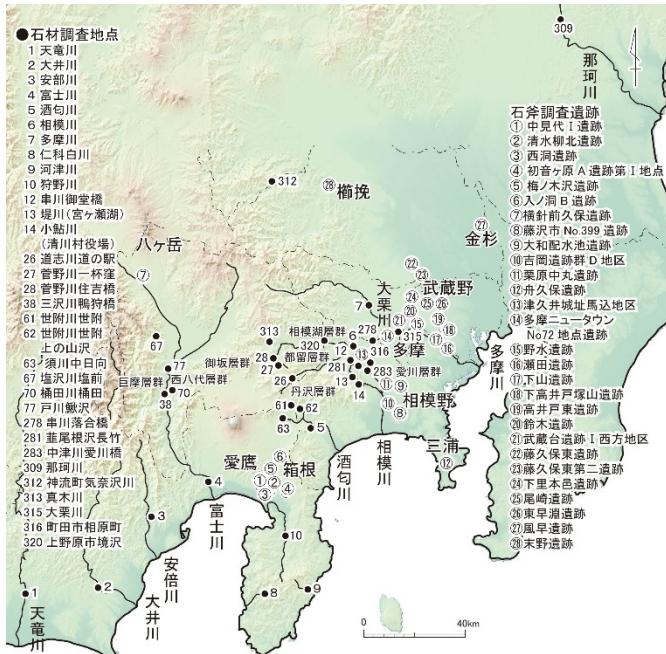
植木岳雪・原 英俊・尾崎正紀 2013 「八王子地域の地質」『地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質区幅)』産総研地質調査総合センター 66 頁

河尻清和 2012 「神奈川県域に分布する四十万帶の地質」『神奈川県立博物館調査研究報告書 (自然科学)』14 163-174 頁

鈴木美保 1995 「関東西南部の石斧と石斧製作址」『考古学ジャーナル』385 ニュー・サイエンス社 9-15 頁

長崎潤一 2011 「石斧研究の基礎的整理—後期旧石器前半期—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 4 分冊 卷 50 67-78 頁

石斧石材の調査にあたっては中村由克氏から玄武岩質の溶岩や凝灰岩をもととする「相模湖層群の緑色岩」についてご教示をいただいた。



## 下河原崎谷中台遺跡の角錐状石器を伴う石器群について

公益財団法人茨城県教育財団

天野 早苗

### はじめに

下河原崎谷中台遺跡は、茨城県つくば市の南西部に位置する旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。つくば市域を流れる西谷田川とその支流に挟まれた標高 23m ほどの台地縁辺部に立地しており、平成 17・18・30・令和 2 年度の 4 次にわたって調査が行われた。筆者は平成 30・令和 2 年度の調査成果について整理作業を行い、報告書を刊行した（天野 2025）。今回は整理作業を行った結果と角錐状石器について若干の考察を述べたい。

### 1 下河原崎谷中台遺跡の石器群について

石器集中地点は全部で 9 か所が確認されており、ナイフ形石器 61 点、角錐状石器 22 点、搔器 51 点、円形搔器 5 点、削器 6 点、石錐 2 点、楔形石器 4 点など、総点数 3,862 点が出土している。また集中地点内からは礫群 6 か所と焼土集中地点 1 か所も確認されている。編年的には、出土層位と角錐状石器を伴うことから、武藏野編年 V～IV 層下部段階、下総編年の IIb 期に該当する。県内のローム層堆積状況の特性から、出土層位から石器群の時期細分が難しいという問題がある。そこで今回は、出土石器の中で角錐状石器の形態について先行研究の形態分類や分析結果に当てはめ、検討を行った。

### 2 出土角錐状石器について

出土した 22 点の内、完形品 14 点を対象に分析を行った。角錐状石器の石材は、黒曜石 6 点、ガラス質黒色デイサイト 5 点、瑪瑙 1 点、ガラス質黒色安山岩 1 点、頁岩 1 点である。関東の角錐状石器の形態的特徴の変化については亀田直美氏により示され（亀田 1996、2011）、伊藤健氏は V・IV 層下部段階の下層（第 4a 群）と上層（第 4b\_k 群）で分類し、変遷を示している（伊藤 2025）。これらの先行研究を基に、今回は長さ・幅・厚さ、狩猟法の想定に用いられる TCSA (Tip cross-section area)、TCSP (Tip cross-section perimeter)（佐野ほか 2012・2013）について分析し、図 1 に示した。TCSA と TCSP については、佐野ほか 2012 を参考に民族事例の刺突具の範囲をトーンで示した。長さの計測値（図 1-A）では中央値が 5.6 cm、平均値は 5.9 cm で、伊藤氏の示したチャートと比較すると第 4a 群に見られる傾向とほぼ一致する。長幅比（図 1-B）のピークは 2.1～3.0、4.1～4.5 cm にあり、これは全体的に数値が大きくなっているが、第 4a 群の傾向に近い。形態分類について、長さ・幅・厚さの相関図（図 1-C・D）に傾向が反映されるのか検討したが、厚さ・幅には一定の相関性が見られたものの、長さ・幅には齊一性が認められず、相関図からの形態分類は難しいという結果となった。このことから、今回は亀田氏の形態分類の A 類・B1 類・B2 類を用いて分類を行い、TCSA・TCSP 箱ひげ図（図 1-E・F）の分布を示した。B2 類は 1 点のみであったことから除外している。分布図は、刺突具に適する値であった。また、亀田氏の形態変遷と角錐状石器の特徴を照合すると、変遷の II 期に該当するものと考えられ、伊藤氏の第 4a 群の傾向に近いことも含め、これらのことから、下河原崎谷中台遺跡の角錐状石器は V 層～IV 層下部段階の下層段階に位置付けられる可能性が高い。

### 3 石器石材について

石器石材については、近傍の石材を使用するのではなく、栃木県や長野県の黒曜石、東北・栃木県

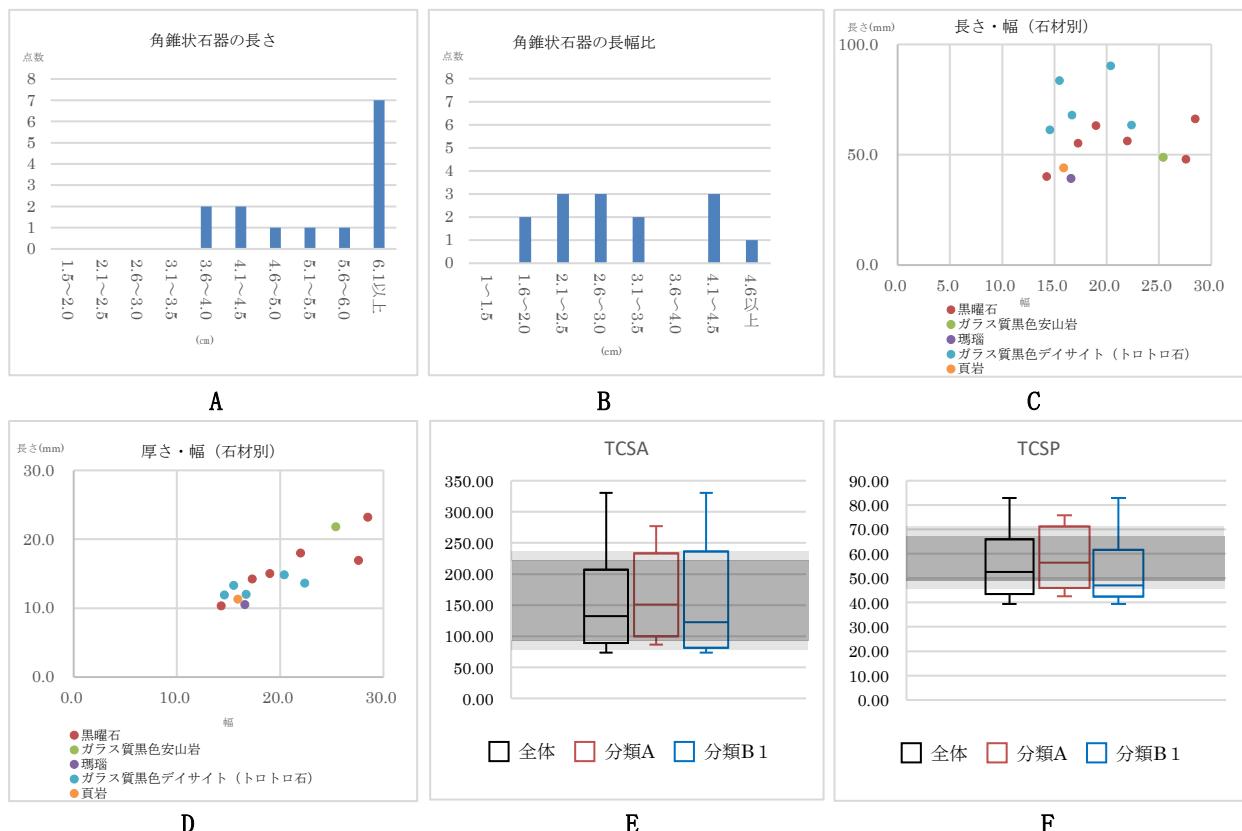


図1 下河原崎谷中台遺跡出土角錐状石器分析図

と考えられる貝岩、栃木及び県北産出のガラス質黒色安山岩、県北産出の瑪瑙・ガラス質ディサイト（トロトロ石）などが遺跡に持ち込まれ石器製作が行われている。石材産地については今後詳しく分析する必要があるため、課題である。

### おわりに

今回は下河原崎谷中台遺跡の石器群と角錐状石器について若干の検討結果を示した。今後は他の器種、石材の分析も行い、総合的に石器群の検討を行っていきたい。今回、分析方法などについて伊藤健氏には多くの助言を賜りましたことお礼申し上げます。また、最後になりますが、鬼籍に入られた窪田恵一氏には整理作業時に多大なる助言を賜りました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

### 引用・参考文献

- 佐野勝宏・傳田惠隆・大場正善 2012 「狩獵法同定のための投射実験研究(1) - 台形様石器 - 」『旧石器研究』(8) : 45-63
- 佐野勝宏・洪惠媛・張思熠・鹿又喜隆・阿子島香・柳田俊雄 2013 「山形県高倉山遺跡出土ナイフ形石器に残る狩獵痕跡の研究」『東北大学総合学術博物館研究紀要』(12) : 45-76
- 亀田直美 1996 「角錐状石器」『石器文化研究』(5) 石器文化研究会: 189-198
- 亀田直美 2011 「関東地方の角錐状石器について」『九州旧石器』(15) 九州石器文化研究会: 13-22
- 天野早苗 2025 「下河原崎谷中台遺跡 3 下河原崎高山遺跡 下河原崎高山古墳群 3」『茨城県教育財団調査報告』第 478 集
- 伊藤健 2025 『後期旧石器時代の新たな遺跡構造論 東京の遺跡を中心に』 新泉社
- 鈴木美保 2025 「野川流域における有撃尖頭器の出現と展開(1)-下原・富士見町遺跡の出土例を中心として-」『資源環境と人類』(15) : 77-96

## ハンマーストーンの分析による石器製作技術と動作 －東日本の後期旧石器時代前半期石器群の諸事例から－

東北大学大学院  
金 彦中

### はじめに

これまでの石器製作技術の同定や復元研究は、石器表面に残された製作痕跡を観察することで石器を製作する際に用いられた剥離具や剥離方法を同定したものである。一方、剥離具であるハンマーにどのような痕跡が残されているのかを分析した研究は未だ少ない。本研究は、東日本における後期旧石器時代前半期石器群ハンマーストーンを対象に、表面に残された製作痕跡に基づいてどのような技術と工程を経て石器が作られたのか分析した。この分析によってハンマーストーンにみられる石器製作痕跡と動作を結ぶ基礎的データを提示した。

そのため、東日本に分布する後期旧石器時代前半期石器群を石器群内作業内容によって大きくグループⅠ：小口面型石刃技法と基部加工尖頭形石器群、グループⅡ：周縁型石刃技法と背部加工尖頭形石器群、グループⅢ：台形様石器群、グループⅣ：打製・刃部磨製石斧を伴う石器群の4つのグループにわけ、総数22遺跡の計52点の資料をもとに、ハンマーストーンの形状と製作痕跡の詳細な分析を実施した。

### 1 分析対象と方法

分析では、①作業内容が異なる前半期遺跡においてどの形状のハンマーストーンが好まれて用いられるのか形態計測を行い、②肉眼認識できる低倍率観察によりハンマーストーンの表面に残っているマクロな石器製作痕跡の識別を行った。

まず①、ハンマーストーンの形態的計測は、礫の最大長をA・直交する幅をB・その厚さをCとしてその径の比を算出した。径の比率とその範囲は $X=C/B$ 、 $Y=B/A$ で、 $0 < X \cdot Y < 1$ のようになる。また、X軸Y軸それぞれの1/3地点及び2/3地点の軸を分類の境界として礫形状をアルファベット順で9段階（AからIまで）に区分した。

そして、②ハンマーストーンの痕跡はCuarteroとBourguignonが提示したマクロな石器製作痕跡（Cuartero and Bourguignon 2022）を参考に分析を行った。特に、線状傷の蓄積による痕跡は、磨耗痕（痕跡a）、縞線状痕（痕跡b）、線状打撃痕（痕跡c）が該当し、割れ円錐（コーン）の蓄積による痕跡は、コーン状打痕（痕跡d）、アバタ状打痕（痕跡e）、うろこ状欠損（痕跡f）、全体的破損（痕跡g）が該当する。

### 2 分析結果と考察

分析の結果、ハンマーストーンの形状が共伴する石器群ごとに異なるものの、その中でもグループⅡ（周縁型石刃技法と背部加工尖頭形石器群）では球状から棒状のかたちをしているB・C・D・E・Fタイプのかなり広い範囲の礫をハンマーストーンとして採用しつつ、ハンマーの端部を中心に縞線状痕（痕跡b）が確認できた。この縞線状痕（痕跡b）の形成要因としては、ハンマーストーンの長軸に合わせて上下に反復運動を行うことにより発生したとみられる。その中でも筆者が念頭に置いているのが背部加工尖頭形石器を製作するため石刃や剥片にブランティング（Blunting）といった二次加工を施すために使う二次加工工具（リタッチャー）の可能性である（図1のAを参照）。

また、グループIIIとIV(台形様石器群と打製・刃部磨製石斧を伴う石器群)においてはE・F・Hタイプの棒状礫がハンマーストーンとして採用され、線状打撃痕(痕跡c)が顕著に確認できた。恐らく、剥離する対象物と打撃したハンマーストーンが直交する向きで、かつ上から垂直に打ち当てられた際に剥離物との接触により発生したと考えられる。また、一般的な剥片剥離とは異なり一定の打面を持たない剥離物であると考えられる(図1のBを参照)。この痕跡は台形様石器群と打製・刃部磨製石斧の組成を持つ遺跡の資料以外には確認できなかった。

この結果から後期旧石器時代前半期の石器製作技術は主目的の石器を製作するためその身振りに適切なハンマーストーンを選択し、それに合った動作をするための「技術選択」を行っていることが示唆される。しかし、前半期における石器製作技術研究には未だ体系的に行われていない状態である。そのため、遺物の観察から製作実験による定性的かつ定量的なデータを蓄積する必要があろう。

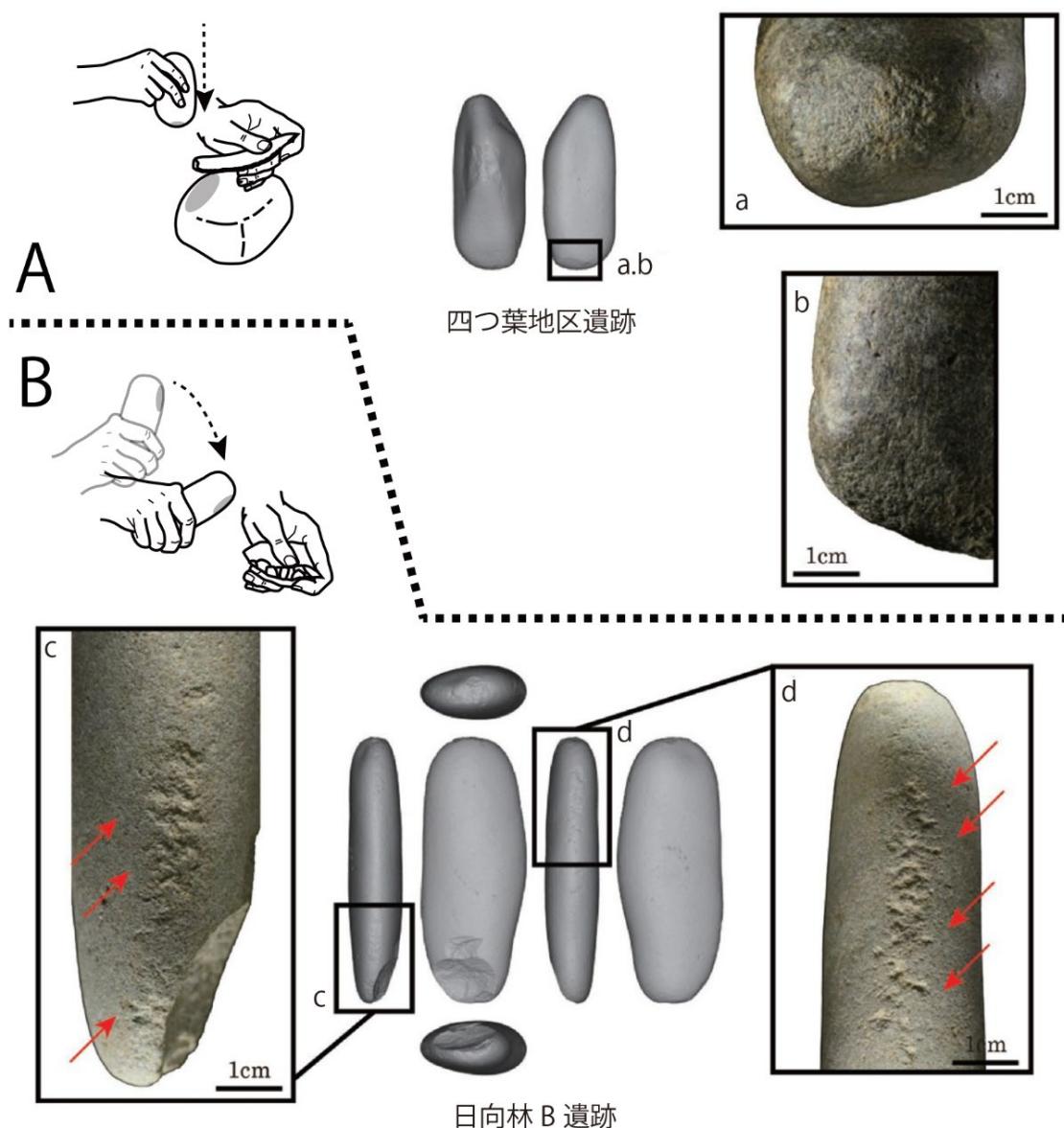


図1 ハンマーストーンに残された石器製作痕跡と推定される動作  
(金2025より一部編集)

引用・参考文献

- 金 彦中 2025 「ハンマーストーンの分析による 石器製作技術と動作 一東日本の後期旧石器時代前半期石器群の諸事例一」  
『旧石器研究』21、1-16 頁、東京、日本旧石器学会
- Bourguignon, L., I. Ortega and F. Cuartero 2022 L' outillage en quartz spécialisé utilisé en percussion lancée  
en contexte discoïde à Pointe pseudo-Levallois : 1<sup>er</sup> exemple de Champs de Bossuet. *Comptes Rendus Palevol* 21  
(24) : 489-509.
- Cuartero, F. and L. Bourguignon 2022 Percuteurs et retouchoirs au Paléolithique moyen en péninsule Ibérique :  
caractérisation et mode de fonctionnement. La percussion lancée au Paléolithique : identification de son  
usage, types d' outils associés et étendue chronologique. *Comptes Rendus Palevol* 21 (14) : 273-301.
- de la Peña Alonso, P. 2011 Sobre la identificación macroscópica de las piezas astilladas : propuesta experimental.  
*Trabajos de Prehistoria* 68 (1) : 79-98.
- Moorea, M. W., T. Sutiknab, M. Jatmikob, J. Morwooda and A. Brumm 2009 Continuities in stone flaking technology  
at Liang Bua, Flores, Indonesia. *Journal of Human Evolution* 57 (5) : 503-526.

## 吠原遺跡の再整理作業—その手順と成果—

<sup>1)</sup>埼玉県教育局、<sup>2)</sup>川口市教育委員会

尾崎 沙羅<sup>1)</sup>、小林 竜太<sup>2)</sup>

### はじめに

本論の目的是、吠原遺跡に係る再整理作業の手順と、現在までの成果を示すことである。吠原遺跡は、1982年から発掘調査が行われ、1985年に調査報告書が刊行された。既刊報告書は、当時の資料報告の水準には十分に達していたものの、今日的な視点に立つと、その記載内容等に補足可能な情報が認められる。そのため、現在までの研究の成果や、デジタル技術の進展をふまえて再整理作業を行うことで、より実用的な基礎データの提供を目指す。

### 1　吠原遺跡における再整理作業の目的とその意義

吠原遺跡は、大宮台地南端部に立地する。川口市遺跡調査会によって、1982年10月から1983年9月まで、約25,000m<sup>2</sup>の範囲における発掘調査が行われた。その結果、旧石器時代、縄文時代、平安時代の遺物、遺構が確認され、1985年に発掘調査報告書(先土器・縄文時代編)(吉田(編)1985)が、1987年に各時期の分析を記した「考察編」(吉田(編)1987)が刊行された。旧石器時代の石器は総計2,115点出土し、また遺物集中部は10箇所(ユニットI～X)検出された。このうちユニットI～VIII、Xは二側縁加工および部分加工が施されたナイフ形石器を伴う石器群であり、ユニットIXは尖頭器を中心とする石器群である。また、利用石材は、頁岩、硬質頁岩、チャートが全体の80%以上を占める。なお、出土層位はソフトローム層上面よりハードローム層上面とされ、なかでもソフトローム層中位に分布が集中すると報告された(吉田(編)1985)。

本遺跡は、主にナイフ形石器の技術的、形態的特徴などから、いわゆる「砂川期」(田中1979)に比定されてきた(吉田(編)1987、西井2002など)。当該期における大宮台地の遺跡は約10箇所とされ、そのなかでも本遺跡の遺物出土点数は最多であり、石器集中部の数も最大規模である(西井2002)。また、大宮台地においては希少な尖頭器を伴う石器群(ユニットIX)が確認されており、ナイフ形石器と尖頭器との共伴関係に関する分析や(西井2002)、尖頭器と石材利用の関係から集団の領域を検証する研究(国武2000)などにおいても、有用な検討対象遺跡として扱われてきた。

このように、本遺跡は大宮台地における砂川期の基礎資料であり、また当該期における多様な研究に不可欠な遺跡と評価される。しかしながら、既刊報告書における石器の平面・垂直分布図、接合関係、母岩別分類などは、概略図の提示と概要の説明のみに留まっている。くわえて、砂川期は、石器群の識別において石器製作の技術基盤が特に重要であると論じられるが(諏訪間・堤1985)、その技術的特徴を理解する際に注目すべき石核や剥片などの実測図も未掲載である。そのため、以上の点を補うことで、当該期における石器製作技術の復元研究や、また遺跡における空間分析などの研究に大きく寄与すると考える。

### 2　再整理作業の手順

本再整理作業の流れは、モデルフロー(図1)の通りである。最初に、石器の出土位置情報の地理情報システム(GIS)化を行った。具体的には、国土地理院の基盤地図情報(数値標高モデルDEM5A)と川口市都市計画図(1/2,500デジタル版)を用いて、地理空間情報の土台となる地形図をQGISにて作成した。そのうえで、上記2つの基盤地図と、発掘調査報告書(吉田(編)1985)の「第8図遺跡全体図」(p.15)

と「第9図先土器時代の発掘調査区」(p.17)とを照合し、道路や家屋などの不動点を重ね合わせることにより、従前の遺物分布図に地点情報を付与した。その結果、調査当時におけるグリッド基点の座標情報が明らかとなった。

他方で、実際の遺物の位置情報については、まず当時の第二原図を元に、グリッド基点から出土地点の距離、および標高(T.P.)を計測した。そのうえで、上述の作業により判明したグリッド基点の座標情報から各遺物の出土座標を計算し、基盤地形図に反映させ、GISデータとしてまとめた。

遺物の再整理作業については、図1下段の手順で行った。最初に、注記内容であるグリッド単位の番号(例 BK-11-1)を基本として、旧遺物台帳に掲載されていた器種、計測数値、石材等の情報を精査のうえデータ化し、新遺物台帳とした。次に、グリッド単位で保管されていた石器を母岩別に分類し、接合作業を試みた。そして、母岩分類と接合作業の一定程度のまとまりを得たところで、未掲載資料の実測、および報告書掲載資料の再実測を進めている。

### 3 現在までの成果と今後の展望

上記の手法により、石器の母岩別分類、接合作業、図化などが進行している。また、現在のところ、GISデータに関しては、呴原遺跡における石器の出土位置情報の入力に留まっているが、今後はその詳細情報(器種、サイズ、石材、母岩分類情報等)を空間情報に紐づけていく。さらに将来的には、呴原遺跡を橋頭堡として、他遺跡における石器の空間情報、およびそれらに連なる遺物の属性を統合する。それにより、同一地形図上において複数遺跡の石器分布等を閲覧することができ、これまでと異なる視点で空間分析などを行えると見込まれる。このように、大宮台地における石器の位置情報を基準とした統合データを構築し、新たな研究の基盤とすることを今後の展望としたい。

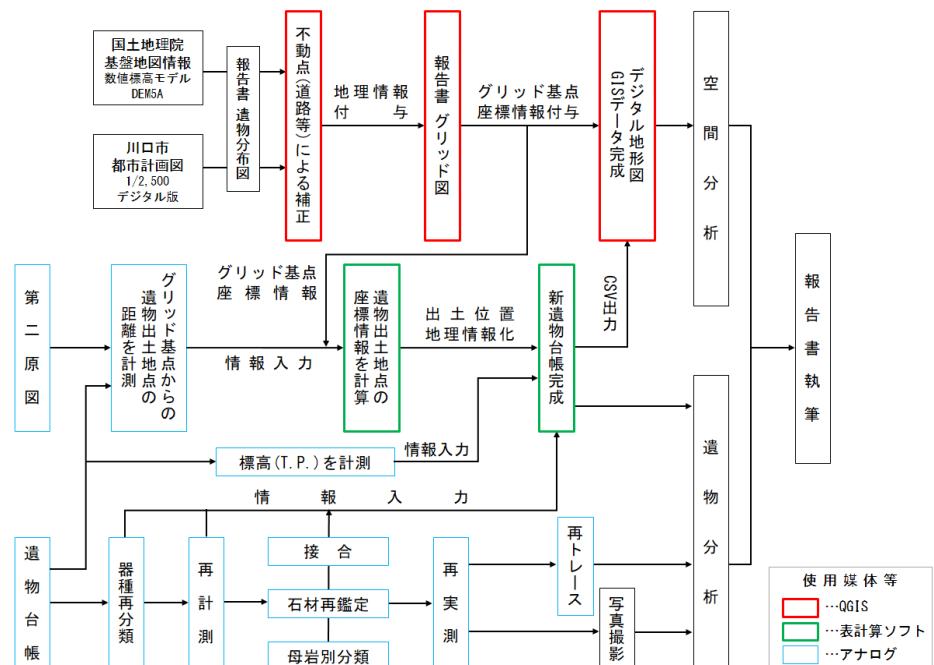


図1 再整理作業 モデルフロー

### 引用・参考文献

- 諏訪間順・堤隆 1985 「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第IV文化層の石器群について」『旧石器考古学』30,85-108 頁,旧石器文化談話会
- 田中英司 1979 「武藏野台地 II b 期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』7,65-74 頁,神奈川考古同人会
- 西井幸雄 2002 「砂川期の基礎的研究(1)－大宮台地、武藏野台地、相模野台地を中心として－」『研究紀要』17,1-28 頁,財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田健司(編) 1985 『川口市文化財調査報告書第 23 集－吠原遺跡－』川口市教育委員会
- 吉田健司(編) 1987 『川口市文化財調査報告書第 25 集－吠原遺跡(考察編)－』埼玉県川口市教育委員会

## 相模野台地における男女倉型有樋尖頭器の衝撃剥離痕跡

大正大学大学院

野口 智輝

### はじめに

有樋尖頭器はこれまで、製作技術や編年的な位置づけなどの研究が試みられてきた。一方で機能研究に着目すると、有樋尖頭器、あるいは有樋尖頭器を伴う石器群に使用痕跡分析を行った例は少ない。そこで、相模野台地の男女倉型有樋尖頭器の衝撃剥離痕跡の分析を行い、有樋尖頭器の機能について考察する。

### 1 方法と対象遺跡

衝撃剥離痕跡は、石器が狩猟具として用いられた際に骨などとの接触によって生じるマクロな痕跡である。衝撃剥離痕跡は、肉眼で観察が可能であり、微小光沢面の分析のように表面の風化や石材による影響をほとんど受けないため、広範な時期・地域の多量の資料について刺突具としての使用の可能性を検討できる（山田 2008）。こうした特徴を考慮して本発表では、自身で行った尖頭器での実験と先行研究（御堂島 1992、Sano2009）を参考に、衝撃剥離痕跡の分析を行う。佐野（Sano2009）の示した、指標的衝撃剥離痕跡（以下 DIF）は、狩猟時にのみ排他的に生じる衝撃剥離である（佐野 2011）。ただし、橋詰（2012）はナイフ形石器を対象とした DIF を尖頭器に導入するには注意が必要であるとしている。こうした視点を参考に、今回の分析では尖頭器製作中に頻繁に生じる折れについては、その他の痕跡を伴わず、折れのみが単独で生じているものについては衝撃剥離痕跡から除外する。

対象とした遺跡・点数は、神奈川県の相模野台地に位置する（図 1）、相模原市の下森鹿島遺跡第Ⅱ文化層（下森鹿島遺跡発掘調査団 1993）4 点、中村遺跡第Ⅴ文化層（中村遺跡発掘調査団 1987）1 点、山王平遺跡（玉川文化財研究所 2021）1 点、横山 5 丁目遺跡（横山 5 丁目遺跡発掘調査団 1997）1 点、大和市の深見諏訪山遺跡（大和市教育委員会 1983）3 点、上草柳遺跡群大和配水池内遺跡第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ文化層（大和市遺跡発掘調査団 2008）15 点の 7 遺跡から出土した計 25 点の有樋尖頭器である。

これらの石器群は、砂川期～ナイフ形石器終末期の範囲に収まる。

### 2 観察結果

観察の結果、下森鹿島遺跡で 1 点、上草柳遺跡群大和配水池内遺跡第Ⅵ文化層で 3 点に衝撃剥離痕跡を確認した（表 1）。下森鹿島遺跡では、4 点中 1 点に衝撃剥離痕跡がみられた。黒曜岩製の有樋尖頭器の先端部の背面側に縦溝状剥離痕跡が生じている（図 2-1）。大和配水池内遺跡第Ⅵ文化層では、12 点中 3 点に衝撃剥離痕跡がみられた。1 点目は、安山岩製の有樋尖頭器の先端部腹面側に樋状剥離面を切って縦溝状剥離痕跡が生じている（図 2-2）。2 点目も、安山岩製の有樋尖頭器であり、先端部背面側に縦溝状剥離痕跡が生じている。また、基部にはめくれるような折れが生じており、その末端部はステップとなっている（図 2-3）。3 点目は、凝灰岩製の有樋尖頭器であり、先端部背面側に樋状剥離面を切って縦溝状剥離痕跡が生じている（図 2-4）。

### 3 有樋尖頭器の機能

以上のように、衝撃剥離痕跡の存在から見て相模野台地の男女倉型有樋尖頭器のなかには狩猟具の先端として機能したものが存在したと考えられる。また、沢田（2019）のしぐね遺跡の使用痕跡分析

では、有樋尖頭器から使用痕跡を検出しており切削具や槍先と結びつくとしている。田村 (2011) は、有樋尖頭器の機能について海外の尖頭器の使用痕跡分析例から尖頭器には多様な機能があり、機能はコンテクストによって決定するとし、有樋尖頭器についても同様であると指摘している。このように、有樋尖頭器には加工具としての機能も考えられ、多様な機能があったとみられる。田村が述べるように、槍先として使用されるか、加工具として使用されるかは、コンテクストによって決定されたと考えられる。しかし、使用痕跡分析例が少ないため、今後さらに分析が必要である。

### おわりに

今回、相模野台地の男女倉型有樋尖頭器について衝撃剥離痕跡の観察を行った。その結果、相模野台地の男女倉型有樋尖頭器のなかには狩猟具として使用されたものが含まれていると考えられた。また、有樋尖頭器には他の使用痕跡分析例などから多様な用途があったとした。今後は地域を広げるなど、分析例を蓄積していく必要がある。

### 引用・参考文献

- 佐野勝宏 2011 「石器に残される狩猟痕跡認定のための指標」『考古学ジャーナル』, 614:20-25
- 沢田 敦 2019 「しぐね遺跡出土石器の顕微鏡観察—有樋尖頭器石器群における石器の機能と運搬」『しぐね遺跡』, 津南町教育委員会, 84-100
- 下森鹿島遺跡発掘調査団 1993 『下森鹿島遺跡』, 194 頁
- 総合文化財研究所 2018 『下九沢山谷遺跡』, 96 頁
- 玉川文化財研究所 2021 『山王平遺跡：発掘調査報告書』, 141 頁
- 田村 隆 2011 『旧石器社会と日本民俗の基層』, 同成社
- 中村遺跡発掘調査団 1987 『中村遺跡』, 597 頁
- 橋詰 潤 2012 「両面尖頭器の欠損」『旧石器研究』, 8:123-143
- 御堂島正 1992 「石鍼と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』, 92:79-97
- 山田しよう 2008 「石器の機能から見た旧石器時代の生活」『旧石器研究』, 4:49-60
- 大和市教育委員会 1983 『深見諏訪山遺跡』, 98 頁
- 大和市遺跡発掘調査団 2008 『上草柳遺跡群大和配水池内遺跡』, 346 頁
- 横山 5 丁目遺跡発掘調査団 1997 『相模原市横山 5 丁目遺跡発掘調査報告書』, 120 頁
- Sano, K., 2009 Hunting evidence from stone artefacts from the Magdalenian cavesite Bois Laiterie, Belgium: a fracture analysis. *Quartar* 56, pp. 67-86.

表1 有樋尖頭器の衝撃剝離痕跡

no.	報告書 図番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	位置	破損	備考
下森鹿島遺跡第II文化層									
1	1-11U	37.5	20.3	7.5	—	黒曜岩	先端	flu(feа)	先端部欠損
上草柳遺跡群大和配水池内遺跡									
1	1-8B	70.5	20.3	9.8	—	安山岩	先端	flu(feа)	先端部欠損
2	6-10B	42.0	25.5	7.5	—	安山岩	先端 基部	flu(feа) tra(stе)	先端部・ 基部欠損
3	11-8B	48.0	22.5	9.8	—	凝灰岩	先端	flu(feа)	先端部欠損

・衝撃剝離痕跡の略号は、flu:縦溝状剝離痕跡、bur:彫器状剝離痕跡、spi:副次的剝離痕跡、tra:折れ

・()は、剝離の末端部形態、略号は、fea:フェザー、hin:ヒンジ、ste:ステップ、sna:スナップ

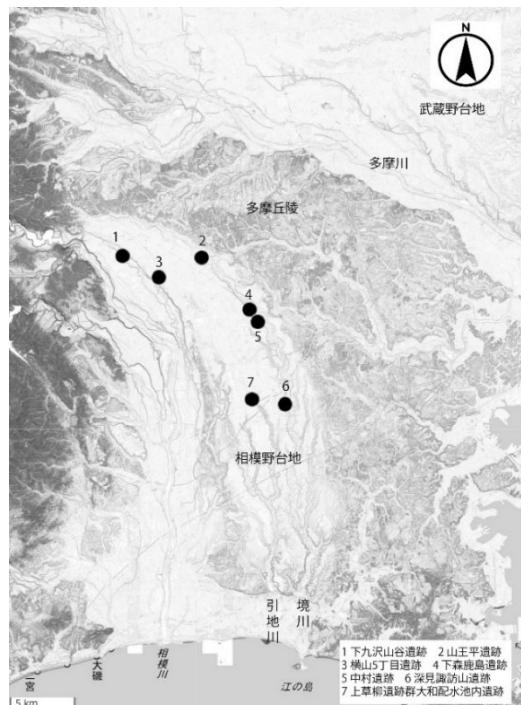


図1 対象とした遺跡  
(地理院地図を基に作成)

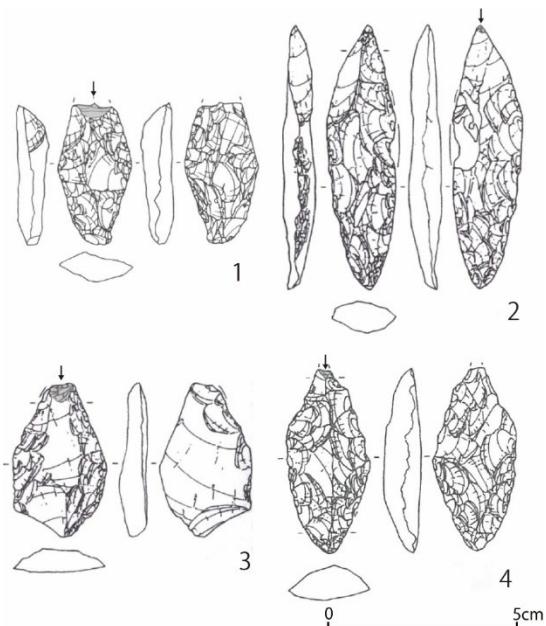


図2 有樋尖頭器の衝撃剝離痕跡  
(1 下森鹿島遺跡 (下森鹿島遺跡発掘調査団 1993)、  
2-4 大和配水池内遺跡 (大和市遺跡発掘調査団  
2008))

## 剥片尖頭器石器群の原産地的様相－熊本県人吉市石清水遺跡を事例として－

明治大学大学院

矢野 賢太

### はじめに

九州地域は、分布・種類・質・量という観点で異なった複雑な石材環境を有する。AT 降灰直後に出現在する剥片尖頭器は非ガラス質の石材を志向する傾向はあれども、この環境差を超えて共有される点で重要である。その素材生産技術は石核調整を積極的に施さず小口面から大型の石刃を剥離する浪費的な技術が推定される。また、この技術を可能とする原産地での一括生産とツール・素材状態での搬出搬入という管理性の高い運用形態が指摘される（阿部 2005、芝 2012）。

しかし、この運用形態によるためか、遺跡の大部分で生産痕跡が残されない。結果として、素材生産技術や工程、その痕跡が残されたであろう原産地遺跡の解像度は低い。特にチャートや黒曜石などガラス質の強い非主体的な石材の場合、その傾向は顕著であるといえよう。

そこで本発表が対象としたのが熊本県人吉市に所在する石清水遺跡である。本遺跡は、近年、村崎孝宏・岸田裕一の両氏によって石材運用・剥片剥離技術が検討され、チャートによる剥片尖頭器生産と原産地遺跡的側面が指摘されている（村崎ほか 2023）。一方で、属性分析に基づく技術・工程全体の復原は行われていない。そこで、その復原とともに遺跡形成過程を把握し、原産地近傍における生産遺跡の実態解明を試みた。

### 1 対象の概要と分析の方法

石清水遺跡は平成 9 年に人吉市教育委員会によって調査が行われ、シラス直上のⅡ層にて剥片尖頭器とスクレイパーを主体とする 205 点の石器群が確認された。出土は三つのブロックに集中し、他時期の遺物の混在は見られず、一括性の高い石器群と評価できる。石材は、チャート・ホルンフェルス・黒色頁岩・流紋岩・黒曜石によって構成される。その石材運用は原石分割から二次加工までの一連の工程がみられるチャートと点数が少なくツールの割合が多い他石材に大別される（村崎ほか 2023）。

分析は、まず接合資料 3 点を含むチャート製石核 20 点を対象に法量・剥離痕の計測、素材・打面・作業面の位置といった属性を抽出し、技術を類型化した。その後、縦長剥片石核から長さ・幅の計測可能な剥離面を抽出し、剥離された剥片の法量を推定した。この数値を遺跡内のツール・同地域におけるチャート製剥片尖頭器の長幅比と照合することで剥片の供給関係を検討し、工程を復原した。最後に石材別の消費過程を対比し、本遺跡での石材運用形態を把握することで、遺跡の性格・形成過程を明示した。なお、本発表における遺跡の点数・器種組成・石材構成については、筆者による集計と調査報告書との間に齟齬が見られたため、筆者の集計によるものを使用する。

### 2 分析結果

素材生産技術は打点移動や作業面の設定、石核素材の形状によって大きく二つの技術に大別できる。加えて、剥離された剥片を石核に転用する事例も確認でき、一定の柔軟性を備えた製作工程を復原できた（図 1）。技術①は小口面に作業面を設定し、剥離を行う。そのため、剥片の形状が規制され、技術②と比べ規格的な縦長剥片が剥離される傾向がある。一方で、技術②は打点を大きく左右に動かすため、縦長剥片とともに幅広・寸詰まりの剥片も剥離されている。このうち後者は遺跡内において剥片尖頭器に供給されず、他器種に供給される。人吉盆地内のチャート製剥片尖頭器をみても、素材が

長幅比2対1程度のものに限られる点で同様の傾向が読み取れる。その他、技術③は、原石分割や①・②によって剥離された剥片を石核に転用することで、さらに小型の縦長剥片を剥離している。

石材別の消費過程では、チャート以外でも運用形態の異なる石材が確認できた。まず、従来のツール・剥片状態での運用はホルンフェルスで看取できる。一方で、チャートとホルンフェルスの中間的な様相を示すのは流紋岩・黒色頁岩である。両石材では、点数が少ないものの、石核状態での搬入がみられる点でホルンフェルスと差別化できる。特に、流紋岩では①と同様に小口面から縦長剥片が剥離された石核や③と同様に剥片を石核に転用する形で小型の縦長剥片が剥離された石核が搬入される。

### おわりに

石清水遺跡では、既存のものとは異なる複数の技術を包含した複雑な工程が復原できた。おそらく、チャートによる節理と大型の素材剥片剥離に際しての脆さを補完した技術体系と考えられる。また、遺跡の形成過程では、典型的な消費地的性格の石材に加え、石核状態で搬入された石材が確認できる。これは、本遺跡が既存の理解と異なる重複した運用プロセスによって形成されたことを意味する。剥片尖頭器の原産地＝素材供給地という一元的理解は必ずしもあてはまらないと評価できよう。

一方で、冒頭で述べた通り、九州地域は多様な石材環境を内包している。そのため、本遺跡の事例が剥片尖頭器石器群全体に適用可能であるか否かという点には注意が必要である。今後は、剥片尖頭器の主石材である安山岩・頁岩なども含めた基礎データを蓄積することで、石材環境による石器群の差異を明らかにしていきたい。

### 引用・参考文献

- 阿部 敬 2005 「剥片尖頭器はなぜ消えるのか？－後期旧石器時代後半期前葉から中葉の東南九州における技術構造の変容－」『物質文化』79, 37-70頁, 物質文化研究会
- 桑波田武志 2004 「石清水型削器小考」『縄文の森から』第2号, 1-10頁, 鹿児島県埋蔵文化財センター
- 芝 康次郎 2012 「九州後期旧石器時代～縄文時代初頭の遺跡分布と立地」『日本旧石器学会予稿集』59-62頁, 日本旧石器学会
- 人吉市教育委員会 1995 『上ノ寺遺跡群 鬼塚古墳・上ノ寺遺跡・石清水遺跡』人吉市文化財調査報告
- 藤木 聰 2015 「素描：九州島と石刃技法と遺跡群」『九州旧石器』第18号, 25-32頁, 九州旧石器文化研究会
- 松藤和人 1987 「海を渡った旧石器”剥片尖頭器”」『花園史学』8, 8-19頁, 花園史学会
- 松本 茂 2021 「狩猟民の再来－剥片尖頭器石器群南進のタイミングと速度」『昼飯の丘に集う－中井正幸さん還暦記念論集－』, 183-192頁, 中井正幸さんの還暦をお祝いする会
- 村崎孝宏・岸田裕一 2023 「人吉市石清水遺跡における剥片尖頭器石器群と剥片剥離技術」『九州旧石器』第27号, 55-64頁, 九州旧石器文化研究会
- 村崎孝宏 2025 「人吉・球磨地域における始良Tn火山灰降灰以前の石器群－石材利用からみる遊動領域復元に関する試み－」『先史考古学論究IX小畠弘己先生退任記念考古学研究室創設50周年記念』, 龍田考古会

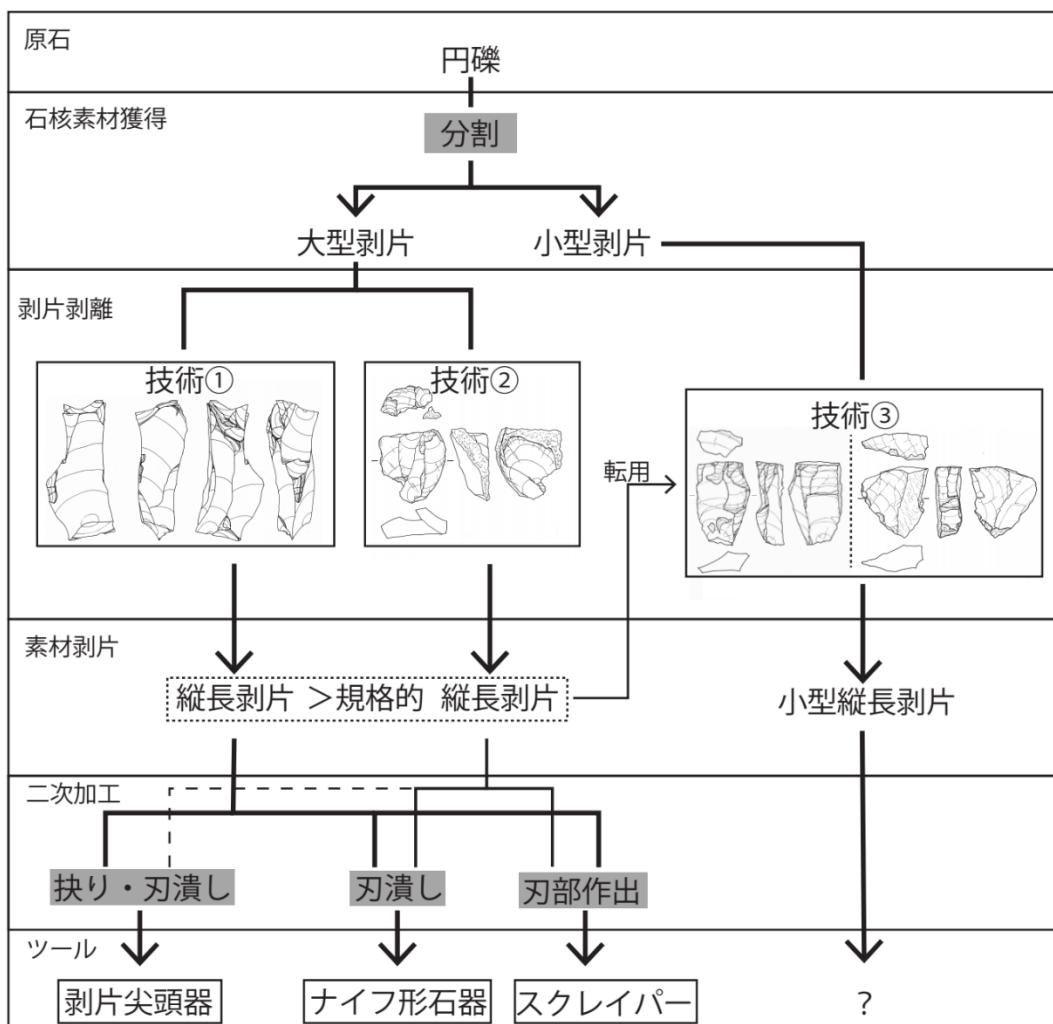


図 1 石器製作工程 (筆者作成)



石器文化研究 22 編集スタッフ

編集担当：伊藤 健・長澤有史・高屋敷飛鳥（予稿集）・山崎詩乃（予稿集）

---

---

石器文化研究 22

編 集 石器文化研究会

発 行 石器文化研究会

発行日 2025 年 12 月 30 日

石器文化研究会

代表世話人 伊藤 健 富樫孝志 鈴木美保

ホームページ <https://sekki.jp/>

E mail [kanrinin@sekki.jp](mailto:kanrinin@sekki.jp)

---

---





